
ゲッター? 平安羽化

廣瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲッター？ 平安羽化

【Nコード】

N5274W

【作者名】

廣瀬

【あらすじ】

瀬田理非等は中学生だった。修学旅行先の京都で、祇園祭を見学した日、彼は、親友とともに突然病に倒れ、目覚めたときには、人間ではないものになっていた。昏睡のあいだ、すでに一年が経過し、日本国籍から抹消されたことを知るリヒト。家族と、人としての人生を失った彼は、学生という身分を与えられ、隔離自治区、ヘイアン・ゲッターで暮らし始める。

突如現れた天使が人間を潜在支配する現代で、人間と天使のハイブリッドとして転生した少年の物語、第一部。

1 羽化

1 羽化

京都は夏の盛りだった。木々は緑に萌え、水は温みつつも流れを絶やさない。

アスファルトをつかのま、打ち水が冷やす。冷やすそばから陽炎が立つ。

四条通は、大勢のひとでにぎわっていた。浴衣やはっぴを着て、軽装で楽しむひとびとのなかに、制服姿の少年が二人いて、なにやら、気ぜわしげに走っている。ひとりは、癖のある髪をやや長めに伸ばした、その年代にしてはやや長身の少年。もう一人は、まっすぐな黒髪に、どこことなくエキゾチックな雰囲気を持つ小柄な少年だが、京都という歴史の重みもまだ知らず、すいすいと泳ぐような身軽さが共通している。

橋を渡った二人の少年のうち、小柄なほう——瀬田理非等は、親友とともに、地図を片手に大通りへ入った。汗が首を伝う。額に手をかざし、行き交う人をよけて走る。

「お前がトイレなんか行くから」

前方で、長い前髪をかきあげて、長身の中島が言う。

「せっかくだろ場所とってたのに」

「ついて来てとかいってないでしょ。女子じゃあるまいし……そのまま待っててくれればよかったのに」

「こんなに人が多くちゃ、もとの場所なんか見つけれないべ」

目的の場所は、すでに多くの人の背中で埋め尽くされていた。ちようど、山車がコーナーを曲がって姿をあらわしたところで、大きな歓声が、目の前の人垣からあがった。

祇園祭、山鉾巡行である。

ゴブラン織りの織物を垂らし、豪華な装飾品で飾られた山車を男たちがひく。彼らはあつという間に大通りを駆け抜けていった。追って、歓声が移動する。黒い山の隙間から一部を目にして、二人の修学旅行のピークは終了した。

「ああもう、にしたって、暑いなあ」

中島洋介は、シャツの襟をばたばたと前後に振る。効果があるとは思えなかったが、理非等もならった。

暑い。その言葉を、三日前から何度口にしたかわからない。ただ暑いだけでなく、蒸し暑い。夕暮れでも暑気は去らず、むしろ、増しているようだった。

クライマクスを見送った人々が、宵山、と呼ばれる、夜店や露天での、夏祭りらしい祭りまでの時間をつぶすために散会していく。二人も、人の流れにのって、八坂神社とは逆のほうへ向かった。前方にも後方にも、シャツにスカート、チェックのズボンの集団。彼らの学校の制服だ。制服姿は、彼らだけだった。

「なんでこんな時期に修学旅行なんだよ」

これも、何度口にしたかわからない愚痴だ。

夏の京都はイベント目白押し。祇園祭、各種夏祭り、寺社の例大祭。それにしても、この時期に京都に来る学校は皆無だ。

「しょうがないよ。急だったし」

行き先が、オーストラリアから京都に変更になったのは、半年前のことだった。同盟国で空港爆破テロが起こったためだ。死者を多数出して大きなニュースとなったが、国内の影響は主に、海外渡航自粛ムードの蔓延だった。危険を冒してまで、たかが修学旅行で海外へ、と、理非等たちの学校では、まず、保護者たちから懸念の声があがり、警備が強化されているからとか、すでにパスポートを集団申請してしまったから、とか、教師たちは最後まであきらめなかったが、安全を最優先して、行き先を国内に変更せざるをえなかった。とはいえ、ぎりぎりになっての変更では、すでにおおかたの候補地は予約が取れなかった。結局、定番中の定番である京都、と

いうわけだ。

生徒は一樣にため息をついた。これが初めての海外、というものが多数いたので、まず、その生徒たちの落ち込みようといったらない。ほかの生徒も同様だ。そこで、せめてもと、日程がオーストラリアよりのびて、十日間となった。自由時間もぐっと増えた。渡航費用が戻ってきたので、生徒たちは、増えた小遣いで、おのおの、関西圏になら自由に足を伸ばしても良いというきまりになった。理非等と中島も、同じ班の女子と、昨日は大阪まで出かけている。悪くはなかった。最高とまではいえないにしても。

女子と合流して五人となった彼らは、路地の一角で地図を広げた。理非等は、手の甲で汗をぬぐう。女子とのおしゃべりを中島にまかせて、持っていた修学旅行の葉で顔をあおいだ。日陰に入ると、ごくわずかだが暑さもゆるむ。アスファルトの照り返しで目が痛く、なっていた彼は、目薬を探そうと鞆に手を差し込む。そのときふと、後方から彼の横をすり抜けようとしたものに、腕がぶつかった。

「あ」

浴衣を着た少女だった。はずみでしりもちをついた彼女は、びっくりした顔で彼を見ている。

「あっ、かわいいねえ。このへんの子？」

気付いた女子の一人が、理非等より早く手を差し出した。その手をかりず立ち上がった少女は、戸惑った顔で五人を見たあと、「すみません、ありがとうございます」と舌足らずに言って頭をさげる。きやあ、と女子が声をあげた。

「かわいいーい」

「こっちこそごめんねえ。怪我しなかった？」

「このお兄ちゃんが悪いんだよねえ」

理非等がもごもごと口ごもっているうちに、少女は、取り囲まれてしまう。ひとりが、頭をなでようと手を伸ばした。困ったように笑って後ずさった少女は、ぺこりと頭をさげると、するりと囲みを抜けて、路地のむこうへ走っていった。小学校の二、三年生くらい

かなあ、と理非等は思った。背中で結ばれた赤い帯が、金魚のように揺れて――向かう先には、着物姿の男女が四人、こちらを見ていた。

理非等が顔を元の位置に戻すと、中島と女子たちは、次の行き先について、すでに何事もなかったかのように喋っていた。なんだか調子がくるってしまった彼は、そこからずっと、黙って残りの時間を過ごした。

＊

旅館に帰り着いたのは、門限の十分前だった。汗だくになった理非等と中島は、部屋に戻ると、他の生徒と風呂に行くことにした。夕食前だったので、大浴場はまだ空いていて、彼らのほかには、一般の宿泊客が数人いるだけだ。

体を洗い終えて、湯船につかっていると、後からやってきた中島が、湯に足をつけるなり、渋い顔をした。

「熱い！ なにこれ。よく入ってられるな」

「そう？」

ぬるくねえか？ と首をかしげると、中島は首をふった。彼は周りを指さす。

「こんなところ入ってるの、お前ひとりだべ。ほれ」

指さきをたどって見ると、後ろの壁にかけられたデジタル温度計に、43℃と表示されていた。たしかに熱い。顔をしかめた中島は、足を湯に出し入れしながら、入るかどうか逡巡している。

「まあ、入ってみたら。案外、慣れるもんだべ。俺は今、ぬるいくらいだ」

「そうかな？ そうかなあ……」

「いい湯だよ」

理非等は、お湯の中で手足を伸ばし、歩き通しで疲れた腕や足をもみほぐす。指先になにかが引かかった。持ち上げてみると、薄

くて長い、皮だった。ひろげると、びろん、と垂れる。中島が驚いた顔で笑った。

「そんなに日に焼けたんか？」

「そうみたい」

腕をこすると、そこにも引っ掛かりがあった。擦れた糸のようなものが、やはり、指の上から垂れる。こすった皮膚の上を、湯が滑らかに動くと、そこが気持ちいい。だが、中島は肩をすくめて背をむけた。

「しみそうだし、やめとく。俺、やっぱりあっちに入るわ」

「おう。俺は出る」

ようやく、ほてってきた。理非等は風呂から出ると、ジャージに着替えて部屋に戻った。部屋では、畳の上に寝転んだり、円座になってカードゲームをしているクラスメイトがいた。混ざろうかな、と思ったが、よほど疲れたのか、すこし頭痛がする。座布団を並べて、部屋の隅で横になることにした。誰かが見ているテレビの音声を聞きながらまどろむうち、やがて、彼はぐっすりと寝込んでしまう。揺り起こされたのは、二十分ほど経ったころだろうか。顔を上げると、もうみんな席について、机に、夕食の準備ができていた。中島もいる。もっと早く起こしてくればよかったのに、と彼は目をこする。

体を起こすと、強烈なめまいを感じた。だるさもある。熱射病になったかもしれない。小さいころ、帽子をかぶらずに外に出て、目をまわしたときと似た感覚がする。

「大丈夫かあ」

ぐずぐずしている彼を見て、のんびりとクラスメイトが言う。

「お前、いびきかいてたぞ」

「うん。……なんか、すごくだるい感じ。ねえ、お茶あるかな」

「いいから、早く来いよ。肉がなくなるよ」

「うん」

ほんの二メートルくらいだ。それなのに、立ち上がることができ

ない。足に、どうしても力が入らなかった。クラスメイトたちは、すきやきの鍋に、先に箸をつけ始めていたが、正面に座っている数人が不思議そうな顔をした。食事を前にしてぐずぐずしているような彼ではない。理非等は、腕で弾みをつけて、なんとか立ち上がる。座椅子に座ると、隣から常岡康広が、「どうしたの」と声をあげた。体調が悪いみたい、と言おうとしたが、それとはまったく別のことを常岡は言った。

「その手！」

理非等は自分の手を見た。手の甲の中心から放射状の八センチ四方にわたる場所が、紙でもはりつけたかのように真っ白だった。家の手伝いや部活三昧で、一年中色白だったことはない手には、唐突で不自然な色だ。理非等は、手をひっくりかえしたりして、まじまじと見る。指の根元から指先は、地黒といっていい彼の元の肌色。日焼けのし過ぎで皮がむけて、新しい皮膚が？ いや、それでも、こんなに――輝くような白さではありえない。

「どっかで、ペンキでもついたっけ……？」

それだったら、風呂に入ったときに気付いたんでねえか、と常岡の隣から中島が言った。

「まあいい。ふいときなよ」

渡されたお絞りで手を拭く。白い部分を、周辺も含めて特に念入りにこすった。だが、とれないどころか、そのうち、元の色を保っていた場所にまで、白が広がった。おしぼりを見ると、茶色い、消しゴムのかすのようなものがついている。なんとなく怖くなって、それ以上こするのをやめた。グラスの水を飲み干すと、器に卵を割りいれて、箸をとる。

「なあ、アニメやってない？」

誰かが、テレビのリモコンを取る。彼らの地元では、この時間、人気のアニメをやっていた。チャンネルが次々に変わる。

「やめろよ。中学生にもなって、お前、まだそんなの見てるのか」
一人が、からかうように言った。だが、三瓶という料理屋の息子が、

「うち弟いるから、一緒に見てる。俺もそれがいい。どうせ、宵山にはいけねえんだし、このくらいしか楽しみねえべ」

俺も俺も、という声が数人からあがった。しかし、

「あ、待て！」

誰かが声をあげて、そこで画面が止まる。理非等はその隙に、鍋から肉を引っ張り出して、器にいれた。テレビに目を戻すと、画面上にLIVEの文字。制服姿の男が喋り終わったところだった。すぐに、画面が切り替わり、ベテランらしい女性アナウンサーが説明をはじめた。画面下には、エクスクラメーションが派手に光るテロップが流れる。

「これこれ、俺がいったやつ」

「連れ去り？ いつの話？」

そういえば、部屋に戻ったとき、そんな話がされていたっけ——とちよつと視線を後ろにむけて画面を見つつ、肉を一口食べる。

「静かに！ ちよつと待て、聞こうぜ」

『——ットーから、初等部の生徒が連れ去られるという事件がおき、どうやら容疑者はその生徒の両親とみられるということです。担当官の話で

は、警備にあたっていたひとりが死亡、ひとりが怪我をしましたが、こちらは、命に別状はありません。少女は保護され、容疑者二人の身柄もすでにゲットー内の研究機関に預けられました。現在、検査を受けています。三人は、鉄道を利用して、一時、関西方面に逃走したということです。今のところ、粒子によって変化したヒトについての報告はなく、また、変化するに十分な粒子を、そもそも、少女は放散しないということです。繰り返します、本日午後、京都府北部にある学区平安、通称、ハイアン・ゲットーから、初等部にかよう——』

「わりと大事だったんだ。関西方面って、どこだろう？」

「京都も関西だよな。頭悪いんじゃないの、この女」

口々に感想がもれた。ふと、理非等と中島の目が合った。中島は、

肉や野菜を山盛りに入れた碗を前に、箸を机に戻したまま、じつと彼のほうを見ている。顔色が妙に青い。彼も熱射病なのだろうか？

「どうした？」

理非等が首をかしげると、中島は「なんか」と呟いた。ほかの生徒も気付いて「どうしたの」と声をかける。

「よっちゃん、顔色悪いよ」

「どうした？」

「気持ち悪い……」

中島はそう呟くと、おしぼりをとって口にあてた。わっと生徒が騒ぎ出す。理非等は、座っていた座椅子から、後ろのスペースへ這い出て、横になろうとする中島のそばへ行く。中島は、急にぐったりとしはじめていた。

「座布団かして！」

仲間が、すぐに座布団をよせてくれる。自分も、さっきからどうにもめまいを感じていたが、友人のほうが急を要することは明らかだった。中島の顔からは、完全に血の気が引いている。額に手をあてた理非等は驚いた。ひどく冷たい。熱があるのじゃないかと思っただのに。

「先生を——」といいかけたとき、窓の外に、救急車のサイレンが聞こえた。甲高いその音が、旅館の前でぴたりと止まる。入り口側に面している窓から、ひとりがり外をのぞき「ここみたい」と声をあげた。中島のための救急車じゃないよな、と誰かが首をひねり、まさか、だってまだ俺たちしか、とその部屋の全員が同時に言いかけて顔を見合わせた。そのとき、先生を呼びに、部屋から廊下に出るふすまに手をかけていた三瓶が「女子のほうみたい」と室内をふりかえった。

「女子が倒れたんだって——」

「ええっ」

「そうなんだよね？ うん——阿部さんと、原さんと、野々村さん？」

三瓶は、廊下に出て、誰かと話をしている。やがて、ひよっこりと、同じクラスの後藤の顔が覗いた。手に携帯電話を握っている。禁止されているのに、私物を持ってきたのだ。どうやらメールで、女子が倒れたということを、女子の友達に聞いたらしい。興奮気味に、「うちのクラスの三人だってよ!」と言った。「夕食の前に、いきなり倒れたんだって!」

それどころではなく聞き逃していたものも、おのおの顔を見合わせた。理非等はずっと驚いた。

みんな、うちの班の女子だ――

「ぜーんぶうちのクラスのやつじゃん! 本当かよ」

「ねえ、それって、三人とも? 全員倒れたの?」理非等はあわてて口を開く。

「そうだって――」

「えっ、じゃあ」

理非等が、中島を見下ろしたとき、担任の加藤の声がした。それは、廊下じゅうに反響して、やたら大きく聞こえた。

「二組、各部屋の部屋長、非常階段のところに集合してくれえ。それから、えーと、Fグループの男子二人!」

「先生え! 中島が具合悪いって!」

おそらく、なにごとかと大騒ぎするだろう生徒たちをなだめにきたであろう担任は、三瓶のその声で、大きな足音を立てて彼らの部屋へやってきた。かなりあわてた顔だった。横に、一組の担任である、首藤という、中年の女性教師もいた。

「なんだ、どうした。中島もか?」

「先生、どういふこと?」

口々に尋ねる彼らを見無視して、加藤は中島に「大丈夫か」「気持ち悪いのか」と声をかける。理非等も、はらはらと中島の顔を見つめた。

「もう一台救急車を――」

首藤が、はじかれたように部屋をとびだしていく。「中島」と、

理非等は、目を閉じてうなっている友人に、何度も呼びかけた。異常事態だということは理解できた。

どうして、うちの班のひとだけ？　うちの班だけってことは、昼間の自由行動で食べたお昼とか、カキ氷とかジュースとかが原因の、食中毒……？

彼自身も、頭痛がひどくなってきた。それに、なんだか肌がむずがゆいような、毛穴がふさがれてしまっているような、妙な熱というか、もわりとしたものが皮膚の中にこもっているような、いやな感じが全身にする。ふいに、理非等は吐き気を感じて、口に手をあてた。そのとき、加藤が「瀬田」と顔をあげて呟いた。

「お前は？　具合悪くないか？　大丈夫か？」

「たぶん、大丈夫だと……」

熱射病だと思っしー。そういつて、口元から離れた手を見て驚いた。夢か？　とまばたきをする。

だが、夢ではなかった。彼の、左手の指先が、欠けている。人差し指と薬指の爪の半分ほどから先が、ぽきんと小枝でも折られたかのように失われていた。加藤は再び中島に声をかけるのに夢中で、理非等の手を見ていない。そのかわり、ふと、もういちど目があった彼の顔をまじまじと見て、驚愕の表情をした。

「瀬田、か、顔……顔が――」

「え？」

「りっちゃん！　皮がむけてる！」

的確な表現といえた。次の瞬間、理非等の視界にも、自分の左の頬からたれさがった、うすい皮膚のようなものが見えた。顔を向けた彼を見て、仲間たちが「わあ」と声をあげた。なにか怖いものを見るような目つきで彼をみている。理非等は文句を言おうとしたが、それより先に、痛みを増した頭痛に思わず顔をしかめた。さらに、熱が全身にこもっているような感覚が、ずんとひどくなる。「すみません」と呟いて、彼も、その場に倒れた。全身が熱く痛みだして、たまらなくなった。さらに、すっぱいものが胃からせりあがってき

て、倒れたままはげしく嘔吐した。畳に、びしゃ、としぶきが飛ぶ。
「三瓶、首藤先生を追いかけてくれ！ 瀬田もだ、早く！」

がんがんと痛みが激しく、めまいと耳鳴りがひどくなった。海の中の小船のように、視界も、意識も揺れる。もう、隣で同じように倒れている中島のことも、加藤の声も、なにもかもがどうでもよくなった。いつか母親に言われたとおり、横を向いて吐いたので、服を汚さなくてよかった、とぼんやり考えた。畳のへりの緑いろや、床の間の茶色、まだついているテレビの遠い音声。すきやきの匂い。窓から、空が見えた。ここは三階なので、暮れかかった空をさえずるのは、よほど高いビルの影だけだ。うつすらと開いていた目を閉じる。呼吸まで苦しくなってきた。

気持ち悪い。この、今までに経験のない悪寒はなんだろうか。本当に――

よりによって修学旅行中にこんなことになるとは。

風邪をひいて高熱を出したときに感じる、もしかしてこのまま死んでしまったりして、という思いと、健康とはいったいなんだったっけ、という疑問。

不快な感覚の中で、正常を保とうと、彼は、おかしなことだけを考えようとつとめた。家のこと、なるべく楽しいこと――帰ったら、家族で宇都宮に行って餃子を食べようか、と父親が言っていたことや、春に植えた西瓜の収穫――ピヨたちに餌をやって、八月の最初の日曜日は、じいちゃんの誕生日のお祝いに親戚が集まる、その準備をみんなで――。

弟と、お土産買うつて約束した。

誰かが「四組に行け！」と叫んだ。そこで、理非等の意識は途切れた。

激しく何かが転がる音と、人々の戦々恐々とした声と、無機質なもののぶつかる振動。

「第3ステージ——ハクの保持——」

事務的な会話の中に、しっかりしろ、だの、大丈夫、だの、慰めとも励ましともとれない呼びかけが混ざる。倒れてからどのくらいたっているのか、どこにいるのか、まったくわからなかった。やがて、耳自体がなくなってしまったかのように、彼は聴覚まで失った。目は、閉じているのかあけているのかもわからない。再び、意識が消えた。

風鈴の音で目が覚めた。

彼は、縁側に、あぐらをかいて座っている。青と白の模様の浴衣を着て、手には、さやえんどうを握っていた。目の前の籠には、収穫したばかりのえんどうが山盛りにはいつている。すじをむいている途中で、うたたねでもしたものらしい。

庭にゆったりと目を向けると、小さな子どもが、地面にボールについて遊んでいる。子どもは、歌をうたっている。聞いたことのある、タイトルは知らないけれど、懐かしい歌だ。

とほうもなく安全だ、となぜかしら感じられる場所だった。どこからか川のせせらぎの音が聞こえ、ただよってくる焚き火の匂いとヒグラシの声が、夏の終わりの哀愁を感じさせる。

しかし、まばたきをするあいだに、彼は、違う場所へ立っていた。竹林の緑なす影のあいだに、ゆったりとした坂を上っていく道。

彼は急いで、前方にいる友人たちに追いつこうとしている。いつものブレザーではなく、みんな、黒い詰襟の学生服を着ていた。友人に追いついたところで、ふいに背後から「りいちゃん」と声をかけられて振り向く。坂の下に、汚れたTシャツとハーフパンツをはいた男の子が立っている。どこかで会ったような気がするが、思い出せない。長くもつれた前髪のあいだから、妙になまめいた赤い唇が動いて「行こう」と言った。誰だったっけ？ 男の子は、理非等を見ると、さも安心したように、小さな唇の両端を、ふわりと持ち上

げた。

「おまえが来てくれてよかった」

——やけにはっきりと、耳元で聞こえた。

と同時に、場面が再び切り替わる。

壁にかけられた絵画が、ずらりと並ぶ廊下。全体に薄暗く、すべてが妙に青みがかっている。

床には濃い青緑のじゅうたんが敷かれ、長い間に踏み固められたのだろう、歩く靴底が、鉛を踏むようだ。そこは窓に面していたが、すべて鎧戸が下ろされていた。内装からすると、古びた洋館——理非等は、石の窓枠に彫られた天使の輪を撫でてみる。指先が真っ黒になった。長く空き家であったのか、ぜんたいに、どこもかしこも埃っぽく、しんとしている。

階段を見つけて、ホールらしい場所に下りる。じゅうたんがときれ、滑らかに光沢を放つ、大理石の床になった。上を見上げると、大きくアーチ状になった天井（ドーム天井というのだと、理非等はあとで知った）が、ずいぶん高いところにある。

右手には、まっすぐに伸びた回廊が、ずっと奥まで続いている。大理石の廊下を、ゆっくりと歩く。かかとの高い革靴をはいていたが、足音はしなかった。無音の世界。

そういえば、ずいぶん目線が高いことに気付く。いつのまに、こんなに背がのびたのだろうか？ 腰に、当然のように武器を携えているが、これはいったい？

夢？

そうだ、夢だ。

すっかり忘れていた。拍子抜けした気分……そうだ——自分はどう大人になって、これは、自分の仕事だった。

とすると、次に起こることは——決まっている。そうだ……。

——来る。あれが——あの瞬間が——

沈黙を裂くように、高いサイレンの音が響いた。威嚇とも警告とも取れる、神経質な和音が、途切れることなく続く。彼は、逃げよ

うと窓を開け、鎧戸を開こうとする。だが、外から木でも打ちつけられているのか、木製の鎧戸はびくともしない。窓枠の上を両手でつかみ、体をもちあげ、弾みをつけて蹴破りにかかる。五回目の挑戦で、やっと、木っ端が音を立てて碎けた。早く出なければ、と窓の外へ出ようとしたところで、仲間がまだこの屋敷にいる、と気付いた。

誰かを呼ぼうとして、口を開いた。だが、誰の名前を呼べばいいのか、思い出せない。

背中から、大きな音が聞こえた。何かが爆発して、大きな光を放つ。逃げられない――光はどんどん膨らんで、彼のいる場所まで迫ってくる。

すさまじい振動も感じた――爆弾のようなそれは、一滴の雫がコップの水を波立たせる勢いでどんどん犠牲となる地を広げつつある。ここにもくる、もうすぐ終わりが――いいようない恐怖で、体が硬直する。

そして、彼は、その光に捉えられた。

一瞬で、体が蒸発するのがわかった。手足がばらばらになり、怒りや戸惑いや悲しみや悔しさを、考えたり感じたりする“心”以外のものが、まばゆい光に包まれて、重さをなくしていく。死んだんだ、と思った。

ふわり、と意識が軽くなる。温かいお湯のようなものに包まれる。これが死なら悪くない。恐怖はかききえ、頭にいっぱい幸福感がみちる。

しゅう、と、熱した鉄板に水をたらしたときのような音をたてて、彼の意識は、強い力で上へとひっぱり上げられた。

昔から決まっていたかのように、魂は、あまりにも自然に肉体を飛び出していく。

その爽快さを表現する言葉も見つからない。
死。これが死。

そして、瀬田理非等、というじぶんがじぶんでなくなる瞬間を感じ

じて、彼は死んだ。

「顔はなるべく元のようになりましたが、いかんせん、前の持ち主の年齢と離れすぎていましてね。まあ——じきに、ハクの影響を受けてそのように変化していくでしょうが……もつと時間があれば、専用の体も用意できたのですがね。気の毒に」

「空きが出ていてよかったよ、それでもね。どのくらいで？」

「一年、と向こうの医者は診ています。私は二年とみましたが。まあ、たぶん、あちらが正しいでしょうね」

「そうか。おれは今、家族に説明してきたが……もう、久々に嫌になった。両親に弟に、祖父母まで来てたんだよ。こっちまで涙が出そうだった。本当にこの子なのか、と思ったけれどもねえ」

「ああ、見ました。ええ、あの様子だと、みんな、簡単には受け入れられないでしょう。ことに、あの家族は……金なんかいらなくて、きっぱり担当のやつに言っていましたからね。まあ、人間が担当できるのは、ここまでですよ」

その会話をぼんやりと聞いていた。

次に目覚めたときは、知らないものたちが、大勢彼のベッドを取り囲んでいた。彼らは、目を覚ました理非等を見ると、奇妙に唇をゆがめた笑みを浮かべた。

「起きられるかな？」

起きられるか——だって？

当たり前だ、と訴えるように、理非等は鼻をふくらませた。

すっかり気分がよくなっていた。倒れた、ということはおぼえていたので、おそらく、あのあと病院に担ぎ込まれて、治療を受けたのだらう。なんだか、変な夢ばかりみていた気がするけど——

よくわからない。いったい、あれからどうなったのだろうか。寝たままあたりを見渡すと、思ったとおり、病院にいるようだった。独特のにおいと電子音、白一色の壁。ここが大部屋なら、女子三人と、中島もいるのだろうか？

「大丈夫だったら、起きてくれるかい」

余韻にひたっていた理非等にむけて、予後の病人をいたわることなどまったく考えていない声色で男が言った。少しむっとしながら起き上がる。しかし、目の前にいる人々を見た彼は、声の出ないほど驚いた。そこにいたのが、人間ではなかったからだ。

いや、衣服を着ているし、人間の言葉を喋っているから、もちろん人間なのだ。だが、それは、彼が生まれてから十三年間なじんできた人類たるものではなかった。ほかは人間と似通っているにもかかわらず、決定的に人ではないようにみせている大きな特徴である彼らの瞳は、楕円形にひらいた空洞の中に、ガラスをはめ込んだような透明感を持っていて、身動きするたびにぎらぎらと光を反射した。皮膚は青白く、毛穴などないかのようにつるりぬらりとしていて、浮き出ている鎖骨やのど仏や、ベッドのふちにかけられている手首などが、その皮膚の下に骨が人のように見せかけるためにしか存在しない、機械であることがわかる。なにもかもがいびつで、不自然だ。

次の瞬間、理非等は恐慌に襲われた――すべてを理解したからだ。なぜ、いつ、そんなことはわからない。おいおい説明してもらえらるだろう。

ただどうして。

「変化した――おれが。羽化――」
「そうです」

一番近くにいた男性が言った。

「これから説明します、瀬田理非等さん。いや、姓をつけて呼ぶのはこれが最後です。貴方は、さる七月十六日の午後七時にご臨終を迎え、その後、正式な処置をえて転生いたしました。死亡により日

本国の国籍から消され、登仙認定により平安総府が与えたその身柄を、われわれが預かっています。今がいつであるかは？」

「ええと——」

何も思い出せない。

あれから、どのくらい眠っていたのだろうか。と、ふいに、頭の中に数字が浮かんた。

「397年……？」

おずおずとそう呟くと、「けっこう」と男がうなずいた。

「平安397年です。あの巨大な無機天使、マレビトが飛来し、世界に粒子がばらまかれてから397年。もう大丈夫ですね——ソジ粒子や、そのほか、われわれについての詳しいことを知っていますか？」

「小学生レベルのことは。あの……でも」

「そうですか。では、冊子を差し上げますので、目を通してください。今日はこれで結構です。また明日」

男は、A4サイズのファイルをベッド脇のテーブルに載せると、部下を促して帰っていった。驚くほどあっさりとした退場だ。理非等が逃げたりすることを想定していないのだろうか。

いや——もう、逃げられないのだ。

部屋が静まり返る。やや呆然としながら、理非等はベッドに起き直り、さっそくファイルを開いた。手が震える。その手は、日に焼けた手ではなく、彼らと同じ、毛穴や体毛の存在を感じさせない、無機的な肌をしていた。彼は、とっさに探した。引き戸になっていた入り口の、電気のスィッチの横に、小さな鏡がかけられていた。ファイルを放り出すと、いそいでベッドから下り、鏡にむかう。そうとのぞきこんだ瞬間、うう、と彼はうめいた。そして、ひとつひとつのパーツを、じっくり確認する。

目——は多少、以前の自分より切れ長に、そして、大きくなった。それはいいが、白目の部分が、なんだか青くて、ガラスの粉でもまぶしたみたい、全体がきらきらしている。髪は黒いようだ。いち

ど剃られたものが伸びたらしく、格好がよくないけどまあ大丈夫。鼻は、人間のものよりも凹凸がはっきりしない。穴は、噂で聞いたようなことはなく、ちゃんと二つあって――よかった、なんとか自然に見えるよう収まっている。唇は、肌が白くなつたせいかな、やたら赤く感じるけれど――これは、手術で、人間に似せるように着色した結果だろう。えい、と思いながら口をあけると、粘膜というよりゴムが湿っただけのような感じの、やっぱり、それらしく着色された口腔と、作り物みたいに（というか、作り物なのだろう）綺麗な、虫歯も、治療跡もなにもないつるんとした歯が並んでいた。理非等は、ため息をつきながら口を閉じた。

ためすがめつ見て多少ほっとしたのは、さっきの男たちのように、一見して人類でない、と強く印象付けられることはないように見えたからだ。彼らが変化したときより、おそらく、技術が進んでいるのだろう。

よろよろとベッドに戻り、ファイルを取る。クリアケースの中に、“変化したその日に知っておきたいこと”というDVDと、小さな冊子があった。“飛来人ってなんだろう？　時をかける粒子と人間たち”“ハイアン・ゲットーの生活”。

理非等は、DVDを、近くにあったデスクに押し込んだ。テレビのリモコンを押すと、すぐに再生される。小さな武士風のキャラクターと、町娘風のキャラクターが出てきて、彼にむかってお辞儀をする。和楽器のオーケストラ風BGMとともに、画面に、見たことのある、タレント活動で有名な大学教授が現れた。

「こんにちは、浦川レオナです。今日はこの、イエルクン、シャロオムちゃんと一緒に、いまや、日本に定着しつつある平安租界、もしくは、ハイアン・ゲットーと呼ばれる場所について、これからそこで暮らしになるかたがたのために、もういちど、わかりやすく解説をしていきたいと思います」

浦川レオナは、彼の曾祖母が、仏間の写真の中で着ているような着物を着ている。慈愛たっぷりの、という言葉が相応しい表情で微

笑んだ。

理非等は、彼女の解説に聞き入った。

暦でいう、西暦2085年のことだった。飛来人、と呼ばれる、人間ではないものたちが地球にやってきた。彼らは、人類の歴史上で、いわゆる神隠しと呼ばれる現象でこつぜんこの世から消えてしまったり、また、宇宙ステーションが誕生して、地球と宇宙が宇宙エレベータでつながれるようになってから、まれに起こった宇宙船の航行事故や旅行のさい、突然姿を消したものたちの成れの果てであった。すぐに大ニュースになった――失踪から既に半世紀がたっているものたちもいたが、それらが平然と、以前と変わらぬ姿で地球上に現れたのである。彼らは、自分たちは“呼ばれた”のだと言った。さらに、“この世界はひとつではなく、あらゆる次元にあるための時間軸で同時に存在して”おり、“まもなく、それを証明するために彼らがやってくる”と声をそろえていった。

彼ら？

とりあえず、集団で神現れした彼らに、回帰失踪者という名称をつけて、誇大妄想と虚言にあきあきした各国の政府や大使館は、極秘裏に確認作業を行った。失踪者の出身は多岐にわたっていたが、肌の色や目の色ではすでに判別がつかなかったのだ。いなくなっているあいだに何があったのか、彼らの様子は、失踪した当時とまったく同じであり、また、本当の意味ではまったく違っていた。肌は、どんな人種であっても一様にマットな青灰色をしていて、瞳は色を失って真っ白。汗や涙、唾液といった体液の分泌がまったくなく、レントゲンにかけても、内臓の様子を写し取ることはできなかった。身柄を預かった医者は皆、いちように悩んだ。これが死体ならば解剖もでき、多少何かはわかるだろうが、そうまでして調べる権限は与えられていない。そして、彼らは苦渋を飲みつつ断腸の思いで報

告書をしたためた。とりあえず、これだけははっきりしていた――患者はもう、われわれが人間と呼んでいる人間ではないようだ――。

医療機関が役に立たないと悟った各国政府は、そうと分かると、彼らを病院ではなく、それぞれ公安や秘密警察や科学捜査研究所おくりにした。そして、はっきりしたことがわかるまでは、彼らの存在を国民には知らせないよう、マスコミに圧力をかけた。虚勢をはりながら恐れていた――彼らはいったいなんなのか？ 新しい人類と呼べるものか？ いや――彼らが自分でいうような、もしもそれが真実なら――はたまた、ひょっとしたら、これは宇宙からの侵略かもしれない、と、冗談ではなく、本気で考える国もあった。

すでにニュースやネット上で、彼らの存在は瞬く間に広まっていた。しかし、一年もたつと、情報規制のかいあって、騒ぎは、有名人の離婚だの、紛争だのにまぎれ、ウェブ上ではともかく、ときおり“そういえばあれどうなったっけ”といわれるレベルに落ち着いていた。その手の話題を好むマニアックなサイトでは、依然として議論は活発ではあったが。

そして、回帰失踪者の発見から一年と半年。“彼らが何者であるか”ということについて、結論が突如として出される。発表したのは、スイスにある素粒子研究所だった。きっかけはドイツで、自分はドイツ人だと名乗る患者の診察をしていた医者が、彼（か彼女か、その判別もすでに難しかったが）の細胞を顕微鏡で確認したところ、何か“瞬いている”としか思えないごく小さな発光物質を見つけ、より高度な調査を、件の研究所に依頼したことだ。ほぼ同時期、ヨーロッパの各国医療機関からも、同様の光る物質について、スイスのその研究所はサンプルを受け取っていた。それは、医者をはじめとする人体に精通するプロフェッショナルが、科学者の領分だと判断した、ということだ。研究所は驚きつつ、若手のチームにその分析を任せた。半年後、そのチームの代表選手たるリーダーが、分析結果を手に、部長室のドアを蹴破らんばかりに報告した。報告を受けた部長は、さらに上の地位にある研究員の指示を求めて、彼らを

伴って所長室へ向かった。

所長にむかって、若手ドクターの筆頭である、とはいえ五十は越えているドクター・フェアシュミットは、彼が信ずるところのカトリックの敬虔な信者らしく、十字を切ってうやうやしく告げた。瞬きを発しているものは、これまでに発見されたことのない粒子であり、どうやら、ニュートリノに似たある性質を持っている。これはすなわち、時間を行き来することに特化した粒子である、と。

結論を告げてから、彼らは過程を話し始めた。

彼らは、苦勞して固定した粒子のひとつひとつをナンバリングし、粒子のふるまいをじっくりと観察した。光を発することから、何らかのエネルギーを持つものであることはたしかだ。そして、エネルギーを持つということは重さを持つということ。動作には、一定のパターンがみられるはずだった。だが、粒子は、まったく彼らの予想をこえた動きをみせた。患者たちと同じように、忽然と消えて、忽然と現れる。はじめは信じられなかったが、どうみても確かだった。この粒子は、消える――そして、再び現れる。しかし、いなくなっているあいだ、その粒子はいついどこへいったのか？

やがて、彼らは、粒子の消失点と出現点の記録を眺めるうちに、あることに気付いた。

鍵は、この粒子が、やたらめったら超高速で移動することにあった。これは、こっそり借りた大型実験器具のおかげで初期に発見できていたのだが、その超高速運動に、秘密があったのだ。――第四の次元であるといわれる時間は、常に過去から未来へと一定方向へ移動する。しかし、この粒子は、自ら移動するエネルギーで、自らの周囲の一マイクロにも満たない空間を捻じ曲げ、極極極小のワームホールを作り出し、その次元の裂け目へと消えたり、あるいはまた現れたりする。その裂けた空間はワームホールであり、そこを通過して粒子が行き着く先はおそらく――過去か未来ではないか。そう、フェアシュミットは、仲間と共に討論に討論を、実験に実験を重ねて結論づけた。彼らが時間を捻じ曲げて裂け目に消えていく、その

一瞬の過程が、量子顕微鏡では瞬きに見えた——燃え尽きる太陽のように、ひとつの星がまさに誕生する瞬間を、彼らはまさに目の前で感じていた、というわけだ。

今自分たちが見上げる夜空で輝く星の光が、何万年も前の光であるということと同じように——

この粒子は、過去と未来を自在に行き来している。

所長は、ひととおり黙って聞いてから「たしかなのか」と尋ねた。にわかには信じがたかったのだ。もちろん、ワームホールや四次元は、学説では存在しうるとされている。SF小説や映画などではなく、彼らはそれを、いつかは実現できるだろうという確かな予測で研究していた。ただ、自分たちの世代でそれが発展を遂げるだろうとは、微塵も思っていなかった。彼らの孫の世代でもまだ足りない、遠未来の夢に過ぎなかったからだ。

この粒子の存在がきちんと証明されれば、人類は大きな力を手にすることができる。所長は、科学者としての長年の実績と栄光にかけてもいい、と確信した。ワンダフル！自分が生きているあいだに、時間旅行という人類の夢が叶うかもしれない——

所長は、その粒子の存在を、所外秘にした。こんな短期間の観察では、はっきりしたことは何もいえない、と考えたのだ。引き続き実験し検証するように。くれぐれも、軽はずみな発言を慎むように。その指示にフェアシュミットらはイエスと答え、引き上げた。誰よりも驚いたのは彼ら自身であり、喋ったことで、多少浮ついた気持ちも落ち着いたように所長には見えた。夢は夢のままかもしれないから——所長は少年のように胸を震わせながら、しかし、期待しすぎないよう気をつけて、報告を待つことにした。

しかし、それから一週間後、所長は、信じられない知らせを聞く。フェアシュミットをはじめとするチーム全員が、突然死したのだ。変死ということで、同じ研究所のドクターが解剖にあたった。検死報告書を持ってきた医師の報告書を見て、所長はあわてて、バスルームに駆け込んだ。

報告書には、こうあった。チーム全員が、死亡の約二週間前、体調に異変をきたして、研究所付属の医療センターへやってきた。彼らの症状は似通っていた。倦怠感、耳鳴り、呼吸困難、脱水症状。ただの風邪、とその日は注射を一本だけ。だが、日を負うごとに、症状はひどくなった。やがて、皮膚が青白くラバー状に変化したために皮膚呼吸の機能が失われ、彼らはERに担ぎこまれたが、なぜか、レントゲンもCTスキャンもMRIも使えなかったので、人工呼吸器をつけながら投薬による治療を行った。しかし、効果はあがらない。そこで、もっとも元気な瀕死の患者を選んで開腹してみたところ、液状化した粘膜のなかに、なかば溶けかかった内臓があった。まるで、人体の内部が、かまどの内部にあったかのように爛れていた――執刀医はそう表現していた。結局、打つ手は見つからず、全員が死んだ。その後解剖してみると、全員の内臓に爛れがみられた。また、彼らの皮膚や体の内部から、不可思議な、綿灰のような塊を採取したので、これを分析中――

綿灰と同じものを、所長はフェアシュミットから、こっそり受け取っていた。それは、あの粒子の残骸だった。ワームホールを潜り抜けた粒子が、やがてみずからの運動に耐え切れずに寿命を迎え、燃え尽きる。灰は、彼らの殻ではないか。フェアシュミットと交わした最後のメールを鮮やかに思い出した所長は、あわててパソコンを開いて確認した。果たして――“その微量の残骸が、互いに引き付けあって結合し、綿灰のような物質になると思われます。”

所長は一通り嘔吐を終えりと、猛烈な勢いでシャワーを浴びた。放射性セシウムやヨウ素のように、水で洗い流せることに望みをかけたのだ。もしあの粒子が、彼らの突然死と関係があるとしたら？彼の予想は当たっていた。やがて、各国政府から、回帰失踪者を検査した結果、未知の病原菌を彼らが保有していることがわかった、と発表された。彼らの異様な形相――変化した肌や瞳、体型などは、すべて、この病原菌へと対抗するための、順当な変化だったのである。かくして、この病原菌の存在は全世界に知悉されることとなっ

た。そして、死亡者が増えるにしたがって、あることもわかってきた。

まず、この病原菌——というより、病原粒子であるが、これは、キャリアとなった失踪者から空気を介して経口、経皮感染し、一定の潜伏期間のあと、フェアシュミットたちに起こったような、倦怠感、耳鳴りといった症状が現れる。その後、急激に肌や内臓の変化が訪れるが、この変化に体がついていかないものは、すべて死亡する。老年ほど、死亡する確率が高いことが、徐々にわかってきた。粒子の存在を、体が受け入れることができないのだ。逆に、二十歳以下では、生存するものも多くいた。ただし、生とひきかえに、彼らは、それまでの自分とはまったく違うものに変化した。失踪者と同じ、人間ではないものになったのだ。

彼らは、ひっそりと集められ、ひっそりと作られた隔離療養所に入ることになった。そして、粒子の研究と、彼ら自身の治療法を探る国際機関ができた。すべての現況である粒子は、その性質について、最初に仮説をたてたフェアシュミットの名前をとって、フェアシュミットの粒子、とかFウイルスと呼ばれるようになった。後者の名称について付記しておく、苦言を呈する科学者や生物学者は多くいた。粒子は無機物であり、生物であるウイルスとは違う。だが、説明するのに便利だというのにくわえ、あたかも菌のような存在として認識するものも多かったので、その名称は長いあいだ消えなかった。

さて、その国際機関に、ヴェネストロムという、北欧出身の若い医者がいた。彼は若干十六にしてすでに博士号を持つ、いわゆる天才だった。そして、天才の例にもれず好奇心旺盛で変わり者であった。実学のひととして名高い彼は、患者の治療にあたるうちに、もっとも有効な手立てとしてこれ以上のものはない、というある手段について考えるようになる。周囲はうすうす感づいていたので、こゝとあるごとに馬鹿な真似はよせ、と忠告した。だが、彼は聞き入れなかった。思い立ったが吉日とばかりに、ヴェネストロムは、ある

日突然、その考えを実行に移した。防護服を脱ぎ捨てて、患者の部屋へみずから粒子を浴びにいったのである。賭けのように無謀であるが見えたその行いは、だが、引きとめながらも、これしかないのでは、と周囲が心の底では願っていたことだった。その国際機関ではたち以下の若者は彼だけだったのだ。

そして、彼は賭けに勝った。

目覚めた彼は、のちにノーベル賞のスピーチでも述べる、人類史上十位以内には入るだろう名言を吐いた。

「思ったとおりだ。世界はもう、新しい！」

彼曰く、それは、時間を越えるだけの粒子ではなかった。患者たちが、自主的に口をつぐんで隠していた事実が、彼によって次々と暴露された。

粒子には、三つの、さらに微細な粒子が付属していた。それらの働きは、以下の通りである。

ひとつは、脳の受容体に、視覚と聴覚に、あるフィルターを形成するよう働きかけるもの。

ひとつは、身体の代謝系や排出系といったフィジカル全体を、爆発的な威力で、粒子それ自体に耐えられるよう作りかえる命令をだすよう、遺伝子に働きかけるもの。

ひとつは、変化した部位の中で、粒子を操ることができるような組織を見つけて、そこに取り付くこと。

ヴェネストロムは、粒子を浴びる以前は、淡い金髪碧眼に高い身長という、北欧ゲルマン人の典型的な容貌をしていたが、変化してから、髪は青く、瞳は白く、高い身長はますます伸びて、三メートルを越していた。彼は、変化の具合を一つ一つ自分で確かめ、それでも、自分が得たものは失ったものより多いと断言した。そして、患者たちをすべて、普通の人間と一緒に暮らせるように環境を整えるべきだと、国際議会で提案した。彼は、粒子に関する論文を山ほど書き、ひとつひとつを実証してみせた。ヴェネストロムの提案で、彼らの特異な容貌だけでも救おうと、整形、形成手術が、のちに、最大の発展の山場といわれる隆盛を迎える。どうやら金になりそうだというので、彼の元には資本が殺到した。

だが、宗教や、政府や、国家といった、これまでに人類が築き上げてきたものもまた、ある日、とうとう破壊の憂き目を見る。この粒子が尖兵だということが知れ渡った日だ。

三月十七日。

宇宙エレベーターに乗っていた少女が、月がいっぱいに写る窓から、誰かの視線を感じた。振り向くと、そこには、宇宙服も着ないで立っている人の姿がある。それは、彼女が映画で見たことのある宇宙人そのものだった。グレイ、と呼ばれるタイプのものだ。ひょろりと細長いその宇宙人は、にっこりと笑って、掻き消えた。少女は、寝ぼけているのかしらと思って目をこすった。彼女の両親は、長いバカンスにつきものの退屈な移動時間に飽きて昼寝をしていたが、そのときちょうど目覚めて、少女の頬にキスした。父親が、「やれやれ、まだつかないのかい」と呟きながら、テレビの電源を入れると、ちょうどニュースをやっていた。

その少し前、国際政府は、どこからともなく現れた集団に、議会を占拠されていた。ちょうど、ある紛争地帯の戦闘に介入すべきかいなか議論しているところだった。そこへ、彼らが、何の前触れもなく出現したのだった。

それは、巨大な光の塊を背負っていた。

後光と表現してもいいかもしれない。その光で、全員の目をくらませ、圧倒しながら彼らは告げた。

「われわれの住処をこのときから、地球にも用意してもらいたい」
光に目がなれて、ようやく彼らを見た議長は、ぎょっとした。彼らには、翼が生えていた。天使だ、ミカエルだ、とユダヤ・キリスト教圏の出席者は言い、ほかのものも、天使と呼ばれるものもちらん知っていたから、同じ想像をした。指令待ちの気の毒なSPたちは、銃を構えていたが動揺は隠せない。思い出したように報道陣のフラッシュもたかれたが、彼らの放つ光の量と比べたら、かわいそうなほど貧弱だった。

混乱さえ許す余地のない、おとずれた静寂の中で、彼らが述べたのは、簡潔に書くと、以下の通りだ。

われわれを地球に住まわせてほしい。あなたがたにはその義務がある。なぜなら自分たちは、地球から別の次元であなたがたと同じように暮らしていたが、あるときからあなたがたの歴史に介入して、

瀕死だった現人類を救った恩人だからだ。

住まわせてくれるなら、礼はする。たとえば、先に行かせた、あなたがたの仲間と、この光。

われわれは、定着の努力を怠らない。

言うだけいうと、彼らは翼をたたみ、いかにも宇宙人といった姿を人間に近く変化させて、議会の真ん中に降り立った。銃も脅しも懐柔も効かないだろうと、瞬時に全員に知らしめるほど、彼らの存在は重厚感を伴っていた。悪いことには、この映像はすぐさまネットを通じて世界中に伝播した。CGではないことも含めて。

それから二年。召集されたヴェネストロムら粒子の研究者と、国際政府の首脳らは、天使（仮）の存在を彼らの要求どおり、正式に公にした。また、飛来人、と改めて彼らを名づけて、大西洋に浮かぶ無人島や、太平洋に浮かぶ無人島、あるいは人工島に住居を用意した。彼らの自治を認めつつ、地球における一国家として迎え入れる方針をかためたのだ。さらに、人類が西暦千九百年の半ばからUF_Oと呼んでいた、彼らの乗り物で移動することも認め、時には島ほどもあるその浮遊城で、各国の上空を自由に往来することもやはり認めた。まるで地球ごと植民地にされたようなものではないかという思いが、国際政府のなかに芽生えたが、口に出すものはいなかった。彼らが自分たちよりすぐれていることは明白であり、その気になれば滅ぼされてしまうと分かれば、従わざるを得ないではないか。

飛来人たちは、デモンストレーションを怠らなかった。

ジェットエンジンなど搭載せずとも、スームズに動く円盤で大気圏を突破してみせ、戦地で飛ばされた最新形ロケットミサイルを発射地点に叩き返し、事故により、宇宙空間に投げ出された宇航士と乗員を、何の装備もなく救った。そのたびに、粒子に汚染されて変化したり、あるいは死亡するものはそれより多かったが、それすらもう、たいした問題ではないと思うほかなかった。

やがて半世紀もすると、飛来人という、強大な存在を得た人類は、

それよりはごく優しく、自分たちに近い“変化したもの”に、同情と尊敬の念を抱くようになった。ヴェネストロムをリーダーとする彼らは、療養所から解放された。ただ、隔離しなければならないということは変わらないので、とりあえず、指定された区域に暮らし始めた。

繰り返し述べるが、彼らはすでに人類ではない——かといって、完全に飛来人ではないわけなので、その中間の種族、ということになる。しかし、いくら人類だと主張しても、飛来人からの接触もたびたびある、というどっちつかずの状況だったので、人類側では、受け入れについて議論がつきなかった。そんななか、彼らは粘り強く懇願と要請をした。生まれ育った場所に愛着もあるという声明も頻繁に出された。なんとか世論が落ち着いたタイミングで、各国は増えていく化生の者たちの住居を、彼らの母国である場所か、あるいは同盟国へ準備することになった。

そこでできたのが、ゲットーと呼ばれる場所だ。つまり、隔離自治区だ。

という説明までを聞いたところで、理非等はベッドに寝転んで、手元の冊子を開いた。

そういえばそんな歴史だったつけ、と、ようやく思い出した。すでに、彼らの世代では、生まれたときから飛来人は“もともとそこにあった”生き物であるし、変化したもの、という名称は、化生とか、魔法使いとか、時限人とか呼ばれていた。飛来人ごっこ、魔法使いごっこという遊びも、子どもたちは絶対にやるものとして定着していたので、漠然と——頭のどこかで、そうならどうするか、という想像もしたことがある。

だが、現実になってみると、どうにも実感がわかなかった。

羽化登仙。理非等は、じっと身を硬くしたまま、その言葉を思い出す。この、耳慣れない、不思議な語感の四字熟語も、変化したもののたちを表すのに、誰かが持ち出して以来、広く知られて久しい。羽化。蛹が蝶になること。羽を持つこと。まったく別のものになる

こと。登仙。仙人になること。二つですなわち、羽がはえて仙人となり空を飛んでゆくこと。人間が、普通の人ではなくなる、異常のものになる――

本当に、そうなってしまったのだろうか？

でも、もう――そうだ。俺は、一度死んだ。おぼえている。自分が魂だけになって、すごい力で上にひっぱりあげられていく。光に包まれて……あのとき、あれこそが、“死”だったんだ。

あれが羽だった。俺はだけど、飛翔したままではいられず、地上に戻ってきた。戻されたのかもしれない。

そして、新しい体に入れられた。顔だってもとの顔と変わらないから、最初からこれが自分の体だったような気がしているけれど、これは、もともと、きつと、別のひとのものだったのだ。

理非等は、しげしげと自分の体を見下ろした。冊子には『変化した体のしくみ』というページがあった。

「

―――――食事はできますが、取り込んだ食物や液体は、体内にある粉碎機器で細かくされ、分離されて排出されます。人間だったときと排出方法はかわりませんが、極端に酸性のものやアルカリ性のものを口にした場合は、内部機関に破損を生ずることがあるので注意が必要です

」

図解があつて、なにか難しい名前が並んでいる。学校で習っていないので、詳しいことはかけらも理解できなかった。

ただ、ご飯は食べられるのだとわかってほっとした。彼にとって、代表的な人間らしい行為といえば、食べることである。つまり、食いしん坊ということだが、それはさておき、彼は、他のページにも

次々と目を通す。どうやら、自分が変化した年齢からいくと、学生という身分が与えられるようだ。ということは、それから、ゲットーの中で、自分が暮らす場所は――

テレビのBGMが変わった。瀬川レオナは姿を消し、のんびりとした音楽と共に、画面が緑色になる。なにかと思ったら、森林を映しているのだ。小川や、そこにかかる石でできた橋や、細長い船――そして、着物を着た人々が現れた。ここが、日本の自治区、エル・シャロームでござるよ、と、サムライ姿のキャラクターが出てきて言った。

理非等は画面に見入った。サムライが、女の子に向かって喋る。

「変化したひとたちの住む場所は、国際政府によって、保護区に認定されているでござる。だから、こんなふうに、たくさんの自然に囲まれて、拙者たちは安全に暮らすことができるのでござる」

ゲットー内部は、ちょうど、蒸気機関により工業が発達した時代前後に、環境を整えられている。これは、粒子をまとうように変化した人びとが、まれに、みずから生み出したワームホールに吸い込まれて、過去へと行ってしまうことが大きな原因だ。今では、ワームホールを生み出す粒子の収集、発散をおさえる製品が開発されたため、頻繁な時間遭難はなくなったが、万が一を考えて、遭難先の時代のひとびとに怪しまれないよう、服装や生活習慣にいたるまで、普段から制限しておく必要があった。彼らがワームホールをくぐって行き着く先は、日本でもしそうなったとしたら、多くは江戸末期から現代にかけて。この、大雑把にしか分からない行き先が問題で、漂流先が江戸までさかのぼると、着物の着方や元号、その当時の風俗的知識が、最低限度、必要になる。

映し出される人々は、すべて、着物や袴姿だった。日常から、訓練をしているのだろう。

どこもかしこも時代劇風の町並みを見ながら、理非等は、だんだん気がめいってきた。

歴史は苦手だ。自然に囲まれた環境というのは、彼の育ってきた

場所は比較的田舎であつたから別にかまわないが――

もし自分が遭難したらどうしよう？

ちゃんと自分で帰れるのか、とても不安だ。過去へさかのぼろうとするほど、たくさん粒子を自力で操ることができなければならぬらしい。帰ってくるのも、同じ力が必要だ。それだけの力を、果たして、自分は持っているのだろうか。

できなければ、漂着先の時代で暮らすしかなくなる。こんな――変な体で。

しかし、浴衣に包まれた自分の体を見下ろしているうちに、ふと、たいへんなことに気付いた。

そうだ――お母さん。お母さん、お父さん！

家族はどうしているのだろう。理非等が変化したことを、きっともう知っているに違いない。

うかつだった――倒れてから、今はどれくらい経っているのだろう。もしかしたら母親は、病院に泊り込んだりして、今も、理非等が目覚めるのを待っているのでは？

理非等は、布団をはねのけて床に下りた。ドアをあけて、左右にずっと続く廊下を見渡す。病院の廊下らしいが、車椅子や、薬を乗せたワゴンや、看護師の姿はなかった。薬品のおいがするだけだ。照明はなく、薄暗い。

手すりをつかんで歩こうとすると、十歩もいかないうちに疲れてきた。彼は座り込んでしまった。「誰か」と、廊下のむこうにむかって呼んでみる。「誰かあ」

病院は、いまだき珍しいほど古びている、木造の建物だった。白い壁は漆喰で、しっとりとした湿っぽい感触だ。遠くに、ガラス製のドアがある。しばらくそうしていると、ガラスのドアの手前から（どうやらそこに、ナースステーションがあるらしい）一人の少女がひよこりと現れた。彼をみつけて駆け寄ってくる。膨らんだ袖に、裾の長い、青と白の縞模様のワンピース、腰からは、白いエプロンをつけている。髪はおかっぱで、頭の上には、白い楕円形の、奇妙な形の小さい帽子をのせている。その格好を、理非等は、母親の書斎の資料で見たことがあった。

「看護婦さん……？」

それを聞いた少女は目を丸くする。近くまで来た彼女は、理非等のそばにしゃがみこんで、にっこりと笑った。

「よく知ってるわね。みんな、最初はこれが看護師の格好だってわからないのよ。ええ、わたくし、看護婦のルリといいます。リヒトね？」

「はい。瀬田理非等です」

理非等がうなずくと、なぜか、ルリは困った顔をして、人差し指を口に当てた。何かを言おうとして、自分でそれをやめたようにみえた。離れていた人差し指を再び唇にあてて、困り顔のまま微笑む。「うーん……今日はいいか。リヒトさん、さあ、立てる？ お部屋に戻らなくてはならないわよ」

「うん、そうみたい。なんか変で……」

じぶんでは元気だと思っていたが、変化する、というのは、相当な負担のようだ。今日はもう、じっとしていたほうがいい、と彼は悟った。ほんの少しの歩行なのに、動悸と息切れがすさまじい。よろめきながら立ち上がると、彼女は、肘に彼の手をつかまらせるようにして、歩くのを手伝ってくれた。これだけは聞いておかなければ、と理非等は尋ねた。

「あの、今は、何月何日ですか？ 397年、というのは知ってるんです。でも、あの、できたら普通の年で」

「ああ、西暦ね？」

年号を聞いた理非等は驚いた。修学旅行から、一年と一ヶ月が過ぎていた。一年！

「あの、俺の家族は？」

「ご家族？」

「ここは何県なんですか？ ここって、古い、病院……だよな？ ルリさんの格好とか、それ、昔のだもん。ねえ、どのへんの病院なの？ 俺の家、東北で……福島なんですけど。白河の総合病院とかじゃないよね？」

「何県というなら……京都府といえると思うけど」

「京都！」

じゃあ、倒れて近くの病院に運ばれて、そのままなのか——いや、違う。理非等はあたりを見渡した。そして、ルリを見つめる。彼女も、何か言いたそうにリヒトを見つめている。彼女の胸元には、ネームプレートがあった。ルリ、とカタカナで書かれ、その下には、

ローマ字でRURIと刻印されている。強い違和感を感じて、理非等はおそるおそる尋ねた。嫌な予感がした。

「ねえ、ルリさん。ルリさんの上の名前って……？」

「昔はあったけどねえ」

感情を感じさせない声色でルリは言って、首をかしげるように、廊下の右端をあごでさす。理非等はそこを見た。気付かなかったが、反対側の壁に、小さな窓があった。ルリはそちらへ彼を連れて行く。外を見せたいらしい。ちょうど顔の前にある窓から、薄く光がもれている。理非等はのぞきこむ。青々と茂った木々が見えた。ふつくらとした地面は苔むして、遠くに、用水路を流れる水の反射がある。その森のはずれでは、誰かが地面を掃いている。ほっかむりに、首に布を巻いて、足をむき出しにしている。袴をはいていて、ときおり、首に巻いた布で手をふく。その横に、縞柄の猫がいた。のんびりとした光景に彩を添えるように、かすかに、古めかしい鐘の音が聞こえてくる。そのとき、何かの物売りの姿が、袴の男のそばを通っていた。籠のようなものを担いで、早足で通り過ぎる――こちらにも、足元をあらわにした袴姿だった。

理非等は、夏の夕暮れの匂いまで感じられるその光景をじゅうぶんに見ると、びっくりして、窓から体を離れた。

「ここは、もうゲットーなのですよ、リヒトさん」

「ゲットー……」

「ええ。一応、住所もあるのよ？ 平安市大正区っていう」

「待って。待って。待って……、ねえ！ 家族は？ お母さんとお

父さんは？ 俺の……俺の」

「おちついて」

「いやだ。ちょっと待ってよ。どうして？ 誰がそんなことしたの？ 誰が俺をここに、勝手に連れてきたの？ 何で？ どうして」

ルリは、少しだけ眉をひそめたが、すぐに笑顔になった。

「リヒト。お部屋に戻って……渡されたファイルをよく見てみるといいわ。ひょっとしたら、ご家族からの手紙が入っているかも。こ

の夏はもう無理だけど、大丈夫。もう会えないってわけじゃないわ。だから、ね——明日から、詳しい説明を、担当の人がしにくるし……それにね、ええと、貴方と似たようにここに来る子もいるけど、皆、一週間もすると、慣れてくるわ。そのうち学校だって始まるし……」

慰めるように、早口で言う。

だが、理非等にはもう聞こえなかった。

知らない間に、すでに隔離されていたなんて——あまりに勝手すぎる。自分がどこか遠い場所へ、不当に連れ去られたような気がした。

お父さん。お母さん。みんな……！

いつの間に、そんなに世界は進んでいたのか。自分が寝ている間に。そうだ、具合が悪くなって、ほんの少し、寝ていただけじゃないか。それなのに。

無性に腹が立った。そして、悲しくなった。

なりたくてなったわけじゃない、こんな体に——

過去にいけるかもしれないんだなあ、と、心が浮き立たなかったかといえぼうそになる。心のどこかで、何か、じぶんが他の人とは違う存在になった気がしたように思っていた。どれだけ馬鹿なんだろう？　まして、ご飯が食べられるんだなんて、のんきに考えていたなんて、もっと大馬鹿だ！

涙が出そうになる。しかし、涙は出ない。

人間ではないから？

いや——人間だ。俺は人間だ！

次の瞬間、理非等は、ルリにむかって、怒涛のように喋りかけていた。

「ねえ、家に帰るにはどうしたらいいの。新幹線とか——電話は？　そうだ、電話できない？　電話だけでもしなきゃ。みんな心配してる。俺、修学旅行に来たまんまなんだよ。一旦、家に帰らせてよ。そしたら、そのあとでここに戻ってきて、ここで暮らせればいいでし

よう？ 家に——ちゃんと挨拶して……みんなにお別れだって言わなくちゃだし……お母さんとお父さんと、弟と、おじいちゃんとおばあちゃんと……あつ、八月！ 八月は、親戚がみんな集まるんだよ。おじいちゃんの誕生日があるから。もうすぐかもしれない」

「リヒトさん」

すでに、二人は部屋の前に来ていた。ルリは、病室の扉を開ける。それは、なんの障害もないようにスムーズに開いた。ルリは、理非等を部屋の内側へ押し込むと「そういうことも全部、担当の人がちやんとしてくれるわ」と、看護婦らしい事務的な口調で告げた。それは、彼への同情と仕事を、完璧に分けた姿だった。

「おやすみなさい」

「待って……」

軽い音を立てて扉はしまった。その後で、あろうことか、鍵のかかる音がする。閉じ込められたのだ。

呆然としながら、理非等は、靴音が遠ざかるのを聞いた。

ともあれ、ルリの言葉がはっきりと耳に残っていた。ファイルをひっくり返して、家族からの手紙を探す。上から下まで探した。やがて、どうして今まで気付かなかったのかと思うくらいあっさりと、いちばん底から、ビニールで包まれた、膨らんだ茶封筒がでてきた。彼は、急いで封を切る。「リヒトへ」と書かれた宛名に、変なの、と彼は思った。母親の字だが、彼女はいつも、子どもたちの名前をきちんと漢字で書く。中を覗くと、みっしりと便箋が詰められていた。彼はそれらを引き出して、ゆっくり便箋を広げる。

「今でもまだ信じられませんか——」

驚きと悲しみ、怒りと落胆。息子への思いが、そこには込められていた。できるだけ冷静に、淡々と綴ろうとしているからこそ、より深く、彼らの受けた衝撃の大きさが感じられた。理非等を救おうと、父と母が、あらゆる努力を彼らがしたのだとわかった。——最初は生存を、次に、人としての健康と生活を、そして、家族のもとへの帰還を。おそらく、書かれている通り、ふたりは努力を惜しま

なかっただろう。そして、すべてにノーを突きつけられたとき、彼らが、先ほどの理非等と同じ要求をしたことも書いてあった。せめて、一度家に帰して。だが、それもだめだった。すでに、瀬田理非等という人間は、日本のどこにもいなかった。彼は、死んでしまった。死んだ人間を、取り戻すことはできない。

彼は、昼間にやってきた異形のものたちの言葉を思い出す。

あいつらが言っていたつけ——俺は、日本国籍から抹消されたって。

じゃあ、俺の名前は、もう瀬田家の欄にはないんだろうか？——そんな。じぶんが、瀬田周と、問理可の子どもじゃなくなるなんて……おじいちゃんも、おばあちゃんも、弟とも、関係がなくなる？手紙の最後の一枚を読みかけていた理非等は、そのとき、空になったと思っていた封筒に、便箋ではないものが、ほかに入っていることに気付いた。

写真だった。四月、中学校に入学したときの写真だ。まだ体になじまないブレザーを着た彼と、弟と、両親と祖父母。家族全員が写っている。一番新しい家族写真だ。

理非等はそれを見ると、出ない涙のぶん、声をあげた。最初は細く、だんだん大きく、嗚咽のようになった。涙が出なくても、視界ってゆがむんだな、と頭の隅で彼は考えながら、啼いた。誰かに聞かれてもかまわなかった。彼は声がかれるまで啼いて、啼いて、その日は手紙を抱いたまま、ベッドに倒れこんで眠りについた。愛している、と父と母は、最後に書いていた。愛してる。

それを捨てる気は、彼にも絶対になかった。

2 再会

なんとか生きていかなければならない、と思ったのは、それから三日後だった。担当官だという、最初にやってきた男が持つてくる膨大な書類に、あらかじめサインをし終わったころだ。理非等という、使い慣れた漢字の羅列は、それを最後に書くことはなくなった。また、次の日から、リハビリもはじまっていた。歩行訓練と、これまでは違う視界に慣れる訓練。さらにそのあいまに、山のような検査を受けた。

ゲッターでは、粒子のことを、ソジ粒子と呼んだ。漢字では、時を遡る、と書く。まず彼は、粒子が、体のどこに一番多く溜まっているか、という検査と、彼がどの程度粒子を操れるか、予測をたてるための検査を受けた。おかしなことに、医師や技師たちは、ソジ粒子を、まるで生きているもののように扱った。そして、彼らが言うには、粒子は特に、リヒトの左腕と瞳と肩甲骨のあいだの部分を“気に入っている”らしかった。たしかに、撮影機に写された彼の体は、高速で移動するそれらのおかげで、そこだけ、ぶれが大きかった。

次々と支給される道具を、理非等は、ルリの指示通り木の箱につめ、夜になると、説明書を読みながらひとつひとつ確認した。一般病棟に移っても、ルリはたびたびリヒトのもとにやってきた。ある日彼女が連れてきた客は、いつもの担当官ではなく、こざっぱりとした風貌に、紺の着流しの似合う若い男と、長い髪に涼やかなガラスの、カラフルなかんざしを挿した、色白で背の高い、中年の女性だった。

「はじめまして」

「はじめまして……」

この男女のように、ゲッターの一般人然とした身なりのにんげん

がやってきたのは、初めてだ。誰だろう、と思っていると、彼らは「平安学園のものです」と名乗った。

「一般教科担当のキョウタローと、実技専門教科主任のカエデ。君の担任になります」

「学校の……？」

「そう。君の先生」

はじめて、普通の生活を意識させる単語がでてきた。思ったよりほっとしている自分に気付いて、リヒトは照れくさくなる。

パンフレットを見ながら、心待ちにしていた相手だ。平安学園の二年次に、リヒトは編入することになっていた。待ちきれず、彼らが椅子に座ったタイミングで、さっそく、質問を繰り出した。

「あの、平安学園って、どういうところですか」

「学校だよ、普通の。いや、まあ……外部生は、最初は多少、とまどうとは思っけどね」

これが、君の入る二年生の課程表、と渡された紙には、時間割があった。圧倒的に社会の授業が多いことをのぞけば、数学、理科、国語、英語といった馴染んだ名前に、ひとまず安心する。英語以外にも、語学、とあるのがひっかかるが、ほかの見慣れない単語のほうに気がなった。

「あの……操実、かっこ基、というのは」

「操作実践基本。粒子を操ってみよう、という授業かな。体育みたいなものよ」

カエデが答えた。

「はあ……あの、武芸、というのは」

「武道芸術。そうねえ、柔道とか剣道とか、お茶とかお花とか、楽器。部活と思ってくれていいわ」

時間割の最後にあたる七時限目には、すべて、武芸とある。なるほど。思ったより、普通の学校ぽいですね、と呟くと、二人は笑った。

「授業のより詳しい内容は、こっちにあるけど……まあ、やってみ

てのことだね。あと、いろいろ不安もあると思うけど、転入してしばらくは、世話係がつくから安心して。寄宿舎での同室の生徒でもあるから、仲良くしてみてね」

「え、誰ですか」

「ミサオっていう子。学級委員だよ。親切で、頼れる子」

学級委員とは縁のない生活を送ってきたので気後れしたが、リヒトは微笑んだ。寄宿舎の説明用紙に手を伸ばしたとき、ルリがドアから顔を出す。キョウタローが、あれ、という顔をする。

「なんだ、君の担当なのか。案内してくれたから、もしやと思ったけど」

「ああ。じゃ、やっぱり貴方が担任なのね」

きけば、二人は同級生だったのだという。ルリは、廊下に置かれていた、キョウタローとカエデが持ってきた荷物を、室内に運び込みにきたのだった。壁際の棚に、ひとまずすべてを収納したが、ひとつをリヒトのベッドに持ってきて、「あけてみたら」と言った。市松模様の風呂敷に包まれている。固い結び目をようやく解いて、中から現れたのは、大きな箱だった。紅白の紙がまきつけてあって、破るのがもったいない。躊躇しているリヒトの様子をみながら、三人は一樣ににこにこしている。中身が何か、知っているのだろう。キョウタローに促されて、思い切って開けると、黒い布に、金色の小さな丸いものがついた塊が出てきた。

「制服だよ」

「制服……」

両手で広げてみると、ずいぶん昔の映像でしか見たことがない、学生服というものだった。黒い固い、ごわごわする生地は、胸から裾へ、直線的に落ちていく。首の中央から下にそって、アスタリスクのそれぞれの線が、二等辺三角形の二辺で縁取られている模様のついた金釦が並ぶ。ズボンと一緒に出てきたベルトのバックルにも、おなじ模様が小さく彫られていた。校章なのだろう。

「二期期がはじまってしばらくは、まだ暑いから、こっちのシャツ

を着ている子が多いかな」

別の紙袋を、キョウタローが差し出す。白い半そでのシャツが出てきた。カエデも、彼の目の前に、紙でできた冊子を積み上げる。ちよつとした山のようになった。どれも渋い色合いで、それはまさに、彼が図書館で目にした事のある、本の体裁をなしていた。目を丸くしていると、カエデは「教科書よ」と笑った。

「教科書？　これが？」

「こっちがノート。それから、筆記用具」

ますます驚いた。彼が知っているノートは、汎用機械帳面と呼ばれるもので、紙でできてはいない。筆記用具も、ペン以外に使ったことはないし、ペンがなくても、デジノにキーボードがついているから、特に必要はなかった。

使いこなせるだろうか、という不安と共に抱いたのは、ずいぶんかさばる、という印象だ。祖父母の昔話に出てくるものを、自分が使う嵌めになろうとは、夢にも思わなかった。

「これは全部貴方の私物よ。リサイクルペーパーじゃなくて、本物の木からできてるの、珍しいでしょ」

「あの……、これ、もらっていいんですか？　こんなにたくさん？」

「もちろん。夏休みのうちに退院できるといいわね」

「うん……」

しかし、渡された教科書を手にして、彼は初めて、じぶんと同じような子どもたちの存在を実感した。恐ろしさもあったが、それよりも、期待が勝った。正直にいうと、もうそろそろ、病院にも飽きてきたころだ。なんでもいいから外に出たい。

「心配しなくても、そのうち、引越しょ」

見越したように、ルリが、一枚の紙を差し出した。

「退院日が決まったわ。あさってには、寄宿舎に行くのよ、リヒト。署名しておいてね」

「おめでとう」

キョウタローが笑う。心から祝福している笑顔だった。変化して

から、初めてこんなふうに言葉をかけられた、と彼は思った。人間らしく会話して、人間らしく……ルリはもちろん親切だったが、それは、看護婦としての親切さよりほかならない。彼はその晩、教科書を読みふけた。デジタルがアナログになったただけだ、とわかったので、すっかり順応して、楽しむことができた。眠っていた間にずいぶん遅れてしまったことも同時に実感したが、さっぱりわからないということそのものが、無性におもしろくてたまらない。

しかし、彼がまだ、本当に何もわかっていなかったのだということに自覚したのは、翌日だった。

「おはよう」

翌日も、カエデはやってきた。キョウタローは、彼を受け入れる男子寄宿舎の準備に忙しいという。複雑な手続きを十分ほどしたあと、カエデは、彼を病院の外に連れ出してくれた。といっても、病院に付属する運動場だったが、それでも、吹き付けてくる風や空気の匂い、空の色を目にして、リヒトの心は浮き立った。

退院の予行を祝福するように、外は、若葉の新緑がまぶしかった。病院の外観を、彼ははじめて見る事ができた。中は木造だと思っていたが、立派なコンクリート二階建ての建物で、想像よりずっと新しかった。大きなファサードに大理石のロビー、看護婦たちが受け付けで微笑んでいるさまを見渡してため息をつく。中央玄関は、はめ込まれた立派な表札の脇で、彫刻の天使がラッパを吹き、花や鳥が飛んでいた。広い前庭では、患者と看護婦たちが談笑している。ゆつくりと歩いた。病院から一步外に出たとたん、リヒトは、鎖を解かれた犬のように、今にも走っていきそうだった。カエデがいるのでおとなしくしていたが、一人なら、間違いなくそうしただろう。そのカエデは、ときおり、彼のほうを振り向いて微妙な表情をした。新しい生徒のできがよくなさそうだから怒っているのか、日光がまぶしすぎるからか、病院が嫌いで本当は近寄りたくないからではないか、という考えが浮かんだが、どれも違うような気がした。ふと、深刻そうにときおりひそめられる眉と、ぎこちなくリヒトを振り向く様子を見ているうちに、そうだ、ルリが以前こんな顔でじぶんを見ていた、と思い出した。

家族のもとに返してくれ、と、小さな子どもみたいに駄々をこねたときだ。

運動場のはずれは、芝生に覆われて、背の高い木が影を作ってい

た。カエデが前方で立ち止まったので、リヒトも歩くのをやめた。カエデはゆっくりと振り向いて「ちゃんと抑制してる？」と微笑んだ。キョウタローと一緒にいたときは、優しそうなひとだと思っていたが、今は、さびしそうなひとだと思った。

「ああ……、ええっと、はい」

リヒトは、耳につけたイヤカフスと、左手首のブレスレット、首の前後に長くたらしめたネックレスを順番に触る。イヤカフスは分厚い勾玉を折り曲げたような形状で、ブレスレットとネックレスにはボール状の塊を、ステンレスの網で包んだものがついている。そこに、粒子の運動を制御する機械が入っているのだ。

「もう慣れた？」

「はい。たぶん」

「ちよっと、やってみて」

「はい」

初めてだ。

リヒトは目を閉じる。体中を、血液と一緒にめぐる粒子のことを考える。肩甲骨の間と左腕から、するすると彼の瞳へ移動してくる彼らのことを。

粒子に付属する副粒子の作用のなかに、視覚と聴覚にあるフィルタを形成する、というものがある。そのフィルタというのが、いわゆる、普通のニンゲンには目に見えないものを知覚できるようにする、というものだった。変化した人々は、感染の度合いに応じて、それぞれ、あるものを見る。

「どんなふうに見える？ リヒトにとって、目の前の世界は」

「ええと……」

彼はゆっくりと目を開ける。目を閉じる前と変わらない風景がひろがっている。だが、カエデの横には、背の高い誰かがいた。スーツを着て、茶色い髪に、淡い緑の目をしている、男だ。さっきまでいなかったもので、それが“そう”であることは、すぐにわかった。いわゆる霊。ゴーストだ。男は、かなり高齢の人物だった。しわ

のある顔と広い額、鼻の下では手入れされた髭が上品にカールしている。手にはステッキを持っていた。

「先生の横に男のひとが。お年寄りって感じの……」

カエデは笑った。

「私のひいおじい様よ」

「外国のかたですか？ そんなふうな感じ」

「そうなの。カエデってね、どういうことかわかる？ 私の名前。

この、おじい様がつけてくださったのだけれどね、おじい様の祖国を象徴する木なの。そう。ふうん、なるほど、なかなか詳細に見えるわね。瞳に、たくさん粒子が棲んでいるのが、関係してるのかな？」

「違うふうに見えることもあるんですか？」

「たまにね」

カエデの曾祖父は、孫娘をいとおしそうに見ているが、カエデはそちらを見ないので、リヒトは不安になる。

「あの、どんなふうに見えるんですか？」

「ぼんやりした光の塊、っていうひともいる。そこに、人の顔だけが写って見えるとか。そう。ありがとう。……おじい様も、わざわざすみません」

カエデが祖父に向かってそういうと、ゴーストは、上品におじぎをして、空中に掻き消えた。彼女にも見えていたのだとわかって、なんとなくほっとする。同時に、興奮をおぼえる。

「これから、どんどん、以前は見えなかったものが見えるようになるわ」

「はい。ありがとうございます」

そうか、練習しに来てくれたんだ、とリヒトは思った。学校では、みんな、当たり前前にゴーストの存在を受け入れて暮らしているに違いない。とまどったりして、みじめにならないように、気をつかってくれたのだ。だが、カエデは首を振った。

「違うの。そういうつもりじゃ……、いえ、ほんとうは、そういう

つもりだけど。ええとね。貴方のことを、多少、予備知識として、教師ですから、知っています。だからね、気になることがあるんじゃないかと思って、特別に来ました。外部生——失礼、ええとね、貴方みたいに、十代で変化して、転入してくるひとのことよ。外部生が転校したのときは、いろいろとトラブルも絶えなかったりするし……。いえ、もちろん、どの程度、操作ができるか、というのも興味がある。教師としては——私のおじい様を見ていたときの貴方を見ていれば、たぶん、大丈夫だという気がするけど。でも、いちばん私が困難に思うのはね、私に変化したのは赤ん坊のころだったから、ゲッターっていうのは、私にとって、特別な場所でもなんでもない、ということなの。でも、貴方は違うでしょ」

「俺にはすごく、特別な場所です」

「だわよね」

カエデは首をかたむけた。髪にさした、何本ものかんざしがゆれる。よく見ると、複雑に髪を留めているそのうちのいくつかは、抑制のためのアクセサリだった。

「ええと」

カエデは、多少、とまどっているようだった。よく見ると、彼女の目は、とても淡い茶色をしている。複雑な笑みを彼女は浮かべ、やがて、細い首を、ひょこりとかしげる。

「気になることがあるんじゃない？」

「と、いいますと？」

「探してるでしょう」

慰めるような声色に、リヒトは、思わず言葉につまる。

その疑問は、彼が、目覚めて、リハビリをはじめた日に、思い出したことだった。その後、病室からリハビリ室へと往復するあいだに、ほうぼうの病棟を見に行ったりしたが、探しものは見つからなかった。

学校に行けばわかる。そう思って、大事に大事に、ひきのぼしてきたのだ。

リヒトはじつとカエデを見つめ、唇を開く。

「会えますよね？」

そのとき、ひととき強い風が、二人のそばを吹き抜けていった。やたたって、彼女は、申し訳なさそうに首を振る。

「いえ。貴方だけです」

「でも、あの――俺たちの年齢なら、半分は、ちゃんと変化できるって、ええと、ほら、あの、浦川レオナっていう有名な人も言った。十歳で感染すると生存率は50パーセントで、あとは、五歳年をとるごとに5パーセントずつ減っていく。俺は十二歳だったから、生きている確率は48パーセントですよ。それで――俺たちは五人いたんです。ねえ、先生、中島は？ 中島洋介は？ 原さんと阿部さんと野々村さんは？ 五人いたら、俺のほかに、あと、一人か二人かは変化して、同じように、ゲッターにいるんじゃないの？ そうでしょ？ 俺のハクの定着は時間がかかったっていった。みんな、もう、寄宿舎に入ってて、夏休みが終わったら学校に通う準備をしてるんでしょ？」

カエデは首を振った。リヒトは目をいっぱいに見開く。

心のどこかで、もしかしたら、という思いはあった。そして、防災訓練のように、心構えだけはじゅうぶんのつもりだった。しかし、いざ聞いてみると、なかなか、その言葉は胸に入っていかなかった。

「貴方だけよ」

カエデは、いくぶん、冷静な声色で言った。突き放すように聞こえた。

「生き残ったのは、貴方だけ」

そうか。――やっぱり、みんな、死んだのだ。

リヒトはため息をついた。あたりの光景が色あせて、一瞬、視界がぐらりとゆがんだ。それは、あまりにも恐ろしい、悲しい事実だった。

とりかえしのつかない一年。

自分だけ。自分だけが、変化して、生きている。

特に会いたいと強く願っていたのは、中島だった。中島洋介は、彼の一番の友人だった。生まれたときから近所に住んでいて、保育所も小学校も中学校も一緒に。部活も同じサッカー部。よく一緒に帰った。

「そういうふうな別れを経験してきた子がね、それでも、やっぱり、学校に行けばたくさんいるわ」

鉛のように黙り込んでしまった彼にむかって、風の音にまぎれそうな声で、カエデが言う。

「幼稚園とかのときだから、今はもう、克服しましたって、みんな笑顔でいうけどね。貴方だけじゃないのよ」

「はい。でも。でも……」

それでも、リヒトは、もごもごと呟いた

あきらめきれなかった。彼は、中島の最後の姿を、ゆっくりと脳裏に思い浮かべる。体をまるめて、苦しそうに、座布団の上に横になっていた――あれが最後だとは、あまりにも悲しい。せめて……

「会えば、あきらめられる？」

ふいに、カエデが言った。まっすぐに彼を見ている。

「だって、会えない。もう」

「ここをどこだと思ってるの？」

「え？」

「ゲットーよ。ハイアン・ゲットー。わかってないわね。あのね、今日私が来たのは、そう、貴方が、学校に行ったり、ここで暮らしたりする予行練習のため。それで、ちゃんと、実感してもらうためにヒト。貴方、一度自分が死んだときのことを覚えてる？」

「はい。あの……」

変な光景をいっぱい見ました、というと、カエデは力強くうなずいた。

「そう。それはね、貴方自身が死んだ瞬間でもあるけれど、高くひっぱり上げられるときに貴方が見た夢はね、貴方に提供した体の、もとの持ち主の最後の光景でもあるの。じゃないと、わからないでしょう。貴方、死ぬ前に、あれが来る、って、思ったわよね。でも、どうしてわかったの？ 死がくる、死が来た、そうだ、これが死だって、どうして知ったの？ それはね、思い出したから。本当はずっと知っていたから、すぐに理解できたの。自分でも本当は知っていたし、前の体の持ち主にそれとなく、ヒントみたいに、その人の亡くなる瞬間を映像として分けてもらって、夢をみるあいだ、じわじわと、死にいたる課程と、魂というもののことを力強く刻み付けてもらっていたの。そのひとのことを自分に起こったみたいに感じたわね。そして、そこに重なるように、自分の死をも客観的に捉えることができた。貴方の肉体は滅んだ。でも、貴方が入っている今のその体は滅ばずに、今貴方のもので、貴方になって、ちゃんと生きています。死んだのに生きていますって、不思議じゃない？——でも、ずっと昔から、人類は、考え方のひとつとして、死は終わりではない、と思いつけてきた。願ってきた、といってもいいわね。そして、ここでは、その考えは現実になる。貴方の死は、貴方の始まり。新しい体で、世界をもういちど生きていく。体はただの器。私たちは、外の世界の誰よりもそれを知っている。そして、今、貴方のお友達もそう——たしかに、変化はできなかったわ。だけど、肉体が滅び、魂が古い世界を飛び出しても、貴方が思い出せば、貴方が会いたい

と願えば、彼は生きてここへ来てくれるわ。私たちは人間ではない。人間の、次のステージに移った。その、ささやかな副作用、あるいは、ごほうびとして、彼らに見えないものも見ることが出来る。彼らに呼びかけることができる」

「つまり、どういうことですか」

「ひいおじい様を見たってことはね、それができる素質があるってこと。光の塊なんかじゃなく、はっきり見えたでしょう。だとしたら、そのひとの心まで、ここに呼べるわ。もちろん、いつでもってわけじゃないけど。私が力を貸すからね」

「それって、それって――」

「会いたいでしょう？」

風鈴の音がしていた。彼はそれが、どこかほかの場所から聞こえてくるものだと思っていたが、ようやく、目の前のカエデの髪にささっているかんざしから、音が聞こえるのだと気付いた。かんざしのひとつに、鈴がついているのだ。

「お友達の名前は？」

「洋介」

「ヨウスケの姿を思い出せる？ 力いっぱい、彼の姿を、粒子の瞬きで照らすことができる？ 手をつないで――」

リヒトはカエデの手をとった。カエデの手はやわらかかった。むかいあうカエデに言われたとおり、洋介の姿を思い出しながら、リヒトは呼びかけた。肩甲骨の間がざわめいて、視界がぼやける。カエデにあずけた左手が、ぞくぞくとうずく。あいたい、と強く思った次の瞬間、彼の目の前に、花のつぼみが開くように、ゆっくりと、色彩が現れた。空間にある見えないジッパ―を引きあけて、そこから出てくるような出現のしかただった。

ブレザーを着ている。シャツの釦をふたつあけて、いいかげんに結ばれて、斜めになっていないほうが珍しいネクタイのストライプ。よれたスラックスに、履きつぶす寸前のスニーカー。リヒトは呆然と、友人を見つめた。雰囲気や、しぐさや、立ち姿まで、はつきり

と、中島洋介そのものの、それは、ゴーストだった。彼の良く知るもののゴーストが、彼の目の前にいた。

「リヒト」

中島は、ぼんやりとあたりを見渡していたが、リヒトに気付いて微笑んだ。

故郷で彼と見てきた風景が、いっぺんにあふれて、リヒトの体を揺さぶる。中島のまわりは、粒子のゆらぎでかすんでいた。体は透けていて、向こう側に、運動場と外を区切る板塀や、草ぼうぼうの運動場の隅の、石ころや土の色まで見える。

「げっ……ん、元気？」

言葉につまりながら言ったとたん、リヒトは後悔した。ばかばかしい挨拶にもほどがある。だが、中島は真剣な顔でうなずいた。

「元気だよ。そっちこそどうなんだよ。りいは元気でねえのか？」

「洋介。洋介、洋介、お前……洋介」

名前しか出てこない。中島は、目をしばたかせたあと、「ああ」とうなずいた。

「なんだ。俺、死んだみたいね」

「みたいねって……洋介」

「悪くないぞ、わりと。うーん、たしかにな、俺のことひきとりにきた母ちゃんとかはあちゃんとかにはすまないと思ったけどな。お前、よかったら伝えといってくれよ。俺、なんとかやってるからってさ。

いや、お前だけでも無事でよかったわ。ほんと」

リヒトは言葉につまった。洋介は、にやりと笑って、頭に手をやっている。声もしぐさも軽妙軽薄なところが、まるっきり変わらない。生きている。死は終わりではない。死ははじまり――

しかし、彼の体の、本当に透けていることを考えると、明るい気持ちにはしぼんだ。

彼はあたりを見渡し、「えらい古めかしいとこに来たな」と首をかしげた。

「お前、ここに住むんか？　なんか、ここだと、俺、すげー元気が

沸いてくるんだけど」

「見えるひとがたくさんいるからね。ここは、ゴーストが姿を表しやすいんだよ、もともと」

横で黙っていたカエデが言った。彼女は、少し離れた芝生を指さして微笑んだ。

「私、むこうにいるわ。ゆっくりお話してちょうだい」

「あ……はい」

ふたりは、カエデを見送る。洋介が興奮したように「美人だなあ」と言った。そのあと、彼は、彼の家族について話した。死んでゴーストになってから、彼は、ずっと自分の家に“ついて”いたという。心配していた通り、彼らの地元は、修学旅行先で起こった悲劇で、めちゃくちゃに混乱したらしかった。ソジ粒子に関する部分は伏せられ、五人の死は病死とされたが、親族を中心に、五人のうち何人かは実は変化して生きている、という噂が流れた。そのせいで、家族に渡される見舞金をめあてに、変な人間や団体が押し寄せたという。

幸い、五人のうち四人は本当に死亡していたので、すぐに事態は収束した。瀬田家も、リヒトだけが生き残っている事実を、とても喜んでみせることなどできはしない。だいたい、生きているとはいっても、書類上は完璧な死人なのだ。リヒトが安心したのは、家族が無事である、ということだった。先祖からずっと住んでいた場所を追われることも、非難されることもなく、周囲から、ただ同情されている。

「なあ、リヒト、頼むよ。俺んちに、手紙書いてくれよ。俺な、まだしばらくこっちにいるつもりなんだ。普段は、静かな、暗いところでずっと寝ててさ……目が覚めたら、母ちゃんとかの様子見に行くけど、みんな泣いちゃってさ……、もう、一年経つのに、俺の部屋なんか、そのまんまとってあるんだ。団地で、ただでさえ家狭いの、無駄だろ、そんなスペース。俺のことは、いいかげんにあきらめて、前向きに生活しろって言ってやってくれよ」

「洋介。ねえ、ほんとに元気なの？ あのこと…あのさ、怒ってないか？」

「なんで怒るの」

中島は、眉間にしわをよせる。

「ひょっとして…、俺が、お前を恨んでたりとか、すると思ってるのか？」

「すこし」

自分だけが生き残ってしまったのだと思った。そう正直にリヒトが言うと、洋介は笑った。笑われるとは思っていなかったの、リヒトは戸惑う。彼は、自分たちの死因について知っていることを、すべて打ち明けることにした。

「ねえ、洋介。どこで感染したかも、俺たち、わからないんだって。なんで粒子を浴びたのかとか、謎のまんまなんだ。でも、旅行のどこかでなにかがあって、俺たち五人だけが変化することになって、耐えられたのが俺一人なんて…：そんなのない、って思わない？」

俺はさ、俺は、一人なんて、嫌だったよ。俺、ずっと、同じ病院のどっかに、お前とか、阿部さんたちがいると思ってたんだ。お前に、ずっと会いたかったよ、俺。嫌だよ。このままさあ、何もなかったみたいに、俺だけが、新しい学校に転校して、普通に生活するなんて。ねえ…：洋介は、後悔してないの。なんで俺が死ななきゃいけないんだろうって、思わない？」

最後は、噛み付くような口調になってしまった。リヒトは、だんだん悲しくなってきた。自分は生きている。だが、彼は死んでしまった。もちろん、自分だって、人間としてはもう生きていないが――だが、洋介は、あっけらかんと笑って首を振る。

「別にいいんだよ。それは、そういうきまりだったんだろ。事故みたいなものだよ。お前のせいじゃないし、俺たちのせいじゃない。まあ、ちっと短かったけど、いい人生だったよ。死んでわかったことが、俺、いっぱいあるぜ。前よりも頭だってよくなった気がする。体がなくなっって、すごく軽くなったんだな、ほんと。よけいな重り

がとれたっていうの？……なんで俺たちが感染したかったのも、ぼんやりだけど、俺、わかってると思う——なあ、リヒト。気にするなよ。俺も、三人も、気にしてないから」

「三人とも——？ ええと、女子たちとも、話したり、できるの？」
「できるぞ。野々村はもう、どっか行っただけだな。そうだ、聞いてくれ、りい。すげえことに気付いた。俺な、阿部と結婚するんだ。次に生まれるとき」

「えっ……ええ？ どういうこと？」

「死んでわかったんだ。俺と阿部な、ええと、中島洋介と阿部唯子に生まれる前さ、やっぱり知り合いだったわけ。百年くらい前かな……俺たち、会津の役所で働いてて、職場結婚したんだ。で、子どもが二人いて、普通に仲良く暮らして、俺が先に死んで、死ぬ前に、次もお前と結婚するからな、って阿部に言っただんだ。阿部も、じゃあ、次も貴方と結婚して子ども二人生むわ、って言った。……修学旅行でさ、俺たちの班、最後に、清水寺のそばにある……、なんとかって、縁結びの神社あるべ。あそこに行く予定だったろ。俺、あそこで、実は、阿部に告白しようと思ってたんだよ」

「えっ……」

「まあ、告白できなかったわけだけど。でも、死んだあとで、その前に夫婦だったこと思い出したんだ。それで、ああ、俺が阿部を好きになったのは間違ってたかった、と思った。それで、阿部と話したんだ。次に持ち越したな、って。だからさ、俺はよかったよ。少なくとも、今回、俺とお前が同じ班で、あいつが違う班だったら、俺だけが先に死んで、ひとり待ってなくちゃならなかったわけだしよ。でも、二人一緒にこっちにきたおかげで、確実に、近くに、もっかい生まれかわることができるんだ。俺な、次もやっぱり、俺たちの実家のとこに生まれようと思う。で、お前の弟の、フウのやつに、もし子どもができたら、そいつの、同級生になってやろうかなあ……」

そしたら、またお前と友達になれるな、と中島は笑った。リヒト

はびっくりして、声も出なかった。中島が阿部を好きだったことも知らなかったし、いつも男ばかった彼の、ロマンティックな一面をはじめて目にして、その意外さに度肝を抜かれていた。

「まあ、そういうわけで、俺のことは気にするなよ。つっても無理だろうけどよ……、何度も言うけどな、俺は、お前に感謝はしてるけど、恨んだりしてないぞ。俺んちってほら、父ちゃんいないだろ。だからさ、お前の父ちゃんが、ザリガニとか、カブトムシとり山につれてってくれたり、じいちゃんが、雨の日に塾まで迎えに来て一緒に連れて帰ってくれたり、ばあちゃんが、夏にアイスとかくれたり、家でごはん食べさしてくれたりするのが、すげえ嬉しかったんだ。俺の母ちゃんも、お前の母ちゃんにずっと助けてもらったっていつて、本当、うちは、りいの家に助けてもらったし、うちのばあちゃんも母ちゃんも、俺とお前が仲良くしてたことが、それが、すごく幸せだったんだ。だから」

中島は、そこで、リヒトの見たことのない真剣な表情をした。

「だから、自分だけが生きてることを、悪いなんて思うな」

「でも……」

反論しかけたリヒトの言葉を、中島は手をふってさえぎる。彼は、目じりをなごませて首をかしげた。

「今、こうやって話してるじゃねえか。それが全部だ。なあ、俺、ぜんぜん、不幸そうになんか見えないだろ」

「あ……、うん」

リヒトはうなづく。目の前の中島には、一グラムも悲嘆や後悔は見えなかった。生きてるときより、むしろ、幸福そうに見える。

「まあ、最後はちょっと苦しかったけどさ。倒れたとき、お前に、座布団あててもらったこと、覚えてるよ。ありがとうな。お礼言えなかったなと思って、それだけが心残りだったんだ。ほんとう、それだけ。ありがとな」

「俺だって……!」

「がんばれよ。お前なら大丈夫だ。絶対。俺が保証する」

「あ、ありがとう……」

中島は、満面の笑みを浮かべた。ああ、時間がない、とりヒトは思った。中島のまわりのゆらぎが、少しずつ、激しくなっている。彼も、そわそわしはじめている。

「ねえ、もう行くの？」

「うん。ちょっと、お前と話ができるって、がんばりすぎたみたい。しかし、ここはすごいな。いや、お前のおかげなんかな？　普通は、喋ったりするのも、できやしねえのに」

「また会える？」

「そうほいほい会えるかっていうと、難しいな。でも、お前の声は、しっかり馴染んでるから……、大丈夫……」

中島は、ぶんぶん手をふる。リヒトも手をふった。やがて、空気に溶けるように、彼は去っていった。地面に、用を終えた粒子の残骸が散らばる。

しばらく立ち尽くしていた。本当は、ずっとそばにいてほしかった。だが、それは、生き返ってほしいというのと同じくらいかわないのだということも、今ではすっかりわかっていた。ここが特別な場所で、彼が生きていていいのだということも。

カエデがやってきて「心配いらなかったね」と呟いた。

「ちゃんとお話できたんでしょ」

「はい」

リヒトがうなずくと、カエデは微笑んだ。

「大丈夫よ」

板塀の上を見ながらカエデは言った。そこには、三毛猫が一匹、スフィックスのポーズで座っていた。茶色と黒と白のまだら模様の猫で、おなかと手足が真っ白だ。猫がいるんだ、と彼は思った。なんとなく、そういう“動物たち”の存在がないような気がしていたので、意外だった。彼——か彼女かは、誰かのペットなのだろう、モスリンの赤いリボンを首につけている。猫は、リヒトが見ていることに気付くと、細めていた目を開いて、塀のむこうへ消えた。残

念に思っていると、「もしかして」とカエデが呟く。

「なんです？」

「……、誰のかしら」

首をかしげていると、カエデははっとしたように「ああ」と口元に手をあて「なんでもないわ、ごめんなさい」と笑った。

「戻りましょうか」

「あ、はい」

もときた道をゆっくりと戻る。先ほどは気付かなかったが、患者たちの中には、あきらかにゴーストに見えるものが混じっていた。みんな、楽しそうに話している。ゴーストというと、悪霊のイメージが強い、と昔読んだ怪談のことを思い出していると、カエデがあっさり「悪いゴーストもいるから、気をつけるのよ」と、わざとらしく怖い顔をした。

「おばけもいっぱいいるんだから」

「おばけ？　ゴーストとはちがうんですか？」

「ううーん。外では、なんていうのかしら。ちみもうりょうがたくさんよ」

「チミ？……妖怪？」

「さあ、どうかしら」

カエデは肩をすくめる。リヒトは、家に手紙を書こうと思った。それから、忘れずに、中島の家にも。

そのころ、平安市の東南にある昭和区。よく晴れた夏の日差しと蝉の合唱のシャワーをあびながら、大通りをはさんで北側に、平安学園付属の寄宿舎が建っている。正式名称は、隔離自治区平安一九寄宿舎——中等部および高等部に所属する男子寮である。とはいえ、長ったらしい正式名称を、ならい呼びしている生徒は少なく、寮生のあいだでは、ふつう、ミノムシ寮と呼ばれている。これは、寮の外観が秋の枯葉の寄せ集めのような色合いで、ところどころ補修されたあとが、いかにもミノムシのように貧乏くさくみえるからだ。通りをはさんではす向かいにある女子寮の、真新しい、瀟洒なレンガ造りの建物と対比すると、その貧相さはさらに際立つ。生徒たちは、なかばやけくそ気味に、その貧相を清貧と称する。

しかし、年月を経て、味わい深くなった木造の建物の内部に目をむければ、建物に凝った部分がないわけではないとわかる。たとえば、階段の踊り場や北西向きの窓にはめ込まれているステンドグラスは、鮮やかな色彩と図柄から、ちょっとした職人の手によるものだと推測できるし、図書室や、共同遊戯室など、洋風の部屋のドアにつけられた、真鍮に銀色の装飾のアンティークなノブは、寮の宣伝写真にも載せられるほどきれいなものだ。

添木会は、寄宿舎で暮らす外部生たちの自主的な集まりの名だった。会員は流動的で、たまには、外部生でなければならぬという前提さえ、ないがしろにされる。困ったときの互助会というかおしゃべりの場というか、そこに行けば、遊びにつきあってくれる相手が四、五人ほどは見つかるという感じだった。会場となっている図書室も、実態はただの物置で、退寮していった先輩たちが残っていた書物や雑誌を、次第に増えていくそれらの置き場に困って、た

またま開いていた洋室にまとめて置いておいたあげく暫定的に図書室と呼ばれることになったわけだが、いつのころからか将棋板や碁盤やチェス盤が常に取り、今では花札やトランプなどもそろっていた。また、隣は給湯室なので、本来は禁止されているが、ソファやテーブルに陣取って、飲食しつつ談笑する、という行為もひそかにあった。

日当たりもなかなかで、居心地がいい。ベランダがついていて、一番端のベランダに出れば、女子寮が建て替えられる前なら、少女たちの聖なる裏庭を見ることができた。現在は、彼らの野望はむなしく砕かれてしまったので、かなりの広さのある——テラスといってもいい——ベランダは、雨にぬれてもいいモノの置き場、もしくは、彼らの相棒たちのたまり場になっていた。

中等部二年のミサビは、相棒たち——寄宿生がそれぞれ持っている、狐や犬や鼠たちを見る。そこに、ちょうど、尻尾が一匹くわわったところだった。

添木会中等二年集会が、現在は行われていた。目的は、新しく来る生徒について話すことだ。

「なんでミサオと一緒に部屋にするんだ、キョウタロー先生は」
ミサビの隣で、憤慨したように言ったのは、フリオだった。

「あんな、内部生のエリートと一緒にしたら、ろくなことにならないぞ」

「嫌なやつじゃないといいけどな。手癖が悪かったり、協調性がなかったり」

「それはお前だろう。いい加減部屋を片付けろ。寮監に怒られて、罰点くらうのは俺なんだからな」

「名前、なんてったっけ——」

新しい寄宿生が来る、と最初に気付いたのはミサビだった。今朝、学級委員の部屋のドアが珍しく全開になっていたのを見てみると、キョウタローとミサオが、空スペースの荷物を片付けていた。二年寄宿生の代表でもあるミサオは、三人部屋に一人で住んでいるので、

寮室点検の際、内部生たちは、彼の部屋に、見つかってはまずいの、持ち込み禁止の品を預けていく。211番室は、一種の魔窟と化していたが、今回、片付けに参加して、ようやくそれを発見した寮監は激怒していた。ひとしきり彼の文句を聞いた後、ミサビは適度に話を逸らしつつ、キョウタローから、新しくやってくる生徒の情報を引き出したのだった。

「リヒト。変化して、一年くらい寝てた子だって」

彼は呟いた。

「なかなか、珍しいよね。この時期に転入ってさ。さっき、それとなくシンさんにも聞いたけど、どこで浴びたのかも、謎みたいだよ」
「そうだよなあ。ちえ、結局、見つけられたのはミサビだけか。…他に、見かけたって奴は？」

「待てよ。病室の位置をつきとめたのは、俺のミケーレだぜ」

「お前は、最後のツメが甘い。威張るな」

「まあまあ。……で？ 他には？」

全員が、彼を見る。

「うーんと……」

ミサビは立ち上がり、ソファをまわりこんで、ベランダの窓を開ける。愛猫が、するりと室内に入り込み、彼の胸へジャンプした。用意していたおやつを与えると、猫は彼の耳元に鼻をよせる。

「いい子だと思うよ。たぶん」

あいまいな情報に、生徒たちは一様にがっかりした表情をした。開いた窓から、彼らの相棒たちも、ぞくぞくと図書室に入ってくる。ひゅうがが、主の抱かれているのをみて、許可を得たと思ったらしい。彼らの相手をしながら、他愛もないことを喋っているうちに、解散になった。みな、好奇心だけでどこことなく精彩を欠いたのは、夏休みの宿題がまだ片付いていないものが大半だからだろう。

部屋に戻る途中、地下の洗濯室に寄ったミサビは、洗濯機の前に、ミサオがいるのに気付いた。黒縁の眼鏡に、ワイシャツとスラックス、足元は革靴。相変わらずの洋好みだ。もう、受け入れの準備は

済んだのだろうか――木製の丸椅子に座って、文庫本を読んでいる。「やあ」とミサビが言くと、ミサオは「君か」というように、視線をすっとあげて小さくうなずいた。ただし、本を閉じる気はないようだ。ミサビは、洗い終わっていた自分の洗濯物を取り出す。

「新しい人だってね。うまくやれそう？」

「さあ」

ミサオはそっけない。わざとゆっくりと洗濯物を取り出しながら、ミサビは質問を重ねる。どれも、すげない返事だった。

この少年とミサビは、初等部で知り合ってから、出席番号がずっと並んでいる。そのため、他の内部生と外部生より、多少、柔らかい関係にある。なんというのが正しいのか――好敵手とお互いを称する野球チームのキャプテン同士、一線を引いた友達の友達、手旗信号で連絡を取る、山の隣人――断絶と密接を繰り返して、ようやく落ち着く位置をお互いが見つけた、というところだった。だいたい、成績本位のミサオの性格からすると、ミサビはどうか、話をするにたる相手と思われるため、内部生の窓口であるミサオへの陳情やとりなしなどは、たいてい、彼が請け負うことが多いのだ。今度の転入生も、世話係のミサオではなく、自分の担当になるような気が、ミサビは実はしている。

ひゅうが伝いの情報から、転入生のほうにシンパシーを感じたミサビは、そのため、うっかり口をすべらせた。

「あんまり、意地悪するなよ」

「意地悪って？」

ミサオは顔を上げる。眉間にしわを寄せ、唇を突き出して、不快感を表現している。

「僕がそんな子どもみたいなことをすると？」

「あ、ごめん。そういう意味じゃないよ」

ゲッターに慣れていない外部生に、間違った作法を教えたり、送られてきた手紙や荷物を盗んだりといった、水面下の嫌がらせや、軽い試験のような洗礼が、たびたびあったので、そういったのだっ

た。ミサオが関わっていた証拠はないが、とにかく、内部生のしわざだろうというのが、添木会の見解だ。凶星だから腹をたてたのか、ミサビは慎重に彼の表情を観察する。ミサオはそれに気付いたのか、眉をひそめて、鼻を鳴らした。

「馬鹿か、君は」

「いやあ、ごめんごめん。他の連中の話なんだ」
へらへらと笑ってみせると、ミサオは肩をすくめた。

「さあ、どうだか。君らが何をこそこそ話し合ってるのか、知らないと思ったら大間違いだよ。しかし、僕に言うのは間違ってるね。やりそうなのは、もっとほかにいるだろう」

「ああ……」

納得したふりをして、ミサビは、「そうだったね」とうなずいた。彼は、しばらくじっとミサビを見ていたが、やんごとなき鉄壁さを持つ笑顔に、冗談だと判断したのか、ばかばかしいと感じたのか、表情をもとに戻すと、文庫本を閉じた。ちょうど、彼の前の洗濯機が、甲高い音をあげたところだった。

籠に洗濯物をつめて、不機嫌な学級委員どのは足早に出て行く。

「悪いやつじゃないんだけどねえ」

ミサビは、無人の洗濯室で、こっそりとため息をついた。

3 転校生

ヘイアン・ゲットー。隔離自治区平安。平安経済特区（スペシャル・エコノミック・ゾーン・ヘイアン）、ゲットー・イエル・シャローム。さまざまな呼び名があるが、住んでいるものには単純に平安市と呼ばれる、京都北部にあるその場所は、東西二十キロに及ぶ山間の町である。総面積およそ四〇キロ平方メートル。人口三千五百人。江戸区、明治区、大正区、昭和区、と、近代日本の元号に基づいて区画整理がされ、それぞれの名を冠する時代風景をそこに見ることが出来る。主な産業は農業、製鉄加工、手工業。環境としては、産業革命前後の文明度である。また、変化した住人だけではなく、近年日本が定めた“伝統芸能保護維持法”に基づいて、一般に職人といわれるものも移住し、修行を行っている。そのため、“人間”の割合も多い。彼らの多くは大工で、日本建築を研究しながら、実用に耐える建物を、当時の素材で建築、修繕する作業に従事している。

さて、本日九月二日は、数珠を連ねたような水玉が、木枠にはめ込まれたガラス窓を叩いている、あいにくの雨だった。灰色の雲から雨粒が落ちるたびに、校舎の中は、かいだことのない独特の匂いが濃くなっていく。不安をおぼえて、リヒトは窓から空を見上げる。彼が寄宿舎に入ったのは一昨日だった。今日は、二年A組の転入生として、はじめてクラスメイトと顔を合わせる日だ。うまくやっていたのか悩ましいところだったが、リヒトをいちだんと悩ませるのは、目の前を歩くこの少年だった。まさに、ミサビの予想通りの展開がリヒトの心中に沸き起こっていたのだが、本人はそれを知る由もない。彼は虜囚のごとくつきしたがうしかできないでいた。

あたりを見渡しながら、前を歩くミサオの説明に相槌をうつ。

「――が掲示板。毎日見るように。それから、右の奥、つきあたりをずっと行って渡り廊下を……」

驚くほど抑揚のない声で、どこが要点なのか判断が難しい。案内はもうあてにしないほうがいいな――早々にあきらめて、リヒトは、学校の雰囲気だけをつかむよう努めることにした。

寄宿舎で同室となったミサオは、黒い髪を左右に分けて、黒縁の眼鏡をかけた線の細い少年だった。学級委員だというキョウタローの言葉通り、まじめそうであり、事実、まじめだった。リヒトが荷物を解いたと見るや否や、間髪いれず、向かい合わせにおかれた本棚から冊子を取り出して、寮の規則からこまごまと説明してくれた。申し分のないほど行き届いた解説だった。さらに、その日はつきっきりで食堂や浴場に案内してくれた。昨日だけで、リヒトは、彼の今までの人生をあわせたより多く「ありがとう」と言った気がする。

しかし、優しくされればされるほど、この少年に対して、苦手意識が増した。親切でないわけではない――しかし、時間がたつにつれ、どうも、彼が、役割をただ忠実に果たしているだけのような気がしてならない。そもそも、情報を、言葉で伝達するところからはじめるやりかたは、百聞を一見ですませるほうが性に合っているリヒトのスタイルとは異なる。意向も聞かずに自分のやり方を押し通すところから推し量るに、ミサオは自分に好感を抱いていないのだろうと思った。みんなが彼みたいだったらどうしよう？――リヒトはまだ、彼以外の生徒と話していない。

早朝、二人は学園に来ていた。授業が始まる前に、ざっと校内を見て回ろう、と、起き抜けにミサオが提案したためだ。緊張と気疲れからぐっすり寝込んでいたところを、ひとりずまいの習慣でけたたましく鳴り響く目覚ましで起こされたリヒトは、転校など初めてのことなので、ここはいうことを聞いておこうと、素直にうなずいてしまった。しかし、正直に言って、すでに、ミサオといえるのは退屈で、窮屈だった。小柄な割に、大股でどんどん歩いていくミサオの説明は一貫して早口で、何に対してのコメントなのか、ようやく

視線が対象を捉えたと思ったら、もう、そのことに対する説明は済んでいる。今朝はより回転数があがっているの、なおさらだ。

ようやく、自分たちの教室に辿り着くと、ミサオは、教室の後方の席を指差して「君の席はあそこだ」と言った。

「僕は、授業がはじまるまで自習している。用があったら声をかけて」

「わかった」

リヒトは自分の席についた。ミサオは、教壇の真正面の自分の席でさっそく教科書を開いており、話しかける余地を見せない。おしやべりでも、言い出すのも遠慮された。手持ち無沙汰に窓から外を見る。

平安学園の校舎は、広大な敷地のなかにあった。三方を高い鉄柵に囲われていて、背後は、こんもりとした山がある。初等部、中等部、高等部、とすすむにつれて、校舎がジグザグに山際へスライドしていくような配置で、運動場や体育館、武道場などの方角に向けて視界が開けた。中等部は三階建てで、二年生の彼らの教室は二階にある。窓から外を見ると、ミノムシ寮の、赤茶けた屋根が目立った。思ったよりも学校から近い。

しばらく、外を眺めていたリヒトだったが、太陽の移動を見るのはすぐ飽きた。こらえきれずに「もう一回、ひとりで見えてくる」と言っ、席を立つ。ミサオは、ちらりと彼を見ただけで、無言だった。リヒトは、小走りに、階段をかけおりた。

一階の廊下を突き当たって、渡り廊下に出る。この先は、武道場だったか——とと思っていると、そちらから話し声がある。やがて、武道場の入り口らしき場所から、大柄な男子が、白い道着姿で現れた。胸元に、大きく、高一2と書かれている。ぼうっと立っているリヒトに目を留めると「挨拶!」と怒鳴った。

「あ、おはよう、ございます」

まごつく彼を見て、男子はにやりと笑った。ずんずんと大股でやってくる、眼光するどく彼をねめつけた。

「どうした。練習に遅れたのか？　どこの部だ」

「いえ、あの、はじめてで……」

「はじめて？　――中等部……何年生だ？　何組？」

「二年です。A組です」

「じゃあ、サツキと同じクラスじゃないか。しかし、見覚えがないが」

「ええっと、まだよくわからないんですけど……」

「同じクラスのはずだ。ああ、そうか――噂の転校生？」

「はい。今日が初日で」

「ああ、なんだ。さぼりかと思って、焦ったぞ。じゃあ……がんばれ」

「ありがとうございます」

リヒトが頭をさげると、その生徒は片手をあげて、校舎のほうへと行ってしまふ。リヒトは、武道場をのぞいてみることにした。声のするほうへいくと、重そうな木の引き戸は開きっぱなしになっていた。顔だけをつっ込んで覗いてみる。中は、横に細長く、中央の仕切りから手前のスペースには、一面に畳が敷き詰められている。そこに、白い道着姿の男女がいた。奥の板間には、防具をつけた剣道部員たち。

「見学？」

ふいに、柔道着の少女が彼に気付き、声をかけてきた。うなずくと「好きに見てって」という返事。これが、カエデが部活といった、武道の時間なのか――朝練までやっているとしたら、たしかに、現世でいうところの、これは部活にあたるだろう。

しばらくぼうっと組み手を見た後、そっとその場を離れる。

近くには、茶色い木の板でできた掲示板があった。ピンで何枚も紙がとめられていたり、わら半紙に、試合の日程やメンバー表が毛筆で書かれて張られている。それぞれのスペースが決まっているらしく、空手、合気道、洋剣、弓道――登山という札が掲示板の上部に書かれていた。中島とサッカー部に入っていたので、球技を探し

たが、どこにもなかった。

柔道場や剣道場とは反対のほうにも回ってみる。べつの道場が三つ並んでいた。緑の芝生の庭を持つ建物に、これも道場かと首をひねっている、予鈴が聞こえたので、引き返すことにした。

＊

教室に戻ると、数人のクラスメイトがすでにいた。彼らが気さくに話しかけてくれたので、リヒトはずいぶんほっとした。女子も教室に入ってくるが、全員、外の世界では絶滅して久しいセーラー服を着ている。

なんてかわいいんだろう、と、その集団を見て、リヒトの目は丸くなった。

あの、歩くたびに軽そうにひるがえるスカート、あの襟、リボン

彼の目が、女子に釘付けになっているのを発見した少年が首をかしげた。

「なに見てるの？」

「ああ……いや、はじめてみたなあと思って」

「何を？」

「セーラー服……すごい、女子が着ると、すごくかわいい……」

それを聞いた周囲の男子が、吹き出した。レイとヨウタ、コーゾウという三人組だ。ミサオと仲がいいので、リヒトのことも聞いている、とひとりが説明した。ヨウタとコーゾウは、どちらも中肉中背で、黒髪を耳元で切りそろえている。レイは、亜麻色の髪で、襟には、他の二人とは違う校章があるので、留学生のようだ。彼らは、他の生徒をわきに押しやって、リヒトの周りを陣取った。

「ミサオの同室なら話は早い。僕たち、仲良くなるう」

「え、ああ、うん……」

「他の奴らより、僕らといたほうがよほどいいよ」

一人が言うと、二人がにやりと笑った。妙に――物慣れた、嫌味っぽい笑みだった。

それも気になったし、わざわざそう言って仲良くなることなんてあるのか、と思ったが、とにかく、話をしてからだ。

三人にむかって、寮で見なかったね、と告げると、彼らは、自分たちは内部生で、通学生だと答えた。寄宿舎暮らしを引き合いに出して、彼らは、さかんにリヒトに同情をもらす。奇妙ななれなれしさを感じて、居心地が悪かったが、黙っていた――この三人が話した始めた瞬間、なぜかいつせいに、他のクラスメイトが離れていった。いやな感じがしたが、だからといって話しかけてくるものを無碍にするのも失礼にあたる。

ひかえめに相槌をうっていることにした。

ヨウタ、レイ、コーゾウの三人でヨウレイゾウ、要冷蔵――ナマモノトリオだな、とリヒトは思う。やはり、彼らの使う用語の半分はわからなかった。特に、内部生と外部生、という用語の輪郭が見えない。どうやら、変化した年齢に関係があるのかな、と自慢ばかりの彼らの話題と、透けてみえるエリート意識にうんざりしかけたとき、ふと、レイ――濃い顔立ちの少年が言った。

「そうだ。われわれのような内部生でもな、テッセンだけは付き合わないほうがいいぞ、新入りくん」

「テッセン？」

不思議な響きに思わず聞き返すと、その名を聞いた周囲の学生が、一瞬だけ彼を見て視線をそらす。

「マザコンだ」

首をかしげた彼にむかって、にやり、とヨウタが笑って説明した。

「おまけに、素行不良で頭も悪い。馬鹿で粗野で、手に負えない」

「問題児だ。このクラス……いや、学校の」

「へえ……？」

「顔もいまいちなんだぜ」

「そうそう。ひどい不細工。……君の隣の席だ」

今はコーゾウが座っている。彼は肩をすくめて、続けた。

「母親と暮らしている。な、ろくでもないだろ？ 気をつけろよ」

「よく……わからないけど。ええっと、それが、マザコンてこと……、なんで？」

「ここで実の親と暮らしてるやつなんか、あいつくらいのもんだからさ」

「実の親……実の？ 実のって、本当の……え、家族と、暮らせるの！？」

ひどく驚いた。そんなことが可能なのか。

しかし、三人はそろって首をふる。

「いや。暮らせないよ。普通はな。あいつは——あいつが胎児のころに、母親が粒子を浴びたんだ。あいつはもとから変化して生まれしてきた。だが、そういうケースは極まれで、世界でも類をみない。

生後すぐに母親と子どもを引き離して育てるのは危険だって、母親ごと平安市に来て暮らしてるんだよ」

「とんだ甘えん坊さんだ」

「そうなんだ……」

そんなひともいるのか。いったい、どんな子だろう？

それにしても、この三人の言いようはひどい。テッセン、という生徒は、ここまでののしられなければならないような子なのだろうか。

「そうそう、それに」

しかし、話を聞くうちに、これは嫉妬だ、とリヒトは思った。主な理由は、テッセンの父親が、平安市で重要な地位についていることらしい。母親と暮らす、という部分は、おまけのようだ——しかし、おまけが目当てで菓子を買う、ということもじゅうぶんありうる。ねたみとひがみでどうにかなっているんじゃないのか、頭が、と思ったが、ここで口にするともまずい、ということがやはり目に見えたので、黙っていることにした。

彼らはそのあいだにも、テッセンの悪口を言い続けている。

「とにかく、相手にしないことだ」

いつのまにか、ミサオもそこに加わっていた。まばたきを繰り返すリヒトに、彼は言った。

「君みたいな外部から来た子をいじめるのを、あいつは何より楽しみにしている」

「えっ、そうなの？」

「ああ。ほら――来た」

突然、前方で教室の重い扉が開いて、がん、と音を立てる。ずいぶんうるさい入室の仕方だが、それが合図なのだろう。続けて、のそりと、少年にしては発達した巨体が現れる。教室が、一瞬静まった。「乱暴だな」「ああ」「粗暴なやつだ」――ひそひそと三人が囁く。

「あいつに何を言われても気にするなよ」

「いじめられたら、僕たちに言えよ。なあに、母親のことを言えばね」

「知ってるか、こういう言葉、」

「ねえ……、あの子がテッセン？」

「そうそう、それから――そうだな、ほら、ああいう」

「え？ なに？」

「内部生ども――」

「どけよ」

小声で話しかけるミサオの背中越しに、近づいてくるテッセンが見えていた。リヒトは立ち上がり、挨拶をしようとしたが、テッセンは見向きもしない。大きな腕が動いて、わざとらしく、コージが座っている席に、重そうな風呂敷と鞆を放り出した。コーゾウの首に当たりそうになって、見ているほうがひやりとした。驚いていると、目が合う。彼は、じっとリヒトを見つめて首をかしげる。

全体に大きな人物だった。縦はリヒトより二十センチはありそうだったし、横は倍くらい太い。学生服に包まれた手足も、比例して大きく長かった。リヒトは、彼の顔を、三人が言うほどそんなに悪

いとは思わなかった。きりつとした眉に、一重まぶたのわりに大きな黒目がちの目、鼻の上に、かぎざぎのような傷あと。唇は薄い。少し伸ばしすぎではあるが、髪は清潔そうだし、身なりも、きちんとしている範囲に収まる。

「えーっと……おはよう」

しかし、どんな特徴をもこえて、テッセンには迫力というものがあつた。堂々たる体格も、彼の雰囲気には拍車をかけている。他人に威圧感を与えるのは、他の生徒より、大人びた顔をしているからだろうか——つりあがった目は、意地悪そうだが、精悍ともいいかえることもできる。

彼は、挨拶に答える代わりに、眉間にしわを寄せながら口を開いた。

「新入りか？」

「あ、うん。リヒトっていうの。よろしく」

軽く頭を下げる。テッセンは、ふん、と鼻をならした。コーゾウを席から追い出して、立っている三人をじろりと眺める。

「育ちをうんぬんいうわりに、ほんと、しょうもねえトリオだなお前らは。どうせ、新入りにでたらめふきこんでたんだろう。そんなに俺がうらやましいのか？ 学級委員、お前も目障りだ、消えやがれ」

「僕は彼の世話役でね」

鼻白むようにミサオが答えたが、テッセンは、け、と吐き捨てた。

「はあ？ 柄にもねえことすんなよ、クズ」

「クズ。ってことは、君よりましてことだ。君は——」

ミサオが何を言ったのかわからなかったが、なにかひどい侮辱の言葉であることはわかった。テッセンが、前の席の椅子を、長い足で蹴り飛ばす。二人はにらみ合う。

「そんな言葉ばかりお勉強してるんだろう。それで秀才とか呼ばれて悦に入ってるなんざ、よほどのバカだ。はん、お笑いだね」

「もう少し態度を謹んだらどうだ。僕らの評判が悪くなる」

「お前らと一緒にされるくらいなら、喜んで、こんな態度を貫くね」
止めようもなく、リヒトは彼らを交互に見るだけだ。そこへ、戸の開く音とともに、「おはよう」と、場違いに明るい声が響いた。
「いやあ、間に合ってよかったよ。今日こそ駄目かと。寮だと、近いから、ついねえ」

昨晚、寮の食堂で見た顔だった。その少年は、荷物を降ろしながら、リヒトの斜め右前へ座る。一緒に、どっと教室へと一団が入ってきた。見覚えがある――全員寄宿生だ。

「やあ、転入生だね。僕、ミサビっていうの。よろしくね」

「あ、ええと……よろしく。リヒトです」

「お邪魔だったかな？ 彼らと、お話してた？」

万人が好感を抱くとしたら、こんな笑顔だろう。ミサビは、細いすんなりとした指をあやつって、癖のある茶色い髪を耳にかける。中性的な容姿としぐさは、周囲をなごませるのにじゅうぶんだった。女子が、彼のほうへすぐに話しかける。レイ、ヨウタ、コーゾウのことを告げ口する少女に、笑顔でうなずいてから「イエローカード」と、ミサオにむかって首をかしげた。

「同じ内部生同士、仲良くしなよ」

「同じなもんか」

コーゾウが言い返す。他の二人もうなずいた。対照的に、ミサオは、急激にやる気をなくしたようだ。ため息をついて「とにかく」と、リヒトの耳元に、そっと顔を寄せる。

「あんまり下劣な連中と付き合うのは感心しないね。あれはまだましなやつだが、他は駄目だ。この男も」

あれ、という瞬間にミサビをさし、この男、というのでテッセンをさす。気付いたテッセンは、黙って肩をすくめる。そのとき、鐘の音が鳴った。三人も、他の生徒たちも、席につきはじめる。キョウタローが入ってきて、ほっとしていると、ふと、低い声が隣から聞こえた。

「親に捨てられて、かわいそうになあ」

テッセンが、彼を見ていた。下卑た笑みこそないものの、嘲笑の意図はあきらかだ。むっとして、リヒトは彼をにらんだ。

「捨てられてない。なんなの、それ」

「聞いたままの意味だよ。転校生。お前、死んだんだろ。家族はお前の墓を建てる。お前は忘れられる。サヨウナラ、って意味だ、それが」

「違う。なにそれ——違う、そんなことないよ」

「どうだか。ここににいる時点で、そうだな、お前が、家族の厄介者なのは、明らかだ」

「なにそれ。どういうこと」

「どうもこうも……」

のどの奥で笑う。

「どっちにしろ、もう戻れないってことだぜ、坊や。かわいそうに……なんだ、その目。信じてないのか？ 馬鹿だな。変化したやつ
の家族ってのはな、もう、外の世界じゃ、日陰者だ。一族の恥なんだぜ、お前は、もう。親戚の誰も、お前の家族を相手にしない。世間につまはじきにされて、そのうち、家族はみいんな、お前を憎むようになる。最初はお前を氣遣っても、だんだん、そうなる。手紙も荷物も来ない。誰も尋ねてこない。一生ひとりだ。せいぜい、そうだな、寄宿舎の、腐れ外部生の連中と仲良くするんだな。ああ、かわいそう——嫌われ者のリヒトちゃん……」

「——転入生です。リヒト」

キョウタローの声で、リヒトはあわてて立ち上がる。クラス中が、彼に注目していた。テッセンが、ひゅう、と小さく口笛を吹いた。笑顔がひきつりそうになるのを我慢して挨拶し、席について隣を見たときには、すでにテッセンは、関心をなくしたようで、写筆用の筆をくるくるともてあそんでいる。三人の言い方も言い方だが、どうやら、そういうわれても仕方のない人物のようだ——よりによって隣の席とは。

しかも、早々に、標的として目をつけられている。

かばんから教科書を取り出そうとしたとき、何かが頭にあたった。消しゴムを小さくちぎったものだ。テッセンが、にやにや笑いを浮かべて彼を見ていた。彼の手元には、ちぎられた消しゴムが、エアガンの弾よろしく散乱している。

途方もない疲労感に襲われながら、リヒトは、初日の授業を受けた。

一週間がたった。リヒトは、授業をひととおり経験し、クラスや学校の雰囲気をつかんだ。そして、クラスの中にある勢力図についても、だいたいを把握することができた。

彼らのクラスは、内部生と外部生とで対立していた――内部生とは、幼等部以前に粒子を浴びて変化したものをさし、外部生は、幼等部以降にそうして平安市に住み始めたもののことをさす。いわゆる、生粋の平安人とそれ以外との対立であった。両者の間には、一種の暗黙協定のようなものができていて、ふだんはお互いに干渉しない。内部生のスポークスマンは委員長のみサオ。外部生のスポークスマンを、副委員長のミサビ―ダブルエム、と呼ばれる二人が務めていて、何かあると、この二人が話し合い、事態を穏便に解決するよう努力する。

リヒトは、じぶんの形容詞が転入生であるうちは、みさオと行動を共にしていたが、五日もたつと、じぶんが外部生だということを、強烈に意識しないではいられなかった。なによりも彼にそれを思い知らせているのがみサオだと、一週間かかって納得した。好きな食べ物、故郷のこと、趣味、将来の夢――それらの話題を携えた彼のアプローチはすげなく返され、弾倉の予備まで失った彼は、六日目に、ようやく撤退を決めた。

週明けの火曜日の、放課後のことである。それまで遠巻きに見ていた、外部生の長であるミサビに話かけると、ミサビはにっこりと笑って「来ると思ってた」と言った。

「しかし、君は我慢強いね。一週間もつとは思わなかった。たいていね、一日だよ。長くて二日」

「なんとかなるかなって思ったんだ。その――必要なことなら、教

えてくれたし」

「必要じゃないことは、話してくれない？」

「うん。だから、悲しくなった」

まったく気の合わない相手とひとつ部屋に黙って暮らす苦痛は、樂天家を自負するリヒトの意気を砕いた。息をするのも苦しいような、気詰まりな感じを打ち破ろうと行ったさまざまな努力について話すと、ミサビと、彼の隣にいた生徒が笑った。

「俺らも話してたんだぜ。キョウタローも、ひどいことするよなつて。あんなのと同室で、よくやってるよ、お前——あ、俺、シルルな。215に、そっちの、ミチタカと住んでる」

「しる……、シルル？」

聞き間違いか、と問い返すと、少年は「それであってる」とうなずく。

「親が、化石とか恐竜とか好きでさ。シルル紀っていう、昆虫が生まれた時代の名前なんだよ。なんか、女みたいだけど、それは言わない約束だから、言うなよ」

他にも、名前だけを知っていた少年たちが、次々と話しかけてくる。ナマモノとも、ミサオとも、ずいぶん感じが違う。リヒトは、ほっと胸をなでおろした。

「なあ、武道芸術、何にするか決めたか？俺たちは、部活って呼んでるけど。このあいだまで外にいたなら、部活、わかるよな？」

「わかるよ。ええつと……まだ決めてない。いろいろ、見学したいなあと思うんだけど」

「柔道部に来いよ。タダヒコに会ったろ？」

サツキが手をあげた。

「楽しいぞ。俺が保障する」

「いや、剣道部に」

「華道部！女子ばかりで、肩身が狭いんだ。頼むよ」

「あの、ミサビは？」

ふわりとした笑顔のまま、ずっと黙っているミサビに尋ねると、

「料理研究部」という返答。残念ながら、同じ部にはなれないようだ。だが、ミサビはさらに続けた。

「あと、杖術部と、万葉和歌研究部と、古文書研究部と」

「待って、待って。かけもちができるの？」

「研究、とついているのは、同好会なんだよ。活動が週一回や二回だから、まあ……それぞれの活動に差し支えない範囲で、いくつでも入部できることになってる」

一同がうなづく。

「ええっと……できれば、ひとつのことをじっくり、毎日やりたいんだけど。芸術系だと、どのくらいあるの？」

「茶道、華道、美術、文芸、吟詠詩吟、日舞、箏楽、三味線、そのほかの和楽器がまとまった和楽と、弦楽部」

「芸術系に興味が？」

シルルの言葉に、リヒトは首を振る。

「サッカーか、野球かバスケットがないかなあと」

全員、残念そうに首を振った。

「球技はないんだよ。そういうのは……、なんていうかその、実生活に反映できないだろ。武道はさ、礼節を身に着けたり、身を守るためにやるんだ。芸術は、教養と、精神鍛錬。事故に備えて、必要最低限、やっておかなきゃならないわけ」

「事故？」

「粒子を制御しきれずに、過去へとばされたときのためにね」

ミサビが言った。

「江戸、明治、大正、昭和……平成はまだ、外からきた僕らにとっては、現代の暮らしとかけ離れた時代じゃない。だが、それ以前だよ。武士の時代、帝国主義の時代、戦中。そこへ、僕らが放り出されたら？ 知らない、じゃすまされない。誰も助けてくれない。もし、憲兵に連行されたら？ 尋問を受けたら？ 侍に襲われたら？ 素手での闘争には柔道、空手、合気道。武士に対抗するには、剣術が必要だ。誰かを遠くから守るなら、弓や銃。万が一、その時代

に長くいることになれば、茶道や華道などの教養は役に立つ。稼げるから」

「なるほど……じゃあ、バスケなんか絶対無理だね」

「残念だけどね。でも……これでも、爆発的に増えたんだよ。僕らが初等部のころ、芸術系の部活なんて、華道と茶道だけだった」

あまりにがっかりした顔をしているのか、リヒトを見て、シルルたちがぐすりと笑った。

「顧問で決めるって手もあるよ。まあ、今日あたり、見学するって、キョウタローに伝えておいたら。キョウタローはちなみに、剣道部だ」

「カエデは？」

「華道部と、料理研究部」

カエデにぴったりだ、とリヒトは思った。どちらも、彼女にふさわしく、風情がある。しかし、リヒトの母親が料理をするときの光景を思うと、可憐とか、清楚という表現はともできない。ならば華道部に入りたいかというと、野に咲いている花を、わざわざ寿命を短くしてまで、室内に生けることに興味がない。やっぱり、体を動かすほうがいいな、とリヒトは思った。ならば、柔道か、剣道か、弓道……このあいだは気づかなかったが、杖術や、銃術というものもあった。

母親を思い出したところで、リヒトはふと、気付いた。

「そうだ。ほかに、俺、聞きたいことが」

「なに？」

「掲示板」

終礼が終わって、武芸までみんな一息ついている時間だった。古文書研究部には遅れていってもかまわない、というミサビがつきあってくれた。

リヒトが気になっていたのは、もっぱら、外部生が利用する、一階事務所前の掲示板だった。そこに、何枚もの紙切れや封筒が、ピンで留めてある。すでに部活が始まった時間は閑散としていた。

木の枠に緑のビロード地が張られた掲示板は、長年の激務に穴だらけだ。そこを見上げて、

「これなんだけど」とリヒトは、首をかしげた。

「あのさ……親からの手紙が、ここに貼られてるんだよね？」

「そうだよ」

平市へ子どもを奪われた親たちは、筆まめだった。子どもの状況をみんな知りたいのだ。その逆もしかり。だから、学園の地下にある購買部では、デザインもさまざまなレターセットが、外部生を中心に飛ぶように売れている。

今も、彼の目の前で、数人の生徒が、掲示板を見ていた。宛名を確認して、大事そうに封筒を抱える生徒たち。例外なく、みな笑顔だ。外界では、通常、この年代の大半は反抗期にあたるはずだが、あまりに早く引き離されると、反抗の気持ちそのものが消失してしまうのだろう。

反抗とは縁のないリヒトもまた、手紙を待っていた。彼は、病院にいるあいだに実家と中島の家に一通ずつ出したし、転入してから、ずいぶん手紙をだしている。一週間と三日が経過しているが、返事はまだ来なかった。キョウタローの話によると、親たちが、学校の住所を知らないということはない。また、戦時中の校閲や検閲よろしく、手紙の内容を检查したり、ということもないらしい。

じゃあ、どうして？

自慢ではないが、息子からの手紙を無視するような親ではない。いくら忙しくても――病院でリヒトが見つけた手紙には、学校に転入したら、絶対に手紙をくれ、と記してあった。すぐにみんなで返事を書くから、とも。リヒトは、言われたとおりに書いた。何時間も考えてしたためた。

届いてない、という可能性も考えた。だが、エメールではあるまいし、配達まで一週間もかかる、ということはないだろう。

リヒトは、あれから毎日テッセンに「かわいそうになあ」と繰り返し言われ続けている。彼の言葉は、少しずつ、リヒトの中に不安

を生んだ。家族はみんな、お前を憎むようになる――

みんな、嫌いになったのだろうか？

リヒトは、ミサビに説明しながら、もういちど、上から下まで掲示板を見る。やはり、ない。ミサビが「そのうち届くよ」と、慰めるように肩を叩いた。

「まだ一週間じゃないか」

「うん……」

「もしかしたら、大きな荷物で送る用意をしてるのかもよ。お菓子とか、着替えとかを一緒に送るときに、手紙が同封されているのもよくあることだし」

彼らの目の前で、一人の少女が、階段を下りてやってくる。階段のすぐ横に、掲示板のスペースはあるのだ。少女は二人を見ると、片手をあげた。ミサビも、片手をあげてこたえる。「マチコだよ」と、彼は紹介し、紹介された少女は微笑んだ。リヒトは「よろしく」と会釈をする。はじめて話す、女子のクラスメイトである。綺麗な黒髪をあごで切りそろえたマチコ――彼女は、黒曜石のような目で、転入生をしげしげと見たあと、ふうん、と息をもらした。

「やっとこっち側に来たんだね。二人そろって、いったいどうしたの？」

「手紙が来てないかどうか見てた。マチコ、美術部は？」

「ヤホ先生がお休みなの。だから、自習。ええっと……」

マチコは、掲示板の右スペースにある、短冊のような紙をとった。上のほうに、ゴシック体で「小包・荷物預かり」と書かれている。荷物のほうに、丸がされていた。彼女は、事務の前に行く。「あれは？」とリヒトが尋ねると、ミサビは「あれが荷物だ」とうなずいた。

「ミサオの説明じゃあ、わかりにくかったろう。あれがここに張ってあったら、預かってる荷物があるから事務まで取りに來い、って意味だ。サインと判子を押して持っていく」

「ああ……」

リヒトは、かけていた鞆から、小さな巾着袋を取り出す。初日に、支給されたものだ。中には、小さなケースに入った判子と、親指大のシールが同梱されている。彼は、ケースを開けた。ろくに確かめていなかったが、その判子は、両親が銀行に持っていくような、正式なものに見えた。判子の裏には、瀬田、と彫られている。彼がそれを見せようとする、なぜか、ミサビは顔をそらした。

「自分のファミリーネームはね、普通は、隠しておく。もし、外部にもれると、家族に迷惑がかかったりするかもしれないから。よほど親しい友達なら、友情の証に教えたり、なんてこともあるけどね」リヒトはあわてて、判子をしまう。ミサビがマチコに声をかけた。「ねえ、受取表を、見せてあげてよ」

「いいわよ」

マチコが、サインと捺印を終えた用紙を見せてくれた。人柄を思わせる丸っこい字で、マチコ、まちこ、Machico、と三種類のサイン。捺印があるらしい小さな四角い欄には、レース模様の保護シール。手には、綺麗な銀色の鍵があった。やや錆のある、アンティークのような風合いで、どうやら、彼女の判子らしい。「改造したんだあ」とマチコは笑った。

「美術部と、意匠研究部の共同開発。内部に判子をはめ込んで、キホルダーにもなる優れもの。ひそかなブームよ。ふふ……：：～」

「ねえ。なんでこんなにサインしなくちゃならないの？ 筆跡鑑定とかやるの？」

三種類もサインを書く意味は、そうとしか思えない。そういうと、「たぶんね」と二人も顔を見合わせて言った。

「他人に荷物を持ってかれないための、本人確認のための措置だと思っけど」

「ねえ、ファミリーネームがどうこう、っていうのは？ ああ、家族に迷惑がかかるって、なんで？」

「僕たちがここにいて知った悪いやつらが、家族のところにい

って、誘拐して、僕らに身代金を要求したり——僕らは、まあ、たいていはゴーストを見ることが出来る。それを、悪用させよう、てやつもいるかも。靈感商法は昔からあるけど、僕らみたいなのができてから、激増したってデータがあるしね。まあ、そういうやつがいるかもというか、いたんだけど……だからだよ」

「この学校なら、みんな同じような環境だから、そんなに気を使うことないと思うけど。あんまりうっかり、自分のことをいわないほうがいいわね。よっぽど仲良しの人ならいいけど」

信頼する人間を、見極める必要があるな、とリヒトは思った。

マチコは、受取用紙を、事務の前にある赤い箱に入れた。「これにいれとくと、寮に届けてくれるんだよ」とミサビ。リヒトは、背後を見る。

荷物の欄にも、彼宛の預かり票はない。

その横のスペースには——荷物と違って、張りっぱなしの手紙。ひどく無防備に見えてしかたない。ひょっとしたら、という気持ちがわからないではなかった。ミサビを見ると、柔和な顔をほんの少ししかめている。

「ねえ。手紙がとられたり、とかって、ある？」

「ない……とはいえないね、残念ながら」

「そう……」

「でも、君は、内部生ともうまくやってる。今のところは。僕らの対立に巻き込まれるようなことは、まだ……」

なんだろう、なんだかいやな予感がする。

再び掲示板を見上げて、リヒトはため息をついた。

「あ、あれ、テッセンじゃない？」

しばらく立ち話をしていると、テッセンがむこうからやってきた。職員室から出てきたところのようだ。仏頂面で、巨体を揺らして歩くので、近くに来るとさらにものすごい迫力だ。三人を見ると、唇をゆがめはしたが、何も言わずにそのまま通り過ぎた。そこへ、タイミング悪く、銃術部というロゴの入った、おそろいのシャツ姿のナマモノトリオ、プラス、ミサオが、渡り廊下から現れた。彼らはリヒトを見ると「手紙を探してるのかい」と、笑う。「そう」とリヒトはうなずいたが、答えた瞬間、嫌な予感をおぼえた。トリオの目が、相手の弱点を見抜いたボクサーのようにきらめいたからだ。

だが、拳は、彼に向けられなかった。レイは、ちょうど立ち去ろうとしていたテッセンの背中に向かって「仲間ができてよかったねえ」とわざとらしく声をかけた。「ママからの手紙を待ってるなんて、外部生って、たいてい、けなげだよなあ。直接甘えられるテッセンにしてみれば、ばかばかしい悩みかもしれないけど」

テッセンは振り向かなかった。リヒトはほっとしつつ、疑問をおぼえた。彼らにからかわれて、黙っているなんて、はじめてみる。

三人を止めるべきか迷っていると、

「手紙、ないの？」

ミサオが、ふいに隣に寄ってきて呟いた。「うん」と急いでうなずくと、ミサオは首をかしげたまま、じっとテッセンのほうを見る。「さっきまで、あいつがこのへんにいたの？」

「ううん。俺らが話してたところに、彼は職員室から出てきて、通り過ぎていったところなんだけど」

そのとき、ヨウタが、突然、癪に障る笑い声をあげたのだ。それ

でようやく立ち止まったテッセンに向かって、レイが、手をひらひらと振るしぐさで、おどけてみせた。

「でくのぼうは、武道芸術をさぼって今日もご帰宅の様子……。早くママにあいたーい、かな？」

「毎晩慰めてもらってるんだろ。今日は、ベッドで、絵本でも読んでもらえよ」

数日前、ミサオが言った侮辱の言葉を、さかんに彼らは口にしていた。いつになく執拗で、ここ数日、にらみ合いだけにとどまっていたぶんが、一気に噴出したようだ。イエローカードじゃないのか、と思ったが、ミサオも、ミサビも、止める気配がない。

一週間で、学んだことがある。それは、テッセンが、どちらにも属さず孤立している、ということだ。

母親と一緒にいる、という一点で内部生から嫌われ、生まれついでての平安人という理由で外部生からもつまはじきにされている。二人とも、今は傍観者でいるつもりのようなのだ。

テッセンはまだ反論しない。顔はわずかに青ざめて——なんだか、疲れているようにも見える。

いらいらした。

一方的じゃないか、こんなの……。はやく、いつものように言え
ばいいのに——

手紙のことでナーバスになっていた感情が、苛立ちに変わる。もう、いっそ自分が口を出すか、とも思ったが、口を出しても、テッセンのことだ。恩を感じてくれることを期待できそうにない。

じゅうぶん分かっていて。今まで散々隣で囁かれたように、今度も嫌味で返されるに決まっている。

でも——

「あのさあ」

ついに耐えかねて、リヒトは、ヨウタたちに向き直る。、多勢に無勢のこの様子では、自分が味方したところで、たいしたことになるわけがない、と思った。それに、この一週間で、彼らと友人で

いることが、ずいぶん嫌になっていた。このときほど強くそう感じたことはない。

もういい——リヒトは、強く唇を噛み、口を開いた。

「あのさあ。いい加減にしなよ。マザコン、マザコンっていうけどさ……、マザコンの何が悪いわけ」

トリオは、ようやく彼のほうを見た。

「何が悪い？」

ヨウタが肩をすくめる。先ほどとは少し違う、怒気をはらんだリヒトの様子に気付いたのか、彼らは顔を見合わせる。そのあと、いかにもばかにした表情をうかべ、吐き捨てるように話した。

「悪いに決まってるだろう。普通に变化した人間なら、親からは独立するもんだ。人間関係の完璧な絶縁によって、俺たちは一個の生命体として確立できる。家族なんて愚かな存在を気にかけているようじゃ、だめなんだよ。そんな、手紙を気にして未練を持ってるようじゃ」

「今すぐに引き離すべきだ、親なんてものは、特に。僕たちが外部生を気に入らないのは、お前たちが、いつまでも、人間だったころの状態を懐かしがって、甘えてるからさ。格好悪い」

三人は掲示板をさした。

「捨てられたんだぜ、お前らは」

「そうそう。あんな手紙……、本当に親が書いてるか、わかるもんか」

小さく、息をのむ音がした。マチコの声が小さく「ひどい」と呟く。

リヒトは三人をにらんだ。

「——そういう考えはあるみたいだね。たしかに」

「そうだろ。愚かなことだよ」

「お前も、そいつらと一緒にいると、いつまでたっても半端なままだぞ。どんどん、格が下がっていく。すぐに悪くなるぜ」

これ以上悪くなることがあるのだろうか、トリヒトは思った。

仁義もなにもない、一方的なリンチのような罵詈雑言。不快でたまらない。

苛立ちが怒りに変わった。

「でも――すまないけどさ、悪いかどうか、俺は、自分で決めるもんだと思う」

リヒトは、三人をにらんだ。

「この世に生まれなきゃ、そもそも、俺たちは変化すらできなかったんだ。生んでくれた親を思っただけが悪い？ 手紙のやり取りの、どこが甘えてる？ 俺は、今まで、両親に育てられてきたよ。大事にされてきた自覚もある。だから、俺は、大人になったらその恩を返そうと思って、父さんや母さんに甘えてきた。でも、変化して、こんなところに連れてこられて――もう、一緒にいられないとわかったときは、正直、悲しみ以外のなにも感じられなかった。そして、それは、俺の両親も同じだ。だから、手紙を書くし、返事を待てる。だって、」

嬉しそうに手紙を持っていく生徒。受取票に書かれた、マチコのサイン。

じぶんだって、待っている。きっと来る、と心のどこかでは信じて、すがっている。

これは未練だろうか？ そして、母親と一緒に暮らすテッセンは、悪いのだろうか？ 自分にどうしようもできない生まれ方を、彼自身の罪とするのは、あまりに残酷じゃないだろうか？

嫌だなあ、と思いながら、リヒトはテッセンがうらやましかった。それはなぜか。

家族に対するこの恋しさは、未練ではない、と思う。だって――「だって俺は、じぶんの両親を愛してたから」

「愛してたって……」

三人は、聞きなれない単語を聞いたような顔をした。次に、吹き出そうとして失敗する。互いに顔を見合わせた。

「笑うんなら笑えよ。でも、俺は、口で好意を伝えることを、恥ず

かしいことだとは教わってないからね。俺が恥ずかしいと思うのは、自分がないものを持つてる相手に嫉妬して、勝手に恨んでるバカらしさだよ。ついでに言うとな、なんでお前らがテッセンを嫌いなのか、俺にはわかるよ。幼少期に、母親の十分な愛を得られなかったやつは、健全な人格形成ができないんだよ。見たところ、お前らは、ぴったりの説にあてはまる。つまり、お前らこそ、幼少期から、母親の愛に飢えている、筋金入りの立派なマザコンってわけ。テッセンの家がお金持ちとか、お父さんが偉いひとだからとかじゃないよ。ずっと聞いてるけど、俺、お母さんがいるってことに、みんなが嫉妬してるとしか思えない」

しばらく、その場はしんと静まり返った。トリオはぽかんと彼を見ていたが、やがて、真っ赤になって、口々に反論をはじめた。スポークスマンであるはずのミサオは、横に立ったまま、黙っている。何かを考えているようだ。ミサビは、最初はしかめ面だったが、今は面白そうにリヒトたちを見ていた。ナマモノたちは、けんけんとして反論をはじめた。

リヒトは、言い分を聞いていたが、相手にするのも、もう、ばかばかしいような内容だったので、黙っていた。馬耳東風に聞き流す。余計にその場は騒然となった。

しかし、とうとう彼らの言葉も出尽くしたところで、ミサオが、やれやれ、というように肩をすくめ、首をふる。

「まあ、今日はこのくらいにしておいたら……」

「でも」

「リヒトはまだ、一応、僕の同室なんだ。気まづくしないでくれ」
今までは気まづくなかったのか!?——リヒトはこの時間で一番衝撃を受けた。事情を知るミサビがくすりと笑うと、その場が、一気に茶番と化す。喜劇にも悲劇にもならない、中途半端な空気が流れた。

ミサオの「いこう」という抑揚のない声で、三人は、しぶしぶといったようにきびすを返す。

静かになったところで、マチコが「なんだかびっくりだねえ」と、大きな目でまばたきをした。彼女の視線が、リヒトとミサビをいつたりきたりする。

「ねえ……、男子って、どうなってるの？」

「女子のほうこそ、よくうまくやってるよ。内部と外部の対立って、ぜんぜん聞かないじゃない」

「うちは、規則にうるさい先輩が、猛威をふるってるから……、あ、テッセン！」

テッセンは、無言で、さっさと歩き出していた。後姿が角をまがる。

「めずらしく、相手にしなかったね。何かあったのかな」ミサビが呟く。

「職員室から出てきたよね、あの人。先生に何か言われたのかもよ。成績だってぎりぎりだし、ほら、いろいろ、告げ口ともされてそう。何回も補導されてるらしいじゃない」

「ああ、あるかもね」

「キョウタロー先生がお説教したのかもよ」

そのときだった。

「なにしてる」

突然――

廊下じゅうに、低い声がするどく響いた。三人は、ぎくりと背後をふりむく。いつの間にか、職員室の前に、セーラー服の少女が立っていた。西からの逆光で、シルエットだけやけにくっきりとしていた少女は、つかつかと三人のほうへやってくる。学年章から、彼らのひとつ上の学年、つまり、中部部三年生だということがわかる。前髪が厚く長く、ほぼ、瞳を覆ってしまっているため、表情が見えずに不気味だ。しかし、何にもましてリヒトが驚いたのは、その髪の色だった。手触りのまったく想像できない銀色の髪。プラチナ・ブロンド――耳元できりそろえられていて、鼻から下の顔立ちを見る限りでは、もともと日本人なのか、外国人だったのかも判然としな

い。合同授業では、見たことがない。誰だろう？

一連の騒動を見られたのだろうか、と全員がそわそわしているところへ、お構いなしの様子で少女は口を開いた。

「あんた、部活は」

淡い珊瑚色の唇が動く。声に温度があるのなら、冬のアラスカほど冷たい。顔の向きからすると、マチコに尋ねているようだ。

「じしゅ……自習なんです」

マチコは、蛇ににらまれた子リスのように見えた。二人が並んでいると、まるで正反対だ。目にして五秒で、リヒトは、この先輩が、なんとなく苦手だと感じた。小柄で、背はマチコと同じくらいだが、声の調子には、女性らしい柔らかさや、かわいらしさの装飾をいっさい粉碎したようなとげとげしさがある。少女は、首をかしげると、リヒトとミサビのほうへ顔を向けた。何かいわれるのだろうか、と思っていると、そのまま黙って、少女は、職員室のほうをふりむいた。ちょうどドアが開いて、男子生徒が出てくる。彼は、少女に手を振る。ふん、と面白くなさそうに息を吐き出すと、少女は、つとそちらへ行ってしまった。

「びっくりしたあ」

たっぷり十秒の沈黙のあと、ため息をついてマチコが言った。

「ああーあ。まさか、鬼が来るなんてね……怖かったね！」

「鬼？ 誰？」

「あの銀色のひと」と、ミサビ。

「ミューさん。三年生だよ」

「そう。生徒会の書記でもある。――珍しく、別の男子と一緒にだ」
ミサビのセリフの後半は、リヒトにしか聞こえなかったようだ。それってどういうこと、と聞こうとしたとき、マチコがうなずいて「そうなんだよ、リヒトも気をつけてね」と心配そうに言う。

「女子がまとまってる原因は、あのひとなんだよ。寮で喧嘩なんかしてたらもう、呼び出し一発、あの声で、……先に口と手を出したのは？ ってね。学校でもそう。あのひとが生徒会に入ったとたん、

もう、女子は震え上がったよね。ぞぞ、って感じ」

「ぞぞ、って……」

思わず吹き出した。きつい先輩の後だったので、余計に、マチコに親近感を抱く。よく動く表情、明るいまなざし、優しい態度。本当にいい子だった。

それはそうと、彼にはずっと気になることがある。先ほどマチコが言った、男子にはある対立関係が、女子にはない、ということだ。男女の性質の違いではないような気がする。そう思う根拠としては、社会科で、ときどき女子と男子に別れて受ける授業の存在もあった。もといた学校では、やかましく伝播しなくとも、男女平等はごく当たり前だったので、首をひねるばかりだ。

「なんか……女子、男子、って分け方をよく聞くけど」

彼が疑問を口にすると、ミサビが、過去を懐かしむ顔でうなずいた。

「操作実行で、過去研、っていうのがあるんだ。過去研修。粒子を操って、ホールを生み出し、指定された過去へ行って戻ってくる訓練。そこが、たいてい、明治大正なわけ。男女七つにして席を同じうせず、の世界。だから現地では、不可抗力に女子と男子のチームにわかれての行動になる。なんとなく、それを学校生活にも反映させちゃっているわけさ」

「へえ……」

「そおそお。男子厨房に入らず、とか、良妻賢母とか。外から来た私たちにしたら、馬鹿みたいとおもうよね。でも、ここにきたら、内部生はあたりまえみたいに女子と男子で別れてるじゃない。私も最初はびっくりしたよ。まさか、この時代にそんな差別、ありなのかしら、って。ねえ……そんなに別にしたかったら、女子校と男子校に分ければいいのよね。うん、絶対そう。そうしたら、各校の授業内容を比較して、女性差別撤廃に向けての運動ができるからね。私、与謝野晶子を例に出して、山本八重子みたいに戦うよ。ね、いいでしょ？　そう思わない？」

「うーん」

リヒトはミサビを見る。ミサビは苦笑した。

「勇ましい……、とは、思うけど、ねえ」

「なによ、文句あるの？」

「ないけど」

「ないけど、何よ」

「なんか、似合わない」

「まあ」

マチコは目をつりあげた。しかし、それすら、彼女のやや幼い表情を、より幼く見せる効果しかない。

「いいじゃないの。憧れのひとよ、あのかたたちは」

与謝野晶子は歌集「君死にたまふことなかれ」で戦争を批判し、夫、鉄幹とともに雑誌「青踏」を発行した女性歌人だ。女性たち自身で、女性の地位を向上させるようにと促した人物でもある。なかなか過激な性格でも知られている。そして、山本八重子はそれより前の時代、江戸末期から明治を生きた女性で、さらに破天荒だ。

時は明治元年、戊辰戦争でのこと——新政府に敵対する立場となった故郷に政府軍が攻め込んできたとき、彼女は、自らの家が砲術師範をしていたこともあって、血氣盛んな武家の娘らしく、自らも銃を取った。断髪、男装して戦うその姿は幕末のジャンヌ・ダルクと後に呼ばれたほどで、血氣盛んな彼女は、最後まで男に混じって戦い続けた。弟と夫を失って敗れた後は、兄を頼って京都へ身を寄せ、再婚するのだが、そこでハッピーエンド、とは、彼女の場合いかない。彼女の行動は、さらに伝説的になっていく。夫である新島襄を、ジョーと呼び捨てにすることからはじまって、彼より先に馬車に乗りこむことを当たり前にしたり、こきおろしたり、当時、女性は男にかしづくものとされていた時代だから、彼女は、悪妻、烈婦の代表のように思われた。しかし、二人の仲はとても良かった。教育者となった新島と同じく、彼女もまた、残りの生涯を、女子教育の向上にささげた。

一般に知られている与謝野晶子ではなく、山本八重子に関して、なぜリヒトが詳しいのか、というと、彼の故郷が、八重子が生まれ育った会津に近いためである。小学生のとき、彼は、夏休みの自由研究で、郷土の歴史について調べることになり、弟と一緒に、八重子の兄、覚馬についての伝記を読んだ。覚馬は、会津藩始まって以来の秀才で、侍の家に生まれながら、近代の政治の行く末を見つめる確かな目も持っていた。藩が危機に陥っている間は京都におり、敵対する薩摩藩に捕らえられて幽閉の憂き目を見たが、彼の優秀さを良く知る新政府側は、彼を厚遇した。すべてが片付いたあとは、役人として、黎明期の日本を裏方として支えた――読書のあと、実際に、そういったことをまとめたのは、彼の弟だったが、兄であるリヒトはそのあいだ、父親が借りてきた映像ディスクで、八重子をモデルにした映画を見ていたので、山本（妹）に関しては兄のほうが詳しいというわけだ。

この二人が、女生徒のあいだで今ブームになっているのを、リヒトはなんとなく聞いて知っていたが、彼も、マチコの言葉はもっともだと思った。いたずらに女性の地位を低くしている前述の石器時代の標語は理不尽だし、男子と女子の授業内容を、それでも分けたいというのなら、最初から校舎を別にすべきだ。ミサビも同意のようだった。

しかし、それはそれ、これはこれ。「でも、やっぱり」――ちらりとマチコを見る。紺色に三本、白い線の入った夏セーラー、紺色のリボン、きれいなプリーツが規則正しい、膝下だけのスカート。万感の思いをこめて、「俺は共学がいいなあ」としんみりと彼が呟くと、ミサビはにやりと笑ってうなずき、マチコは、ため息と共に肩をすくめた。

4 天使の蝶

美しい夏のさいごの光が、オーガンジーのカーテンを透かせて、室内に柔らかな色彩を添えている。

A組の三人が、銀色のミュー女史と接近し、男女差に関して話をはじめる十五分前のことである。職員室の隣にある相談室で、カウンセラーのシュウは、相談者の手を握りながら、ときおり相槌をうっていた。シルクのカバーをかけられた革のソファに座って、隣で喋っているのは、彼の元後輩であり、十年來の友人だ。彼女のため、シュウは、シナモンフレーバーの香ばしく熱いコーヒート、生徒には、開かずの冷蔵庫としてがちり封印されている保存庫からお菓子を出して特別待遇で迎えた。しかし、甘いものよりも彼女に必要なのは、友人の慰めと落ち着いた態度であるようだった。飴色に光るオークのティーテーブルの上で、放置されている生菓子は、いたずらに表面を乾かしている。

「あの子を見たとき、胸が苦しくなった。逃げ出したくなったわ。今も……できれば、会いたくない。いえ、会いたい。どちらなのか、自分でも分からないの。どうしたらいいのか。ええ、もちろん……わかってる。大丈夫よ」

深刻な表情のまま、カエデはようやく、シュウの手を離れた。そのまま、手をあごにあてて、深くため息をつく。

「出張の間に何があった？」

白いものが混じり始めた頭髮をかるく手で抑えて、優しく聞く。彼らの体は劣化しないが、人間らしくみせることに全力を傾けている魄幹旋部のおかげで、彼の髪は、年を経るごとに灰色をおびていた。毛根に定着させてある色素が減っていくごとに、髪から色がうせていく。もともと色素の薄い白色人種だと、そう大きな問題では

ないが、太陽光に対してもっとも強く、単一の色としてももっとも濃い黒髪を持つ黄色人種や黒色人種などは、頭髪の変化は顕著である。つまり、老化が目に見えやすい、ということだ。

立ち上がって、ガラスに映る自分の顔を見たとき、シュウは、自分がずいぶん年をとったことを、あらためて実感した。ついで、果然とソファに座り込むカエデを見る。本来の彼女は、とても若く、陽気で、誠実そうに見えるのだが、今はその清冽さも、影をひそめていた。

涙が出ればいいのに、とシュウは思う。泣くことは、じつにストレス発散になる。感情は、閉じ込めれば閉じ込めるほど、澱のように体にたまって心を蝕む。抱えている悩みごと目から温かな水を出し、きれいに流しさってしまう行為が、これからの平安人には必要になる気が彼はしている。実際、何か問題を抱えたにんげんの脳波を、泣く前と泣いた後の状態で調べると、ストレスを反映する波形に大きな違いがあるという。

カエデは気丈だった。よく耐えた――式については淡々と語り、その後の処理についてはますます淡々と語った。元来、あまり、人に内面を打ち明けるのをよしとしない性格である。それを踏まえて「相談したい」といわれたときのシュウの驚きといったら、とても言葉では言い表せない。手を握られた瞬間は、天変地異、驚天動地といっても良かった。おそらく、生徒たちには想像もつかないだろう。いつもは明るく、陽光のように暖かな心と態度で指導にあたる“憧れの操実の先生”に、このようなナイーブな一面があるなどと。

「出張は、仕事の部分はいつでもどおりだったわ。でも、そこで会った天使の連中が――いやな目をした。私たちを“子ども”と呼んだわ。粒子をあびて、変化して、人間世界から追い出され、彼らと人間とのあいだで板ばさみになっている私たちを、子どもですって。本気で言ってるのかどうか、どうなのかしらね」

「軽口だろう」

「意識にバリアも張れない人間が、こぞって来ていたわ。偉大なる人類の先見者さまの前で、無防備に心をさらしてる。全部読まれているのよ。おそろしい。嫌な予感がするの。なんだか……」

「考えすぎだ」

さめたコーヒーをいれなおしながら、シュウは、明るくもなく、暗くもない口調を作る。

「だから、そう——ね、あれは、彼じゃないよ……」

最初の話題に立ち戻ったのは、これ以上、出張の話を聞くとまづいと、彼女の言い方で気付いたからだだった。踏み込んではいけない領分がある、とシュウは自覚している。カエデは、大学でも操作実行について講義を行う、期待のエースだ。一方、彼は、平安学園中・高等部の、しがない相談員。カエデは黙り込んだ。永遠とも思われる沈黙のあと、彼女は唐突に、シュウが答えられない疑問を並べ立てた。

「どうして、人間の姿にしたのかしら。私たちを。心が体を飛び出した瞬間、とても幸せになれたのに。これが死なら悪くない、って思ったのに。温かくて、優しくて、身軽になった体はすべての真理を超越していた。それなのに、彼らはなぜ、私たちにもう一度、人間の体を与えたの？　ご丁寧に、もとの人間とそっくり同じ器に整形して……、あの魂の、なにものでもない形なら、きっと、他の動物の形をしていたってよかった。声帯さえあれば、意志の疎通だってできたのに。どうして？　この体では、子どもも作れない、天使にもなれない……」

「ヒトを賣めてるの。それとも天使」

「どうして私たちは、まだヒトの形をしてるのかしら」

カエデは顔をあげた。

「こんな作り物の体を与えられて……こんなことまでされて、ヒトでいたかったわけじゃないわ、私は。器なんてなんでもよかった。いっそ、犬か猫でもよかった。そうしたら、人間ではないものになったとしても、ただ動物になっただけ。それだけですんだ。——人

間たちは、私たちを忌み嫌う。人間の形をしてる別の生き物にすぎないから。人形だから。だったら、別の動物にでもしてくれればよかった。そうすれば、こんな苦しみはなかった。私は、もう……：うしたい。犬でもいい。猫でも……：そんなものに」

「しかし、犬になりたい、というと、また別の意味になってしまうよねえ」

シュウは無理やり笑おうとしたが、失敗をすぐに悟った。カエデが、憔悴した苦笑を浮かべて、小さくため息をつく。ごまかしは通じない。シュウはコーヒーカップをテーブルに置き、ソファに座った。自分用にいれなおしたカップを持って、ゆっくりと告げる。

「それでもね……、生徒を見ていると、私は間違いなく人間だ、っていう子がとても多いことに気付くよね」

カエデにとっても既知のことである。彼女は小さくうなずく。

「中には、君みたいに思ってる子もいるけど。でもね……」

原始の海で、海底火山から湧き出す、硫化水素まじりの熱い水から、バクテリア生物は誕生した。そこから、生物は、多くの犠牲の果てに変容と進化を繰り返し、鱗を得、肺を得、足を得、最後に立ち上がって地面を駆けるようになった。すべて、状況と必要に応じて、彼らはじぶんたちの姿をかちとった。魂を守るよろいとしての肉体を、世代を重ねるごとに研ぎ澄まし、余分なものを捨て、さらに強化して――

「望まなければ人間ではいられない」

シュウはそう思っている。自分たちがなぜ人間の姿をしているか。それは、本能が、生きるのにもっとも自然な形として、人間の器を選んだからだ。おそらく、もっとも生き残る率が高かったのだろう。魂は記憶をとどめている。記憶は直前に生きていた器をいちばんよく覚えている。彼らが生きるためには、まだ、体が必要だった。その体は、人間を模していなければならなかった。

「生まれながらに変化した体を持っていた、天然の――二年生に、テッセン、という子がいるよね。ああいう子なんかは、きつと、じ

ぶんの体について疑問などないんだろうね」

「ええ。だと思う」

「そうだね……。しかしおそらく、変化したあとの姿が、かろうじて人間の姿をしていなかったら、僕らは殺されていただろう。“そういう意味では、まだましだったよ。僕らは人造人間、人間の手によって管理される存在。そう思うから、人間は安心していられるんだ。これで、天使みたいに翼がついていてごらん。彼らはひがむか、嫌悪するか――まあ、嫌悪するだろうね。あの、浮遊城にいる連中の姿は、人間が昔から聖書や宗教画で見してきた、聖なる存在とことなるから」

今、天使、という言葉が表すものの八割は、三月十七日に国際首脳会議場に乗り込んで、一方的に間借り宣言をした飛来人のことである。輝く何枚もの羽、衣服を身に着けずとも醜態をさらす心配のない、つるりとした光沢のある肌に宝石のようなきらめきをまとい、自ら光を発して、無重力と無酸素の空間を航行する。言葉だけで書けば、美しいように思えるが、実際に目の前にすると、聖なる、とか、厳かな、という形容詞をつけることは、この生物を前にして、とても無理だとすぐに察するだろう。彼らの姿を、人類は、誰も現実には想像していなかった。ラファエロやダ・ヴィンチが宗教画で夢想して描いた天使のどれも、人間の姿の範疇をこえていなかった。彼らが描いたのは、風呂にたたきこんでこすりあげれば、垢もでるし汗もかくだろう、有機体の姿だ。そして、この前提のもとに、ユダヤ教やキリスト教やイスラム教思想のもとで教育をうけたものなら、翼を持つということだけで、ついうっかり天使と名づけてしまった化け物がもつ、ビームでも発しそうなきらぎらとした目や、触覚のようにうごめく腕を見た瞬間、わめきたくなること必至だ。身の丈が普通に二十メートルをこえ、物理的な攻撃をものもしないとなれば、ほとんど、CGによるSFの世界だ。

二十一世紀なかば、人類は、新たなるフィールドを開拓した。発達したカーボンナノチューブ技術により、宇宙エレベーターがつい

に完成したのである。莫大な酸素と金と労力をつぎこんだロケットで、中途半端に行ったり来たりする時代がようやく終わった。しかしそこから問題だった。月に家を建てたとしても、そこから眺める地球がどんなに壮麗であろうとも、現実問題として、誰も宇宙に住みたくなかったのだ。放射能の嵐が吹き荒れるなかで、ひとびとは常に白血病や癌を患うリスクを負うことになるし、そもそも、生きるために必要不可欠な酸素が自然のなかに得られない。人間は地球で生まれた。死ぬまで地球にいるべき存在なのだ。宇宙エレベーターは、地球と宇宙とのあいまいな境目をなくし、宇宙を「ちよつと旅行に」と行って帰ってくるだけのものとしては十分だった。最初は、移住を希望するものもいたが、十年もたつと、現実とコストがあまりにも見合わないと気付いて、全員が地球へ引き返していった。エレベーター周辺の地価だけをあげ、観光資源としての価値だけを生み出し、その後十年で、今にもパンクしそうな総人口を支える原子力発電所から出る廃棄物を、太陽に向かって投げ捨てるための、単なる運送通路へと変わった。

そして、同時期、先進国には深刻な病が広がっていた。

「人間はもう、進化の限界に来ていた。先進国のなかで、同性愛者が爆発的に増えたのは、その一端だ――一般に、高学歴のものほど、ゲイやレズビアンが多いという。これは、子孫を作り、繁栄する必要がなくなった、と彼らの脳が判断したためだ。進化が止まれば、繁殖の必要はなくなる。子どもはいらなくなる。男女の壁は崩れ去る。そもそも、増えすぎれば、すでに、地球上でめったなことでは死なない彼らを生かすのに十分な食料が尽きることは明らかだった。医療が進めば進むほど、彼らは苦しむ。進化するスピードが速くなればなるほど、滅びの道を同じだけ早く進むことになる。それは、エジプトやローマや殷のような、文明の滅亡とは違う。それを生み出した人類そのものがいなくなる、本当の消滅だ。彼らは、隕石の衝突や病の蔓延ではなく、自ら死にゆく最初の種になるはずだった。天使が現れなければね――」

カエデは無言だ。シュウの声だけが、薄暗い室内に響く。

「今の僕らの体は、人類がそれまで抱えてきた病を克服するのに有益だ。珪素ベースの有機体。皮膚病もない、内臓の疾患もない、脳が生きている限り死なない体。魂と肉体を、本体と入れ物にする理屈。そのうち、変化をすることなしに、人間を、僕らのようにする計画が出てくるだろうよ。たぶん、そう遠い未来のことじゃない——そしたら……」

嫌な予感がするのだった。もしも、人間がその技術を開発したら——することは決まっている。

じぶんたちに近く、よりすぐれた種であるものに出会って、生き残っている種はいない。二十世紀の学者がそういったとおり、人間がこれから生き残るには、天使の存在が重要になる。彼らは、外見のパーツだけ見れば、非常に人間と似た部分がある。似通った種族であり、そして、人間よりすぐれた種族であるから——

カエデはその予感を口にせず、ことさら自嘲の笑みを口もとに浮かべて呟いた。

「彼らの粒子を浴びて人間から変化した私たちは、さながら、人間と天使のハイブリッド、というわけね」

ハイブリッドとは、種間雑種、という意味だ。性質の似たものどうしを掛け合わせて生まれる。しかし、そうして生み出された新しい種は、独立した道を歩むまで、親のどちらを模倣するべきなのだろうか。

「イタリアの作家に——たしか、天使は人間が進化したものだ、というのがあったね」

「ああ……。読んだ気がするわ。私は彼から読めって言われたんだけど、彼に勧めたのは、貴方？」

「うん」

シュウが記憶から引っ張り出したのは、プリーモ・レーヴィの短編小説だった。

「人間は通過点にすぎない。われわれは蛹なのだ——いずれ天使と

いう蝶に孵化するための課程を、今、人間として過ごしているにすぎない——だとすると、僕らの今の立場は、蛹、か」

「みっともなくうごめきまわっている、蛹ね」

力なくカエデはうなだれる。彼女の心を、本当に慰めるには、自分には役不足だ、とシユウは思った。

だから、涙が出ればいいのに。

マチコたちと別れてから、リヒトはミサビの案内のもと、部活動を見て回った。もっとも部員が多いのは柔道部で、次が剣道部と空手部。その次は、意外にも、ミサビのいる杖術部だった。人気の秘密は「初期費用の安さ」だという。名前の通り、杖術は杖を使って戦うスポーツで、基本的に、一メートル未満の棒さえあれば成立する武道なのだ。防具は貸し出されるし、特にほかの道具も、道着もいない。

渡り廊下は、道場から聞こえてくる威勢のいい掛け声でうるさかった。おそろいのユニフォームを着た生徒が行きかっているなかに、小学生と思われる小柄な生徒もいた。初等部の生徒が、出稽古にきているのだ。ひととおり見学した後、型どおり、ミサビは杖術部への入部を勧めてきたが、まだふんぎりのつかないリヒトは、首を縦にふることができなかった。

初日、彼が見た、不思議な施設の正体が、ようやくわかった。弓道場だったのだ。板間に並んだ射手たちは、庭の向こうにある土間にかけて的を狙って弓を引いていた。武道部のなかで、その部活だけが異様に静かだった。その静けさのせいかどうかはわからないが、部員も少ないようだった。

寮に帰ったときには、日が暮れかけていた。寮の舎監に尋ねても、リヒトあての荷物は届いていなかった。ミサビが図書室に案内してくれたので、彼はそこで、簡単な煮炊きのできる共同キッチンの使い方を教えてもらい、寮の、よりローカルな規則について、ミサオに聞き損ねていた詳細を尋ねることができた。特に彼が困っていたのは、今まで着たことのない浴衣や着物、袴の着用方法と、その後のしまつの方法だ。たたみかたも、洗い方もわからない。ミサビは、

お古の袴を出してきて、実地で扱い方を教えてくれた。一時間かかって、なんとかものにする。

「化繊ものは月一回、第一土曜日に、洗濯業者（クリーニング屋）が取りに来る。一回百円、三キロ以上は一キロにつき五十円加算。面倒だったら、木綿の袴や夏用のシャツも出すといい。ただ、自分でやったほうが安上がりだね。アイロンの当て方は？」

リヒトが首を振ると、ミサビが「じゃ、後でアイロン室だ」と笑った。

「小間物屋に行ったほうがいいね。なんにもそろってないんじゃない、そのぶんじゃ」

「うん」

洗濯をしようにも、籠もなければ、洗剤もない。昔の生活様式で暮らしているので、てっきり、川で手洗いでもしていると思っていた、と冗談をいうと、ミサビは目を丸くした。いくらなんでも、そこまで徹底してはないらしい。

「小型テレビ持ってるやつもいるくらいだよ。まあ、電波の状態は悪いけど」

「あの、DVDとか、映像ディスクはないの？ ええっと、なんだっけ、ここだと」

「活動ね。キネマ館が、商店街にある。映写機は、遊戯室にある」「遊戯室？」

そこは普段、寮に住む内部生のたまり場になっていて、外部生はめったに立ち入らないという。一階の遊戯室は内部生の縄張り、二階の図書室は外部生の縄張り、というわけだ。将棋板や碁盤などといった娯楽道具では図書室が充実しているが、設備の豪華さでは遊戯室に劣る、とミサビは苦笑した。もちろん、年功序列なので、高等部の先輩が使用したいといえば、即座に部屋を出なければならぬ不便さはある。それでも、遊戯室には立派な撞球台ビリヤードがあると聞いて、すぐにでも遊びたくなった。

しかし、はたと気付いた。

「そういえばさ……内部生って、寮にあんまりいないよね。うちのクラスだと、ミサオしかないみたいだけど。他の子は、どこで暮らしてるの？ 他にも寮があるの？」

「ああ……内部生はね、養子として、平安の家庭に引き取られて暮らしてるひとが多いんだよ。ミサオはね——彼も養子に行ってるはずだけど、事情があって、寮に入ってるんだよ」

「事情？」

なんとなくは知ってるけど、たぶん、僕が言うべきことではない、とミサビがきっぱりと言ったので、リヒトは、それ以上追求するのをやめた。たぶん、外の世界の多くの家庭と同じような問題を、ミサオの家も抱えているのだろう。

ミノムシ寮はコの字型をしていて、それぞれ、伊、呂、羽、という棟名がついている。彼らの住む部屋があるのは羽棟で、食堂、浴室、トイレなど共同スペースがあるのは呂棟。伊棟には、主に高校生が住んでいて、時折、呂棟で顔を合わせる。そういうときは、すぐにわかった。下級生の威勢のいい挨拶の声が、棟に筒抜けになるからだ。

集団生活の規則ははっきりしていた。上級生を敬い、下級生を導く。年功序列の本質は、けして、年上のものが年下のものを虐げ、威張り散らすものではない。それぞれがきちんと責任を果たしているからこそ、守り続けられている慣例なのだ。

夕食は、十六時三十分から二十時三十分まで。その日の献立は親子どんぶりと野菜スープ、漬物だった。材料はすべて平安市内でまかなわれているという。病院の食事はまずかったが、寮や学校の食堂では、まともな味が提供されているのを、その日、リヒトはようやく気付いた。たぶん、緊張と、変化した後、今までの人生で培ってきた味覚がゼロに戻ったため、ショック状態だったのだろう。なんにもまして、部活から戻ってきたシルルやサツキ、フリオ、ジュンサン、カンタ、ケマルらと、にぎやかにテーブルを囲んで食べたのがよかった。

修学旅行のとき以来の、まともな食事だと気付いたのは、眠りに
おちる前のことだ。カーテンで仕切られた彼のベッドスペースの斜
め上では、まだ明かりがともっている。ミサオはいつも、夜遅くま
で予習をしている。鉛筆が紙をこする音が、静かな部屋に響く。自
分と正反対の、まじめな弟と同じ部屋を与えられていた彼には、懐
かしい音だった。夏の夜は蒸し暑く、開け放した窓からときおり風
が入る。実家のように、そこに風鈴の音を探そうと彼の耳はするが、
まどろみに、疑問が頭をかすめるたびに、ふう、と目が覚めた。

寝て起きたら家だったりしないだろうか、ということ、リヒト
はまだ、ときどき思うのだ。しかし、元来が楽天主なので、たぶん、
すぐに慣れるさ、とそのたびに思い直す。悪くはない。最高とはい
えないにしても。

ところで、リヒトは週に三日、授業の始まる前に補修を受けている。これは、彼が中途に編入したために、学力も、粒子の扱い方も、他の生徒より遅れているためだ。特に彼を悩ませているのが、語学だった。英語はついていけるレベルだが、フランス語やドイツ語、アラビア語となるともう、虫の羽音と大差がない。

「君はたぶん、前衛類^{フォワード}？かねえ」

補修で担当してくれたのは、ホン、という、相談室勤務の職員だった。白髪交じりの髪を後ろで束ねた、恰幅のいい男性教師だ。もとの担当は歴史らしいが、今年は、持ち回りで補修を担当している。のちに知ったところによると、対外折衝や指揮官になる生徒を後衛^{バック}、後衛の指示のもと、実際に各種の処理にあたる生徒を前衛^{フォワード}と分けるのだった。類とは、高等部で生徒が選択する課程で、類？には運動能力にすぐれた生徒が、類？には語学にすぐれた生徒が、類？には、医療に向く生徒その他が振り分けられる。つまりリヒトは、体は頑丈だがお勉強に関しては難有り、と転入早々見抜かれてしまったわけだ。

補修には、彼より若い生徒も多数いた。初等部、中等部の中途編入者を目にして、なぜ高等部の生徒は転入生がいないのか、ということ考えた瞬間、暗い気分になった。生存率――

家族愛についてトリオともめた次の日でもあり、補修を終えて教室へ入ったときは、なんとなく気の乗らない気分だった。1限目は操作実行。カエデの授業だ。急いで、筒袖と野袴に着替えて、実習室に向かう。

窓から見上げた空は夏らしく澄み切って、雲ひとつない。駆け足で廊下を抜け、実習室の重い三重扉を開けると、もう全員そろって、

それぞれのグループで固まって話している。三十平米ほどの、すり鉢状になった円形教室の中央、もっとも低くなった場所で、カエデが、袴姿で立っていた。もうひとりの操作実行の男性教師と話している。

「すみません、遅れましたか」

階段を降り、どきどきしながら話しかけると、カエデが彼を振り向いた。リヒトだけが知っている、あの、さびしそうな笑みが一瞬浮かぶ。彼女を中心とした空間が、光を吸収しているように、際立って見えた。

きれいなひとだな。

リヒトは、カエデを見て改めて思った。

「あのう、あのう、お久しぶりですっ」

声が弾むのを止められなかった。「久しぶりね」とカエデもゆったりと答え、「どう、慣れたかしら」と首をかしげる。その仕草に、魂を打ち抜かれたように全身がしびれた。奇妙な感覚が胸の中に現れた。

なんだろう。どきどきする……。

「はい。あの、先生、しばらく学校にいなかったですよね？ お会いして、相談したいこともあったんですけど」

「ああ……、先週は、外せない出張だったのよ。ごめんなさいね。初めての授業だったから、私も、直接見てあげたかったんだけど」カエデは腕を伸ばし、リヒトの肩に手を置く。

「しばらく見ないうちに、顔がだいぶ変わったわねえ。それに、少し、背が低くなった？　これが、リヒトなのね？」

「え、ああ——はい」

「でも、いいわ。それも」

「そうですか……？」

リヒトは自分の顔をなでる。変化したあとの彼は、たしかにリヒト本人ではあったが、多少の違和感が残っていた。変化した人間が最初に移されるハクは、年齢に応じて八種類から選ばれるが、彼の

場合、ちょうど合う在庫がなかったもので、上の年代のものが使われたのだ。そのため、変化する前より背が高く、顔も大人びた風になっていた。しかし、徐々に、その違和感は薄れつつある。ぶかぶかだった服がぴったりになってくるように。これがおそらく、ハクに応じて変化する、というやつなのだろう。

もしかしたら、カエデは、リヒトになる前のリヒトのほうが良かったのかもしれない。よくなった、とはいえないことがひとつあった。

「背は、高いままがよかったですけど……」

「そうねえ……まあ、でも、あまり気にしないことよ。貴方はまだまだ育ち盛りの年代だから、私なんかきつと、一年後には、貴方に見下ろされているわよ」

「ほんとうですか？　ほんとにそう思います？」

「ええ」

菩薩のような笑みを浮かべたカエデが、心からそういつていることがわかったので、リヒトは舞い上がる。しかし、

「ミサオたちと同じグループよね。もう本鈴が鳴るわ。さ、向こうに並んでらっしゃい」

現実をつきつけられ、急速にがっかりして、彼は、階段状になった教室を見た。ミサオたちカルテットは、すぐそばの、一番前のステップに並んで立ち、喋っている。これまでどおり好意的な態度を、今日からは、とても期待できないだろう、と、彼らの様子を見てなんとなく彼は悟った。

本鈴が鳴って、カエデは「位置についてください」と大声を張り上げている。ミサオの隣に行こうとしたが、案の定、レイとヨウタが彼を見てにやりとした。いじめてやろう、といわんばかりの、嫌味な笑みだ。リヒトは、通路をぐるりと半周して、カエデが背を向ける方向にある階段を上り始めた。そちらには、ミサビとサツキ、フリオラがいる。グループに入れるかどうか尋ねると、ミサビは申し訳なさそうに首を振った。

「ごめん。もう、定員だ」

彼らは五人組だった。隣には、女子ばかり三人のグループがいる。最低三人のグループでなければ、授業を受けられない。ひとつのグループに、定員は五人まで。あぶれているのは、とあたりを見渡しながらか階段を上る。早くしなければ、と焦ったが、どこも、入れそうなグループはなかった。ついに、一番上の段まで来てしまう。教師から一番遠い場所――あまり、まじめでない生徒たちが、それでも四人とか五人とかの組を作っている。焦っていると、端のほうから低い声があがった。

「おい」

「えっ」

振り向いたリヒトは、一瞬、凍りつく。相手は、眉間にしわを寄せながら、手招きする。テッセンだ――あわてて「なに？」と尋ねながら駆け寄ると、

「相手がいないんだろ」

「あ、うん」

すると、上等な筒袖野袴を身に着けたテッセンは、しかたないな、というように呟いた。

「俺も一人だな。ちょうどいいから、来いよ。……もう一人も、ここにいるからよ」

彼は、背後に別の生徒を連れていた。大柄な体に隠れて、戸惑いの表情を浮かべている、小柄な少年。どうも、テッセンが、たった今、無理やりほかのグループから借りたらしく、隣にいる男子たちが、困ったようにテッセンを見ていた。抗議したいのだが、無用のトラブルを招きたくない、という顔だ。

「いいだろ？」

「あ、うん……」

「あのう。よろしく……チャリットといいます」

「俺、リヒト。よろしく」

チャリットは、気の毒そうにリヒトを見た。リヒトは「ごめんね」

と謝ったあと、テッセンを見る。彼はにやりと笑う。

授業が始まった。一番上の段に並んで立つ彼らには、下にいる他の生徒たちの姿がよく見えた。

今日は、一年生との合同授業だ。ほぼ同学年の者同士で組んでいる。無理やり仲間にさせられたチャリットは一年生だったが、テッセンは、気遣う様子がまったくない。リヒトがちらちらと見るたびに、チャリットは申し訳なさそうな顔をした。

「おう、お前、なんだその袴」

カエデの声を聞きたい彼が、必死で耳を済ませているのもかわわず、テッセンが話しかけてくる。リヒトの実習服は、昨晚、ミサビが先輩方にかけて譲ってもらった、お古だった。制服と教科書は支給されるが、実習に必要な道着や教材は自費である。平安学園の生徒は、毎月渡される給付金で生活していて、学校で必要なものができれば、そのつどそのお金でまかなう。だが、けて多くはなく、生徒たちは節約のため、あらゆるものを先輩から順送りに融通しあうのだった。

「時期が悪くてね」

九月編入では、先輩たちのお古も、ろくなものが残っていない。彼が着ているのは、上も下もつぎはぎだらけだ。フランケンシュタインでも、これよりましだろう、というくらいのものであった。

「貧乏だねえ、外部生は。気の毒だな」

いつもならむっとするところだが、今日は腹が立たなかった。嫌味っぽくない、やけにあっさりした口調だったからだ。「しょうがないよ。実際貧乏だし」と言い返すと、テッセンは、ふん、と鼻から息を吐いた。

「——いいですね。たとえば、そう、完璧に粒子を操り、自分の周りの空間時間を客観視する方法を身につければ、これは大変な武器になります。時間は流れるもの、絶対に止まらないものです。しかし、止めることはできませんが、私たちは、その動きをゆっくりにすることができます。視界をクリアに。意識を清明に。人間でも、

動体視力のすぐれた人間は、時速百五十キロで打ち出されるボールを、スローモーションのコマ送りで見ることができるといいます。それと同じ原理です。皆さんなら、時速三百キロか、五百キロか、そんなスピードで飛んできたものでも、触れることができるし、さらには、それを飛んできた方向へ返すこともできるでしょう。どの程度の速さまで可能かは、訓練と素質にもよるでしょう。しかし、それでも、人間の平均はかるく越すはずですよ」

「よかったら、やるよ」

「へえ!?!?!え、何を?」

渡された装置の使い方を読んでいたところだったので、すっとんきょうな声になってしまった。前の階段にこしかけていた女生徒三人がふりむくが、テッセンを見るとあわてて体勢を元に戻す。

「服だよ。足りねえんだろ。夏は着まわすぶんがいる。綿とか麻とか、絹とか、ちよつと出かけるときにゃ正絹、羽織に下駄に、袴ももつといいやつが要る。制服以外に、ろくに持っていないだろうが。いらねえか?」

「――いる。ええつと、くれるのなら……ただで?」

「いいよ。日曜に取りに来いよ」

「ん。日曜ね」

ろくろく考えもせずに返事をしたが、テッセンは「よし」と、腕組みを解いて満足そうに笑った。リヒトの耳は、カエデの声を、自動追尾のついたミサイル迎撃装置のように追っていた。カエデは、半円の反対側に向かって説明している。

なんといっても、後姿が、とても綺麗だ。長い髪にかんざしのかざりが揺れて――腰から下にながれる袴のラインが美しい。

いい生徒だと思われない。彼女の前で、絶対に失敗したくない。

「おいおい、まじめだな」

テッセンにひやかされても、まったく気にならなかった。

いよいよ、実践になった。各グループに配られた装置は銀色の球体で、大きさは野球のボールほど。黄色と黒の縞模様塗装され

ている。

「では、やってみましょう。順番に見てまわりますからね。事故のないように――白線の内側へ下がって」

生徒たちは階段から立ち上がり、四角く区切られた白線の内側に立つ。そこへ、正面以外の三方に、鈍い音と共に、鉄板がせりあがってきた。

運動場のトラックを区切ったように、ゆるやかに湾曲する長方形の個室。なんだか、プールのシャワールームのようだなあ、と、リヒトは見渡す。「やるか」とテッセンが言った。それを聞いたチャリットは「じゃあ、先輩がたから」とわきへ下がった。

端のほうに、同じようにせりあがってきた装置がある。腰ほどの高さの支柱の先に、カメラ大の金属製の箱がついている。箱の中に、リヒトは球体をセットした。側面のボタンを押すと、ぶーん、と音がして、箱から光が照射される。反対側の鉄板はスクリーンとなり、中央に、丸く影が浮かび上がる。もう一度ボタンを押すと、鉄板についていた照明がきりかわり、あたりが、もやに包まれた。

「はじめてください」

男性教師の声。「じゃ、俺が最初にやるから」と、テッセンが、スクリーンの真ん中に立った。影が、彼の腹部に来るよう、リヒトは高さを調節する。ボタンを押すと、カウントダウンがはじまった。5、4、3、2、1、ゼロで、勢いよく、球体が箱を飛び出していく。目に見えないほど速い。それを、どうやったのかリヒトにもよくわからないが、次の瞬間、テッセンは片手に握っていた。やったぜ、というように、軽く拳を肩の高さにあげ、笑う。

「今の、毎時何キロですか？」

「最初だから、二百だろ。おい、次は、四百で出してくれ」

テッセンは、時速四百キロで打ち出される球も、軽々と受け止めた。リヒトは目を凝らしたが、どうやっても、ゼロのあと、一瞬、テッセンの手がゆっくり動いたかと思うと、もう、ボールを手にして笑っているのだ。おそるべき速度のものを受け止めているのに、

なんら、痛みを感じている様子もみえない。

「どうやってるの？」

実は、カエデの説明を聞いても、よくわからなかった。料理を作る方法と野菜を作る方法が違うように、そのつど、粒子の操り方は違うはずだ。テッセンは、「カウントのあと、よく見て、集中して、ばしっ、だ」と、非常に抽象的に説明してくれる。前衛芸術のように複雑怪奇である。テッセンは最後に「ま、やればわかる」と、誰でもわかる結論をだし、リヒトをスクリーンに押しやった。

「粒子がある場所を意識するんです。特に、目から頭への流れを感じて！」

チャリットのほうが、よほど分かりやすい。言われたとおり、背中と左腕、目を意識する。イヤカフスとブレスレット、ネックレスのある場所に、力の流れを感じる。

——コウテイナイギョーなど、主に東洋医学で、人間のあいだでも古くから知られていたことだが、体の中には力が出たり入ったりする穴が四百ほどあって、粒子はそこから体を通過することで、さまざまな副作用をもたらすから、自分が持っている粒子を使いたい器官に近いその穴のほうに寄せていって、なんたら、かんたら……補修で習ったばかりの知識を総動員する。

受け止める手にも、粒子を——これは、衝撃を和らげるため。手から放出した粒子を、ワームホールとこの時空に行き来させ、空間を、ボールの衝撃波が存在しない時間軸に引き戻す。ボールの速度を落とすには、物体を認知する視覚神経の伝達速度を、粒子を操ってボールの速度と同じにすれば、ボールは止まって見える——

「だめだ、無理っ」

鈍い音をたてて、球体は、リヒトが今までいた場所の後ろの鉄板へぶちあたり、からん、と床に落ちた。「よけてどうするんだよう」とテッセンが首を振る。

「時速百九十だぞ。十キロ落としたんだから、取れよ」

「難しいなあ……」

「僕、やってみましょうか」

そういったチャリットが、軽々と二百キロをクリアする。リヒトの集中特訓が始まった。速度を、百五十キロまで落としてもらうも、恐怖が勝って、寸前でよけてしまう。とうとう、テッセンが彼の隣に来て、実地で説明し始めた。箱の射出口の高さに手をあわせる。

「いいか。これができりゃあ、飛んできた鉄砲の弾だってよけられんだ。絶対、今覚えろ。ええっと……」

「ゴーストは見えるんですね？　だったら大丈夫。えっ……粒子が目に見えんぞ？　じゃ、できないはずない」

「お前、弱虫か？」

「そんなことないと思うけど……」

「当たり前だ！　あの連中にあんだだけ大口叩いてんだから、できねえはずがあるか」

ばあんと肩を叩かれて、リヒトはよろめく。その瞬間、カウン트가ゼロになる。よける間もなく、ボールが彼を襲った。チャリットが、スタートボタンを押していたのだ。

「うわああああ」

気の抜けた声が出た。見開いた目に、ボールが、ぐんぐん迫ってくる。視界が、カメラの連射のようにコマ送りになる。

あれ、ボール、遅い。蠅が止まってるみたい。もちろん、実際には止まってないけど――あ、そうか、これが“そう”なんだ。ええっと、次は、どうしたら――そうだ、チャリットは、止めるんじゃない、受けて止めるんだって言ってた。要は、精神論だって。なんだか、念力に似てるな……。とはいえ、俺たちは時間を止めることなんかできない、ただ、ゆっくりにするようにして、そこへ、自分の手の、前のほうの空間に、感覚をあわせて――

きゅうん、と頭の中で何かがなった。スイッチが切り替わったように、感覚が鋭敏になり、人工の皮膚がざわりとする。突き出したのは左手だった。手首で、ブレスレットが揺れている。その部分が熱くなる。

ボールは、空気中をゆっくりと回転しながら進んでいた。彼の左手がボールをつかみ、完全に手のひらで包んでしまう。衝撃はあとから来た。しかし、その瞬間、彼は、手の中の空間を巻き戻す。戻れ、戻れ！

すぐに、ボールは回転を止めた。ひらを上にした彼の手に、こわいほどの静けさでぴたりくっついていいる。

ボールを手に持ったまま、リヒトは深く息を吐いた。痛くない——テッセンとチャリットが、笑って手を叩いた。

「できたじゃねえか。そうか、やっぱ、俺は間違ってたな。やればできるんだ。いざとなりやってやつだ」

「これがそうなんだ……」

「やりましたね」

速度を少し上げて、再び挑戦すると、今度は、なんなくできた。

「あら」と声がしたほうを振り向くと、カエデが、一段下に立って、彼らのほうを見ている。手にしたボードに、ペンで何かを書き込んだ。

「ここは、三人とも大丈夫ね」

とろけそうになっていると、「ふうん」とテッセンが横で首をかしげる。探るような目と、眉間にしわを寄せた表情が気になったが、何かを言おうとした彼をリヒトは無視した。ただただ、ひたすらに嬉しいだけだった。

カエデにほめてもらった！ あの、美しいひとに。

このとき、はつきりと、彼はカエデへの思いを自覚した。まさしく、洋介も言っていた、これが恋に違いなかった。

その日から、テッセンは、なぜか彼に優しくなった。多少の不気味さをおぼえながらも、リヒトは好意を受け取るのにやぶさかではない。仲良くできるのならそれにこしたことはないのだ。しかしこれは、思わぬ波紋をも呼んだ。

まず、内部生たちの態度があらさまにかわった。露骨に嫌味をいうことがなくなり、そのかわりに、遠巻きに、彼とテッセンを見るようになった。少し、尊敬のまなざしも含まれているのは、絶対になつかない猛獣を手なずけたような感じなのだろう。外部生は、より率直な驚きをもってその事実を受け止めた。

「君をいれたら六人になるから、三人、三人で二つのグループを作ろうかって話してたんだぜ。でも、ふと見たら、お前、テッセンといるだろ。びっくりしたのなんのって」

操作実習のあと、サツキが言った。外部生の中では、リヒトはサツキと仲良くなっていた。その日、寮の食堂で、たまたま早く帰ってきた彼と一緒に、早めの夕食を食べていたときのことだ。

「何があったん？ まさか、あれと仲良くなるこたないだろうな、って、みんな思ってたんだぜ」

「俺も思う。なにが原因かよくわかんないや」

「こんなことなら、テッセンの隣にしなきゃよかった、って、内部生連中が言ってるの、知ってるか？ やつらにとっちゃ、テッセンは、一種の、なんていうか、強いし、生まれたときから平安人である、中学にはたったひとりしかいないすごいやつだし、できれば陣営に引き入れたいけど扱いにくいでしょう、みたいな……性格的にもあわないだろうし、みたいなの……ましてや、俺たち外部生のことなんか、あいつははなから馬鹿にしてるからさ、どっちにもつかないですつといくんだろうな、って感じだったんだぜ。だからこ

そ、俺らも、連中も、テッセンだけはこう、隔離部屋、みたいな……」

どうやら、リヒトがテッセンの隣の席を与えられたのは、もともとその席に座っていた内部生が、あまりにもテッセンに、ことあるごとに嫌味を言われたり、小突かれたりするもので、ミサオに頼んで、その席をまんまと転入生にあてがうことにした、というのが本当であるらしかった。でなければ、キョウタローが、問題児の隣にお前を座らせるわけない、とサツキがうなづく。

「あいつらにとっちゃさあ、仲間はテッセンから引き離して、新しく来る外部生は叩き潰されるに違いないから、一石二鳥、みたいな感じだったんじゃないの」

「おお……、悪い考えだなあ」

感心した。ここまでくると、いっそ潔い。

「じゃあ、俺とテッセンが仲良くなっちゃって、だいぶ、ヨウタとかはかりかりきてるんだね？」

「ああ。まさに、策士策におぼれるってやつだ。ま、お前がそのぶんじゃあ、迷惑そのものって感じだよな。なあ、操実のとき、なに喋ったんだ？」

「家に誘われた」

「えっ」

サツキは絶句した。聞くところによると、テッセンというのは、素行によらず、本当に、相当なおぼっちゃんらしかった。大丈夫かなあ、を連発した後、「日曜は買い物があるからつていえば」とサツキは言い、「俺がつきあってやろうか」と誘ってくれたが、約束してしまったものはしょうがない。

日曜日、リヒトは迷ったが、やっぱり、指定された場所へ向かうことにした。彼の家が、どうやら豪邸であると聞いたので、持っている中で一番よさそうな服を選んだ。寮を出て、路面電車の駅がある、学校の方角へ向かう。切符を買って乗り込み、二駅目で下車。テッセンの家があるのは、江戸区文化、平安市の南にあって、文学、

絵画、演劇などの化政文化が花開いた時代の名を冠しているのもうなずける、華やかでこぎれいな町だった。電車を降りると、通りの左右は、白壁にかわらを載せた、立派な囲に破風がのぞく、日本家屋の立ち並ぶ住宅地だ。道路に沿って、ずっと水路が流れているので、思いがけず涼しかった。

指定されたのは、そこから一分ほど歩いた場所にある茶店だった。時代劇にあるような、日傘の下に緋毛氈をしいたベンチ台が並んでいる光景をリヒトは想像していたが、そうではなく、もうすこし時代の新しい、外界という和風オープンテラスカフェ、というところだった。修学旅行のとき、渡月橋の近くで、こんな店を見たな、と彼はふと思い出した。

晴れているので、籐椅子とガラスの天板をのせた丸テーブルが石畳の上に出され、竹林の藪を背景に、すずやかに暖簾が翻る。突き出した店の軒先には金魚玉が下がっている。金魚玉、というのを、彼はゲッターで初めて知ったが、夏の風流として、ここでは楽しまれているのだった。手のひら大のガラス鉢に金魚を泳がせたものを、上から風鈴のように吊るして楽しむ。陽光をあびて丸い光が地面におちるそばで、素人目にも上等な着物姿の婦人や、ぱりっとしたスーツを着こなした紳士が、茶や菓子を口にしながら談笑していた。

最低限の必需品を買い揃えたばかりで、給付金のほとんどが消えている。高級そうな茶店に入るなど言語道断だった。リヒトは、ちやうどやってきた茶売りから、よく冷えた曹達水を一本買い、飲みながら、茶店の前にある神社の石段にこしかけて待つことにした。約束の三分過ぎ、このくらいはリヒトにも一目でわかるようになった、涼しげな白い緋の浴衣を着たテッセンが、小走りに茶店にやってきた。軒先から中をのぞいている背中に「テッセン」と呼びかけると、彼はふりむいて、なんだ、という顔をした。

「中にいるかと思った」

「高いよ」

控えめに値段の書かれたメニューの看板をさすと、テッセンは不思議そうに首をかしげる。所詮内部生だなあ、ということがわかって、リヒトは吹き出した。テッセンはそれを見て、照れたようににやりと笑う。

「まあいいや……行こうぜ」

彼の家は、そこから一分もしない場所にあった。見るからに高級住宅地とわかる区画で、かなり広い場所を占めている。サツキの言うとおり、お金もちらしかった。小石のしきつめられた庭は、うすく溝がひかれ、枝木を品よく伸ばした松や、桜や楓やつつじの木が植わっている。奥には、池があるらしい反射。入り口の門柱には、住所を示す番号のみだったが、御影の飛び石を伝った先の、広い玄関の上部には表札があった。木の板にファミリーネームが彫られている。平安市では、一定の条件をクリアしなければ、名字を名乗ることはできない。ということは、相当な名家だ。

「藤原くんだったんだねえ」

それはそれとして、しみじみと言うと、テッセンは「まあな」とそっけなく呟いた。家は木造二階建て。彼は、鍵のかかかっていない引き戸の玄関扉を開けた。とたんに、

「おかえりなさいまし」

中年の女性が、伸びた廊下の奥からすり足で滑らかに移動してきて、三つ指について二人を出迎えた。どこかで見張っていたのでは、と思うほどの動きだった。面食らうリヒトをよそに、平然と「今帰った」とえらそうにテッセンは言い「あがれよ」と、あごと手でうながす。

「お邪魔します……」

そそくさと靴を脱ぎ、ちりひとつない、タイルの敷き詰められた土間からそつと上がる。女性にむかって「はじめまして」と頭を下げる。テッセンが「いいよそんなの」といいかけたが、その瞬間、彼の前に、水のようにすべりで彼女は、リヒトの全身をまじまじと見た。だいぶ小柄なので、視線を合わせようとすると、見上げら

れる形になる。うわあ、ほんものの「お手伝いさん」だ、という程度のことはわかったが、かける言葉をみつけれないでいると、
「わたくしはタエコと申します。貴方さまは、ぼんのお友達であらしゃいますのどすなあ」

タエコは、目の前で深々と頭をさげつつ首をかしげた。シャイマスノドスナ？――疑問を抱きつつ「そうです」と頭を下げようとすると、いきなり手を握られる。しわだらけの手の温かさを感じながら仰天していると、タエコは感激した様子で、目にいっぱい涙を浮かべていた。

「こんな日が来ようとは、不肖、藤原家に仕えまして二十余年、歓喜の念に耐えませなんだ。どうか、どうか、リヒトぼっちゃま、テッセン様をよろしくお願いいたします。まあまあ、ようやく、ようやく……」

「へえっ？ あ、あの、ええと、俺……」

「末なごうよろしゅうたのみます。ああ、今夜はお赤飯どすなあ」

「タエコ。タエコ、やめてくれ。頼むから」

「何をおっしゃいますのや。ぼんの大事な、大事なお友達であらしやるのどすから、ようくご挨拶しとかなあきまへん」

「いいよ、別に。そんなたいそうなもんじゃねえよ」

テッセンが、苦々しげな表情で手を振った。声は悲鳴に近い。

「そういうんじゃねえんだよ、ほんとに……いいから、向こうで休んでてくれよ。もう、なんもしなくていいからよ。リヒト、ほら、こっちだ」

「まああ、敬称をつけないほどに仲良しであらしやるのどすなあ」

「ああ、そう……そうそう、仲がいいんだよ。友達、友達。じゃあ、部屋に行くから」

肯定したほうが話が早いと思ったらしく、テッセンは急ブレーキと急ハンドルで方向転換をし、リヒトを連れてどんどん廊下を歩いた。広い背中を、リヒトは早足で追いかける。どれほど広いのか想像もつかない屋敷だ。何度も角を曲がり、百メートルは廊下を歩

いただろう。よく磨かれたあめ色の床に柱、外からの光に、淡い陰影をたたえた障子の群れ。そのどれも、丁寧の手入れされ、ちりひとつなく管理されている様子が見て取れた。思わず、ため息がでる。
「うちとぜんぜん違うなあ」

「うち？」

「あ、うん。実家なんだけど」

リヒトの家は農家である。田舎の農家がそうであるように、福島にある彼の家もまた広かった。単純な広さだけなら、藤原家にも匹敵するかもしれない。だが、廊下にそれとなく置かれた壺や、花の生けられた花瓶など、調度ひとつひとつをとってみると、まるで比べ物にならない。瀬田家は田舎の家だったのだなあ、ということをし強く彼は実感した。軒先にはいつも、たまねぎやらジャガイモ、干し柿が吊るされていたし、縁側には、ブルーシートの上に、農具、作業着、軍手などがごたごたと置かれていた。整頓とはまるで無縁の空間で、手の届かない場所は、数年分ではきかないだろう埃にまみれて放置され、時折、笑い話になった。

だからこそ、藤原家の静けさが際立った。こんなに広いのに、テッセンとタエコさん以外に誰もいないのだろうか、とリヒトは思う。こんなに綺麗な、よく手入れされた家だからこそ、それは逆におそろしいような気がする。

そうこうしているうちに、テッセンが足をとめた。

「入れよ」

ふすまが開いて現れたのは、二十畳ほどの和室だった。一面に竹のラグマットがひかれて、大きなベッドが壁際にある。中に入って初めて、リヒトはほっとした。彼の年代の少年らしく雑然としている。部屋が広いからそんなに気にならないが、物だらけだ。窓は開け放たれていた。簾を通して涼風が吹き込み、積まれた雑誌のページをばらめくる。

「悪いな、散らかってて。その辺に座れよ」

「あ、うん」

開いたスペースを見つけて座ると、テッセンは、押入れをあけて、さっそく頭をつっこんだ。

「えーっと……着物はこっちだったかな。なんか、こまごまとした道具も、もう使わねえのがたくさんあるし、いるんだったら持っていけよな」

「いいの？ 本当に」

「いいんだよ。もう、どうせ着られないんだ。今の俺のサイズだった、一ヶ月、違うのを着てもまだ新しいのがあるくらいだぜ。制服があるんだし、持て余すだけだ、実際」

「あ、そう……」

着物のほかに、帯や扇子、丹前、まだ一度も使われていない雪駄や羽織紐などがぞくぞく出てくる。それらを床に広げて、この袴にはこの着物だの、帯の組み合わせはどうだの、テッセンは説明をはじめた。洋服も、何枚も出てきた。リヒトは黙って聞いていたが、タエコがお茶を運んできたタイミングで休憩になったので、ようやく切り出した。

「あのさ。……なんで、こんな急に、よくしてくれるの？」

ずっと気になっていたことだ。ありがたいが、ただより高いものはない、ということわざもある。テッセンの真意が知れたかった。テッセンは、細い目をほんの少し見開き、しばらく考え込んでいたが、やがて、低い声で呟いた。

「そりゃあ、お前が……俺が、ずっと思ってたことを、はっきり言葉にして口にくれたから、かな」

「俺が？……いつ」

「掲示板の前で、なんか、話してたときのことだよ。お前らこそマザコンだ、って、学級委員どもに大見得きったろうがよ」

「ああ……、あれ、」

それでも腑に落ちず、首をかしげていると、テッセンはするどく言った。

「俺はな、お前の言った言葉、ずっと、そうだと思ってたんだ。生んでくれた母親を愛して何が悪いんだ、ってこと。でも、俺がそれを言うんじゃ、やつらにとっちゃ、そらみたことか、っていう……、なんていうか、証拠を与えることになるだろうが。俺が、違う違う、って言ったって、かえって、それでやつらは確信するだけだ。母親にべったりの軟弱な野郎だってさ。だからさ……、俺以外の、別の第三者、ぜんぜん関係ないやつに、それを言ってもらうってことが必要だったんだ。何の偏見もなく、まっとうな考え方のやつに。それに、そう……、そうはいうけど、実際、俺はお前がそういうのを聞くまで、心の大部分ではそう思ってたが、どこかで、ぎりぎりのところで、考えてもいたんだよ。俺はマザコンかもしれない、俺が悪いのかもしれない、って。でも、お前がはっきり、堂々と、両親は大事だ、愛してる、って言うのを聞いたとき、ああ、そうか、そうだったんだ、って思った。やっぱり俺は正しかったって。正直に言うと、俺がなんでこんな目にあわなきゃならないのか、って、母親にも、タエコにも、関係ないのに、すげえつくあたったり、心にもないこと言っちゃったりしたことが、今まであったんだ。ずっといらして、無性に腹がたってさ……、でも、あのときお前が

ああ言ったのを聞いてさ、なんか、すっきりした。だから、これは、俺のせめてもの礼と、わび」

テッセンは、手に持っていた夏の浴衣を、リヒトに持ち帰らせる用に出してきた、大きな行李の中に入れた。

「そういうわけだったんだ。悪かったな、いろいろ……今までのこと」

照れたように、年相応の顔で笑う。まさか、あの、何の根拠もなく言い放った内容が、こんな影響をテッセンに与えたとは、露ほどもしかなかったリヒトである。驚いた、というより、呆然とした。

「なんか……、こっちこそ、ごめん」

対価としてはじゅうぶんすぎるほどの衣服の量だ。テッセンは「いや」と首を振り、最近の唐突な態度の変化が、リヒトを不安にしたと悟ったのか、もごもごと謝罪した。おかしい空気が流れた。

「まあ、そうだな、ちよつと多すぎるかもな。ああ、だったら、寮のやつらにやってもいいし、古着屋に売って、小遣いにでもしろよ。金、ねえんだろ」

「あ、うん。でも、すごいね。俺、なんにも持っていないから、ありがたいよ。俺のほうこそお礼しないと。にしても、すごい衣装もちだね」

「そう。だいたい、こういうのは……」

そこで、テッセンははっとしたように動きを止めた。うーん、と口の中で数秒唸ったと、真剣な顔でリヒトを見る。「ちよつと、頼みがある」と彼は言った。

「あつてほしいひとがいるんだけど」

「えっ、誰？」

「お前にしか頼めん。悪いけど、今から来てくれるか？」

「え、誰？」

「行けばわかる」

着物を放り出して、すたすたと歩き出した彼を、リヒトは追った。庭に面した廊下に出る。縁側は開け放たれ、目前には、緑が滴りそ

うな庭と枯山水が広がっている。縁側から沓石の上に降り立ったテッセンは「ちょっと待ってろ」と玄関のほうへ消え、戻ったときには、リヒトの靴を持っていた。

庭をぐるりと半周すると、裏庭になる。石灯籠やつつじの植え込みの間を縫うように進むと、苔むした地面の先に、古い木造の離れがあった。玄関にむかって、ゆったりとスロープがついている。玄関の上部には、ステンドグラスがはめ込まれ、光が暗く透けていた。日本家屋の敷地内にあるにしては、不釣り合いな洋風の小さな館だった。日当たりが悪く、湿っぽい北側に、なぜこんな離れがあるのかも理解しがたい。

見た目どおり、中のつくりも洋風だった。タイルのはられた、段差の少ない玄関を上がると、スリッパが出される。靴箱の脇には、スタンド型の、大きな、鉄製の鳥籠がある。止まり木だけが横たわっていて、動物の気配はない。廊下を進んですぐ左のドアを、テッセンは開け「ちょっと待ってろ」と言い残して、中に消えた。

リヒトは、ドアの前に立ったまま、首をめぐらせる。玄関ホールの上の、大きなクリスタルシャンデリアに、小さく息を飲む。母屋とはまた違う静けさ――なんとなく、騒いだり、ふざけたりしてはいけない空気を感じた。

どこから、鳥の鳴き声が細く聞こえる。そういえば、母屋の玄関にも、竹でできた鳥籠があった。インコでも飼っているのだろうか。

「来てくれ」

テッセンが、顔を出す。「今なら、大丈夫みたいだ」

「大丈夫って？」

「起きてた」

「あの、誰？」

「母親」

今まで聴いたことのない、繊細な調子で、テッセンは答えた。

リヒトは黙って彼に続いた。

二間つづきの洋風の部屋の奥の間に、彼の母親はいた。細い足をもつ、鉄製のベッドに起き上がって、夏だというのに寒いのか、寝巻きの上に、ウールのガウンをはおっている。痩せた肩と浮き出た鎖骨が痛々しい。だが、その顔を見て、リヒトは、顔にこそ出さないが驚いた。

「ようこそ」

微笑もうとしている筋肉の動きは痙攣をともない、びくびくと血管が震えた。顔の半分が医療用のマスクで覆われ、あらわになった片目も、人の瞳ではありえないくらい色素が薄く、澄み切っている。綺麗、と表現するには不気味すぎるほど澄んでいるのだ。見えていないのかもしれない、とリヒトは思った。瞳が、リヒトのほうを向いていない。唇周辺の皮ふは、切り刻んだ紙のようにずたずたに引きつれ、あるいはたるんでいた。テッセンに向かって伸ばされた手は老人のようにしなびて、皮ふは茶色と青、白のまだら模様をなしている。頭髮だけが黒々と長く垂れていたが、全体の調和として、どこことなく人工的な匂いがした。母親、というからには女性にちがないが、胸にふくらみはなく、重ねた病衣は、体との間に不満げに空間を擁している。

「昨日、検診に行ったばっかりだろう。無理はだめだ、母さん」

「貴方の、……お友達、でしょ」

かすれた声が、わずかに空気を振るわせる。

「ご挨拶、しておかないと。そう、さつき、タエさんも……、僕、ごめんなさいね、こんな格好で。テッセンの、母、です。ミドリといます」

苦しげに微笑むミドリに、リヒトは首をふる。しかし、見えない

のだと思って、「いいえ」と急いで言った。

「はじめまして。俺は、リヒトといいます。あの、テッセン君に、今日は、ご招待していただいて、学校の、隣の席にいるんです」

「こいつは、つい最近平安に来たばかりなんです。制服以外に、着るものとか何にも持っていないっていうから——俺のお下がりだけど、どうかな、と思います。いいですよね？」

「そう……ええ、そうね。どうぞ、あんなのでよければ、着てやってほしいわ……貴方には、もう、着られないわよ……、こんなに、大きくなっちゃったものね」

いとおしげに息子の手をなでるミドリを、母という仕事にだけしか生きていないようなひとだとリヒトは思った。病気で、そんなに外に出ることもできない、だからこそある膨大な時間を、テッセンにだけ注いでいる。カエデとはまた違う寂しさと悲しさを感じて、リヒトは押し黙る。テッセンも、小さな子どものように自分を扱う母に、されるがままになっている。

ふと、リヒトは、ベッドの奥にあるテーブルを見た。ふっくらとたわんだ生地と、裁縫道具がのっている。縫いかけの、いかにも、秋用のシャツにすればさぞいいだろうという布が広げられている。

あれらのたくさんの着物や服は、全部、きつと、このお母さんがテッセンに作ったものなのだろう。

「あの……いただいたものの、大事にします。どうも、ありがとうございます」

頭を下げると、ミドリはふたたび、顔中を痙攣させながら微笑んだ。

「こちらこそ……、来てくれて、ありがとうねえ。テッセンと、どうか、これからも、仲良くしてやって、ね」

「母さん。ほら、横になって。今日は、あんまり喋らないほうがいいよ」

「いい子、なのよ……、ちょっと、乱暴だけど、ね……お願い、ね」
「いいから」

学校とはまるで別人のように、テッセンは優しく、かいがいしくミドロの世話をした。水差しから水を唇にふくませ、肩を抱き込むようにしてゆっくりとベッドにねかせ、毛布をかけてやる。

「また来ます。アーシャはどこに行きましたか？」

「さっきまで、ここに、いたけど……庭に、いると、思う……」

「おやすみなさい」

「おやす……」

後半は、ほとんどろれつがまわっていない。相当な眠気もあるらしく、朦朧としていた。二人の前で、すう、とミドロは眠りにおちていく。手前の部屋に移動すると、テッセンは説明した。

「俺を生んで、ああなったんだ。――俺のいる子宮から、内臓がどんどん崩れていって、体を、二年かけて平安人の体に移植して、それでも、腹から下は俺を生むために、人間の部分を残しておかなきゃならなかった。生んでからが、もう、それはそれは大変だったらしい。ヒトの体じゃなくなってたってよ。それで、何度も整形したけど、完璧には、もとの姿を再現できねえで――顔も体もぐしゃぐしゃ。いろんなショックでもう片目は見えないし、もうじきもう片方も見えなくなるかもしれないし、自力じゃ立つのも、歩くのもできない。あの、化け物みたいな顔も――本当のところはどうか知らないけど、あの人は、姉貴の話じゃ、昔地元のコンテストで優勝するくらいの美人だったんだってよ。ほっそりして、きりつとした美人で、うちのきょうだいはみんな、俺が生まれる前は、あの人が自慢で仕方なかったらしい」

淡々とテッセンは話すが、そうやって話すことができるようになるまでの時間を思うと、リヒトはめまいがする。母親と暮らせるなんていいなあ、と漠然と憧れていたと、いまさら言えなかった。彼女もテッセンも、どれだけ苦しんだことだろう。言葉のはしばかり、ひしひしと感じる。

「綺麗なひとだね」

リヒトは、苦しい胸を隠して、呟いた。

「そう思うか？」

テッセンが、苦笑する。すぐにリヒトはうなづく。

「思う」

見た目の問題ではないことは、すぐに気付いた。彼女の周りには、穏やかで、澄んだ空気だけがある。芯から善良な人が発するオーラだと確信できた。「思う」と、もういちど力強くうなづく、テッセンは、いつもの顔でにやりと笑った。

「お前が言うならきつと、そうだったんだな」

離れが出る。なぜ、こんなところに、大正時代風の洋式離れがあるのか、という疑問は、彼が話してくれた。

「ああ……、俺んちの本宅は、昭和区にあるんだよ。あっちは全部洋式で、大通りのそばだから、何するにも便利なところにあるんだけど、親父の仕事がらみで人の出入りも多くてあの人が疲れるから、こっちに移ったんだ。別に、母屋でもいいんだけど……、病人には、洋風の住まいのほうが、動くのに便利だろ。タエコも、看病しやすいし。だから、本宅から、あの離れだけこっちに移築したわけ。日当たりが悪いのは、あの人には、日の光があまりよくないから」

「本宅」

これが、本宅ではないというなら、元の家はどれだけ豪華なことだろう。

「むこうのやつらは、ここのこと、火宅って呼んでるな。火のお宅で、火宅」

「かたく？」

「火曜日だけ住むような、別荘って意味だよな。きつと」

「別荘ねえ……」

違うんじゃないかと思ったが、口には出さなかった。テッセンが、ぼつりと言ったからだ。

「なんにしろ、よかったよ。俺がいっぺんも友達連れてこないって、あの人が、ずっと心配してたからさ……」

部屋に戻ると、テッセンは、行李の中に、次々と服を放り込み、

ついでに、好きなものを持っていけ、と、その辺に積まれていた雑誌や文庫本を広げた。大量の本は、最近、ひとからもらったのだが、「俺は本は読まねえ。マンガなら読むけど。くれるっていうから、仕方なく、だな」

というので、書籍の類も譲り受けることになった。大きい从小さいのまであるそれらは、なんだか懐かしい、やっぱりちゃんとした紙の本だ。ずっしりと重いそれらをすべて持ち帰るのは骨が折れそうだが、ただで暇つぶしの娯楽が手に入ったのが嬉しかった。読み終えたら、図書室に置いておけば、寮のみんなも喜ぶだろう。

帰り道、夕暮れの道をテッセンは駅まで送ってくれた。「明日、学校で」と手を振って別れる。寮では、サツキやシルル、フリオらが帰りを待っていて、彼は、夕食の席で質問攻めにあった。

5 マテキ

研究所からの封書が届いたのは、夏休み気分の残滓が完全に抜け、補習授業が週一日になったところだった。夏から秋にむけての移行期間で、びっくりするほど寒くなる日がときどきあった。そんなとき、リヒトは事務室から呼び出された。彼が向かったところ、受付の事務員は「ここではなく高等部のほうからですね」と言って――特殊と判の押された呼び出し状をさし戻した。

「俺、高校生じゃないですけど」

「ああ……、研究所からの封書は、高等部でしか扱ってないんですよ」

行け、ということだ。仕方なく、高等部の校舎に向かう。

平安学園には、初等部、中等部、高等部の校舎があって、移動するには、各校舎の間にある庭園を通っていかなければならない。部活をしていないテッセンも、彼についてきていた。今ではすっかりコンビである。

校舎の中を、涼しい風が吹き抜けていく。シャツの上に学ランを着た生徒が、すでに数人いる。廊下は、部活に向かう生徒で騒がしい。中庭に出ると、学ランのボタンを全部はずして着くずしたテッセンがため息をついた。

「めんどくせえよなあ……せめて、持ってきてくれりゃいいのになあ。特殊ってことは、研究所からのなんかだな、きっと。相変わらずえらいそうに……」

「俺もそう思うけどね。――そういえば、ねえ、研究所ってなに？」

「魔的研究所だな。粒子とかを研究する専門の機関だよ。粒子を最初に発見したスイスの研究所から、ソジ粒子だけを専門に、独立して研究するようになった……、日本支社？ 分署っていうの？ そ

ういうとこ」

「まてき？」

「粒子のことだよ。ソジと、それに付随する謎の物質群の総称。魔的粒子——魔法みたいだろ。時間をさかのぼったり……ゴーストを見る能力を人に与えたり。素粒子研究所にしてもよかったんだろうけど、普通のもんじゃないやねえし、苦し紛れにそうしたんだな。魔法研究所って名前にしないだけ、俺はよかったと思うね。一氣にしらけちまうもんな」

「魔法ねえ……」

「あれだろ。ほら、お前、変化した後入院してるあいだに、いろいろ検査受けただろ。たぶん、その結果だぜ、きっと。あと、保険番号と、カードでも来たんじゃないのか」

さすがは生まれながらの平安人、テッセンは、リヒトの知らないさまざまなことをよく知っていた。彼も、今まで人に頼られたことがないので、やっとできた友人に、いろいろと教えられるのが嬉しいようだ。

高等部校舎は、中等部よりも小さな、灰色の建物だ。石造りで、昔の市庁舎のような雰囲気がある。現世では大正時代、関東大震災のあとに増えた、いわゆる西洋のゴシック様式をまねて、モルタルやコンクリートで頑丈に建てられた建物だ。

正面玄関は間口が広く、天井が高かった。入り口は階段状になっている。ピロティを支える、大きな柱の周囲で、数人の、黒い詰襟制服姿の男子や女子が数人、立ち話をしていた。自分たちとは違う制服、違う匂い。大人の匂いだ——スラックスとプリーツスカートの違いはあるものの、男子も女子も、上着には同じ、黒に銀モールの飾りのついた学ラン姿。同じもの同士の群れを思わせた。同じ規格、同じ性質を持つものたちの集合体。誰もあまり性を感じさせない。男子のようにりりしい長身の女生徒がいると思えば、妖精のようになおやかな雰囲気を持つ男子もいる。

「あのおう、事務室は……」

一人の、長髪を首もとで結んだ男子生徒に話しかける。指さしたさきには、案内板があった。あわてて頭をさげ、そちらに向かう。

受付にいた男性は、リヒトが差し出した呼出状を受け取ると、すぐに、細長い茶封筒をよこした。銀色のワックスで封蝋がしてあって、円の中で、鳥の羽と笛が交差した紋章が浮かび上がっている。事務員に促されて開けると、中にはカードが入っていた。縦二センチ、横五センチ、厚みは五ミリほど。材質はセラミックか、アルミか、チタンだろう。軽い。端には、淡い赤いラインが一本入り、穴が開いていて、紐やストラップを通すようになっていて。身分証明書にもなりますから、なくさないように、と男性が説明する。

「交付は初めてですね——お名前と、顔写真に間違いはないですね？ では、受領書にサインと判を」

現世でいう、運転免許証とか、住民カードのような役割を持っているらしかった。手続きを終えた後、浮かび上がる顔写真と電子文字に現世のにおいを感じてスイッチを押しまくっていると、テッセンがあきれた顔をした。

「子供かよ」

「こういう、電気仕掛けの仕組みのものをもらえるのって、はじめてだから」

「ふうん」

「さ、行こうか。おなかすいたよ」

「お前の味覚は発達してるよなあ」

このあとは、どこかに買い食いをしていこうという話だったが、さっさと退散しようとするリヒトと違い、テッセンは、あまり乗り気ではないようだ。というのも、ゲッターでは、食はただの娯楽で、そもそも、食事から栄養を摂取することが彼らはほとんどないのだ。空腹シグナルは、脳に組み入れられているただの時報で、食べずとも一ヶ月は死にはしない。街角に茶店があったり、定食屋が存在したりするのは、食事の習慣を取り除くのが、精神衛生上よくないからだった。

しかし、人工的に付与された能力であっても、リヒトの味覚は、今ではもう、変化する前とほぼ変わらい。そうとわかれば、よりおいしいものを食べたくなる。そして、彼の同好の志は、外部生において、けっこう多い。放課後に、少ない小遣いをやりくりして駄菓子を買って求めたり、評判の店に出向いてゆくのは、ちょっとした冒険だ。特に彼は、格式ばらない露天の屋台で売られている類のものが大好きだったので、成長を妨げるだの、病気にかかるだのを心配せず、味に没頭できるこの体を、悪くないと思っていた。なにしろ、江戸時代から急速に発展した寿司や天麩羅の屋台をはじめ、ゲッターには、現代日本ではほぼ絶滅した屋台文化が健在だったのだ。恐るべし、人間の食欲、ということだろう。

「あ、なんだ、二階に渡り廊下があるよ」

一刻も早く放課後を楽しみたいという思いが、彼に注意力を付与したらしかった。案内板に、中等部校舎とつながる廊下があるのに気付いて声をあげると、テッセンは「まあな」とうなずいた。どうやら、一度中庭を通らせてやろうという気遣いだったのだ。回廊のようになった中庭は、緑を基調としたブリティッシュ・ガーデンと日本庭園の混交で、たしかに見ごたえがあったが、今は、早くこの校舎から抜け出したかった。なにしろ、制服が違うので、結構目立つ。

二階へあがり、渡り廊下のほうへ向かう。彼はそこで、ふと、奇妙な感じにとらわれた。

石造りの校舎は、窓も洋風で、天使の像が窓辺をかざっていた。西洋文化史にあるような、子どもの姿を模した天使が、百合の花をささげながら窓枠を飛んでいる。中部より一メートルは広い、ゆったりと幅のある廊下は、モザイクのようになった大理石の床にモスグリーンのカーペットがしかれ、茜色の斜陽がさしこんでいる。実習棟でもあるからか、ひと気がまるでなかった。視界を奇妙にセピアにみせる夕日のおかげで、廃墟のよう。学校、というとてもにぎやかな場所にそぐわない印象をおぼえた。

この感じ。なにか、どこかで見たような――今にも――なにか、サーベルを携えた軍人や、幼い少女がかけてきそうな――

「おい、どうした、ぼうつとして」

「え、ああ――いや、ちよつと」

渡り廊下の手前は、ドーム型の天井を持った、ホールになっていた。学校の設立に関わった某の銅像や肖像画が飾られ、テーブルや椅子が置かれている。休憩所のようなのだ。

「ねえ。こういう建物ってさ――俺、前にも来た事あるっけ」

「はあ？　どういうこと」

「うまく言えないんだけどさ……なんか、似たような光景が、前あったような気がするんだよね」

「病院か？」

「ううん。違う。ええつと、俺、前、ここをずっと……」

歩いていったような気がする。いつだっただろう。

首をひねりながら渡り廊下を渡った。

＊

中等部の校舎に戻り、鞆を取りにいく途中、ふと、テッセンが、掲示板の手前で足をとめた。

「そういえば、手紙、届いたか？」

「ううん――まだ」

そろそろ、一ヶ月になろうとしているが、リヒトあての手紙はまだ来ない。本当をいえば、リヒトは、テッセンが彼の手紙を横取りして隠しているのではないかと思っていた。しかし、正直にそう打ち明けた彼の疑問を、テッセンは一笑にふした。今までも、彼が外部生の手紙を横取りしたことは一度もない、という。本当だろう――ほかの内部生たちが、テッセンの悪評をいいことに、罪をなすりつけたに違いなかった。

しかし、ならばいったい、犯人は誰なのだろう。

「手紙が張り出されるのは朝だろ。郵便屋もわかってるから、授業がはじまる前に届けに来るんだよ。ってことは、犯人は、お前より早く登校してるやつだろうな」

「俺よりはやくっていうと……」

リヒトは補修を受けていた。その彼より早い生徒は、ひとりしかない。

「俺は、違うと思うけど」

「なんでだよ」

「だって、そんなそぶりはないし……」

一応はルームメイトである。もしミサオが犯人なら、部屋で一緒のとき、あんなに普通の態度をとれるものだろうか。

だが、そういうと、テッセンは大げさにため息をつき、首を横にふった。

「お人よしにもほどがあるぞ。あいつはなあ、いやなやつだぜ。いやみったらしい、小心者の、成績だけ気にするような点数稼ぎ野郎なんだからな。お前、あれから、実技はそこそこいけるじゃねえか。語学だって、英語はけっこうできるし。目をつけられてるんじゃないか」

「成績を気にするようなひとが、万が一ばれたらひどいことになるようなこと、するかなあ……。だって、一緒に住んでるんだよ」

「ばれねえようにやってるから成績がいいんだよ！」

「でも、荷物の出し入れだって、彼、俺のこと気にするようなそぶりでしてないし……俺、それにさ、悪いと思ったけど、見ちゃったんだよ。ミサオがいえないうちに、ざっと、彼の机とか——いや、悪いとは思ったけど……、だって、変だもん。俺は三日に一度は手紙いまだに書いてるんだよ。もしかしたら、本当に、俺が変化したことで、母さんも父さんも、じいちゃんもばあちゃんも、何かひどい目にあってないかって……弟だって、学校でもし何か、それでいじめられたりとかしてないかなって……テッセンは謝ってくれたけどさ、ちよっと、気になるよね。もしかして、うちのひとが、本当に

俺を嫌って、手紙の返事をくれないなんてこと、あるかな……横取りなんてなくてさ、本当に、返事そのものが、本来、ないとか……」

「そんなわけねえだろ。違うよ。気にするなよ——」

テッセンは、リヒトがこの話題について話すたびに否定する。それは、意地悪の穴埋めであると同時に、本心からの同情でもあるようだった。急いで言う。

「そういうことなら、ミサオじゃないのかもしれないけどよ。絶対犯人を見つけようぜ。俺がとっちめてやらあ。もしかしたらさ、内部生のやつら、結託して——ミサオが朝一番で来て手紙をとるだろ。で、学校にいるあいだに、他の内部生のやつに渡して、そいつの自宅に隠させたりしてるのかもしれないしよ」

「うん」

たしかに、その可能性はあった。あれから、ヨウジらは手紙の返事が来ないことも揶揄するので、ミサオが関与してないとしても、こいつらならもしかしたら、という気もした。

「あれっ、お二人さん」

話しこんでいると、そばの資料室から出てきた人物が声をあげた。ミサビである。手に、分厚い辞典のような本を抱えている。

「なにしてるの？」

相変わらず、華やかな空気をまとった副委員長は、長袖の制服のシャツを腕まくりして、上気した頬で笑った。テッセンが、一瞬で冷めた顔になって「別に」と答える。テッセンは、ミサビが苦手だ。「あいつはやたらめったら明るくて底が見えない」というのが彼の言い訳だった。たしかに、ミサビはいつも明るく、優しく、公平だ。それが、テッセンには、不気味に見えるらしい。

リヒトは、親切で、裏表のないミサビが好きだった。彼が、人の陰口を言ったりしているのを聞いたことがない。テッセンにいわせれば、それこそがおかしい、ということになるのだろうが、とにかく、ミサビには、彼の年代が身に着けていなければならぬ模範的なものが、すべて備わっていた。

「ええと……今日は水道橋を見に行こうかなと思って、話してたとこ。あの辺、アイスとか売ってるし。ミサビは？」

「研究部で使う資料取りに」

表紙に、万葉集の時代、というタイトルを見つけて、リヒトはうなずいた。ミサビは、万葉研究部というのに入っている——そろそろリヒトも、武道芸術の時間に何をするか、考えなくてはならない。いくつか、めぼしをつけてある、と告げると、ミサビは微笑んだ。

「そうするといいよ。テッセン、君も。いい加減に何かやったらどうだい。剣道でいいところまでいったんだし、もうじき実習だし——待ってると思うよ、キョウタロー先生は」

「あれはだいたいわかったから、もういいんだ」

うんざりとテッセンは首をふる。

「ほっといてくれ」

「君が言うのなら、そうしよう。ま、今のうちにリヒトと遊んでおきなよ。でも、君もいい加減年貢の納め時にしたらいいと思ったんだよ」

すげなく扱われるのさえ、ミサビは楽しそうだった。さわやかに彼が去ったあと、ぽつりとテッセンが呟く。

「あいつかもな、案外」

「え？」

「犯人だよ」

「まさか」

笑ったが、テッセンはまじめな顔だ。ぽつりと、「いや——」腕組みして首をふり、リヒトが仰天するようなことを言った。

「初等部から見てるがな。俺は、あいつが手紙を受け取るところを、一度も見えてない。今でも、手紙やら荷物が届くと、仲のいい連中なんか、菓子をわけたり、外ではあれがはやってる、こんなゲームがでてるなんて騒いでるだろ。まして、ちびの年代なんざ、大騒ぎだ。でも、俺は、あいつが手紙や荷物を受け取ってるなんて話もきかないし、見たことない。こっちに來てから、一度も、あいつは、外に

いる親や知り合いから何かをうけとったりしてねえんだ。外部生なのによ。そんなやつを、俺は、そうだな——いちども聞いたことないな。だから、案外さ」

そういう奴のほうが、頻繁に手紙を受け取る奴に、嫉妬したりすることがあるかもしれないな、とテッセンは言った。なまじ、同じ外部生だし、というのもつけくわえる。

リヒトは目をぱちくりとさせた。

「でも、すごく親切で——俺にいろいろ教えてくれたのも、結局、ミサビだったし……」

「だからだよ。怪しい」

テッセンは、厳しい目つきで、ミサビが去っていった、芸術部棟のほうを見ている。

そんなことがあるだろうか、とリヒトは思った。教科書の古い漢字にとまどうリヒトに、じぶんも部活で疲れているのに、仲間たちと親切に教えてくれたり、あれを買うならどこそこの店が安いとか教えてくれたミサビが？

まして戸惑ったのは、彼に手紙や荷物を送る親や兄弟や知り合いがひとりもない、ということだった。本当に一度も？ と問うと、一度も、と、テッセンは深くうなづく。

考え込んでいると、ふと、視線を感じる。振り返ると、五メートルほどむこうの廊下、階段の前に、高等部の制服に身を包んだ男女が、集団で立っていた。特にそのなかの一人が、リヒトだけを食いつくように見つめている。背の高い、黒髪の、長髪の少年だった。どこかでみたような顔だと思った。

「ね、テッセン。あれは？」

尋ねると、テッセンは「ああ、生徒会の人たちだ」とうなずいた。「各学年から二人ずつ、代表として選ばれるんだ。今日は、集まりがあるのかね。実習の打ち合わせか、うちの、大ホールでも使うかな……おい、あんまり見るな」

いきなり首をぐるりと回されて、リヒトはうめいた。

「ミューもいる。こええぞお。知ってるか？」

「あ、うん。一度」

集団の中には、全体に短い銀髪、前髪を深くたらしした小柄な少女の姿があった。マチコがいった、鬼の先輩。例の少年の隣に、隠れるように立っている。中等部も一緒に会議があるらしい。

「規則にうるさいって評判だ。目をつけられたら大変だぞ、こら。聞いているか、おい」

だが、今のリヒトには、どうでもいいことだ。すでに目を逸らしてしまった少年の顔に目を凝らしたとき、リヒトの心はざわめいた。遠目に見ても、顔立ちが整っていることがわかる。武士のような、きりつとした佇まい。白い顔に赤い唇。ゆったりと舞うような、ただ動いているのさえ人目をひく動作。

「ねえ。ミューじゃなくて、その手前の、背の高いひとは？ 黒髪の長い、色白のさ、きりつとした感じの」

「ミューの手前……？ ああ、シンかな。学年章は見えたか？」

「高等部のひとみたいだけど」

「ああ——」

テッセンは、額に手のひらをあてるポーズで、階段をのぼっていく集団の後姿を見る。

「じゃあ、うん。シンだな。すごい人だぜ、あの人は」

「えっ、そうなの？」

「なんとかっていう、難しい試験があるんだけどさ、高等部の終わりに。それをもうパスしてて、今すでに、平安市の上のほうとか、ほら、マテ研の奴らと一緒に仕事してるってよ」

テッセンは、リヒトの持っている封筒をあごでさした。

「でも、ぜんぜんえらそうじゃねえんだ。俺、お前が来るまで、つきあってた連中がいるだろ」

リヒトの前に比較的仲の良かったという男子数名の名を、テッセンは挙げる。

「ずっと前に、そいつらと学校に残ってたのを、生徒会で見回りし

てたシンに見つかってさ。学校の退出時間を過ぎてただけで、でも、見逃してくれたんだよ。一緒にいたのがミューってやつで、そいつはもう、罰点だ規則違反だってけんけんうるさいのをさ、うまく言いくるめて、内緒にするって言わせちゃったんだ。そりゃあ、痛快だったよ。かつこいいしさ……。次の生徒会長はあのひとになれるぜ。前に一度……。学校の何かで演説してるのを聴いたけど、そりゃあ立派なもんだったし。なんていうか、話がうまいんだよ。寝ちまおうと思ったけど、つい最後まで聞いたよな、さすがの俺も」

テッセンが、他人について手放しでほめるのはじめてきいた。そんなにすごい人なのか、とリヒトは首をひねる。シン。シン――彼は、たしかに自分をみていた。でも、そんなにすごいひとが、なぜ自分を見ていたのだろうか？

しかし、自分も、いつかどこかで彼に会ったような気がする。でも、いつ、どこで？

心の中がざわつく。

「よし。行こうぜ、水道橋」

考え込むリヒトの背を、ばあん、とテッセンの大きな手のひらがたたいた。はっと現実に取り戻される。

夏の最後の蝉の声が、校舎の中を、ドップラー効果のように響きまわっていた。

初秋の空気は乾いて、空は高く澄む。休日の朝、着替えを終えたリヒトは窓から外を見た。緑の山が、滑らかな稜線を描いてつづくところどころ朱が混じって、季節の移り変わりをはっきりと感じさせた。薄くもやをまとっている山際——かなり気温が低い証拠だ。

起き上がって、血液補充のためのジュースを飲む。

転校して、一ヶ月がすでに経った。

十月。ここでは、神無月。

山のふもととは明治区で、明治時代の主な産業である農業を実施している。晴れた日に、自転車借りて平安市を一周する、という寄宿舎内のレクリエーションに参加したばかりだったので、あぜに囲まれた水田をありありと思い出すことができた。実家も、もうじきに稲刈りの時期だ——夏野菜も終わり、柿や栗、林檎に梨、果物のおいしい季節になる。

田園は、山にかこまれた故郷の光景を彼に喚起した。

外に出る気にならず、食堂で朝食をとったあと、部屋で読書をしていると、彼の背後で、宿題をやっていたミサオが「意外だね」とめずらしく挨拶以外のコミュニケーションをかけてきた。

「そんなの読んだ」

「ん……、もらったんだ」

誰に、とは言わなかったが、ミサオは「ふうん」と呟いた。リヒトが読んでいたのは、フランス人作家の小説だ。テッセンからもらった文庫本の残りもの。読み終えたものから順番に、図書室に持っていていく。寄宿舎で生活をはじめからというものの、彼は、読書しか、空き時間にひとりすることを見つけられないでいた。なにしろ、テレビも、電話もないのだ。他の生徒は、相棒と遊んだり

しているようだが、彼は何も飼っていない。

勉強をやめたミサオは、立ち上がる。机の横のサイドボードに、青海波の風呂敷包みと、大きなボストンバッグを置いていて、昨晚から、そこに荷物をつめている。

「ヨブ記か。一粒の麦もし死なずば、ただ一粒の麦にてあらん。死なば落ちて実を結ぶべし、だったか……」

「すごい。よく知ってるね」

ミサオは肩をすくめ、よそゆきの服に着替え始める。いつもの休日なら、この時間は、まだ勉強しているはずだ。どうしたの、何かあるの、と問うと「帰省」と答えた。

「しばらく留守にする。汚すなよ」

「ああ、それで……」

荷物をちらりと見る。

「汚さないけど。いや、汚すかもしれないけど」

ミサオがいない時間に、たまに遊びに来るサツキやシルルら“ちらかし魔”の顔が浮かぶ。ミサオはやれやれと首をふり、彼の隣に開いたスペースをさす。

「いない間に抜き打ち検査があると思う。ミサビが来たら、ここからはみださなかったら荷物を置いてもいい、と言っておいてくれ」
ここから、という部分で、机に空中で線を引きながら言った。「わかった」とうなずくと、ミサオは肩をすくめ、荷物を持って、さっさと出て行った。

いいなあ、とリヒトは思った。

まとまった休みを、家族と過ごすのだ——そんなふうに戻る家があるなんて、中身はともあれ、うらやましい。

昨日から始まった秋の休みは五日間ある。休みが明ければ、合同授業週間が始まる。昨日から、寮生の数は、三分の二ほどになって、寮全体がなんだかしんとしていてさびしかった。と同時に、残ったものの話題は、合同授業でもちきりである。ちょっとしたお祭りのような雰囲気も感じ取れるその授業について、リヒトは、未知

の不安を感じて本を閉じた。

合同授業週間とは、一週間にわたって行われる、中・高等部合同の、操作実践の実習授業だった。武器を携帯し、近時限へと行って、指定された目標を倒して帰還する。武器で戦う授業があることに、彼はかなり驚いた。これが毎年、当たり前に行われている、ということ――彼が思っているほど、ゲッターは平和ではなかったということだ。

人類の居住区として、ゲッターは微妙な立場だった。バチカン市国の扱いを受けている、というのが一番近いが、バチカン市国は、人間による人間のための統治がされている。平安市は、人間による、平安人のための居住区で、両者の間には深い溝がある。けして相容れない別の種族という溝だ。

平安市民は、人間と天使の板ばさみになっていた。両者のあいだにもし争いが起こったら、両方から、じぶんたちに味方するように要請されるだろう。要請だけですめばいいが、最悪の場合、両方から攻撃を受ける可能性もあった。人間からの攻撃は物理的なものであるだろう。天使からは、時間的なものかもしれない。学生であるうとも、絶対数の少ない可戦人口を補うための有事動員に備えなければならぬ、というのが、平安学園理事長の方針だった。もしも過去に飛ばされたら、という理由は口実で、実のところ、武道芸術が正式な授業となっているのは、そのためだった。

リヒトは、部屋の入り口を見る。そこには、布にくるまれた細長いものが立てかけられている。先輩から、つい一昨日、譲り受けたもの――和弓だ。

リヒトは、弓道部に入った。人数が少ないので、先生によく見てもらえるだろう、という理由だ。加えて、弓という、現代ではまるで役に立たない武器をあえてやってみたい、という、多少天邪鬼な考えもある。合同授業でも、彼は携帯武器に弓を選んだが、まだ、的を射る段階でもないので、戦力にはならない。かわりに、カエデは、補給や雑役をこなすことで特別に合格点をあげる、と言ってくる

れた。敵を倒す、というのに気が進まないリヒトは喜んだ。実のところ、五日間連続でカエデの授業が受けられることが、ちよつと楽しみでもある。

ミサオもいなくなったし、どうしようかな、とベッドに寝転んだリヒトは、ふと思いついた。

「中島あ」

空中に呼びかける。何度かつづけて呼ぶと、ややたって、空中から、ひよこりと、かつての級友が現れた。くたびれたシャツにネクタイ。スニーカー。

「呼んだ？」

「呼んだよ。久しぶり。なんか、ずっと答えてくれなかったけど、いま、忙しい？ 用事ある？」

「靈にむかつてなんてことを。ふざけんなよ、お前」

中島は拳をふりあげるまねをしたが、顔は笑っている。懐かしい声、懐かしい姿。ほっとして、リヒトはベッドに起き上がり「あさ」と話しかけた。

「家、どう？ 福島のお前、まだ、家のところうろうろしてるの？」

「ほかにどこに行くってんだよ」

中島は頬をふくらませた。

「俺んちとか、お前んちとか学校とかしか、行くあてなんかねえよ」

「お前のことだから、阿部さんと転生前に海外新婚旅行とかしてんじゃないかって」

「無理無理」

中島は笑って手を振った。

「よくわからんけど、なんていうの……行ったことのないところに行くとか、知り合いのいないところに行くのは、相当辛いみたい。なんていうか、どうしても行く気にならんし——ひっぱられるっていうの？」

「ふうん。あの、じゃあさ、最近、俺んちにも行ってるよね」

「実家？ お前んち？ なんだ、早く言えよ」

中島はにやりと笑った。

「安心しろ。みんな元気そうだぜ。じじいからからメダカまで、お前のうちの連中はみんな元気だ」

「じゃなくて。あのさ……、ううんと……、ねえ、家に、俺の手紙、届いてるよね？」

「んん？ 届いてるぜ」

ちよつと不思議そうに中島は答える。

「そうそう……、約束どおり、うちにも手紙くれただろ。ありがとな。お袋が泣いて喜んでた」

「そう……俺からの手紙はちゃんと届くんだ」

「ああ。——ん？」

むこうから、こちらに送られるものだけが――

郵便事故とも考えられる、と思ったが、他の生徒にはちゃんと届いている。

「どうしたんだ？ 何か悩んでる？」

「実はさ」

リヒトは、空中をうろうろする中島を目で追いながら、

「ずっと聞きたかったんだけど、中島に。あのさ、俺の手紙……、俺のほうに、うちからの手紙が来ないんだよ」

これまでの経緯を説明すると、中島は「えっ」と驚いた顔のまま、しばらく聞いていた。やがて、リヒトを空中から見下ろしながら、うーん、と首をひねる。不思議そうに言った。

「何でだろうな。でも、送ってないなんてことは、絶対ねえな。だって俺、おばさんやおじさんが、手紙を郵便局に出してるの、だいたいぶ前に見たぜ」

「え、ほんと？」

「こないだ行ったときは、ちょうど、手紙書いてるところだったもん。じいさんとばあさんと、お前の弟も書いてたぜ。分厚くなったやつ、でっかい封筒にいれてさ。お袋さんが、じゃあ、仕事の帰りに郵便

局行って出してくるって……、はつきり言ってたもん。しかもそれ、だいぶ前のことだから、まだこっちに届いてないとか、ありえないよ。そう……、ちょっと俺も、曜日の感覚が曖昧だから、なんともいえないけど、昨日だったかおとといは、お前に、荷物送る準備もしてたぞ。秋休みらしいぞ、今送つとかないとかなんとか親父さんが言ってるさ。秋休み、ってのも、それは、お前が手紙で伝えた内容だろ」

「ええっ」

「お前のほうにだけ届いてないのか？ それって、変だな。そんなはずないと思うけど。つかしいなあ」

「じゃあ、やっぱり……」

盗まれているのは間違いなさそうだ。しかし、誰のしわざだろう？

中島は、彼の隣にこしかける。しばらく、故郷の話になった。そのついでに、リヒトはふと思いついて「そういえば、シンって名前に聞き覚えある？」と聞いてみた。

「シン？」中島は首をひねる。

「どういうこっちゃ？」

「高等部にさ、すっごくかっこいい、背の高い男子生徒がいるんだよ。なんか、その人のこと、俺、昔知ってたような気がするんだ。」

中島、覚えてない？ そういう奴、いなかった？」

「はあ？……ううんと、ここにいてるってことは、そいつも変化したってことか？ 年上の、先輩で？」

「いや、同級生のなかでも……そう、俺みたいになさ、事故とかで転校してった、みたいな感じでいなくなったけど、実は変化してゲットーにさせられた、みたいなさ。あるかもしれないでしょ」

「そいつが、俺らの地元の奴かもしれないって？ そりゃ、幼稚園から小、中と、転校してった奴なら、何人かはいたと思うよ。他の学年はわからんけど、同級生ならなんとなく……え、お前は、覚えてねえの？」

「おぼえてたらこんなこと聞かないよ」

リヒトは眉間にしわを寄せた。頭を指さして、「どうも曖昧でさ」と困り顔を見ると、中島は「ふん」と、吐息をもらした。

「シン、ねえ……うーん、そういわれてみれば、そんな名前の奴もいた気がするけど」

中島は、遠い目をして、しばらく空中をにらんだあと「うん、いたな」としつかりとうなずいた。「ほんと」とリヒトは声をあげたが、中島は微妙な表情で、彼をじっと見た。探るような目だ。

「なに？ どうした？」

「お前、ほんとに……」

「え？ なに」

「覚えてないの？ わりと、仲良かったはずだぜ、お前とは」

「えっ、そうだったけ？」

まったく思い出せなかった。うう、とうなって腕組みしていると、中島のほうはだんだん思い出してきたのか、うなずきながら言った。「そうだよ。ほら、坂の下、川端の県営団地のさ——シンとかリンとか、たしかそんな名前の奴で、小学校で転校してた奴がいたよ。うん、そうそう……」

中島はうなずく。

「なかなか、俺らはつきあいなかったけどさ。ほら、県営団地——ダンチのやつだから。これは、おぼえてるか？」

ふと、彼の頭に、薄汚れた茶色い壁が平行に列をなす、四角い建物の姿が浮かんだ。つつじの垣根に囲まれた、何棟もの、二階建ての建物。そばには、雑草でほぼ上部を覆われた、暗い流れの水路がそばにあって、ちよろちよろ水が、背後の川に流れ込んでいた。日焼けした男が、しじゅう作業着姿でうろつき、夕暮れ時には、年取ったくたびれた感じの女が、下着同然の服に前掛け姿で勝手口に腰掛けて煙草をくゆらせ——

そこは、低所得者たちの住まいだった。町内でも評判の、あまり柄のよくない場所で、ともすると蔑みの対象になっていた。

「県営団地。ダンチ。ああ、そっか……」

「お前、本当に、変化してから記憶が怪しいみたいだなあ」

「――そうなんだよね」

一度死んだせいなのだろうか。必要のない記憶が漉しおとされて、最低限必要なものだけが残った、という感じだ。名前、家族、好きだったもの、嫌いだったもの、得意科目。はつきりしているものとおぼえていないものの差が激しい。中島は「変わったよな」と呟いた。なにかと思うと、彼は、ベッドの横のほうに積まれた本を見ていた。彼が指をうごかすと、表紙が持ちあがり、つづいて、ページがぱらぱらとめくれた。

「前はこんなの読まなかったよな？　字ばかりのやつなんか」

「ああ……うん。でも、面白いよ」

「変わったよ。見た目だけじゃなくて、好みまで変わるんだなあ」

しみりと呟いた中島に、なぜか、リヒトは言い返すことができなかった。だんだん、遠くなる、とりヒトはふと思ってぞっとした。もしかしたら、自分でも気付かない間に、自分はどんどん平安人になっていつているのかもしれない。中島の態度が、それをあらわしているような気がした。反論しようとする、中島はにやりと笑って、手をふった。

「気にすんなよ。別に、俺も気にしないし」

「ねえ。ずっと、友達だよな」

「映画みたいなこと言うなよ。気持ち悪い。ずっとなんて無理だぜ。俺も、だって、そのうち、生まれ変わらなきゃならないもんよ」

「そうだけど……」

「お前も、早く、相棒を見つけれよ。暇つぶしになるだろ。ここじやみんなそうなんだってな。お前も、そうすれば……、そうしたらほうがいいよ」

「うん……」

ゲッターに住む人間は、「相棒」と呼ばれる動物を飼っていた。それらは、人間の世界では、妖精とか精霊とか言われるたぐいのものだ。日本では、陰陽道の概念をもとにした「使い魔」とか、「シ

キガミ」という呼び方でも知られている。普段“かくり世”にいる彼らは、ゲッターでは、動物の姿を借りることが多い。粒子によって可視化された存在である彼らは、餌にありつくことと引き換えに、主人である平安人に仕えた。簡単なお使いを任せたり、知能の高いものなら、話し相手にもなる。ミサビの“ひゅうが”に、フリオの“ミケーレ”、そして、サツキの相棒である黒狐“政宗”が喋るのを目の前に見たときは、リヒトは腰を抜かしそうになったものである。

「もしそいつがいたらさ、朝早く掲示板に行ってもらって、見張りも頼めるしさ。すぐに解決。それがいいぜ」

「うーん……、そうだねえ」

しかし、今のところ、リヒトにはまったくその気が起こらなかった。手紙のことが気になるし、そういわれると、シンのことも気になる。気になることだらけだ。そういうと、俺なら、絶対パンダかライオンを相棒にする、と中島は不満げに呟く。そのとき、ノックが鳴ると同時に、サツキが姿を現した。

「よお。ミサオが外泊だって、下の札で見たもんだから」

「ああ。入って」

「あ、ゴースト」

中島を見たサツキが目を見張る。彼の後ろには、シルとフリオがいた。「友達。現世の」とリヒトが中島を紹介すると、彼らは、生きているものどうしのように、普通に自己紹介をしあった。ひとしきり談笑したあと、遠慮したわけではないようだが、中島は「眠いから帰るわ」と消えていった。サツキたちはしばらく笑っていた。「リヒトをよろしくな」と保護者よろしい置いていったのが、面白かったらしい。

笑いが収まると、フリオが立ち上がった。

「聞いたか？ 所持品検査」

「ああ、聞いた。ミサオが、そこなら使っていいって」

三人は、持ってきた紙袋に、菓子だけではなく持ち込み禁止の品

をつめていた。中身を取り出して、ロッカーに次々と放り込みはじめる。フリオの肩には、鷹のミケーレがいて、彼女はリヒトを見ると、けたたましく泣き声をあげた。リヒトは、ミケーレとの出会いを尋ねてみた。「どこで会ったの」ときくとフリオは「鎮守の森だよ」と、プレイポーター——携帯ゲーム機をしまいながら答えた。

「あそこらへん、よくゴーストもいるし。粒子がよく揺らいでるから、居心地がいいんだろうな。むこうでも見つけようと思ったけど、俺は、ヘイアンに留学したら、そこで見つけたいとずっと思ってた——ひょっとして、相棒探しに行くのか？」

「いや。聞いてみただけ」

「なあ、そうだ。政宗に、友達を紹介してくれるように頼んでやろうか？」

「いや、俺は別に、まだ」

「いいぞお、使い魔がいる生活」

話を半分しか聞かないため、いつのまにか話題が頓珍漢になる傾向のサツキが、向かいにあるミサオのベッドに腰掛けて首をかしげる。怒られるのは俺なんだけど、とベッドから下りるよう促すと、サツキは

「大丈夫だって」

と根拠のない自信たっぷりの声で言い、

「行くなら秋休みのあいだがいいかもな」

と、リヒトを無視して提案した。

「半日旅行がてらさ。なあなあ、どんな動物がいいんだ？」

現世でも、猫派と犬派の不毛な争いが存在するが、ここではもっぱら、四足派と二足派の戦いだ。二足派には、羽翼種も含まれる。フリオは鳥類の利点をあげ、サツキは、四足で駆ける政宗の俊敏さを褒めた。

「虫はだめ？」

「小さいからなあ……荷物も運べないし、話もろくにできないし。やっぱり、ある程度知能があるほうがいいよ。鹿とか、珍しくてい

いよな。馬なら乗れるし。そういうのとか、群れで暮らしてるやつらなら、比較的、話がしやすいな。虫は、虫の形しか取れないってことは、やっぱり、力が弱いつてこともあるから、俺はどうかと思う。よっぽど好事家なら、町にいるみたいだけど」

「虫愛ずる姫君とか」

くすくす笑うサツキをよそに、フリオはまじめだ。

「体の大きなやつほど、使い魔として立派になるし、知能も上がる。そのぶん、付き合うのは大変だけど――まずは友達から、というなら、虫なんかもいいかもしれないけどなあ」

「女子でさ、隣のクラスに、とげだらけの鼠みたいなのと一緒にいる子がいるよね？」

「ハリネズミだな。ローズーイギリスからの留学生だろ」

平安学園には、留学生が多い。各国ゲッターは、お互いの学生を頻繁に行き来させて交流している。彼らのクラスメイトも、約三分の一は、留学生だった。フリオもそうだ。イタリヤからの生徒で、アトランティック・ユニオンもともと、大西洋連合にある五つのゲッターのうち、地中海隔離自治区、メディテラネウス・ゲッターの内部生だった。彼らが連れている相棒は、それぞれの出身地ではなじみがある動物だが、リヒトの目には珍しく映る。

フリオが、ミケーレの羽をさすりながら首をかしげた。

「なんか、好きな動物とかいないのか？ 鳥は？ いいぞ、こいつらは。飛べるから速いし、伝達に向いてる」

「うーん、特に……あ、合鴨は好きかな。鶏も好き。おいしいし」

「食うのかよ」

「牛も好きだな。馬も好き。でも、そばにいてもらうには大きすぎるよね。スズメはいやだな。せっかく作ったお米を食べられちゃうのは嫌だ。猫も、猪も、狐も狸もいまいち」

かつて実家にいたときに畑を荒らすこれらの動物を列挙する。狐もだめなのか、とサツキが不満の声をあげる。

「じゃあ、何ならいいんだよ。いざというとき食べられちゃうかも

しれない奴の相棒なんか、誰もなりたくないっていうぜ！　今までの好き嫌いは捨てろよ」

「考えとく……」

結局、うやむやのまま終わった。

彼らに続いて、ドアをノックする人物がいた。シルルとミチタカ、ミサビまで現れる。全員、所持品検査のがれの面子だ。テッセンの言葉が気になるリヒトは、ミサビをじっと見てしまう。相変わらず朗らかで、品行方正な態度が控えめで礼儀正しい。こんな子がいたら、自分が親なら毎日手紙を書いちゃうんじゃないかな、と思った。見た目すらも優しい。少し癖のある髪は柔らかな茶色で、卵形の顔にアーモンド形の目、鼻筋はとおって、薄い唇はいつも笑みを絶やさない。

彼が犯人だとは、どうしても思えなかった。

「どうしたの？」

禁制品をしまう手を止めて、ミサビが首をかしげる。リヒトはあわてて「なんでもない」と首をふった。ミサビはくすりと笑うと「似合ってるね、その紺の単」と、リヒトの着物を褒めた。テッセンのおさがりだ。サツキが「あの野郎がこんなにリヒトに親切にするなんて、思いもしなかったよなあ」とため息をついた。「裏があるんじゃないか？」

「ないよ！……たぶん」

「見方が変わるよなあ、こうなってくると。何を考えてるんだか」

「まあまあ」

ミサビは今日も、他人の悪口を言わない。

「ところで、図書室に、この本置いたのって、リヒト？」

懐から、一冊の文庫本を取り出す。ノヴァーリスの「夜の賛歌」だった。今は、彼が借りているのだろう。

「これ、読んだ？　リヒトは」

「えーっと……それ、詩集だよ。俺、詩はよくわからないから」
読まずに図書室に置いたのはそれだけだったはずだ。そういうと

「そう」とミサビは少し首をかしげ、本を懷にしまった。そのあとで、不思議な歌を小さく口ずさむ。八五調で、牧歌的な中にかすかに上品さが漂う。しょっちゅう口ずさむのを聞くが、タイトルはいまだにわからない。

「それより、さっき、ゴーストがここにいたんだぜ！ リヒトの友達なんだって！」

サツキが、興奮気味に話し始めた。

学園には、昔は多かったという実習中の事故で亡くなった教師や生徒のゴーストがたくさんいた。食堂や教室には、彼ら専用の席まであるほどだ。ゴーストにまつわる話は、不思議にロマンティックで、ほんの少しホラーを含む。友達になることは、一種のステイタスだった。

「へえ……、そうなの。中島くん。どういう関係？」

「あ……、えっとね」

中島が、一緒に粒子に感染して亡くなった友人だと告げると、空気はやや重くなったが、リヒトが平気そうだと見てとった彼らは、やがてずばずばと尋ねてきた。

「一緒に感染したって？ そいつと二人ってことか？」

「ううん。あと、女子が三人いた。修学旅行のときに変化したんだよ、俺」

「そりゃ珍しいな。おい、詳しく聞かせろ」

ひくべきところはわきまえている外部生である。突然、日常から切り離されてしまったという共通の体験をしているので、会話はサブレを囁むようにさくさくと進んで、リヒトは、自分が変化した経緯について話した。とはいえ、どこで感染したか、なぜ感染したかは、さっぱり身に覚えがない。

サツキたちは目を丸くしていた。リヒトは、珍しいパターンらしかった。

話を聞き終えると、

「変だね」

「うん、変だ」

彼らは口々に言った。次々に、推論がなされる。

「それもあるけどさ。……お前、なんで、今まで気にならなかったんだ？」

全員が、疑問の表情で彼を見つめた。リヒトはだが、それに答えることができない。どうやら彼らにとって、どこで感染したか、どうやって変化したか、というのは、とても重要なことらしかった。リヒトはようやく、なぜ変化したのか今まで考えもしなかった、そのおかしさに気付いた。

たしかに——自分はいったい、どこで感染したのだろうか？

六人は、昼食のあと、リヒトの部屋ではなく図書室へ向かった。

将棋やオセロ、読書にそれぞれふけりながら喋っていたが、夕方にさしかかったころだ。トイレに行って戻ってきたミチタカが「リヒト宛に、下に荷物が来てるぞ」と駆け込んできた。リヒトは思わず立ち上がる。

「ほんと!？」

「嘘なんか言うか」

すでに全員、事情を知っている。そいつは一大事、と全員で階下に下りた。

玄関の脇、在寮札の下のメールボックスに、呼出状が入っていた。どんなにか待ち焦がれていただろう――リヒトは、カードと一緒に首から下げていた判子を、初めて使った。事務室の寮母は、リヒトを見ると、廊下に置かれている荷物のうち、羽、と張り紙がされた壁の下のスペースを指差して「あのでっかいやつよ」と教えてくれた。

紐でぐるぐるに補強されたダンボールは、リヒトが座って入れるくらい巨大だ。サツキとフリオが手伝ってくれて、三人がかりで部屋に運ぶ。

全員が、期待にみちた表情で彼を見つめている。

包みを解く。中から、彼の好きな、クルミとアーモンドを挟んだバクラヴァーートルコのパン菓子や、瓶詰めの桃と林檎のコンポー、ロクムという餅菓子が出てきた。その下からは、シュトーレンにキルシュトルテ（さくらんぼのケーキ）の包み。さらに下には、地元でおいしいと評判の店のゆべし――という米の菓子や、あんこを黒糖生地で包んで山の形に作ったものをかりかりに揚げてある、黒糖饅頭の箱が発見される。

わくわくしながら様子を見守っていたクラスメイトたちは、顔を見合わせた。まだお菓子が出てくる。

やがて、あきれながら、

「お菓子ばかりだな」と、サツキが言った。

「まあ、保存がきくからね」

「にしたって多いぞ。俺、甘いのは苦手なんだけど」

「なあ、キタカタのラーメンスナックというのはなんだ？」

すでに、リヒトの買い食い趣味は知れ渡っている。いちいち大げさに喜ぶりヒトをよそに、その色気のなさにうんざりしかけたころ、
「あ、服」

その下の布の塊は、真新しい臙脂の麻の単と、袴や草履だった。家にある和服を送ってくれ、と書いたことをリヒトは思い出した。祖父のものでもいいから、といったはずだが、新調してくれたようだ。

さらにその下の地層からは、黒いシャルワール——ゆったりとしたズボンと、カフタンが出てきた。帽子まである。着物はともかく、明らかに異文化の香りのするそれらを見て、五人は顔を見合わせた。全員を代表して、「ちょっと待って」とフリオが首をかしげた。

「リヒトって、日本人だよね？」

「日本人だよ。なんで？」

裾だけが細くなったシャルワールを手に、これは寝着にしようかな、と考えていたリヒトは、振り向いてうなずいた。

「俺、それ、見たことある。ターキーの民族衣装だ」

「ターキー？ 七面鳥か？」

サツキは首をかしげた。ミサビが苦笑して「トルコのことだね」と呟く。

「うん。ええつとね……、トルコ人のドイツ人なんだよ。お母さんのお父さんのお母さんが」
リヒトはうなずいた。

「トルコ人のドイツ人？」

「うん。ええっと……」

1990年の東西ドイツ統一後、労働力を補うために、ドイツ政府は多くの移民を受け入れていた。移民のなかでもっとも多かったのが、ヨーロッパの東の果てである、トルコからの労働者だった。ベルリンにあるトルコスラムで、彼の曾祖母は、トルコ系ドイツ移民の三世として生まれ、のちにドイツ国籍を取得する。彼女は、ドイツ語を母国語として、母親から、はるかかなた東西が交差する故郷の話を聞かされながら育った。成長するにつれて、はるかオリエントの地であるトルコに愛着を持つうち、やがて、彼女の意識は、さらに東へと向かっていく。いつかトルコへ、さらに東へ——夢を描きつつ大学生になったころ、彼女は、同じ大学に留学生としてやってきた、アジア人男性と恋仲になった。順調に交際を続けた二人はやがて結婚し、男性の母国で暮らすことになる。日本にやってきた二人——見知らぬ土地での彼女の生活は困難を極めたが、夫婦は、二人の娘と一人の息子に恵まれ、なんとか幸福な生活といえるものを営んだ。可偉斗と名づけられたその息子が、リヒトの祖父であった。

アジアとヨーロッパを分かち、黒海とエーゲ海をつなぐボスポラス海峡。その海を臨む都市のはずれ。そこが、おじいちゃん一族のもともとの出身なのよ、とりヒトは幼いころ、母から聞かされた。すでに行ったことのない“はるかなるルーツ”ではあったが、今でも、瀬田家の食卓にはときどき、トルコ料理やドイツ料理が出る。

級友たちがいままで気付かなかったのも無理はない。リヒトの中に、「トルコ人のドイツ人」の血は、八分の一しか流れていないのだ。それぞれの国で割るなら、十六分の一ずつ。十六分の二のトルコとドイツと、十六分の十四の日本の血。どちらが強いかは自明の理である。本人も、日本語しか話せないし、日本から出たことがない。見た目は確かに、日本人にしてはやや濃いような、という感じを受けるが、この程度は範囲内である。

「なるほどねえ……」

菓子 of 山を見ながら、サツキがやれやれと首を振った。リヒトは、同梱されていた手紙を見つけて、いそいで封を切る。初めての手紙だ。

“手紙どうもありがとう。毎日楽しみにポストを覗いています。とにかく、元気でなによりです。荷物が遅くなってごめんなさい。あなたの好きなお菓子を作る時間がなかなかとれませんでした。必要なものをあれもこれもと集めているうちに、もう夏も終わってしまったし……。とりいそぎ、着物と、あなたに作ったカフタン、好きだったお菓子を送ります。テッセン君とサツキ君と、仲良くやってみたいね。秋休みを楽しんで、実習、しっかりがんばってください。みんなひとりで食べてしまいたいところでしようけど、お友達にもお菓子を分けなさいね。よろしく伝えておいて”——最近の出来事にも言及している。やはり、リヒトからの手紙は届いているのだ。

いったい、どういうことなのだろう。

「荷物は見逃してやるよってこと？」

リヒトが首をひねっていると、サツキが、窓際に並んでいる二つの机のうち、ミサオのほうを指さした。

「かもね。……なあ、あいつがいなくなった途端届いたよな」

「どうかなあ。こんなでかい荷物だからな。持ち逃げするのも目立つ。単独犯なら、一人じゃ無理だろう。だって、手紙とはわけが違うぜ」

「なににせよ、良かったな。初めての手紙じゃないか」

「うん……」

納得がいけないが、リヒトは、手紙を鍵のかかる机の引き出しにしまった。大量の菓子にかけられる期待のまなざしに苦笑しながら「食べる？」と尋ねると、全員がいつせいにうなづく。お茶をいれて、みんなで楽しむことになった。

夜、リヒトはテッセンにメッセージを書いた。窓辺にアルリシャがやってきたからだ。

アルリシャは、テッセンの相棒で、黄色い羽毛に、初列風切羽の一筋だけが赤いカナリアだ。瞳も赤い。元は、どこかの神社に祭られていた道祖神が、ゲッターに迷い込んできて、幼かったテッセンと仲良くなった。ハイカラな鳥だ、というので気に入って、カナリアの姿を借りているという。細い足にメッセージを書いた紙を巻きつけると、アルリシャはリヒトに、一瞥をくれて飛び去っていった。夜を飛ぶ黄色い宝石のような姿を見ると、ぼんやりと何かを思い出しそうになる。

テッセンからの手紙は、休みのあいだにうちに遊びに来いよ、というものだった。おそらく、彼も、サツキたちと同じように、相棒探しの絶好の機会だというに違いない。だが、あいにく明日は、弓道部の練習日だ。

「好きな動物」

夜風の吹き込む窓辺。ミサオの机の上には、陶器でできた白いウサギの置物がある。ふと、リヒトは、昔どこかで野生のウサギを見たことを思い出す。懐かしい彼の故郷、山々に囲まれた小さな町。通学路は、田んぼのあいだをぬうようにのびていた。夜のあいだ、山から、ときおり、鹿や狸やウサギなどが道路におりてきた――不幸なものは事故にあう。朝、その死体を見つけるのは、たいてい、通学途中の小学生だった。内臓を無残にはみ出させた血まみれの姿で、道路の脇でひっそりと横たわる抜け殻。小学生だった春、下校途中に一緒にそれを見つけたのは――

彼は立ち上がり、部屋を出た。

静かな部屋。

ミサビの部屋は、二人部屋だ。カンタという、隣のクラスの生徒と住んでいるが、そのカンタは、友人と徒歩旅行に行っていて不在だ。登山部で、大きなリュックにテントまでつめていたから、今頃どこかで野宿でもしているのだろう。

ベッドに寝転んで、煙草に火をつける。彼の密かな趣味だ。平安人の体にはタールもニコチンも関係ないので、ただ、煙を吸い込んで吐く、というだけの行為になるが、それだけに集中する時間が、けっこう“いいかんじ”だと気付いてから、一日一本と決めて、こっそり楽しんでいる。

なるほどね、と、彼は、すっかり馴染んだ転入生について思った。日本的でありながら、時折見せる不思議な表情。それは、ユーラシアの風と光をいっぱいに浴び、海の波濤を乗り越えて異国へと旅立っていった、勇敢な血の表れだったのだ。いまどき、混血児など珍しくもなんともないが、それと知らない欧亜混交の雰囲気、テッセンや、カルテットでさえひきつけている。楽しみな生徒だな、と、彼は教師の目線で思った。今は遅れを取っている知識量も、背丈も、これからどんどん伸びていくに違いない。

自分に備わった予見の能力を、ミサビは過不足なく信頼している。最後の転校生――それは、いつだって特別な存在だ。自分たちにとって、とくに、現世から知らない間にここへ連れてこられた者にとってはいっそうその思いは強い。

懐かしい現世の空気をもたらすもの。自分たちが確かに生きていた世界の匂いを運んでくる、おそらく、リヒトが最後の人物だ。

父母の国、兄弟の国からやってきた、もっとも新しいもの。

しかし彼は、ほかとは違った理由で、リヒトに興味がある。胸元に置いた詩集をとりあげてみた。ときどき、前の持ち主による鉛筆の線の跡が現れる。

リヒトが感染したのは夏の京都、七月十五日、祇園祭りのさなかだった。彼はその後一年眠っていた。符丁が合うのではないか、と思ったが、誰に話すわけでもない。断言もできない。

噂の域をでないが――

ふと、にゃあ、と声がして、ひゅうがが窓辺に現れた。図書室のベランダから、雨どいと張り出し窓伝いにやってきたのだろう。網戸の専用口をくぐってすんと床に降り立つと、ベッドに飛び乗ってきた。

「なんだい、その声。猫みたい……、どうだった？」

「さっぱりよ。わからないわ、まるで迷路。それにしても、鎮守の森とはよく言ったものだわ――うるさいったらありやしない」

「あつかれさま」

ミサビはくすくす笑う。あの騒がしい場所がすぐに脳裏によみがえる。

現在、かくり世のものたちの社交場となっている鎮守の森。その奥まった場所には、祭祀場所である平安神宮がある。神宮は異空間を通じて下界とも繋がっており、大鳥居の連なる参道の奥から、人の世を逃れて闇をひたり出てくる妖しげなものたちの宴が、毎夜境内で行われていた。

ミサビは、ねぎらいをこめて相棒の背を撫でてやった。

ひゅうが。人面獣身の山神として東海道筋に祭られていたものだ。生きにくくなった現世を嫌って、早期にゲッターにたどりついた獣精のひとり。宴にはすでに飽きてしまっていて、めったに参加することはない。彼は身震いすると、ミサビが起き上がったベッドの隣に、スフィックスのポーズで座る。ミサビがあごをかくのに、ごろごろとのどをならしていたが、ふいに薄目をあけて「いいにおい」と呟いた。ミサビは立ち上がり、机からとってきたもらいものの菓

子を彼に差し出した。

「異国のものだから、口にあうか」

「でも、原料はこのクニのものでしょ」

さくらんぼの酸味をたしかめてから、ひゅうがはそっとかけらをなめとる。口にあったのだろう、夢中で食べつくした。

「そうそう、さっきそこで、アルイサに会ったわよ」

前足をなめながら、発音しくそうに言う。

「アルリシャに？」

「会った、というか見かけたんだけどね。あんたが気にしてる転校生のところから出てきたわ。こっそり前を通ってきちゃった。窓があげっぱなしで、部屋の中がよく見えたわ。いいわね、やっぱり、浴衣って。こう、白い——白かないわね、お世辞にも。でもまあ——健康そうな肌が透けて見えてねえ。あの子着慣れてないから、無防備でたまらないわ」

「僕じゃ駄目ですか」

「あんたは細すぎていけない。ああいうのは、適度に、丸みとかついでところがあれば、かえって色気がないものよ」

「はは……。それより、森に変わりはなかったですか。いつもの面子？」

「ええ。それに、興味を持って手伝ってくれる子が二、三というところかしら。あと、葵がいたわ」

「葵——」

「ようやく新しい人を見つけたみたいね。挨拶に来てた」

ミサビは、机から帳面を取った。墨をひたした羽ペンを取る。彼は、平安学園とその関係者について、できる限りメモをとっておくことにしている。名前、住所、出身、相棒の有無、借りている動物の姿、名前。葵という名前には見覚えがあった。ページの後ろ、平安学園卒業生の名が並ぶ。そのなかに、葵の名もある。

「葵って、白いテン？」

「そうよ」

「じゃあ、間違いない。このひとか……」

「何よ。どうしたの？」

「去年亡くなった、連合ゲッター軍の士官なんだよ。葵ってかたの主」

「そうみたいね」

「なんで死んだか、葵は話してた？」

「プライベートで他国のゲッターに旅行中だったんですってよ。かわいそうに、客死ってやつね。遺体も回収されないで、本人も、ゴーストにならないで消えちゃったって、葵がショックを受けてたわ。いばりんぼでシスコンギминаのが玉に瑕だけど、まあ、いいひとだったそうよ」

「突然死？」

「粒子の制御装置がはずれて、生命維持線の内臓器官がぶっとんだとかどうか」

「本当かな、とミサビは思った。軍士官が、プライベートだからといって、所属基地のあるゲッターを出ることも、死因も明かされず突然死、というのもふにおちない。訃報が新聞に載ったのは、たしか、八月だったとミサビは記憶している。

回収されなかった遺体――リヒトが変化したのは、七月十五日。

「考えすぎかなあ……」

「陰謀史観が強いわよね、あんた。もっと気楽に生きたら？　せつかく、長生きできる体になったんだから、楽しまなくちゃ損よ」

「そう？」

「考えすぎよ」

「そうかな。でも……」

ミサビは、陰謀のない世界などありえない、と思う。運命、という言葉の重みも、ときどき感じる。

葵の飼い主、イチカの死がリヒトの変化と関係があるとしたら、その周辺にいるものも、無関係ではいられない。

それでなくとも、近頃、ゲッターをめぐる動きは不穏だ。平安市

は、四方を海に囲まれた日本にあるという条件と、多くの一般人も居住しているため、いまのところ暴徒に住民が襲われたとか、侵入者が狼藉を働くといったケースはないが、外国では、それもたびたび起こるのだ。すべて、ゲットーの存在に不満を持つひとびとの仕業だった。人間でないものが、人間様の土地に住むな、ということである。かといって、浮遊城のように浮いた場所に暮らしていたって、文句を言われるに違いないのだ。

暴発の時がいつかくる。

ふと、ミサビは、詩集のあいだから長方形の紙切れを取り出す。和歌が書いてある。細い筆の手は、力強く優美だ。学の高さと品性を感じられる。

「はつせのゆつきが下にわが隠せる妻……」

「なにそれ？」

「万葉集。栞に書かれてたものだよ。風流だなあと思って。でもこれ、調べたら、返歌があるんだよね」

これの元の持ち主がテッセンのはずはない、とミサビは確信していた。

“泊瀬の斎槻が下に 我が隠せる妻 あかねさし 照れる月夜に 人見てむかも”——柿元人麻呂の和歌である。はつせは、奈良県にある初瀬川周辺のことで、聖域にあたる。ゆつきはケヤキのことで、この木の下も、やはり神聖なものとされた。ひっそりと神聖な場所に隠した自分の妻を、まぶしく照らす茜色の月の光で誰かに見られてしまうのではないだろうか、という意味だ。涼やかで微妙な風情の描写は一見クールだが、うちに秘めた夫の妻への情熱も同時に感じさせる。

返歌は、“ますらをの思ひ乱れて隠せるその妻 天地に通る照るとも頭れめやも”である。壮健な男がそれほどに不安に思いながら隠した妻だから、月が天地をくまなく照らそうとも、人の目につくことはないでしょう。心配する夫に、大丈夫よ、と返す妻の心情だ。サツキなら、この美しい和歌二首も「妻が美人だと、夫はおちおち

寝てられんなあ」で片付けてしまうのだろうか……。しばらく、ミサビは万葉の時代に思いをはせた。はつせのゆつきが下に、もそうだが、この時代の和歌には、思いがふと口について出てしまった、鼻歌のような自然な感じがある。歌の起源は神をまつり神と遊ぶ祭祀である、という説がある。だとするなら、人と神が、同じ言葉を口にしていた時代ということだ。心配する夫に答えて、しつとりと返す女性の息遣いがけなげで、何気ない感じでさえ、二人の関係を想像するだけでいじらしい。

葉を差し戻す。

煙草の、燃え尽きるさいごの煙を見ながらしばらくぼんやりしていたとき、ふいに、ノックがする。「どうぞ」と煙草をもみけしつゝ振りかえると、ドアからリヒトが顔をだした。あたりをはばかりように、そわそわしている。

「聞きたいことがあるんだけど」

彼の用は、高等部のシンという生徒について聞きたい、ということのだった。

今ひとりだから、遠慮しないで、と告げると、リヒトはほっとしたような表情になる。カンタの椅子を引き出して与えると、そこへ行儀よく座った。

「シンさんが、どうかした？」

「俺の昔の知り合いに、シンってひとがいるみたいなんだ。それがどうも、その人じゃないかなって、ふと思って……それで、どういうひとなのかなって」

興味深い話だ。ミサビも、向かいに腰掛けた。

「あのさ、そのシンってひと、すごく頭が良くて、すごい人だって本当？」

「本当だよ。でも、ちょっとまって。昔の知り合いって、それ、本当なの？」

リヒトはこくりとうなずいた。しばらく、じっと何かを思い出すようにあごに手をあててうつむいていたが、もういちどはつきりと

うなずく。ミサビは信じられなかった。変化は、ものすごい確率で起こることなのだ。日本の人口二億五千万人、そのうち、年間で粒子をあびる数は数十人いるが、生存率は一割を下回る。一人か二人の子どもだけだ。そして、その二人の子どもが、同じ故郷から出る、というのは、集団で粒子を浴びた場合にしかありえない。

リヒトと一緒に粒子を浴びたものはみな死んだはず、と思っっていると、

「小学校で転校していったクラスメイトで、シンって子がいたんだ。さっき思い出したんだけど。あの……、もしかしたら、シンじゃなくて、リンかもしれないけど」

リヒトは眉間にしわをよせて呟いた。

「それで、こないだ、シンってひとを見たとき、なんとなく見覚えのあるひとだと思って……」

「シンタロー、シンジ、シンスケ。リン、という子なら隣のクラスにいるね。リンコも、たしか、高等部の先輩にいるよ。でも、シンだと思うんだね？ 高等部の先輩の、あの、シンだって？」

「うん。平安学園には、飛び級制度があるんでしょ？ 落第も。もし、シンが俺の思ってるシンって子で、転校が変化によるものだとしたら、初等部に入学してるはずだ。その間に飛び級したなら、シンが俺より先輩なのも説明がつくよね」

「たしかに、シンは小さいころに飛び級してるって話をきくね」
おもしろい。

ミサビは身を乗り出した。「これね、知り合いのみんなの、プロフィールが書いてあるんだけど」といいながら、もういちど帳面を開く。シン――しかし、彼の出身地は、福島ではない。

「もしかしたら、転校というのは本当に、転校先で粒子を浴びたのかもね」

「そうだね。その可能性もあるや」

「本人に聞いてみる？ 僕、一応知り合いだけど。つなぎ、つけようか？」

「ううん。まだ、そうと決まっていな……」

リヒトは首をふった。しきりに何かを考えている様子だ。
そのうち、

「ねえ、変化したら、性格が変わるって、よくある話？」

いつも陽気な彼にしてはめずらしく、影のある声で呟いた。ミサビはうなづく。

「たまに聞くよ」

「そう……じゃあ、やっぱりそうなのかもしれない」

「どういこと？」

「シンって、すごい人みたいなんだよね。でも、俺が思い出したのとは、ぜんぜん違うから」

なぜか、地元の産業について、彼は淡々と語り始めた。

「俺んちはさ、昔……ずいぶん大昔のことなんだけど、当時は、鉦山で栄えた地方なんだ。ペグマタイトっていう、珍しいやつが出て、それを目当てに県外からも人が押し寄せたらしい。鉦山があつて……炭鉱って知ってる？　そういうのがいっぱいあったの。俺も、じいちゃんから聞いたんだけどさ。事故とかも多いから、鉦山で働くのって、相当危ないはずだけど、でも、もうかるから、低学歴の労働者なんかが、東北じゅうや、九州なんかからもういっぱい来たんだって。でも、炭鉱は、昭和に入ってから次々と閉鎖して——町はあつというまにさびれた。たくさんいた労働者も、地元にはひきあげていっちゃった。だけど、引き上げなかった人もいた。そういう人たちは、もともとが、その日暮らしの労働者で、喧嘩っ早くて、乱暴だったからさ……地元の会社なんかもあんまり雇いたくなくて、みんな貧乏で、汚い長屋に暮らしてた。中には、盗みで生計をたてたり、やくざみたいになったりするひともいたらしい。で、俺らの世代に、そういうひとたちの孫やひ孫たちがいてね。あのさ——子どもの性格って、家庭環境で決まる、って、知ってる？」

「知ってる。虐待を受けて育った親は、自分の子どもも虐待する、っていうね。わかった——その孫やひ孫も、盗みややくざまがいの

ことをする大人に成長するってことだね」

「そう。で、長屋は、俺らの世代には、県営団地っていう場所になった。団地の子どもは、小学校でも問題児が多くてね。っていうのは、俺は、高学年になってわかったんだけど……その、俺の知ってるシンは」

「団地の子どもだった？」

「そう」

リヒトは、ふう、と息を吐いた。

「団地の子どもだった。なかでも、特に問題のある子だった。……いつも、汚い格好でさ。髪とか、何日も洗ってなくてべとべとで、肌も、赤茶けて汚れて、近寄ると変なおいがした」

「虐待されてたの？」

「うん——今はそう思う。あんまりおぼえてないけど……たまに、シンの家に行くと、うちと違うのが不思議でたまらなかったんだ。お父さんは、昼間家について、ずっと居間の床の上に寝転んで、あたりに、エッチな雑誌がたくさん積まれて……お母さんは、でも、自分の旦那さんに何にも言わないのね。それで、部屋の中は、ラーメンとかカップ酒の容器とか、弁当のゴミなんかでいっぱい。シンはいつか、床に落ちてた弁当から、ご飯を拾って食べてた。服は、近所の人があげてたみたい。それで、学校から帰ると、外で遊んでるっていわれて、遅くまで外にいるんだよ。家に入っちゃいけないんだって言ってた」

「育児放棄だね、それは」

「うん。だと思う。でも、そんなんだから、学校でも、いつもみんなから嫌われてた。いじめもあったかも」

むやみに嘘をつくような人間ではリヒトはないから、ミサビは、その話を本当だろうと思った。しかしそれは、彼の知るシンの姿とはとても似つかない。

マテ研に出入りする学生のエース。逸材。彼の能力がどんなものか未知ではあるが、輝かしい未来をすでに約束された立場だ。

「リヒトもいじめたの？」

このような傷があるとは思ひもしなかった、と内心驚きながらやんわりと尋ねると、顔をあげたリヒトは、ぶんぶんと首を横に振った。

「してないよ！ でも、無意識に何か言ったりとか、そういうのがあったかも。俺、バカだから。りいは何にも考えてないってよく弟にも言われたし。ガキだったんだよ。今も変わらないかもしれないけど……、見ればわかるでしょ？」

「ああ、うん。わかる」

ゲッターで暮らす子どもたちの精神年齢は、おしなべて高い。初等部に入っところから、男女ともに武士よろしく素読をし、四書五経を習い、人間とはかくあるべしとの掟を叩き込まれる。中等部を卒業するともなれば、すでに進路を決めて自立の道に入っているものが大半だ。

その中で、中途に転入してきたリヒトの子どもっぽさはよく目立った。よくいえば自由奔放、悪くいえば、協調性や謙虚さに欠ける。それでも男女問わず友人が多いのは、彼の、竹を割ったような性格と、家族の愛情をいっぱいにうけて育ったとわかる、裏表のない優しさのおかげだろう。テッセンがいるときは遠巻きにしているが、寄宿舎の仲間内では、なんとなく、“みんなの弟”的なポジションにおさまってしまっている。

「だとしたら、俺に会いたくないかもって思ってた」

しんみりと言った。

「生まれ変わったシンは、本当にすごいひとなんだよね。頭もよくって、きれいで、才能もあって。だから、そんな自分の過去が、きたない家で虐待を受けたり、いじめられたりしていたなんて、知られたくないのかもしれない」

「そうだね……」

ミサオ自身、自分の昔のことについて、語りたと思ったことは一度もなかった。苦渋に満ちた、とはいわない。幸せな部類に入る

と思う。それでも、あえて話したいとは思えない。

そう――親を慕って三日とあけずに手紙をしたためるような生徒ばかりではない、ということも、リヒトはすでに知っているはずだ。

「わかった。シンについて、もっと何かわかったら、教えよう」

リヒトは、嬉しそうにうなずいた。

6 秘密

「それでお前、全部しゃべっちゃったのかよ」

翌日、学園の武道棟。

弓道場と廊下を隔てる垣根に寄りかかるようにして、垣根の向こう側へ、テッセンは不満をこめた声で言った。「そうだけど」と、子どもっぽい口調でリヒトの声が返ってくる。さきほども、弓道師範に手取り足取り教えられたのが終わったあとは、高等部の意匠研究部とかいうのがきて、彼の体のサイズを入念に測っていたあとである。リヒトは、急遽与えられた仮の弓になんとか慣れようと、四苦八苦しているところだった。最低限、足をひっぱらない程度の技量は身につけたいという必死さが、そこにはあった。

「ミサビが犯人かもしれないだろうが。手紙の。なあ、なのに、なんでシンのことまで、そんなべらべら喋っちゃうんだ。しかも、俺より先に。大丈夫なのか？」

「違うと思うもん」

「根拠がねえぞ。それだからお前は」

「お人よしって？——あのねえ、テッセン。ちよくちよく思ってたんだけどさ、俺、そんなに過保護にやいやい言われたりしなくたって、ちゃんと考えてるんだよ。なんかさあ、そりゃ、そっちのほうで、ハイアン流儀ってやつを知ってるかもしれないけど、俺だってこっちに来て、もう二ヶ月も——学校じゃ一ヶ月か——でも、そのくらいたとうとしてるんだから、大丈夫だよ」

知っている人間が聞いたら、驚きそうな光景だった。あのテッセンが、友人とはいえ、新参者で、小柄で、いかにも子どもっぽさを残すクラスメイトごときに、はつきりと口答えをされて黙り込んで

いるのだ。

そりゃそうだけどな、とテッセンはいいかけて口ごもり、言うのをあきらめて、むつつりと腕を組んだ。彼をいらだたせたのは、無防備に他人に胸のうちをさらけだしてしまいうりヒトのうかつさではなく、むしろ、リヒトの相談に一番に乗るのは自分だ、という自負のためだった。そのことに一瞬で気付いて、舌打ちする。友達づきあいということに関しては、テッセンはリヒトを馬鹿にできない。その一点においては、彼は初心者同然なのだった。

「なに？　ふてくされてんの？」

頭上から声がして見上げると、垣根から、リヒトがおかしそうに彼をのぞきこんでいた。

「違うよ。ふてくされてるってなんだ、馬鹿」

「そう？」

「そうだよ。いや——まあ、いい。ミサビはまあ、そうだな、お前がそういうなら、信用していいんだろ。でもなあ、シンが……お前、本当に本当の、お前の知り合いのシンだって思ってるのか？」

「うん。たぶん」

「それこそ、間違いだと思うぜ。だって俺、ずいぶん前からシンのこと知ってるし。家にも、何度か行ったことあるんだ。親父のつきあいで」

「本当？」

「嘘なんかいうか。いいか、俺んちは本当に実の家族だけど、そりゃ、めっちゃくちゃ特殊なパターンでな。松岡家っていや、先代は平安ゲッターの副代表も務めてた、政治一家だ。で、代々養子をとって家を続けて——シンもちろん養子だけど、松岡家が、家を継がせる男子を養子にもらうのに、出自のよしあしを調べないわけがない。虐待されてた子どもなんか、絶対に引き取るわけないんだ」

「でも、性格が変わるでしょ。そういうこともあるって」

「だとしても、やんごとあるような家庭の出の子を、引きとりやしないよ。実の親が、金持ちの家に引き取られたのを知ってごねるな

んてパターンもあるんだから」

「そうなの？」

のんきに首をかしげるリヒトに、テッセンは「そうさ」とうなずいて続ける。

「昨今、現世にはたち悪いのが結構いるからな。そういうのに限って、子どもが金になるとわかると、どんなにその子が大事だったか喧伝してまわるもんよ。だから、俺らは、成人まで名字を名乗るのを許されないんだよ」

「なるほどねえ。たしかに、そんな親かもしれないな。俺の知っているシンのご両親……」

しかし結局は、シンの正体がなんであれ、それが何だというのだろう、という話になった。シンが、彼をリヒトと知って、あえて声をかけてこないのなら、どうしようもないではないか。リヒトも、もし本当に彼の幼馴染だとしても、華麗なる経歴を傷つけるとするなら、暴露する話ではないと心に決めていた。

リヒトは、矢をつがえずに弓をひく練習をしている。それは、普段武芸の時間に使う和弓ではなく、より実戦に適した、折りたたみ式の携帯弓だった。竹と檜でできている。長さは六十センチ、幅は、広げても三十センチほどだろう。洋弓よりもさらに小型で細身とあれば、いかにもか弱い感じがするが、弦には、弾力性のあるラバーと革を使っており、よくしなむことで飛距離と威力を増す。

というのを、テッセンは垣根越しに聞いていたので知っていた。

弦をはじく音がひびく。

話は、休み明けの、操作実践の実習授業になった。合同授業週間の全貌を、リヒトは初めてテッセンから知った。

「えーっとな。亜空間てのがあるんだよ。どの世界にも」

「あくうかん」

「この空間から枝分かれしていく、たくさん未来のうち、同時刻に平行して存在する別空間。時間の流れが違うんだ。こっちの一時間が、あっちの一週間に相当する、という……のは極端だけど、ま

あ、ウラシマ現象が起こるような感じだ。で、俺らは、教師どもがマークしたその空間に跳躍んで、指定された敵を、力をあわせて倒し、証拠品を持ち帰る」

「証拠品？」

「そいつの身に着けてる、これだよ」

テッセンは、着物のふところに突っ込んでいた腕を出し、袖をまくりあげてみせた。彼の右腕には、アームレットを模した装身具が巻かれている。「もしくは、これ」胸元から、首に下げたマテ研の紋章の入ったカードを出す。もちろん、リヒトも持っているものだ。それを見て、リヒトは急に不安になった。

「相手は、人間なの？」

「いや。粒子を浴びた動物。俺らの標的はな」

「それって、自然に？　　そういえば、俺知らないけど、動物も変化するの？」

「何例かはあるはずだ。でも、俺らが戦うのは、マテ研が、わざと変化させたやつだよ。なんだ……怖いのか？」

「動物に怪我させたりとか、そんなひどいことできないよ」

眉をひそめるリヒトに、テッセンは「まあなあ」と頭をかいた。

「でも、しょうがねえ。それに、現物みたら、そんな気なくなる。もろに、危険動物だってわかるぜ。やらなきゃやられるって。もちろん、安全装置がついてるから、やられる前に、元の空間に戻れるようになってるけど、そうすると、一年間笑いもんだし、合格ももらえないし。まあ、お前は俺がついてるから、どっちみち問題ないだろうけど」

「ふうん……」

「駄目でも、俺がカエデに頼んでやるから、大船に乗ったつもりでいろよ。あいつ潔癖だからわかんねえけど——まあ、あいつもお前のことは気に入ってるみたいだし、大丈夫だろ」

「……え？」

弦の音がやむ。

「どうしてもあれなら、今度、遊びがてらあいつの家に行ってみるか？」

「ちょっと待って」

がさり、と音がして、再びリヒトが垣根をかきわけて頭をだした。今度は、体ごと半分垣根に埋もれている。本当にびっくりしたときの顔をしていた。

「なに？ その言い方。カエデとなにかあるの？」

彼の剣幕に、いちばん驚いたのはテッセンである。友人が、操作実践の教師を慕っていることはなんとなく気付いていたが、あからさまに頬を染めた様子に深く驚いた。やや呆然と「親戚だけ」と答えると、リヒトの目が――たぶん見間違いだろうが――ぎらりと光った。

「親戚！？　なんで!？」

「あ、いや、もちろん血はつながってないけどな」

「聞かせて」

リヒトは、弓を地面にそっと置いて、垣根をがさがさと抜け、テッセンの隣に座り込んだ。

テッセンがざっと語ったところによると、こんな話だった。

テッセンの祖父は、もともと関西で、流通に関わる事業で財をなした一族の跡取りだった。自分が会社をしょってたつにあたって、さらなる市場を開拓すべく闘志を燃やしていた彼は、そのころできた平安ゲッターと外界との間でやりとりされる日用品や、平安人が使う、さまざまな古いものを商う仕事に興味を持ち、勉強をはじめた。やがて、三十代のころ、つてを頼ってゲッターに出入りする資格を得ると、ゲッターから外界、外界からゲッターへという流通業をほぼ独占することに成功する。何らかの政治取引があったに違いないが、テッセンはそこまでは知らず、ただタイミングが良かったのだろう、と言うにとどまった。というのも、そのころは、ゲッターへの偏見がピークに達した時期で、誰も、ゲッターに関わる仕事を避けていたからだ。しかしそれが、祖父にとっては、千載一遇のチャンスだった。

青田買いに走る男に大半が向けるまなざしのとおり、彼は当初、変わり者あつかいされた――身内からも批判の声が出るほどだったが、それは、結果となって現れた利益の前に、やがて雲散霧消した。さらに彼は、ゲッターの情報を逐一外界へ持ち帰り、粘り強く紹介した。魔や霊が当たり前に存在し、昔ながらの街並みでゆったりと暮らす、平安人の幽玄の生活が、見習うべきものであると周囲に説いたのだ。のちに、ゲッターの一部を、自然景観にすぐれた保養地として売り出す財団の理事も務めたが、それはさておき……

やがて、努力のかいあって、徐々に、ゲッターへの差別は沈静化していき、商売がしたい、という会社も現れるようになった。しかし、そのころには、初期に参入した藤原流通（株）の地盤は堅固な

ものとなっており、他のどの業者も、藤原にお伺いをたてなければ
ゲットー内に入れない、というのが暗黙の決まりになっていた。以
来、流通に関しては、藤原家の寡占状態が続いている。一代を築い
た当人は惜しくも八年ほど前に亡くなったが、今でも人々の記憶に
深い。嘘か本当かはわからないが、孫であるテッセンが変化した子
どもとして生まれたことで、ゲットーとの結びつきがさらに強化さ
れた、よかったよかった、と放言していたという話もある。

そこからはじまった話を粘り強くリヒトは聞いていたが、気が急
くままに先を促した。

「ねえ、カエデは？ それとどういうつながりがあるわけ？」

「えーっと。カエデンちのひいじいさん、知ってるか？ お前、じ
いさんのゴーストを見たんだったっけ？」

「うん」

「じゃあ、そいつがきつと、ロレンス翁だな」

カエデの曾祖父、ロレンスは、大西洋連合におけるゲットーの創
始者のひとりで、人間の代表として、天使との対外交渉にあたった
人物だった。そして、ロレンスの妻はかつて日本の大学に在学して
おり、テッセンの祖父の級友でもあった。ゲットーに関わる仕事を
しようと志を同じくする二人は、女友達であり妻でもある女性を介
して知り合い、意気投合した。

「で、義兄弟の契りを結んだわけ」

「ギキョーダイ……、テッセンの家って、ゴクドーなの？」

「ゲットー出現以来、血の繋がりのない親しいもの同士が、そうい
う関係に――ばか、そんな目をするな。純粹にだよ。純粹に、義兄
弟の誓いを結んだんだよ。やくざじゃなくて、桃園の誓いのほう」

三国志の逸話をひっぱりだして、テッセンは説明する。

「死ぬときは一緒だ、ってな重いもんじゃあなかったけどな。とに
かく、血の繋がりのないもの同士でも、個人でそういう、いわば、
同盟を結ぶような友情を育んだわけ。まったく、本当に何も知らな
いよなあ……、で、それ以来、藤原家とロレンス家では、家族ぐる

みのつきあいが続いてるってなもんよ。ロレンス家は、途中で、日本人じゃないけど、アジア系の婿が入って来日して、結局平安にうつってきたし、そのとき頼れるのはうちぐらいだったからな。それで、うちの親父世代もすこぶる仲がいい。お互い、孫とひ孫が変化しちまったっていうのも、共通したし」

テッセンはそこで、おそろおそろリヒトを見た。羨望のまなざしとまともにぶつかる。よく見ると、少しだけ青緑がかったリヒトの真っ黒な瞳は、無頼漢のテッセンでも容易に想像がつくほど、恋の魔法に――ゲットー流に言えば、恋の魔的に染まっている。

「お前、カエデのこと、本当に好きなんか？　そういう意味で？」
しばらくたってから、リヒトはため息とともに「うん」とうなずいた。うつとりと、そこにカエデがいるかのように視線を泳がせながら――

「だって、あんな綺麗なひと、この世にいないでしょ」

「いるぞ？」

「そういう意味じゃなくてさあ……もう、茶々いれないでよ」

「もうとか言うなよ。気色わるい」

「よけいなお世話。うん、そう。俺、カエデのことが好き。愛してるっていうもいい」

「愛してるう？」

テッセンは目をむく。ときどき、この友人は彼の想像を超える。

「あの髪とか、目とか、肌とか……いいよね。カエデを見てると、俺、幸せ。生きててよかったなあと思う」

「死んでるのに？」

「生きてて良かったなあと思う」

だめだこりゃ、とテッセンは肩をすくめる。

彼自身、こんなふうに人を思ったことはないの、本当には分らないが、たぶん、これが恋なのだろう。平安人でも恋愛が可能なのか、と不思議な気分になりながら、なんとなくリヒトが哀れに思えたテッセンは、思わず言ってしまった。

「そういうことなら協力しねえでもないけど」

とたん、リヒトが「ほんとっ!？」と目を輝かせた。今まで見たことのないすばやい反応であった。こいつ、食い気以外にも大事なことがあったんだな、と内心で驚きながら、テッセンはうなずいた。「やったあ!　じゃあ、俺、お礼に今度、タエコさんに、テッセンが学校でとてもいい子になったって口ぞえしてあげるからね!」

「ちょっと待て。なんだそれは」

「だって、泣かれるんでしょ、ときどき」

「そりゃ、つい最近まではお世辞にも成績がいいとも素行がいいともいえなかったけどよ」

「そのかわり、本当に、ちゃんと協力してよ。まずはカエデに恋人とか好きなひととかいないかどうか聞いて――」

しかし、そのほほえましい計画は長くは続かなかった。

「こら、不良」

ぎくり、と二人は体をこわばらせた。おそろおそろ上を向くと、垣根の向こうから、弓道師範の顔がのぞいている。白髪交じりの髪を後ろで束ねたひよろりとした体躯の中年男は、道着に草履をひっかけて彫像のように立っていた。ばつの悪そうな顔になった二人を見ると、ふ、と吹き出す。二人は、あわてて立ち上がる。

「すみません」

シュウという名前だけは、テッセンも知っていた。リヒトが頭を下げると、シュウはやれやれというように二人を見比べる。テッセンの上に視線が止まったとき、軽い凝視があった。

「ふうん。びっくりの組み合わせですね。なんだ、君たち、友達なの」

テッセンは、じぶんが、教師たちのあいだで有名なことを知っている。出自ではなく、前述の、素行という意味でだ。警戒のメーターはぐんとあがった。

「何か文句でも？」

「ふうーん」

シュウは、テッセンのつんつんした物言いにも眼光にもひるまず、彼を見回した。競売台にのせられた家畜を見る目だ、と気付いて、テッセンは身をかたくする。しかし、飄々とした態度を崩さないシュウは、やがて、くっ、と首をかしげた。

「剣道をやってみましたよね？ 今も？」

「今はなにも」

「そう……、じゃ、弓、やってみない？」

「は？」

てつきり、武道をさぼっている小言をくらうと思っていたテッセンは、とまどった。

狐目の、変な男——そういうえばこいつは、カエデと仲が良かったのでは、と思い出す。そんなことは露知らないシュウは、テッセンの肩に手をおくと、立派な体格をたしかめるようにうんうんとうなずいた。

「いやあ、君が初等部にいるときから思ってたことなんだけどね。」

君は、体つきは立派だけど、中身が伴ってない。ちょっと、子どもっぽすぎるし、短気だし、その武道向きの体を、心技体のうち、体しか使ってないでしょう。それで剣道をやったってね——いや、もちろん、剣道だって、精神の修練という意味ではすぐれたものですよ。でも、ほら、ああいう、本当に戦うための競技って、反射神経を使いすぎるところがありますからね。その点、弓で一番大事なのは、待ちの姿勢ですから。引いて、弓が矢から離れていくのを泰然自若と待つ。今は合同授業週の前だから、和弓はお休みして、実戦弓をやってるけれども、リヒトもいることだし、どうですか、この際。弓道部、君が入ってくれたら、団体ができるのですけどね」

さらりと言われたが、前半はほぼ悪口だ、と気付くのに五秒かかった。テッセンは毒気を失って、後ろに一步下がる。

「俺、剣道やるんで」

「おや。本当ですか。いやしかし、剣道部は今日、合同前の合宿に出ているはずですが、君は一体、体調でも悪いのですかね？」

「これからやるんです」

仕方なくそういうと、リヒトが「テッセン、剣道部入るの」と間抜けな質問をした。黙れ馬鹿、ともいえないでいると、シュウが「そういうことなら、私がキョウタローに言っておいてあげましょう」とにこりと笑って両手を打った。

「いえ、結構で……」

「遠慮せず、先生に任せなさい。私の相棒とキョウタローの相棒は仲がいいのですよ。すぐに走らせましょう。万事うまくゆきますよ。いらっしやい、羽咋」

一匹の、立派な体格の柴犬が、どこから弾丸のように飛んできて、シュウの足元に止まった。きりりとした顔は、犬ながらひきしまつて、賢そうだ。命をまつ使い魔をよそに、テッセンとシュウはしばらくにらみ合っていたが、やがて、リヒトが横からぽつりと「そうしたほうがいいような気がするな」と、羽咋と呼ばれた犬に目を細めながら呟いた。テッセンは顔をしかめたが、リヒトは膝をつき、「お手します？」などとシュウに尋ねながら、彼を見上げた。「ミサビも言ってた。けっこう、いいところまでいったんでしよう、もったいないよ」

「いや、でもなあ……」

「携帯武器は、どうせカタナなんでしょ。それなら、剣道部が今、実習にむけてずっと訓練をしてるじゃない。いい機会だから、混ぜて、カンを取り戻したら？ 家の庭で、ひとりでぶんぶん振り回してるより、よほど健康的だと思うな」

「じゃあ、決まりですね。さて――リヒト、君、その弓持って帰っていいから、とにかく、引きの練習してくださいね。明日までになんとか初射までもっていきますよ。さあ、練習再開」

師弟が弓道場のほうへ向かっていくのを、呆然とテッセンは見送った。

平安学園中等部および高等部の女子寄宿舎は、男子の住むミノムシ寮の向かいにある。建て替えられてまだ二年と建っていないため、設備はいきとどいて、どこも綺麗だ。

しかし、今寮にいる生徒の数は、いつもの半数にも満たなかった。秋休みということもあって、平安市に実家のある内部生はほぼ帰省しており、また、用事をすませてこれから帰る、というものもいて、どことなくうら寂しい空気が寮内にはただよっている。

中庭のポーチにある休憩所に座ったマチコは、のんびりと手足をのばして、十月の紅葉しつつある庭を眺めた。

彼女は、初等部から寮住まいだ。帰る場所のない残留組のひとり。昔は、休みのたびに家へ帰っていく内部生の友人や先輩、後輩の姿を見ると、うらやましいやら悲しいやらで涙が出そうになったものだが、今は違う。かえって、人のいない寮を――女子寮というのは、とかくどこでも甲高いおしゃべりが絶えないものなので――こんなふうに静かなのも、たまにはいいものだと思うようになっていた。

寮が建て替えられてから、表の通りをはさんで男子寮から見られるおそれのある庭は、完全に寮の建物に隠れた。おかげで、こうして、あれらもない格好もできるといふものだ。まきスカートのすそがまぐれて足が見えても、ちょっと胸元の開いた服を着ていても、気にすることはない。デッキチェアにふかぶかと腰をおろして、ふりそそぐ日差しに、ひととき、まぶたを閉じる。

美術部の課題を手元でこなしながら、頭では、いろんなことを考えた。外国のゲットーに交換留学生として行っている友人に送る手紙のことや、実習のことや、それで決まってしまう今学期の成績のこと。故郷のこと。

「何を作ってるんですか？」

そういつて、ふと、彼女の手元を覗き込んだのは、中等部一年のアスカという少女だった。

「んー。意匠研究部で作ってる、武具につける飾り」

「すごい。高校の」

意匠研究部、というのは、高等部芸術科に在籍する生徒たちが起こした部だった。武道芸術のうち、芸術を選択した中学生のなかで、憧れの部である。そこには、単に手先が器用というだけではなく、職人として素質があると見込まれた生徒たちが所属している。彼らは、平安市にある職人組合と連携して、刀などの武器から手ぬぐいなどの日用品まで、とにかく、技術を要するものづくりを日々実践していた。意匠研究部イコール、芸術系技術職におけるエリートである、という証明でもある。というわけで、近年では、芸術選択の生徒のダントツの人気を、意匠研究部は誇っていた。

そして、人気の秘密はもうひとつある。意匠研究部に入部できれば、卒業後、職人組合に所属して、平安市で技術を提供して生計をたてることができるだろう、と暗にみなされるからで、そうして見習いを経て独立すれば、軍属を免れることができるのだ。

マチコは、自分の手先の器用さと、どうやら戦闘むきではない体つきや性格からして、すでにこれしかない、と進路を決めている生徒だった。

もともと、絵を描いたり刺繍をしたりという細かい作業も好きだったし、才能もあった。中学二年ながら、意匠研究部の研究生として、高等部にも出入りしている。

アスカは手元をじっと見ていたが、同じ進路を希望するものの、深い懊悩のため息をついた。

「無理かもしれないわ……」

「染色は？ あなたの染め、私、好きだよ」

「最近、それが、わからないんです」

「スランプ？」

「大きなものを作りたい、と思うんですけど。それにはやっぱり技

術が必要で——それを体得するまでの道のりを思うと、くじけそう
で」

「私もだよ」

「マチコ様も？」

女子寮では、目上の人間には様づけとなっている。同級生にはさん付け、親しい下級生だけは呼び捨てが許される。規則として徹底されているため、女子たちの会話は、寮ではどこともなく時代がかって聞こえる。しかし、これもまた、いざというときの訓練の一環だった。なにしろ、男尊女卑の時代にとばされて、学校と同じように男子と同じ口調で喋っていたら、眉をひそめられ、けなされるのは自分なのだ。女子たちは、なによりもそれを理解しているので、かたくなにこのルールを守った。そして、男子たちの前では、寮内でじぶんたちの口調が変わることなどは、おくびにも出さない。まるで演劇だわね、と彼女たちは自嘲する。

「上には上がいるもの。私は、子どもはできるけど——だからといって、持ちたいかというのと、そうでもないから。とにかく、一歩ずつ進んでいくのに障害なら、要らないし。そのくらいの覚悟がないと、平安で職人としてやっていくのは無理だろうしね。男子だって、細かい仕事を女よりすばらしくやってみせるものはいるから、とにかく、やるしかないと思ってるわよ」

「そうやって、思い切れればいいんですが……」

アスカは、かたわらに腰を下ろす。ポーチはタイル張りで、中庭にむかって緩やかに階段が続く。その一番上に腰掛けたアスカは、庭の草木を眺めながら、ぼんやりとため息をついた。はんなりとしたピンク色の花を咲かせていた百日紅は枯れて、そろそろ銀木犀の香るころだ。秋の空は高く、白いチョークで塗ったようたまばらの雲が、粗く青を透かしている。

「いずこよりか、秋風、至る」

中唐の詩人の漢詩を口ずさむ後輩につられて、マチコも庭を見た。
「雁が群れで来る、というのには、まだちょっと早いけどねえ——

あれ」

「馬車ですね」

一台の馬車が、裏門の前に止まったところだった。車体に書かれているマークを見て、二人は顔をみあわせる。マテキ研究所の紋章だった。ドアが開いて、制服を着た男子が降りてくる。銀モールが遠目から光って見えたが、その顔を見ずとも、彼女たちには、誰なのかすぐにわかった。

「シン様だわ」

「本当ですね。じゃあ、また……」

シンに続いて降りてきたのは、銀色の髪に似合う装いを美しく着こなした少女、ミューである。二人は親しげに話している様子だ。やがて、守衛に外出カードを返したミューが、ひとりで裏門のドアから中に入ってきた。シンは、黙って彼女を見送っている。

「……シン様だけは、あの女にひっかかってほしくなかったです、私」

「うん。外泊って、隣の子が言ってたけど、また……だったんだね」

ミュー——女子寮のベラドンナ。彼女と、高等部のやんごとなき家柄のシンの交際は、女子寮ではとくに知られた事実だが、このことを、大半のものは腹立たしく思っている。表立って批判が出ないのは、ミュー自身の鉄のような対応と容赦ない反撃が、ただただ怖いからだった。

だから二人も、こっそりと悪口を言い合う。

「限度ってものがないのかしら。シン様に、どうやっておねだりしたのか……、いくらなんでも、マテ研の馬車で送ってもらうこと、ないと思いませんか。寵をかさにきて威張る妃みたい。ポンパドール夫人でも気取ってるつもりでしょうか」

「しょうがないわ。冷たいとか厳しいとか、なんだかんだ言っても、あのひと、美人だもんね。クール、っていうんだよね、ああいうの……、外の世界では」

「私は、カレン様のほうがずっと綺麗だと思いますけど」

「私もそう思うけど、しょうがないわよ。ああまで厳しくできるひとじゃないと、たぶん、女子寮なんかまとまんじゃないと思うし。リーダーシップのあるひとが、シン様は好きなのかも」

「他の男も……、ですか」

「きつと、私たちにはわからない魅力があるんだよ。きつと……」

会話が尻つぼみに消えたのは、二人の後ろにドアがあるからだ。銀杏の葉の連続した柄の、銀ねず色の風呂敷を手にしたミューは、ゆっくりとした足取りでやってきて、デッキェアと階段に並んで座る二人をちらりと見た。ワンピースからのぞく鎖骨のくつきりとした胸元が奇妙に艶めいて、疲れたような表情が、なんだかんだ言いながらうぶな少女でしかない二人に、情事という言葉を思い出させ、あわてさせた。ミューは二人を見ると、少しだけ眉をひそめて、そのまま寮のなかに消えた。

「緊張したねえ」

「ええ。本当に」

嘆息しあっているところへ、再び、ドアが開く。背後から

「冷えるぞ。使え」

——ミューが立っていた。ポーチからガラスを隔てた寮内のスペースは共用の談話室で、そこに置いてあった毛布を持っている。放り投げられた毛布を受け取って、顔を見合わせていると、「いい加減にしないと、体冷やすからね、あんたたち」——捨て台詞を残して再び消えた。

今度こそ、鬼の銀色が戻ってこないのを確認すると、マチコは肩をすくめた。

「と、いうことで、悔しいけど、なんだかんだいっても、ああいうところがさすがだなあ、と思ってしまうのでした」

「右に同じ」

マチコは、薄手の巻きスカートに綿のシャツブラウスを着ただけ、足元は、素足に草履ばきである。アスカも似たようなものだ。午後に入ると気温がぐっと下がる季節だから、心配されるのも無理はな

かった。

それにしても、ミューが“大半”に入らない一部の女子から、圧倒的な指示を得ているのもうなずけるできごとだったので、二人は、もう悪口を言わず、秋の休日を静かに楽しむことにした。

どこそこの菓子がおいしいとか、小物がかわいいとか他愛のない話をしたあと、談話室にうつる。やがて、居残り組の仲良しグループがやってきて、結局はミューとシン様の噂話で取りとめもなくなるのだったが――

さて、その、女子寮から去っていく馬車に乗り込んだシンは、ミユーがいなくなってからようやく、手元のファイルを開くことができた。一枚の紙片に細かく書かれているのは、つい最近平安学園に転入した生徒の詳細な情報だった。

「やっぱりか」

間違いなく、彼が瀬田理非等であるという動かぬ証拠を手にして、シンは不思議な気持ちになった。まさか、こんな形で出会うとは思ってもみなかったのだ。しかも、彼の存在は、つい最近シンが知った大事な情報に、深く関係していた。

「口をふさぐ方法が、ないではないですよ」

彼の前に座る、マテキ研究所の所員が、こともなげに言った。

「気になるのなら、やっておくべきです、今のうちに。死人ですからね、もともと――」

「古くからの知り合いを殺せと。――もっと機嫌を損ねてほしいのですか？」

「失礼」

フェアじゃない。と自分でも思ったよりきつい言い方になったが、それが効いたのか、男は口をはさむのをやめた。シンは窓から外を見る。さきほどまで彼の隣にいた女のぬくもりが、すでに懐かしかった。

「でも、定着したんだからね。たいしたもんだ……あちらは、気付いているのかな。飛来人のかたがたは」

「まだですよ。というか、そう思いたいものですな」

鷹揚に言ったのは、彼の目の前に座る、もう一人の人物だ。亜麻色の髪に堂々とした巨体を、濃紺のスリーピースに、いやらしくな

く包んでいる。胸からたらしした銀色の鎖を引っ張り出して、懷中時計の時刻を確かめた。時計の蓋には、地中海ゲットー、メディテラネウスの紋章。この男、テオドール・ティセリウスが現在の市長を務めている。

「ヘイアンの市長が亡くなって以来ですな、こちらは――懐かしい。わが友、クサマ・タローの治めた街」

彼は、かつての盟友の名を、たいした感慨もこめない様子で呟いて、タッセルの房をひいた。カーテンが左右にわかれ、秋の光が薄く馬車の中にさしこむ。

「今の市長はなんといいましたかね」

「シローですよ。ファミリーネームは同じです。チェンバー・オブ・グラス。前市長の弟君」

最近交代したばかりの平安市長の名を答えたのは、マテ研の所員だ。ティセリウスは笑ってうなずいた。

「ああ。そうだった、そうだった。シローね。タロー、シロー。似てるから、間違わないようにしないとね。……しかし、安心しましたよ。タローは人間だったから、しょせん、われわれの気持ちなどわからない。その点、シローならば、大丈夫だ」

四人乗りながら、ゆったりとした作りである。その、動く箱の中で、ティセリウスの声は深くよどみなく響いた。市長だの、世界だの、首相だの大統領だの、同乗しているのが一介のハイスクール・ステューデントであることを、内心快く思っていないことがみえみえの話題選びで話は続く。おまけに、先ほどまでは、中学生の女の子まで一緒にいたのだから、ずいぶん不満がたまっていたのだろう。怒涛のように喋りだして、止まらなかった。シンは、彼自身の内側にある苛烈な部分を、今出してはいけないと必死でおさえながら、愛想笑いを口の端に浮かべて黙っていた。

「それで」

波が途切れたところで、シンはゆっくりと呟いた。

「そちらの処理はいかがだったのでしょうか？」

「一個大隊かかりましたね。どうやら、迷宮に入ったようだ、という話です。あとから搜索したら、体だけ出ましたよ。もちろん、再利用もできない状態でしたが。脱出できたのは、イチカだけだった。まあ、彼の体だけでも無事でよかったのでしようがね、シローがちゃんとこちらで守るというから……なぜ、会わせてもらえない？

あれはもともと、こちらのものなのに」

「ハル・ミゲルを失ったのは痛手でした」

シンは話題を変える。あからさまな方向転換だったが、気付かない、というジョークが売りのティセリウスなので、すぐにうなずいた。

「ええ。イチカが最後まで助けようとしたのも、おそらく、それでしよう」

「貴重な才能でしたよ。切り札でした。失うべきではなかった。よりによって、二人を一緒に隊に入れることはなかったですね。大事な……、仲間——だった」

「ええ、そうでしょうね。まあ、でも、しかし、次を考えるべきでしょう。ここには、後継がもういるのだから——よりすぐれた後継者が」

目を細めてシンの全身を見る。シンは、ぞっとした。イチカとハル・ミゲル以外の兵士については言及しなかったことが、この市長の能力主義を端的にあらわしていた。彼にとって、名もなき者とは、すべて踏み石にしか過ぎないのだろう。

冗談じゃない。

リヒトは渡さない。

シンは、ファイルを隠すように自分の鞆におさめてティセリウスをにらんだ。もちろん、あからさまにねめついたりはいしない。表面上は笑みを絶やさず、おっとりと言をかしげると、自分でも自覚している美貌が、壮年の男にもたらす効果が絶大なのを確かめる。

「君にもぜひ、うちに来てもらいたいものだね。どうかね、留学生として、まずは1、2年でも。歓迎するよ。もしそうしたいなら、

あの美しいお嬢さんと一緒でもいい」

とろり、と妖しげな光をおびて、ティセリウスの目がシンの全身をすばやくなめる。美しいお嬢さん、とミューを称しながら、目の前の男が、どちらかといえば同性のティーンエイジャーに、嗜好の重きを置いていることを、シンは悟った。

吐き気を感じたがだまって微笑んでいると、マテ研所員がやれやれというように首を振った。腐っても平安市に所属する所員なので、シンのほうに同情を感じたのだろう。それとなく「今日の実験はいかがでしたか」と話題を提供した。ティセリウスはすぐに食いついた。

「すばらしかったね。一度、実戦で使ってみたいものだ。どうして、平安市は、高校からの飛び級を認可していないのかね。君なら、すぐにでも少佐だよ。いや、大佐だよ。うちにあるゲッターなら、そうだね、ロンドン常駐の軍の副司令官相当の地位が準備できるよ。語学も問題ないし、君ほど美しければ――私が部下なら喜んで指示に従うね」

「容貌は関係ないと思いますが。私ではまだ経験不足ですよ。それに、そちらでは、平安市に対する不満がさうとう強いそうじゃないですか。私はどう見ても平安人の顔をしている。よそのアジアングッター人だといって通用するほど、そちらの人間も甘くはないでしょう」

大西洋連合にある5つのゲッターのうち、もったも問題なのが、かつて市民が属していた宗教や民族による対立だった。平安市でいわれる外部生と内部生の対立など、及びもしないほど深い根である。キリスト、イスラムの昔からの対立に絡まって、元の国民の領土問題や紛争問題などで、市民同士の殺し合いまで起こるありさまだ。くわえてメディテラネウスは、もともと民族対立のあるトルコとギリシャ、そして中東に、大西洋連合でもっとも地理的に近いいため、なにかととぼちちりを食うのだった。これは、近隣のゲッター同士の流通をよくして経済を活性化させるべしとの決まりがあるからで、

まだできたばかりの中東ゲットーの面倒は、大西洋連合が抱えるゲットー5つのうち、メディテラネウスが担当しろよという他ゲットーからの圧力のためである。

だいたい、同じゲットーでも、内情はかなり違う。

アジア圏で、民族対立という点で唯一似たような環境なのが、元中国内陸部にある崑崙市、通称、クンロン・ゲットーだ。中国も多宗教国家で、民族によって信仰が違っていた――朝鮮系は仏教およびキリスト教、ウイグル、カザフ系はイスラム教――モンゴル、チベットを中国と呼ぶことは今ではないのだが――一応中国の属国だった時期もあったためクンロンゲットーにいて、彼らはラマ教を信仰していた。

ただし、中国全体のすべての宗教の背景には、道教といわれる、日本でいう神道のようなものや、土着の信仰があった。殷周時代に、多神教であるそれらが根づいて数千年、なんとなく、この国も日本と同じように、仏教徒でもクリスマスを祝い、地元の廟にお参りもし、モスクを観光して礼拝の真似をしてみたり、という、宗教に対する寛容というか、単に垣根が低いというか混沌というか――の空気があって、今ではすっかり、もともとと同じ中国人だよね、一緒にあの共産一党体制に耐えてきたよね、という意識で仲良く暮らしている。仲良く、という言葉に語弊があるのなら、融通しあって、とか、寛容の心で、というところだろう。多少の小競り合いはもちろんある。だが、変化して失われたアイデンティティーを、もとの信仰ではなく新たな地に求めた、という点で、はるかに、賢明といえた。

地中海ゲットーは、迷走している状態だった。そこでこのティセリウスが臨時にとった対策を、シンはまったく評価していない。ところが、他の大西洋連合ゲットーではそうでもないらしい、というのが、得心がいかなかった。

声高にではないが、ティセリウスは、変化した人類であるわれわれは、もとの人類を駆逐して、よりよい土地を手に入れ、人間たち

の代表として天使と相對するべきだ、と主張しているのだった。つまり、人類と戦争して倒し、支配せよ、ということだ。国内をまとめるために、外に敵を作る、というのは、歴史上頻繁に見られる“政治手法”であつたが、自分たちが人間よりすぐれているとするのなら、人間と同じような惨事を起こすような馬鹿な真似をしたくないものである。しかも、ティセリウスはまず、同じゲットーに喧嘩をふっかけた。彼の意見に同調しないゲットーの市長を、自国の安定にだけしか関心を向けない利己主義者だと言って口撃していた。ことに、島国で、もともと、民族対立がよそに比べれば圧倒的に少ない日本の平安ゲットーなど、はつきりと批難の対象である。市長である彼の意見が、このごろでは市民にも浸透しつつあるらしい。平安ゲットーに対する偏見の目は、確実に育っていた。

軟弱とか他国に関心がないとか、まるで日本国の国民性を反映したような、というのがその偏見の一部である。送り込んだ留学生が、多少その印象を拭い去ってくれているのがせめてもの救いだ、が、完全に否定できるほどの的はずれでもないのが頭痛の種だった。

しかし、今度の市長、草間士郎は、彼の意見に歩み寄りを示している。ティセリウスの今日の訪問は、外向けには、マテ研日本支部の視察だが、内実は、新市長である草間との個人的な会合が目当てだ。

馬車は、ゆっくりと、大正区に近づいている。外界でいう、旧岩崎家——三菱財閥の社長一家宅を模してつくられた草間家の邸宅が見えてきた。

草間士郎は、ティセリウスに同調して平安を変えてしまうのだろうか。この、名前の通りうららかで美しい自治区を。

シンは、自分がもっと早く生まれてこなかったことを齒がゆく思う。彼もまた、与えられたものの傲慢さで世界を支配しようとするものの一部だったが、今はそれを自覚していなかった。

燃えるような野心を宿した少年の目が、自分を通して草間家の邸宅に向けられているのを見たティセリウスは、密かに笑った。

女子寮二階の隅にある自室で、ミューはようやく重荷を脱ぎ捨てた。彼女の銀色の髪に良く似合う、清楚を装う白づくめ――シルクの純白のワンピースに薄水色のサッシュベルト、純白エナメルのレストランシューズにストッキング。そのほか、出発前のごたごたで、床いっぱいに散乱した洋服を横目に、背もたれつきの籐椅子に体をなげだして、下着姿で天井を仰ぐ。

今日はデートだと言われていた。だが、実際は、シンから商売女のように――いや、単にマスコットのようにか――連れまわされて、とことんまで馬鹿にされた気分になっていた。彼女は、拳で、そばにあった勉強机を叩く。何度も何度も叩いた。腹立たしさがそれで消えると考えたが、いつまでもすっきりしない。

天井につりさげた籠から、白い蛇がするりと下りてくる。黄色いトパーズの瞳が、吊り下げ式のランプを覆う、唐風のほやから漏れる光できらめいた。

「ご機嫌斜め」

しゅう、と、爬虫類独特の呼気とともに、ハスキーな声が彼女の肩にふってくる。

「それとも、お疲れ？」

「あんたは黙ってな」

「おお、こわ……」

蛇は、もどどおり、籠の中に戻っていった。

ミューは、備え付けの給湯器からお湯を急須に注ぐ。粉末のミネラルを溶かし込んで、うろうろと立ったまま、少しずつなめるように飲む。昨日からの外泊で、暖房の調節がなされていない部屋は暑

かった。温度を下げて、衣桁にかけてあった黒い綸子をとる。ひっかけるように袖を通し、ゆるめに帯をしめる。

女子寮では、中学生のうちは二人部屋と決まっているが、今、この部屋を使っているのは、ミューだけである。女子中等部寮長という肩書きのおかげだが、彼女は、一年のときから一人部屋だったので、さほどありがたいとは思わなかった。当然のことだと考えていた。何のために努力をするのか、優等生でいるのか、目的ははっきりしていた。

すべて、シンの期待に応えるためだ。

完璧な女でいること。完璧な娘でいること。完璧な生徒でいること。周囲の女子たちは、彼女にとっては子猫同然だった。扱いやすく、優しすぎる。甘やかでいとけなく、ただひたすらそれだけだ。そしてミューは、それだけに腹がたつ。マチコという二年生の小娘をはじめ、一部の、技術に見所のあるものをのぞけば、自分に匹敵するだけの“女”が存在しないような気がして、嫌になる。そしてそれこそが、とりもなおさず、自分が女以外のものであることの証拠のように思われる。

怒りが軽い自己嫌悪に変わったところを、

「もうじきあれだね。中学生は。なんてったっけ」

機嫌がややよくなったとみて、蛇が話しかけてきた。

「ええっと、なんかの授業よ、ねえ？」

「操作実践の実習授業。合同授業週間」

「ふうん。あんたも、今年は参加するの？」

「見学よ。調子が悪い」

「また？」

「そう、また……」

ミューはカップを持ったまま肩をすくめる。持て余す力と裏腹に病弱な自分の体が、ミューは嫌いだった。他人に対するきつい態度も、完璧主義の性格も、すべてそれをカバーするためだとは誰も知らない。知っているのは、相棒であるこのルーと、それから――

「あんたが死んだりなんかするから」

にらんだ壁には、写真が貼られている。珪藻土を塗った壁は、彼女のシルエットを白い壁に映している。イチカ・レオン・ワン・ロレンスの生前の姿――まだ少年時代の彼は、異国の町を背景に、夕暮れの中で笑顔をみせている。その隣にも写真があったが、ミューは顔を逸らした。ふたたび怒りで胸の中が染まりそうだったからだ。「墓に会ったわよ、そういえば。イチカじゃなくて、別の人についてみたい」

ふと、思い出したように、ルーは報告した。とっておきの話題らしく、そっけないそぶりで「すごいわよねえ」と言った。

「ああ……」

のってやることにして、ミューは聞き返す。

「そうか。他には？」

「ひゅうがって奴がいるでしょ。中学の、ワサビだかムササビだかの相棒の」

「ああ」

成績優秀者の上位にいる、茶髪の、軽薄そうな少年。ミューはルーを振り返り、まさかと思いながら「何か動きが？」と尋ねる。蛇は「ううん」と器用に頭を振って、「でも、相変わらずこそそそと、なにかをかぎまわってる。シン様に報告したら？」と言った。

「なぜ」

「僕たちカクリヨのものにも、好奇心ってものがあるのよ。ほかのが同調してくると、まずいんじゃない」

「まずいって、なぜ。一揆でもするの？ あんたたち」

「しないけど」

「ならいいよ、別に。……三柱だって、気にしないわよ別に。自分たちさえきちんと祀られているなら、伊勢だろうと北極だろうと、別次元であってもあの方々はご機嫌うるわしくあらせられるんだろうからね」

「そういう言い方はちょっと……」

蛇は、息を飲んだ——正確には、息を飲んだように見えた、ということだが、彼女は、ルーが感じた恐れやおののき、戸惑いを感じ取って、急いで「ごめん」と謝った。

「言い過ぎたね」

「ううん。……いい、かまわないのよ、僕はぜんぜん。ミューに聞いて欲しかっただけだし……ただね、僕が気付いてるって事はね、他の連中から口伝いに、もっと上のほうの奴にも気付かれてるってことがあると思うのよ、ってこと」

「そうだね……」

主従は、天井とベッドにそれぞれ陣取る。ミューは寝転び、裾の乱れを気にせず足をゆるくハの字に広げて、軽くまげたひじから伸びる、白い手の甲を額にあてた。ほてっている。

「私って馬鹿だなあ」

ぽつりと呟くと、ルーは、彼女がこうなったときにいつもするように、黙りこんだ。独白のようにじぶんに対する呪詛を吐き出しながら、ミューは頭痛がひどくなるのを感じる。まるで、変化したときのようだ。

「死ねばよかったよ。どうして、どうして、何もおぼえてないんだろう。どうしてこんなことになったのかなあ。なんでかなあ……」

「わからない。何も分からない。このままずっと、シンと一緒にいなくちゃいけないんだろうか。もう嫌だ。逃げたい。でも、もう人間に戻るのはまっぴらだ」

「みんな死ねばいいんだ。くだらない。くだらないよ、こんなの」

しかしミューは、たった一つだけ希望を持っている。置き忘れてきた人間としての人生は泥のようだったが、ぐずぐずとそれに飲まれていくしかなかった彼女は、たったひとつ幸福な思い出を握り締めて生まれ変わったのだ。

ごみのように道具として使われて消えることが願いだった。それで認めてもらえると、浅はかにも思ったが、案の定、途中で折れた心は、見るも無残な成長しか遂げられなかった。客観的に見て、自

分はおかしい、とミューは思う。それを認めたうえで生きていくにしては、体も心も弱すぎる。

だが、もっと弱い存在を見つけたとき、ようやく、これからきちんと生きていける理由をみつけた。

「私が守ってあげる。だから……、生きなくちゃだめだ——どうなってもいいから、一緒に……」

——おやすみ、と、ルーの声が言った。

ハイアン・ゲットー。創建以来百五十年、平和で安寧にみちた、これが、この街の姿である。そこに暮らすひとりひとりにとっては大きな問題であろうが、世界にとってみれば瑣末な、大河の一滴に過ぎないような、わずかなひび割れ。おなじみの、そんなものの寄せ集めでできた都市。住んでいる“もの”が多少違うだけの、どこにでもある、ただひとつにしか過ぎない地方の街。原始以来おなじみの、嫉妬、欲望、野望、恋、名誉、闘争などといった、にんげんくさいものがすべてそろっていながら、そのにんげんくささと、けしてにんげんになりきれない悲しみと誇りが入り混じって、華やかな影をおとす街。

そこに暮らす少年と少女に、今、最初の試練のときが迫っていた。秋の雨が、やがて、窓の外で庭木を洗い流し始める。雨は、平和な休日の最後、ひとときの安息をそのまま閉じ込める檻のように、一晩中降り続いた。リヒトもミサビも、サツキもテッセンも、二年A組の生徒は誰一人まだ知らなかった。他のクラスの、他の学年の生徒も知らなかった。彼らはまだ幼く、弱く、無抵抗だった。学んだことを生かしかるのに十分な経験を積んでおらず、中途にできあがった防衛体系のおかげで守られてきた平和に、あまりにも受身でいすぎた。自覚を持つものはいたが、あまりに少ない。そのために、大変な犠牲が出ることをしかし、自覚しているものでさえ予測でき

なかった。

遊戯がはじまろうとしていた。それは、魔術による遊戯だった。あるいは、偶然の恣意であり、無節操な搾取かもしれなかった。

夜が来て、彼らは、来るべき日のために、おのおのの道具の手入れをし、報告のための数行を空けた手紙を途中まで書いてそこでやめた。動物と戯れ、餌を与え、寢床を整える。その一瞬一瞬が、音もなく積みあがっていく未来への布石だとは気付かなかった。

それは、多くの人間のように。

けして天使ではない、未熟な蛹の見る架空の夢だった――

7 実習

高くなった空は、昨晚の雨のにおいを残したままからりと晴れている。涼やかな風が吹き渡る校庭では、指定された実習服に身を包んだ生徒たちが、三々五々、組分け表を手に、同じ組になったものと、事前の交流を行っていた。

合同授業週間は、通常、春と秋の年二回実施される。春は、学年を超えてチームを組んで行う過去研修、秋は、同学年の生徒同士で行う実力考査である。

その朝発表された、可否を左右する大事な組わけで、リヒトは、テッセンと同じ組だった。おそらく、訪問はかなわなかったものの、アルリシャによる手紙のやり取りのおかげで、カエデが計らってくれたのだろう。リヒトは、それにすらも、一人前とみなされていないのかもしれない、転入生に許された特別措置かもしれない、と恋の盲目で気をもむ。テッセンはあきれながら「馬鹿じゃねえの」と言い放ったが、彼も、友人と同じ組になれたことで、多少気が楽になっていた。

テッセンは、操作実践の授業だけは、成績がいい。それですべての教科を補っているといってもよかった。そして、なににもまして彼にとっての実習は、自分の力を誇示して、“栄光ある孤立”をアピールする場なのだった。自分とそれ以外。チームワークなど感じたことはないし、そんなものに協力してやる気もない。高い身体能力、粒子操作能力を持ちながら、いつも、個人プレーでしか得点してこなかった。

今回は、多少違ったものになるだろう。実習授業で、仲間を意識したのは、彼にとっても初めてのことである。

ただし、嬉しいことばかりでもなかった。彼らと同じ組のメンバーに、ナマモノ・トリオのひとり、コーゾウがいたので、テッセンの機嫌は、結果的には、悪かった。

「ああ……」

「最悪だなあ」

二人をなんとか取り持とうと奮闘するリヒトの隣で、はは、と、静かに、投げやりに笑うのは、やはり同じ組になったミサビである。「いやあ、こんな組わけになるとは思わなかったよ。てっきりいつものメンツだと」

といいつつ、ミサビが、自分の役割を完璧に理解していることは明らかだった。その上で頭を抱えているので、解決策がさっぱり思いつかばないのだろう。リヒトは同情したが、同情するだけでは問題は解決しない。とりあえず、テッセンのなだめ役としていようと決心する。

校舎の影になった校庭で、彼らの担任が、他の教師と話している。打ち合わせの真っ最中のようだ。

二人は、恨めしくそちらを眺めた。表面化していないとはいえ、キョウタローは、自分の担当クラスで起こっている内部生と外部生の対立を把握している。トリオでもっとも内向的で、懐柔の余地があるコーゾウを、まずは口達者で明るいムードメーカーのミサビに近づけて、態度を軟化させる。ついでにテッセンを放り込んで、彼の孤立も解消する。いかにも教師が考えそうなことだ。

「剛腹だなあ。ははは」

ミサビは笑ってばかりである。その隣にいたリヒトのもとへ、むすりとした表情のテッセンがやってきて「言っただけだな」と腕組みした。役割分担についてどうするか、コーゾウの元へ聞きに行ってもらったところだった。

「俺はあいつのサポートはせんぞ。絶対にだ。考えてもみろ。なんで、今まで俺の陰口しかたたいてこなかった奴と仲良くできると思うんだ。頭、おかしいんじゃないの」

「でもさあ……、コーゾウはまだいいほうで」

「黙れ。俺はもう、お前しか助けねえ。おい、副委員長。そういうわけだからな、お前が、あいつと女子どもを守ってやれ。それでいいだろうが」

「うーん。いいけど。でも、それじゃ、補助点がゼロにならない？」

「補助点なんざ、今までなくなっただって合格してら。――むしろくしゃするな。ちよっと水飲んでくる」

テッセンが、給水所に去ったところで、リヒトとミサビは顔を見合わせた。

「どうしても無理かなあ」

「まあ……、一理あるからねえ」

一組七人編成である。一応ではあるが役割分担があって、記録係をコーゾウにやってもらいたい、という通達をテッセンに任せたとこ、どうやら、両者のあいだで、再び口げんかが起こったらしい。ぷりぷりで行ってしまったテッセンの背中を、二人は見送る。そのわきで、女子三人が顔をみあわせた。馬鹿な男どもを、心から軽蔑しているそぶりである。クレール、ジュリア、マチコ。クレールはナイジェリアからの留学生、ジュリアはイタリアからの留学生である。

「僕は、じゃあ、一応、コーゾウを担当するよ。彼と連携できるようにするから、リヒトは、基本的にはテッセンと組んでくれる。女子はたぶん、問題ないだろうから」

「馬鹿にしてもらっちゃあ困りますワ」

「足をひっぱらないでくださる」

クレールとジュリアがそろって抗議する。

「お説ごもつとも……」

「大丈夫なの？」

マチコも心配そうである。いつも、制服にもなにかしらオリジナルの装飾をさりげなくつけている彼女だが、今日はみんなと同じ、

洋装の指定服をあつさりと着ている。細身に仕立てた白いシャツが、釦を外した黒い上着からのぞく。黒の袴に、これも黒い、ごついブーツをはいていた。全体の印象が、かわいらしい、華奢な彼女にそぐわない。自覚しているのか、居心地がわるそうに、余った袖口をひっぱる。おそらく、先輩のおさがりなのだろう。

「あーあ。大丈夫かなあ」

「とかいってさあ、俺よりは戦えるでしょ」

「そりゃ、持ってるだけのリヒトよりはね」

「あ、ひどい」

「冗談。でも、そうか、私が作ってたやつって、リヒトのだったんだね」

長刀を提げたマチコは、リヒトが肩に担いだ弓をさす。握りにあたる部分には、飾り紐がつけられている。所定の場所に弓と矢をセットすると、最大、三本までの矢を一気に射ちだすことができる機械の要の部分を補強するものだった。今朝、支給されたものをリヒトが持っているところへ、あ、と声をあげたので、作者がマチコだと知れたのだった。

とにかく、彼女がいてくれるのだけが、このチームで一番良かったことだ、とリヒトは思った。あとは――

ふと、耳慣れない音が聞こえた。

「ん？ どうしたの？」

きよろきよろと左右を見渡すリヒトに、マチコが首をかしげる。

「いや、今……なんか、変な音聞こえなかった？」

「音？ どんな？」

「なんていうんだろう……」

気のせいかな。運動場には、生徒たちのにぎやかな話し声が響くだけだ。

「あ、おかえり」

「おう」

テッセンが戻ってきた。仏頂面だが、先ほどよりは好転している。
「そろそろだな」

「あ、うん」

と言ったところに、今日だけ使用される、空砲による予鈴が、どこかーん、と鳴り響く。それを合図に、グラウンドへ、靴音を響かせて高等部の生徒が入ってきた。彼らは一列に整列し、教官の合図でそろって脱帽、敬礼した。散らばっていた中等部の生徒も、いっせいに、所定の場所へ駆けた。リヒトとテッセンもまざる。

あつという間に、グラウンドは水を打ったように静かになった。
本鈴まで、あと五分。

うわついた中学生たちとちがって、微動だにせず、前方に並んでいる高校生は、あきらかに異質だった。

「前衛類？だな」

リヒトの様子を察したテッセンが、そつと説明する。

「たぶん、そのなかでも、成績上位の生徒だ。操作実践の。すげえ迫力――だろ」

たしかに、たくましい体躯、圧倒的な体格は、いかにも体育会系の猛者だ。そのうち、ひとりだけが列から外れていた。何かを担当教師と話している――カエデと話している。彼らを中心に、教師たちの会議が行われている。

ふいに、その囲みがとかれて、あらわれた一人の生徒が前に進み出る。ざわ、と主に女子のざわめきがグラウンドを席卷した。

「シン様だわ」

「シン様」

「シンだ……」

色めきたつ女子は、彼のグループにもいた。マチコも、ジュリアも、クレールも、ぼうっとなって前を見ている。

「はあ……やっぱ、相変わらず、かっこいいねえ」

「本当ネ。あのヒトを見られたので、平安に来てよかったネ……」

「ファビュラス……インクレディビレ」

どうやら、シンは、本当に特別な人間らしい。

昔の姿からは、想像もできない。綺麗な黒い髪、艶のある肌、赤い唇。あれが本当に、彼の知るシン——カリンなら、ずいぶん美形に生まれ変わったものだ。

——いや、もともとから、そこそこ整った顔をしていただろうか……

女子のざわめきと視線をもとせず、シン——松岡新は、涼やかな美貌と、若武者らしい日本美をたたえた身のこなしで、拡声器を手に、カエデとまたなにか話す。カエデも、今日は、黒いベストに黒い軍袴、という、準軍属の格好でいる。美しく、凛々しかった。秋晴れのもとの、本当に女神のようだ。

本鈴が鳴った。シンは列の一步前にすすみ出る。拡声器をつうじて、明朗な声が響いた。

「皆さん、おはようございます。本日は、いよいよ年に一度の考查、実習授業です。中等部の皆さん、特に三年生の皆さんは、われわれが転送を担当いたしますので、このあと、ホールへと移動願います。一年生、二年生の皆さんは、先生がたより伝令の後、実習開始となります——」

「ん？ どういうこと？」

「あいつらの訓練も兼ねてるんだよ。高等部の実践の」
こそこそと、テッセンが呟く。

「だから来たんだな。——たぶん、あいつらは、粒子の操作、特に、時間と空間に穴を開ける技術にたけてる連中なんだろう。挨拶してるってことは、やっぱシンがトップってことで」

「穴を、あける？」

「ワームホールだよ。ワームホール作りの達人ってこった」

「ワームホール……」

時空の虫食い穴。そこを通して、過去や未来と呼ばれる場所に行くのだ。

「道筋は教師どもがつけるが、そこへ人間を転送するのには、粒子をつかう操作実践の高い応用力が必要になる。高等部の、二年とか三年で習うんだろうが——うちの三年が、とりあえず、連中の実験台になるってこった」

「過去に行くの？ 未来？」

「俺らと同じだよ。亜空間、だろ。過去に飛ばすのなんか、まだ、無理無理。いくらエリートでも、ここからは本当に本当の素質、才能ってやつが要るからな。あいつらは、未来のエリート候補ってやつだ。まあ、失敗するような連中なら、後輩を実験台にはできんだろうが。奴らも、この実習で、ふりおとされたり、上にあがったりするんだろうな」

「シンって、一年生じゃない？」

テッセンはうなづく。それほどすごい、ということだろう。

「……実習は、三年までは、俺たちと同じような場所だ。でも、いるのは——たぶん、俺たちが相手にするやつと比じゃないくらい強い相手だろう。高等部の連中も、失敗できねえから、びりびりだな。でも、それよりも三年の連中の、死にそうに緊張した顔……。来年、俺たちもあなと思うと、他人事じゃねえよな——特に、前衛希望は、ここではしつときめとかねえと、高等部進学も危ういからな。まずは戦えないと、どうにもならないし」

「え、そんなにシビアなの？」

この週が終わって成績発表も終わったら、二年生にも進路希望表が配られる。個人面談もある。そう聞いていたが、成績によっては希望がふいになるかもしれない、と知って、リヒトはあわてた。

テッセンはまじめな顔でうなずいた。

「定員が決まってるからな。絶対、誰かは落ちる。そうなってる。」

たしか去年は、卒業生50人くらいはいたはずだけど、あがれたのは30人くらいだ。で、落ちたら——他がよほどよけりゃいいが、駄目なら中卒確定だ。中卒だと、ゲッターじゃ、職人になるほか、たいした職にありつけねえ。お前も、高等部行きたかったら、今のうちから気張っとかねえと」

はじめて、焦りを感じた。普通にエスカレーターで行けると思っていた。外では、よほど勉強が苦手でも、みんなとりあえず、高校まで入ることは入るのだ。どんなに頭が悪くても、探せば受け入れてくれる場所はきちんと存在する。

弱肉強食。やはり、ここは現世ではありえない世界だった。今でもときどき、リヒトは、夢を見ているような気分になる。魔法のよくな、だけど、とても厳しい世界。実力主義の世界。だが、そういうと、「法ってのは、ちゃんと体系化されたもんだろ、そういうのじゃねえよ」とテッセンは言った。

「定義するからには、その本質を知っておかなきゃならねえが、粒子ってのは、なんていうか……人によって違うし、まだよくわからねえし。新しすぎるモノだよ。なんなのかさえよくわかってない、モノ、だ。そいつをやみくもに使ってやみくもに進んでる今の状況で、そいつを使う方法を、法とは、まだ呼べない。しかし、本当……不思議なもんだよな。ソジ粒子——そして、それにくつついてる面倒なその他大勢。こいつらが現れてから、本当、俺たちの世界はぐちゃぐちゃだよ。何もかもがはつきりしなくなった。生きているのか、死んでいるのか。正か負か、強か弱か。そいつに踊らされて、俺たちみんな、こんなところをやらされてるってわけ」
「うん……」

「魔的、か……。たしかに、魔、っていうのは正しいよな。魔性のもんだ、おれたち、みんな」

テッセンはぐるとあたりを見渡す。肌の色も、髪の色もさまざまな生徒たちが並んでいる。

たんに留学生が多いからというのではない。魂から反映されるハ

クの具合によって、転生時に特異な変化をするものがあるのだ。もつともめだつのは、斜めむこうで陽光に輝くプラチナ・ブロンドや、はた目にも青く見えるB組のケイトの髪と目。同じクラスにも、両親ともにアジア人、という中国出身のエイリンが、炎のように橙色の髪に、ぬけるような白い肌をしている。

「妙なもんだよな……」

テッセンはしんみりとひとりごちる。

「なんか、驚いた」

リヒトは、少し笑う。

「ん？」

「そんなこと、はじめてきいた、テッセンが……そういうの」

「ああ」

テッセンは、照れたように笑う。ずっとひとりでこの授業を受けてきた少年は「毎年そう思ってたんだよ、俺は」と呟いて、首を振った。

「いつも、この一週間がくるたびに、毎年、毎年。誰にも言えやしなかったけどな」

「そうだね……」

「気をひきしめねえと。今日は、お前がいるからな。俺ひとりで突っ走るってわけにはいかないし。そうだな。たぶん、俺——今気付いたが、こんなこと考えるってことは、そう……毎年、実は、緊張してたんだな」

「足はひっぱらないようにがんばるよ」

「そうしてくれ」

リヒトは、思いがけない友人の本音を聞いたことで、肩の力が抜けた。たぶん、大丈夫だろう。

ゆっくりと深呼吸をする。

二年生の相手は、動物だ。事前の説明会で聞いたとおりなら、そんなに難しいことじゃない。みんなの邪魔にならないように精一杯やろう。

シンの説明は、いつのまにか終わっていた。カエデが拡声器を握っている。

「では、次に移りますが――一旦、点呼をとりたいと思います。身体検査で異常の出た人は外れて。登録武器と違うものを支給されたというかたは、点呼のあとそれぞれの担任のもとへ行くように。点呼は学年ごとです。一度、出席番号順に並んでください」

笛が鳴り響く。言われたとおりに、彼らは整列しなおす。

テッセンは前のほうに行ってしまった、リヒトの隣には、ヨウタとレイが来た。二人の腰には、ホルスターにおさめられた銃が下がっていた。二人は、ひそひそ声で話し始める。

リヒトは、手持ち無沙汰に、腰にぶら下げた巾着型のポーチから、亜空間内の地図を取り出して、行き先である五階建ての建物についてもいちど確認しはじめる。実習は、毎日、五時間に及ぶ長丁場だ。帰還するときに集合するポイントが、まだ全部覚えられていない。

キョウタローの声が、前から聞こえる。

ところが、次の瞬間。

運動場じゅうに、鐘の音が鳴り響いた。

教師たちが、顔を見合わせる。生徒たちも同様だ。

リヒトも、近くにいたレイと顔を見合わせた。

「なんだろう？」

「さあ……」

生徒たちはざわめいている。教師たちが「静粛に」と声をはりあげた。彼の知らない教官のひとりが、校舎のほうへ駆けていく。キョウタローも、「A組は全員待機だ！」と言い捨てて、あとを追っていた。

すでに移動しかけていた高等部の生徒たちと三年生は、あたりの様子を伺うように身を低くしていた。二年生はまだ習っていない、戦うための構えだった。見よう見まねで、後輩たちも、それに倣いはじめる。

リヒトはカエデを探した。人垣の隙間から、シンが何かをカエデに言っている、そのけわしい表情が見えたが、声は、ものすごい音で聞こえない。

何重にもユニゾン奏でる鐘の音は、だんだんと音量をあげていった。

「ねえっ……、こんなっ、鐘になるとかつ、ときどきあるのっ？」

リヒトは、隣にいたヨウタに大声で尋ねる。もう口をきかなくなつて久しかったが、リヒトと同じくらい不安げな表情で、ヨウタは首を振る。

「ないよ！　なんか、起こったんだろっ」

「起こったって、なにが――」

「なあ！――なんか、揺れてないか？」

レイが言った。言葉通り、地面がわずかに揺れている。

と——突然、鐘の音はやんだ。
地面の振動も消える。

耳を押さえてあたりを見渡していた生徒たちだったが、それで、そろそろと手を外して、お互いに顔を見合わせる。どうなっているのだろう。

リヒトは背伸びして前方を見た。同級生たちの間から、大きな手がよきりと生えて、彼を手招きしているのが見えた。テッセンだ。「待て、列を崩してはだめだ！」

「うるせえ、黙ってる」

ミサオの制止を怒鳴りつけておいて、テッセンは「なんだろうな」と、やってきた彼に向かって首をかしげた。てっきり、教えてくれるために呼ばれたのだと思ったりリヒトは、目を丸くする。

「……、え、テッセンもわかんないの」

「初めてだな、こういう種類の警報は」

「——そうでもないみたいだよ」

横から言ったのはミサビだった。彼は、そっと、前方を指差す。残った教官たちが、険しい表情で喋っていた。「サンプルか」と、彼らの言葉が耳に届いた瞬間、テッセンが「まさか」と呟いた。

「噂だろう」

「噂？」

リヒトはテッセンを見上げるが、テッセンは、リヒトを見ず、ミサビと教官たちを見比べる。

「あるかもしれないよ」

「——かもしれないって、でも」

「彼らも準軍属だからね。何かは知ってるんだろうと思うし」

「ねえな。絶対に」

「僕もよくは知らないけど」

「そんなわけねえ」

すばやく交わされた、会話というよりただ独白しあっただけという二人を見比べる。「どういうこと」と尋ねると、二人とも黙ってしまう。うつむいたあごに指先をあてたまま、じっと、互いの足元に視線を落として何かを考え込んでいる。ときどき、二人がちらりとリヒトを見るので、リヒトは落ち着かない。

ふと、

「違うだろう」

わきで黙っていたミサオがぼつりと呟いた。無機質な表情を崩さずに。

突然だった。リヒトは、どうしても、と思った。ミサオはどうして、いつも自分の中に閉じこもっているのだろう。こんなに一線をひいているのだろう。手の触れられない、ガラスのむこうの標本のようだ。

遠い……。

変なの——ずっと同じ部屋で暮らしていたのに、今、こんなことを考える……

苦笑したまま、ミサビが首をふる。

「僕も……、いや、たしかに、断定はできないものな。そう、違うと思うけどね」

「そう?」

そろそろ、周りの生徒も落ち着いてきたようだ。列の前から、リヒトに気付いたサツキが、手をふっている。テッセンが、顔を上げる。

「待て、このあと何が起こるかによ——」

そのとき、視界が大きく動いた。

鐘とは違う、異質な大きな音。それは、振動だった。振動が音になって、大気を、地面を、木々のこずえを、人の体を揺り動かす。悲鳴をあげて、リヒトはその場にしりもちをついた。彼の隣で、テ

ッセンも、ミサビも膝をつく。さすがというべきか、地面に転がるようなへまはやらない。あわてて、リヒトも体を起こして、膝をついて耐えに入る。小柄なミサオは、膝だけではなく両手も地面につばって、焦った顔で周囲を見渡している。彼と、一瞬だけ目があつた。

全員が――強いはずの教師たちも、先輩も、高等部のひとびとも、後輩たちも、そろって立っていられないくらい、地面がうねっている。あの鐘は、これを知らせるものだったのだろうか？

きやあきやあと騒ぐ女子の悲鳴が聞こえた。

そして、直後。

まるで――音の塊が頭上に現れた、と思った。

「見ろ――上！ 上だ！」

かすかな、誰かの声。

頭上を仰ぐと、いつのまにか、暗い影が空を覆っている。

「あれは……」

上空に浮かんで視界に広がるそれは、巨大なお皿の底のように見える。雲の一種か――出現は唐突すぎて、まばたきのあいだに、空という舞台のセットが差し替えられたかのようなだった。すさまじい音は、そこから聞こえている。ぴし、ぴし、と、きしむような音が、轟音にさらにアクセントを加える。はじける光と闇。しかし、いつまでも見てはいられなかった。

まだ揺れている。

音は振動――衝撃波。あまりにもありふれて単純なそれが凶器になりうる、ということを知り、リヒトは初めて知った。頭の上から、全身、おさえつけられるような圧迫感で、体中が苦しい。彼は、地面にふせる。息ができず、胸がつまった。

ふと――

強い力が、彼を襲った。

ひっぱられる。

ほとんど吸い込まれるといってもいいほど強い力だ。どこからひ

っぱられているのかはわからないが、とにかく、何かが、彼の体をひきつけている。

「い——た——……、」

目を開けていられず、視界がせばまった。苦しい。息ができない。見えない。音が大きすぎて、何も聞こえない。

体が、みしり、と音をたてて崩れる音を聞いた気がした。

覚醒はなかなかやってこなかった。

目を開けたとき、彼は、自分が、暗い水の底に沈んでいると思った。

それほど、手足は重く、どこもかしこも疲れきっていた。

動きたくない。面倒だ。

そう思って、天を仰ぐと、ふいに、何もなかった視界に模様が浮かんでくる。水面の波紋だと思った。輪のように広がる波の線。

それはやがて、木目となって、はっきりと木の色とともに現れた。天井。

どこの？

家の――彼の――

「嘘だ」

はっと正気にかえる。唐突に軽くなった手足を畳の地面について、がばりとその場に起き上がった。

あたりを見渡す。

床の間に飾られたレプリカの水墨画。有田焼の壺。そのわきには、ひっそりと、端午の節句の武者人形が二体置かれている。う、と彼は思わずうめき声をもらした。そこは――その姿は、この感触は、まごうかたなき、彼の実家であった。

「あれえ……」

手を見た。それは、かつての、人間だったころの手だった。それから、見えすぎない、普通の目。乾いた唇。

制服を着ている。中学の――シャツにネクタイ。スラックス。白い靴下。

風が流れている。我にかえった彼は、あわてて縁側へとにじりよる。動かすたびにいつも大きな音をたてたガラス戸は開け放たれて

いる。むこうを見ると、案の定というかやっぱりというか――

小さな洗い場のある庭。倉庫にくっついた鶏小屋。そのわきで、のんびりと日向に寝そべる黒い雑種のモリス。物干しにひるがえる、風をいっぱいにはらんだ洗濯物。

「うおおお」

これは、この感じは。

いそいで、サンダルをつっかけて駆け出す。「縁側から出入りしないのよ!」という母親の声が飛んでこないところを見ると、彼女は仕事の日なのだ。大きなストライドで走りきって、庭の端の、舞台上に平らになった大きな庭石の上にあがる。背伸びをして、ブロック塀の向こうをのぞくと、少し低くなった田畑の光景が、はつきりと広がって見える。

緑の洪水。土と水と光の恩恵を一身に受けて青々と伸びた稲穂、まだ実をつける前の若々しい色彩が、奔流となって彼におしよせる。この時期特有の土の匂いと、太陽の角度、それに、みずみずしい湿度が、髪を吹き散らした。

誰にでも、心の中に、命の源というべき風景を持っているが、リヒトの場合の、それは光景だった。

「や――っぱり、」

――なんて綺麗なんだろう。

田植えを終えて一ヶ月もたつと、稲穂は水を吸ってぐんぐんと伸びる。きらきらと輝くせせらぎの反射のなかで水鳥が泳ぎ、尖った葉先は風を受けてしなやかに揺れた。雲ひとつない空、その下の緑みどり。緑の海。次々に揺れる。ざわめいて、風にあおられることに濃淡をつくる。春、夏、秋、冬、何度も繰り返す年月のうち、彼がもつとも好きな季節だった。

麗しい季節。

「福良――」

胸がいっぱいになった。懐かしい、彼の家の車――全農連福良耕地(有)、と横書きされたトラックが、農道を走っている。運転し

ているのは、祖父か父に違いなかった。一瞬、農道を横切る窓ガラスの中がはっきり見える。たっぷりとした黒髪の男――手ぬぐいを首に巻き、仕事着を着ている、がっしりとした体つきの人物。父だ。天氣がいいので、畑へ、水の具合を見に行っているのだろう。

瀬田周は、この時期になると、レコードでドビュッシーを聴いた。プレリユードの5番、アナカプリの丘。同じ巻に、野をわたる風、という曲があつて、このほうがどちらかというと、七月のこの風景に合うのでは、とりヒトは思ったものだ。しかし、父親は譲らなかった。

「たららららたらー、たららららたらー」

汗まみれの手ぬぐいを首に巻いて、折々、大好きな曲を嬉しそうにハミングしていた。きつと、今もしている。ステアリングをきる腕が踊るようにまわって、車はおしりをむけて走り去った。

懐かしい風景とすっかり馴染んだ、滑らかな旋律が、つぎつぎと思ひ出される。

呆然とする。

「ああ……」

今までのことは、ぜんぶ、夢だったのだろうか。

拍子抜けする。こんなに簡単に、現実に戻ってこられるとは。

テッセンも、サツキも――ミサオもミサビも、ゲットーも、全部、夢。まぼろし。

ゲットー。

ゲットーってなんだ？

そんな場所、あったっけ？

そして、恐るべき直感で、彼は、次に聞こえてくる音を知った。

「りっちゃあん、ふうちゃあん」

右下がりの音程で、台所のほうから祖母の声がひびく。しわがれた声は、ときどき地鳴りになるが、今はひたすらにやさしい。

「お昼、おそうめんでえがったがねえ？」

はあい、と返事をしそうになった。

しばらく、そのまま呆然としていた。毎年、いつも最初に啼く蟬の声が聞こえている。

ふいに視線を感じて振り返る。

縁側に、男の子が座っていた。目元をほぼ覆う長い前髪、日に焼けた肌、赤い唇。垢じみたシャツにズボン。足をぶらぶらさせている。

いつのまに。

「どうしたの――、」

よく知っている。近所の子だ。この子の名前は、なんだっけ。一瞬、頭が真っ白になる。

「ねえ――、ねえ、××、どうしたの」

するりと口に出した名前が、なぜか、彼の耳にはそこだけ聞こえない。炎天下で、奇妙に真っ白い印象の、その男の子は立ち上がった。

「待って。待って――」

待ってよ、と手を伸ばすのに、足は、畳に沈み込んだ棒のように動かない。彼は、門の外へ走っていく。ふりかえらずに。痩せた、長い手足をふりあげて。

「待って！」

お願い。

手が空を切る。

サンダルが地面をすべる。

待って。置いていかないで。俺をひとりにしないで。こんな、わけのわからない場所に――

お願い。

違う――本当は、知ってるんだ、俺。

戻らない。もう、ここに帰ることはできない。

父も祖母も、幻。もう、血の繋がりのないにんげん。

せっかく、あきらめたのに。

あきらめると決めたのに。

どうして。

なんでこんな、夢みたいな風景を見ちゃったんだろう。よりによって、一番大好きな季節で、大好きな時間で。もう、すぎるのは君だけなんだ。

現実でつながっているのは君だけだ。

ひとりにしないで。

悪夢——手に入らないとわかっていてより鮮やかなら、これこそが悪夢だ。

たすけて。

そのとき——

目が覚めた。

「リヒト！ おい！ 食いしん坊めが、しっかりしろ！」

彼の名前を呼ぶテッセンと、目があった。テッセンは、彼が気付いたとわかると、呼ぶのをやめて、つりあがった目元をなごませる。

「ど——」

リヒトは、がばりと倒れていた体を起こす。

「いってえ……」

「しっかりしろ。大丈夫か」

どこもかしこも、すりきれたような痛みがあった。あたりを見渡すと、そこは、どこかの交差点のようだ。アスファルトの地面に引かれた白線に、ガードレール、信号。道路にそって立つ、ビル。頭がぼうつとする。

「なに？ どうなったの？」

テッセンが、ほっと息を吐いた。

「わからん」

「あーっと。頭、すごく痛い。うーん……？ 今、いつだ。どこだっけ」

口にしながら、だんだんと思ひ出す。

……
そうだ——さあ、実習、というところで、突然、大きな音がして

よく見ると、周囲からは、「しっかりして」だの、「おい、いるか」だの、安否を気遣う声がたくさんあった。彼の隣にはミサビがいて、同じく、とまどいの表情で、倒れているミサオを起こそうとしている。

「待って、って言ってたぞ。夢でも見たか？」

「ん？ ああ——そういえば……」

見ていたような気がする。しかし、疲れる夢だった、というのだけで、内容はさっぱり忘れていた。

「うーん、と……、テッセンは？ どうしたの？」

「わからん。気付いたら、倒れてた。で、お前が隣に寝てて、うなされてたから、今、起こした」

「あ、そう……」

状況は、おおむね同じのようだ。

はつきりしはじめた頭で、周囲を見渡す。

「ん……？」

違和感を感じた。

もちろん、たくさんの生徒がそこには倒れているのだから、異様な光景ではある。それにしも、遠くまではつきりと見渡せない——というのも、もやのようなものにあたり一面おおわれていたからだ——声や気配から、かなりの数のクラスメイトがいることがうかがえる。みんな、おそろいの格好で。意識を失う前と同じ状態で。

——事故でも起こったのだろうか。

「さむっ」

底冷えというのだろう。地面をはって、しんと冷たい空気が流れてきた。「さむい」というささやきが、あたりからもあがる。リヒトは腕をこすり、ベストの前をかきあわせ——と、ふと、違和感の正体に気づいた。

「あれっ？　ここ、どこ。運動場——じゃ、ない……？」

彼の座り込んでいる地面は、アスファルトだ。

周囲をもういちどよく見る。

縞状になった白線は、横断歩道だ。すぐ近くには、ガードレール。道路標識。信号。道路にそって立つ、ビル——

おかしい。

学校の運動場は、固い地面で、ほうぼうに草がはえているはずだ。いつのまに、こんなところに來たのだろうか。

「ここ、どこ」

脳裏一杯に疑問符を広げた彼が、わきに居合い座りている友人に呆然と呟くと、テッセンは眉間にしわをよせる。黙って首をふった。
「運動場じゃねえことはたしかだな」

リヒトは立ち上がる。手と、軍袴の脇をはたく。見渡しても見渡しても、あたりは、学校とは似ても似つかない。奇妙になつかしい、やや古ぼけた都会の風景だ。

しかも、現代風の。

「はあ？　なにこれ。ここは——」

「わからん。俺にもさっぱり」

テッセンもたちあがった。リヒトは、左右に背伸びをしながら、もやのなかに目をこらす。

「ええ？　ねえ、これ——現実だよね。夢じゃ、ないよね？」

「そりゃそうだろうが。もういつかい、ひっぱたいてやろうか？」

「やめて。ああ——嘘でしょ。ここどこ？」

「だから、わからんって」

「でも」

「東京だ」

ふいに、答えたのは、サツキの声だった。声はすぐ近くからで、やがて、サツキは、シルルやジュンサン、ミチタカと一緒に、もやをかきわけて現れた。

「よかった。お前もいるんだ」

一様にほっとした表情をうかべた。

「みんなも……」

ということとは、これは夢の続きじゃない。

サツキたちが微妙な表情でうなずいた。

「ああ。……とにかく、無事は無事だけど」

「今、ざっと見てきたけどな」

「ねえ、ここどこ。どこだって？」

「東京だよ。そう言ってる。俺とシルルは。でも……」

声のするほうへ引き寄せられるのか、やがて、他のものもぞくぞくと、リヒトたちのまわりに集まってきた。親しいもの同士でかたまりながら、あたりを見渡して不安そうだ。小さな嘆息とささやきもれる。

視界が明瞭になるにつれ、サツキの言葉は信憑性を増した。

すぐ近くにたつ道路標識には、渋谷、丸の内、新宿、と、田舎者のリヒトにも分かる、“首都”東京の有名な町の名前が並んでいる。道路わきには、たくさん車の車が無人のまま停まっている。ナンバープレートは、いずれも、練馬や品川。もちろんこの地名は、ゲッターにはない。こんなに新しい車も、外車も存在しない。

奇妙に色あせた看板。

ネオンで飾られた看板を掲げたビルディング。

ゲッターのはずがなかった。平安市のどこを探しても、こんな場所はない。

「東京——あの。あの、とう、きょう……？　本当に？　本当の本当に？」

「うん。そうとしか……」

「東京」

トウキョー・シティ。

もやがはれたいま、はっきりと姿をあらわした空は黒い。しかし、何にもまして暗いのは、重々しく影をたたえた高層ビルがつくりだす影だ。地面に座り込み、あるいは立ち尽くす彼らに、その陰影が

覆いかぶさる。ビルの間を吹き抜ける風は冷たく、不気味な音をたてた。

口をつぐみ、しばらく、彼らはあたりを呆然と見渡していた。

「嘘だ……」

それは、現世ではまだたった十四、十五歳の子どもにすぎない彼らにとって、あまりにも大きいのかかってきた現実だった。

「どうして」

「どうして」

「なんで……?」

悲鳴に似た叫び声が、次々と上がった。

8 無人東京

根拠もなく、サツキとシルルが東京だといいはったわけではなかった。視界のわるいなか、ひととおり周囲をめぐるって、そう決断するにいたったのだ。状況証拠では、そこは間違いなく東京だった。しかし、彼らでさえ迷うのが、ただ一点、絶対にありえないことが、この場では起こっているからだった。

誰もいない。

それは、異様な町の光景だった。ここが東京だというのなら、なおさらおかしい。議論のはじまりはささいなことだったが、当人たちにもすでにどうでもよかった。ただ、言葉を交わすことで出口が見つかるかもしれない、というだけだ。

間違いなく東京だ、と、リヒトの斜め前で、シルルが声をあげている。彼は、前方の建物群を指さして主張した。

「賭けてもいい。あっちの大きな公園、上野恩賜公園だよ。西洋美術館！ 不忍池も」

「じゃあ、なんで無人なんだ！？ 誰もいないじゃないか。車、家、店、どこもかしこもからっぽだ。こんな東京があるか？」

サツキが手をふりまわす。論議を繰り広げる二人を、全員が固唾をのんで見守っている。リヒトも、呆然とあたりを見渡しながら、同じことを思った。

東京に、見える。しかし、東京のはずがない。こんな、しんとした、さびしい場所が、東京だなんて、信じられない――

彼の知る東京は、首都機能の一部を大阪に移したとはいえ、依然として繁栄を続ける大都市である。道路を行きかうビジネスマン、OL、フリーター、高級車ばかりの道路の大渋滞、評判のうまい店、

行列、喧騒、絶えない犯罪。泡のようにニュースがいくつも湧いて出る、エキセントリックなメガロポリス。

車ならある。無人のまま、道路の端に数珠のようにつらなっている。たくさんのお店も、店構えを残したままたずんでいる。広い道路は、人が大勢行きかっけていてもおかしくない。

彼らの言うとおり、ここは間違いなく東京にちがいないのだ。見た限りでは。

「でも、でも……」

そこには誰もいないのだった。路上に停められた車のなかを覗き込んで、運転手はおらず、あたりのビルは商業施設にも関わらず、従業員も、客もいない。

彼らが騒動を繰り返している路上にも、もちろん、誰もいなかった。

そして、なによりもおそろしいのは、いくら探しても、大声で呼ばわっても、おそらく誰一人出てこないであろう、と確信せざるをえないひと気のなさが、痛いほど感じ取れるということだ。

からっぽの東京。

ひといきれも、クラクションも、ネオンのまぶしいきらめきも、人間の情熱と欲望が起こす、うねるような躍動も消えた東京。

東京を東京たらしめるゆえんが、なにもない。

彼らだけだった。リヒトが見渡したところ、いるのはクラスメイトばかりだった。三年生も、高等部の先輩も、シンも、カエデもキョウタローもいない。

「おちつこう」

やがて、言葉の出尽くした二人が、がっくりと肩を落としたタイミングで、水のように静かに、ミサオが言った。

「たぶん、東京だ、というのは、君たちの話を聞いてよくわかったから。おちついて——考えよう」

「そうだね」

ミサビもうなずいた。

「場所はたぶん、東京だろうから。次の問題は――、今がいつか、かな」

「ああ、同感だ」

ざわめきが広がる。たしかに、という声があがった。ここは、東京にはちがいがなかったが、どこかが狂っていた。何かが違う。それは、やたら多い、奇妙に流行おくれの古ぼけた看板からわかる。

「俺、見てくる」

「俺も」

「僕も」

やがて、斥候を志願した数人が、大通りを横切って、銀行という看板の出ているビルに様子を見に行った。帰ってきたとき、彼らは、カレンダーを持っている。日めくりのそれには、成和30年12月20日という日付があった。

「成和って……」

「ねえぞ、そんな元号」

全員が顔を見合わせた。そして、決定的な一言――

「遭難だね」

冷静に言ったのは、ミサオだった。いつせいにため息が漏れる。

時間遭難。粒子が暴走したあげくに、時間の狭間へ迷い込むこと。だが、彼らが授業で習った遭難とは、かなりケースが違う。そして、もっとも重要なことは、やはり、人がいない、ということだ。

「どこに行った？」

つい最近まで人がいたらしい痕跡は、ただ路上にいたりヒトにも感じ取れた。まるで、メアリ・セレストだね、とミサビが呟いた。

乗組員が突然いなくなった漂流船、メアリ・セレスト。通りかかった船の一等航海士が、救助のために乗り込んでみると、デッキは水浸し、船内には食べかけの朝食や湯気のたつカップが残されたまま。ついさっきまで人がいたような様子で、人間だけが忽然と姿を消してしまっていた――その光景のしんとした恐ろしさが、後にオカルトや都市伝説を生んだのだ。しかし、怪奇現象の代表格になっ

てしまったこの話の真実は、単純だった。脚色したものが、ある事実を伏せていたのだ。それは、船に備えられていたはずの救命ボートがなくなっていた、ということ——おそらく、なんらかの事故で、船員が救命ボートに乗り込んで船を放棄したのだろう、というのが今では定説だ。そのまま遭難して全員が帰らぬ人となったのはたしかに悲惨だが、よくある事故のひとつに過ぎない。

——これも事故だろうか？

リヒトがテッセンを見ると、彼は難しい顔で、口を真一文字に結んで、じつと、ミサビのほうをにらんでいる。「どういうこった」と彼は低く呟く。

「ただ過去にきた——ってわけじゃねえんだな？」

「そうみたいだね。僕らの知ってる日本に、成和時代なんてないし。とすると、ここは、僕らがいた場所につながる過去ではいつてことだ。軸がずれてる」

「とにかく……、ここじゃなんだし。いったん、あそこに隠れないか？」

ミサオが、交差点の、反対の通りをさす。そこには、地下への階段があった。アーチの上部には、都営大江戸線上野御徒町、とある。反対する理由もないので、彼らは、そろそろそこへ向かった。

上野なんとか町——リヒトは、なんとか、の部分の漢字が読めずに悩んだ。階段を降りると、広いプラットフォームにたどりつく。照明がないため暗かったが、彼らの目ではあまり痛痒を感じなかった。暗さに応じて虹彩が変化し、視野の光度が調節されるからだ。

全員が座る場所を確保すると、口を開いたのはテッセンだった。

「なあ。俺は、こんな遭難は聞いたことがないんだが。過去にとぶったって、まさか、時間軸がちがうなんてこと、今までにあったか？ それに、こんな、粒子が暴走するってたってたかがしれてる中等部約百人ちよつとのうち、どいつがこんな大掛かりな操作をしたってんだ。この人数！ ざっと見渡しても二十人はくだらん、かなりの数だぜ。それが、腕も足も内臓も欠けずに、そっくりそのまま無

事でいる。おい、副委員長。お前は知ってるか？」

「知らないなあ。困ったね」

あごでさされたミサビが、ため息を漏らす。彼の周りには、少女たちが集まっている。手にしたカレンダーをしげしげと眺めて、ひとりごとのように呟いた。

「例のない遭難になっちゃったかな。そういえばこれ、西暦がかかれてないよね。ってことは……、ひょっとしたら、鎖国政策したままの日本が存在する時間軸に移ったってことも考えられるね。ということは、旧暦だから、この、十二月、というのは、実際には、十月ごろのことになるのかな。時期だけが同じってことか」

のんびりとしたミサビの口調とは裏腹に、悲鳴のように次々と声があがる。

「どうするんだ」

「こんなの、俺たちだけで何とかできるのか？」

「俺たちのいた時間軸じゃないって？ 馬鹿な……」

「助けは来ると思う。そこは、心配しなくていい」

「だけど……」

「落ち着きましよう！ 落ち着かなくちゃ、落ち着かなくちゃ」

議論をよそに、リヒトは、線路のほうを見る。そこに電車はない。電光掲示板は真っ黒のままだ。

——電気も通ってないのかなあ……でも、建物はそのままだ。

新参者の悲しさで、こういうとき、どうしたらいいのか、よくわからない。大変だということはわかって、どの程度大変なのか、見当もつかないのだ。

結局、まわりを見ているしかなかった。左斜め前で、ミサオが呟く。

「もちろん。助けは来る。でも、状況がわからないのに、いつまでもひとところにいるのは危険だろうね」

暗くしずかな無人駅。改札にも、もちろん人の姿はなかったのだ。ミサオとミサビを中心に、輪のように生徒たちは広がっている。

青ざめた顔、不安ゆえに興奮しているもの、さまざまだ。

「なあ——こういうとき、どうするんだっけ？」

ぽつりとグエンが言った。B組の、坊主頭の生徒だ。めったに喋らないことで有名だが、さすがに、黙っていられなくなったようだ。「俺たちだけか？　ほかにも、こっちに来てる奴がいるんじゃないか？　——なあ、点呼とろうぜ」

冷静な指摘だった。それを機に、あわただしく、生徒たちは動き始める。二分後、ようやく、全員のうちわけがはっきりした。リヒトたち二年A組21名全員と、二年B組の男子2名女子5名、一年B組の男女8名だ。A組の列を中心に何かが起こったのではないか、という結論に彼らは達した。列は、右から順に、一年B組、二年A組、二年B組に並んでいた。間に挟まれていたA組のどこかの地点で粒子が暴走し、その人物を中心とした半径数メートルの範囲で、生徒たちはワームホールにおちたのだ。A組の生徒たちはざわついた。

ひとり、リヒトだけが、事情をのみこめない。テッセンが、彼に向かって小さく教えてくれた。

「誰かが、運び屋の——粒子を操作して、人や物を別の次元、別の空間に送り込む、とんでもないクラスの素質を持ってたかもしれないねえ、ってことだ。高等部の前衛の奴らでも無理かもしれないな、俺ら全員をここに連れてくる、となると。そのくらいすごいことだぜ、これは。こんだけの人数を過去に、まして別の時間軸に吹っ飛ばすくらい——とんでもない粒子を操る力が働いて、俺たちはここにいるんだよ」

「そうなの？　ええと、つまり、誰かがやったってこと？」

「そうだ。遭難ってのは、いいか——無意識が起こす粒子の暴走によっておこる。そして、暴走はたいいてい、同心円状に起こるんだ。操作をしたやつを、運び屋、と呼ぶ。その運び屋を中心とした、半径数メートルで、運び屋が粒子を暴走させた結果、その範囲にいたものすべてを、ワームホールに飲み込んでしまう。まあ、わかりやす

く言えば、爆弾みたいなものだよ。中心ほど威力がでかい」

「え、じゃ、うちの組、全員がいるってことは、A組の」

「そう、単純に考えりゃ、うちの組の誰かが――」

じぶんたちの誰かが、粒子を暴走させた可能性が高いとあれば、その中心に近い場所にいた生徒ほど、うろたえた。だが、ミサビとミサオが冷静に「犯人を捜すべきでない」と瞬時に述べた。

「犯人探しはなしだ。犯人なんて、そもそもいないかもしれない。それより――音がしたよね。その、ここに来る直前」

「した。でっかい音が。音なんてものじゃない、ものすごい――」
ようやく、心あたりを思い出して、彼らは、顔をみあわせる。

「ということは、事故かも？ 外部からの攻撃を受けて――」

「ミサイル？」

「いや。ここ最近、日本がそういう攻撃を受ける理由はないね。ゲットーと知ってのことなら、なおさら」

「でも、外部からの攻撃だとしたら――それが、たぶん、きっかけだよな。防衛本能が、勝手に粒子を暴走させた可能性もある。A組の誰かが潜在的にその能力を持っていて、危険を察知した瞬間、そこから自分を中心とした空間すべてを、異次元に避難させたんだ」
「誰だよ、そんな力のもちぬしって？」

「だから、今は――犯人探しはしない。決め付けるのはよくない。もしも攻撃なら、僕らをここに吹き飛ばすことこそが、その攻撃だったのかもしれない。こんな、ただの中学生を狙う意図は不明だけども」

一瞬、空気が固まったように思えた。みんな、顔を見合わせておし黙る。ミサオは「とにかく、早計だけはだめだ」と重々しく言った。彼の周りには、ナマモノの三人がそろって、外部生たちをにらみつけている。彼らは列の後ろのほうにいたから、自分たちは犯人ではないと思っているのだろう。

「とにかく――ここが異次元で、時間遭難だというのなら、僕らは、元の時間軸から、他の生徒たちの前から忽然と消えた、ということ

になる。助けはくるだろう。だが、ポイントの特定に多少時間がかかることは間違いない。あっちも、もしかしたら、何かとんでもないことが起こっているか、そうでなくても、僕たちに何が起こったのかわかっていない可能性もある。とりあえず、助けを待つとして――今は、僕らは安全な場所にうつるべきだ」

「うん。最優先事項だ」

ミサビもうなずいた。

「マニュアルに従うことにしよう。まず第一に、身の安全の確保。それから、元の世界との通信手段を探す」

「そうとわかったら、移動を開始しようか。全員、異存は？」
なかった。

大人数では目立つので、いくつかの組に分かれて移動することになった。

「同じ組になるかなあ」

隣で、Wエムが話し合う様子を眺めているテッセンに首をかしげると、「なるだろ」と彼はこともなげに言った。

「でも、どこへ行くんだろう」

「たぶん、避難場所だな」

テッセンが言うには、どの時間軸にも、その軸から別軸へ移動するのにたやすい地点や、絶対に揺るがない場所があって、何か起こった場合、ゲッターの人間はそこに避難することになっているらしい。

プラットフォームの入り口付近で、ミサオとミサビが話し合っている。他のクラスの生徒たちも、とりあえず、A組の二人に指揮をゆだねることにしたらしく、決着を待っていた。

「遅いな。なにもめてんだ」

リヒトとテッセンは、生徒たちから少し離れた、地下鉄のポールによりかかって待っていたが、前方で、なにやらざわめきがあがったので、立ち上がり、学級委員長と副委員長を取り巻く輪に合流する。そこでは、眉間にしわをよせて首を振るミサオと、それを懐柔しようとしている、悲しげな表情のミサビがいた。二人の会話を聞いて、リヒトは、どうしてもめているのか悟った。そして、結局、ミサビが折れたことも。

「チームワークが大事だ、というのは君もわかっているだろう」

ミサオが呟いた。

「大事な場面で、普段のいがみ合いを反映するような行為……、たとえば、裏切りや躊躇があれば、全員の命が危なくなる。内部生と

外部生で別れよう」

「わかった。しょうがないね。……そうしよう」

「賢明だ」

「気をつけて」

「そちらも。健闘を祈る――では、また」

スポーツスマン同士はすばやく握手を交わす。

ミサオは、同じクラスのトリオと、他のクラスの内部生たちを呼び集める。内部生のほうが、数が少ないので、彼らはチームわけをせず、そのまま行くようだ。さっさと準備をはじめた。

一方、ミサビの側には、まだ15名をこえる外部生や留学生、女の子たち、下級生がいる。「僕らはこれから組み分けします」とミサビが、親しいものにはわかる、リラックスして聞こえるよう自制した声をあげた。

「じゃ、お先に」

内部生たちは、列をつくって、階段のほうへ向かう。

別れる瞬間、列の最後尾にいたレイがふりかえった。外部生と一緒にいるテッセンに向かって「お前は、こっちに来ないのか。よければいれてやるぜ」と呼びかけた。二秒遅れて「リヒトも一緒なら、別にかまわないが」と付け加える。

空気が冷えた。

彼らの真意を、その場の全員が正確に理解した。テッセンは、味方につければ戦力になる――粒子の扱いも、運動能力をはじめとする格闘センスも、同級生の中で彼はトップクラスだ。今だけは欲しい、という意図がみえみえだったので、外部生たちは顔を見合わせながら、渋い顔をした。するどい視線が、二人につきささる。しかし、テッセンは「やめとくよ」と怒鳴り返し、首を横に振った。一瞬、リヒトに意味ありげに視線を送ると、トリオに向かって「遠慮する」とつづける。

「こいつと、こっちにいるわ」

「そうか」

悔しそうな、残念そうな表情を、内部生たちはした。リヒトが「いいの?」と尋ねると、テッセンはうなずく。

「いいんだ」

「でも」

周囲で、男子の囁きが波のように広がる。孤立は、中立という立場をも表していたのだ。それが破られたことで、内部生に勝った、というあからさまな表情を浮かべたものもいたが、多くは、戸惑っている様子だった。単に、リヒトがこっちにいるからだろう、という意見も、小さく二人の耳に聞こえた。もしそうなら嬉しいが、テッセンは別の意図を持っているような気がリヒトはする。

「ねえ。……ほんとのところは?」

騒ぎが収まってから、そつと尋ねると、テッセンはにやりと笑う。彼は親指を立てて、ふと、前方をさす。ミサビがいる。

「ミサビが、どうかしたの」

「いいから、聞いてろよ」

ミサビは、全員を見渡して、話し始めたところだった。

「そういうわけだから、緊急事態です。ええと、そうだな……まず、この大人数では動きにくいので、これから、みんなを、いくつかのグループに分けます。元のグループで動きたい、というひといますが、それも考慮して、もう一度分けなおすよ。依存はないね? ……では、ここは東京なので、東京出身で、地理に明るい人を、まず、誘導役にしたいと思います。東京出身のひと——個人情報、というのは、この際おいておいて」

普段の人望のおかげだろう。すぐさま、三人が手をあげる。使命感に満ちた表情で進み出た三人を横列に並べると、ミサビはすぐさま「次に、東京首都圏出身の人。埼玉、神奈川のひとは? または、千葉、栃木、茨城出身で、自分は東京の地理に詳しい、って人」

五人の手が上がった。ミサビはてきぱきと、先ほどの三人を補助する副誘導役に五人をふりわけける。

「な?」とテッセンはにやりと笑った。

「なっ、て？　どういうこと？」

「ほんものの緊急事態なんだぜ。よく考えろよ。一瞬の判断の遅れが、どういう影響をだすかわかんねえだろ。たとえばさ——ここから浅草方面に行く最短ルートをとるのに、バスか、電車か、地下鉄か、モノレールか、それともタクシーか、まあ人がいねえから、手段としちゃ使えないが、とにかく、どれを使うのがいいのか、電車なら乗り継ぎはどうか、ってことを、ゲッターの地理しか知らない内部の奴らが、すぐに思いつくと思うか？」

「ん、思わない」

「そういうので迷ってる時間が惜しいだろ。」

もしかしたら、それが命取りになるかも。それに——」

テッセンは目を細めた。

「内部生は一枚岩じゃない。それは俺は、小さいころから見てきてよく知ってる。あいつらは、それぞれが、じぶんは特別だって意識を持ってるんだ……集団行動に致命的な欠点だよ。だから、今はまとまっても、どうせそのうち、俺が俺が、って、てんでばらばらになるに決まってる。そして俺は、そんな連中を、ミサオがまとめきれるとは到底思えねえ。成績がいいって理由でなんとなく他の奴はあいつをトップにおいてるが、あいつは、リーダーにふさわしい資質を持ってない。まだ、ミサビのが、ついてる人数も多いし、確率が高い」

「確率？」

「生きてもとの軸に帰れる確率。見ろよ——あいつの仕切り。みんな、あいつを信用してる。性格は信用ならんが、あいつのリーダーとしての資質は、俺は、かなりのもんだと思う」

たしかに、誰一人、ミサビに異議を唱えるものはいなかった。彼は、二十数人の仲間を五つのグループに分けた。能力が平均になるように、個人の関係までを配慮した組み分けは完璧で、リヒトには、いわずもがな、文句のつけようもない。ミサビは、リヒトとテッセンを自分の組にいれた。これは、テッセンと他の人間の折衝役を

買って出ると同時に、どうしようもない疫病神をみずから背負い込むことを他の全員に示すものだった。全員がほっとした顔をしていた。

「さて、行こうぜ」

サツキが、リヒトのそばにやってきた。彼は、埼玉出身で、このグループの誘導役だ。ミサビ、サツキ、ミチタカ、それにリヒトとテッセンの男子五人。女子は、マチコとミユキ、テスの三人。いちばんの在所だ。たぶん、リヒトはテッセンと二人一組の計算で数にはいつているのだろう。

「目標地点は、神楽坂の平安会館だ。時代背景は、東京タワーが確認できる、ということから、元時代の1958年12月以降にあたる時期と断定する。僕らのいた世界の過去延長線上ではないから、その建物もあるかないか……、正直、地理すらも、同じかどうか分からない。なんともいえないけれどもね」

それぞれの組のリーダーとミーティングを終えたミサビがやってきて、そう言った。

彼らは、隊列を組んで、そろそろと駅の外に出る。「じゃあ、神楽坂で」――ミサビの挨拶に、それぞれの組から「神楽坂で」「神楽坂で！」と声があがり、彼らは散会した。

リヒトたちは、ひとまず、徒歩で最短ルートを取るようになった。無人の旅行代理店で地図を調達し、記録係となったミサビが、サツキの指示通り、ルートに線を引きながらおおまかな道のりを説明する。

「はあ……、あれが、東京タワーか。はじめてみたな」

歩きながら、そっと呟いたテッセンの言葉に、リヒトもそれを見た。

東京タワー。細い骨組みの、赤と白に塗装された高い塔。

昔の写真で見てリヒトも知っていた。まだ真新しい塔のてっぺんが、指さすさき、低く群れなすビルの間隙から見えた。正式名称は、日本電波塔という。テレビの電波を発信していたものだ。それが今

は、不気味に沈黙を守って遠く時限と時代の闖入者たちを見下ろしていた。

「花のお江戸は八百八町、っていうが、聞いてたよりもうすぎたねえなあ」

味も素っ気もなく言ったのは、テッセンだった。二時間も歩きとおすと、誰ともなく無口になるが、彼だけは、現代の東京についてときおり感想をもらした。生まれてこのかた、ゲッター以外の場所を知らない、この場でただひとりの人物である。人がいない、ということとは、ゆくてをさえぎる人ごみがないため見とおしがいい、ということでもあって、おかげで、彼らの時間軸とひきくらべて昭和時代にあたるであろう東京の姿が、かなり遠くまではつきり見えた。テッセンにとっては、そのすべてが、新しく興味深かった。彼がこの風景に抱いた感慨は、リヒトがはじめて平安の市街を見たときと似ていた。「芝居の書割みたいだな」——映画のセットのように思われるようだ。いつもの仏頂面にくわえて、あたりを警戒する緊張感をみなぎらせているのが、子どものような発言とあいまって、どこことなくおかしみがある。

軽口すら遠慮される非常事態だったが、彼のその発言が、意外にも、リヒトたちのチームの雰囲気なごませた。ひとりごとのように彼が言えば、リヒトがまず答え、サツキが続く。他の人間からも知っている情報が出てくる。いつ助けがくるともしれない絶望にひたって、意気消沈とすすむより、何倍もましだった。

冒頭の感想にも、サツキが「そりゃ、ゲッターのほうが何倍もきれいだべ、こう言っちゃなんだけど」とのんびり言った。

「東京も、昔はただの、沼地ばかりの草っぱらだったらしいしね。関東ロームとかなんとか。でもまあ、俺も、できたての東京タワーを拝むような時代の生まれじゃないから、よくわからんけどなあ。」

いわれりゃ、たしかにちよつと汚いか」

「なんか、くすんでるっていうのか？ 節操のない感じだな。ごみごみして」

サツキのいうとおり、関東平野一円は、その昔、ただの湿原だった。それが、現代の東京につながる大都市へと成長するのは、徳川家康が開いた江戸幕府始まってからのことである。たったひとりの男が、ここを都にするのだ、と決めたために、ひなびた田舎、辺境にすぎなかった場所の運命は変わった。湿地は埋め立てられ、海岸は開墾され、水路が整備された。川には橋がかけられて、道路が作られる。それができれば、人が増え、家がたちならび、町ができる。こうして、かつて、大和朝廷において東国とひとくくりになされていた場所の面影は消えた。

「江戸のあいだ繁栄し、明治期には馬車が続々。関東大地震できれいさっぱり崩れ去ったあと、都市計画でモダンに生まれ変わり、十年でまた焼け野原。で、高度経済成長により、近代ビルの乱立が始まった。タワー建設は、高度経済成長のちよつと前だけど――だいたい、排気ガスに光化学スモッグの時代だな。テッセンがそういうのも無理ないかもなあ。リヒトは、東京には行ったことあるんだろ」

「あるよ。親戚が何人か住んでたし。でも、もうちよつと未来の東京だったよ。ビルなんかもつとでっかったし、ぎらぎらのぴかぴかだったし。昔の東京って、思ったより、高いビルがないね。そのぶんこみいって、ごみごみしてる……。タワーは、博物館としては知ってたよ。行ったことはないけど――行くとしたら、別のタワーのほうが楽しいし」

「俺も。俺も――その東京は知ってるけどなあ。うーん、たぶん、ひいじいちゃんとかひいひいじいちゃんの東京だよな、ここは」

「果てしないねえ」

ほかに、東京に来たことのあるものはいる。ああだこうだと喋っている、気もまぎれた。

「しかし、本当に誰もいないな」

ミチタカが、あたりを警戒しながら言った。彼の腰には、刀がぶらさがっている。

「活動で見た風景をまのあたりにできるとは思わなかったな。俺は、想像してたよりは綺麗だと感じたぞ」

「あたしもです」

彼の横で、ミユキがうなづく。一年生だ。ミチタカと同じ剣道部の後輩で、緊張した面持ちだが、発言ははっきりしていた。運動場での威勢のよさはどこへやら、すっかり萎縮してしよげかえってしまっているマチコより、よほど年上らしく、頼れそうだ。

マチコは、長刀を両手で握り締めたまま、小幅で歩いている。小柄なため、体力も心もなく、ともすると、集団から遅れがちになる。いらだつテッセンが舌打ちするので、ますますびくついていた。ほとんど泣きそうであるが、最後のプライドで踏みとどまっていた。

「マチコさん、大丈夫ですか」

「う、うん。ありがと……」

「何かあったら私が前に出ますから。しっかりして」

はげましているのは、同じクラスの留学生、テスである。長い黒髪をポニーテールにしている。クラスで一番上背のある少女だ。銃のホルスターに片手をかけ、もう片方の手で、マチコの肩をときどき抱いた。彼女とミサビのおかげで、マチコはなんとかもっているのかもしれない。

「本物って、やっぱり違うなあ。すごく面白い」

不謹慎さを感じさせない、学者めいた口調で、サツキと先頭をいくミサビも感想をもらした。

「魔の二十一世紀以前の東京を、こんなに鮮やかに目にすることができるなんて、ちょっとできない体験だね。どこもまだ水没していない。直下型地震も、東海沖に連動する富士山の噴火もまだ起こらない」

「あ、そうか。そういえば――元の時代だと、ここって二十世紀か。たしかに……」

つづく二十一世紀は、多災の世紀、といわれた。人心荒廃と天災は、たびたび時期を同じくするが、彼らにとってそれが起こったものとも近い時代が、二十一世紀である。二十世紀は戦争により荒廃したが、二十一世紀は、天災がそれにかわった。

リヒトたちの時代、すでにいくつかの国が、地球温暖化による海面上昇により、全国土を失っている。太平洋に浮かぶ国だけで、キリバス、ツバル、パラオなどは、すべて海中に没して消えた。今、その国にかつていた国民の子孫、いわゆる、環境難民と呼ばれるひとびとが、自治区をもらって同盟国で暮らしている。徐々に、固有の文化を失いつつあるのが惜しまれるが、しかたのないことであるのかもしれない。

さいわいにして国土を失わないまでも、沿岸部が侵食された国はその数倍にもなる。アジアだけでも、ベトナム、タイ、インドネシア、マレーシア、シンガポール、スリランカ、セーシェル。日本の周辺では、中国に朝鮮民国。もちろん、日本も例外ではない。海抜ゼロメートル地帯は、気候変動で威力と数を増した台風と洪水で常に液状化と崩落の危機に陥った。ヨーロッパでは、オランダがもつとも被害を受けた。強靱な技術力を盾に回復したものの、埋め立てた沿岸部の三割が一時水没したのだ。

「とはいえ、金があればなんとかなった、と嘆く映像はたくさん見たね」

「ああ、たしかに」

沿岸部の侵食で済んだ国は、すべて、経済が豊かな国だった。亡国民衆の多くは、護岸工事など打つ手がありながら、自国が――露骨にいうなら、貧乏だったために、生まれ育った土地を捨てざるをえなかったのだ。南半球の多くの国も、被害を予測しながら、減っていく沿岸部をただ見守るしかなかった。

彼らを助けるはずの先進国にも、当時、救援の手を出せない理由があった。経済が傾き、ついに債務不履行――デフォルトを宣言し、デノミネーションを敢行した米帝と、やむなく連合を解散した欧州

をはじめとする第一覇権資本・人道主義。大国にのしあがった中華共産帝国、連動して再び共産主義に傾くロシア連邦の対立が、朝鮮半島有事の際に再燃した。さらに、火薬庫であるバルカン半島が再び火を噴いた。中東も、民主化に端を発して暴行が多発した。それは、やがて、黎明にまどろむインド、ブラジル、“最後の砦”アフリカをも揺り動かす。中国にかわって世界の工場となりはじめた南の国々が、経済力を得るにつれ、国連という旧秩序に疑問を抱いて、独自に軍事力を補強し始めた。カオス——混沌の時代のはじまりだった。大国と呼ばれる国は、他国にかまっている余裕をなくした。自国のことは自国でなんとかしろ、という風潮が生まれ、あつというまに世界を席卷する。その半世紀で、前述の国々は国土を失うに至った。

いっぽうで、華やかな話題も多かった。だいたい、こういったことが起こっても、第三次大戦には至らなかった、というのが、人類が確実に進歩していることの証のようだった——対立の結果として、いくつかの国は独立を勝ち取ったり、政治と経済をなんとか軌道にのせたりのせなかったりした。どんなときも、融和と平和は相変わらず声高に叫ばれつづけた。人類を火星に送る計画が、骨子だけでなく血肉を得て実行に移され、民間宇宙関連会社が、あつちでもこっちでもぞくぞくとたちあげられた。ゆずれない思想をたてに対立したり同盟したりする政府をよそに、各国個人の交流はさかんになった。同時に、国や政府の存在意義が大きく揺らいだ世紀でもあった。原理主義と個人主義は、亀の歩みではあったが相互理解を深めた。混血が進んで、離婚率はあがった。性は、ふたつを隔てていた神秘のヴェールを脱ぎ捨て、男女の差異は縮まった。国境がいまいになるにつれて、人種もそれにならった。宇宙エレベーターができた。さらにそこへ、突然やってきた飛来人。

「あとからあとから、よくもまあ、つてところですねえ」
ミユキがうなづく。

「そうか。まだ、そういうことを何も知らない東京、なわけですね

……」

何も知らない東京。

その言葉を最後に、しばらく無言で歩いていたが、突然、前方で「ああっ」とミサビが声をあげた。彼にはめずらしい、素っ頓狂ともいえる声色だった。

「だめだっ。ああ、思い……ついちゃったよ。気になる。どうしても」

彼はふりむき、口元に手をあてて、全員を見渡す。

「どうしても、どうしても、僕、気になる。ねえ、行きたいところがある。もちろん、みんなが——反対するなら、このまままっすぐ……いや、気になる」

「どうしたんだよ、突然」

ぽかんとサツキが首をかしげる。

「なに？ 珍しい……」

「どういうこと。どこに行きたいの？」

「帝大図書館——って、あるよね。ええと、帝大じゃないや。東京大学か。そのの、図書館ならさ。ここの歴史が、ひよっとしたらあるんじゃないかと思ってね。思いついたら、知りたくなっちゃった」「ここの歴史？」

全員が顔を見合わせる。ついで、あ、と声がもれた。

そうだ——。

先を急ぐのもたしかに大事だが、ここがどういう場所か、というのも、同じくらい彼らにとっては知っておきたいことである。

図書館になら、この東京のリヒトたちの時代との違いが、見つかるにちがいがなかった。

「行こう」

ほかの誰より先に、きっぱりと言ったのは、珍しく、リヒトだった。

「行っておこうよ。そのほうがいいような気がする」

「ちよっと待てよ。東大の図書館って、どこだ？——えーっと、国

会図書館とかもなかったか？ そっちのほうに近いんじゃない？」

「それは僕も思ったけど。でも、さっきから通りを見てると、公共機関なんかは、けっこうシャッターとか降りてるところもあるでしょう。僕たちの時代だと、国会図書館クラスだと、指紋だの声紋認証があつて、かなりセキュリティが厳しかったはずなんだよ。で、ほら、この東京——電気が通ってない。もし、入り口が電動式だったら、びくともしない可能性があるなんて思ってたね。でも、大学の図書館ならば、まさかそんなに厳しくはないだろうと思う。せいぜい、ガラス扉に鍵がかかっている程度でさ。だったら無理やりでも開けられるし……それで、たしか日本一蔵書数のある大学図書館だった。かなり詳しく調べられると思う。場所はたしか、文京区だ。ちょっと寄り道すれば」

「まっすぐ行きたいところだな、俺は」

ミサビをさえぎったのは、テッセンだ。あたりを、剣呑な表情で見渡す。

「ぐずぐずしてると、何か起こりそうで怖い」

彼にそぐわない、怖い、という発言に、一同は一瞬、喋るのをやめた。テッセンには、シンとは別の意味で、他の人に耳を傾けさせる、不思議な迫力がある。そのまま、難しい顔で言った。

「静かすぎるんだ。こういう世界はいやな感じがする。ずっと見てて——今さっき、ちょっと昔に、知り合いが言っていたことを思い出した。この地球のいかなる地軸においても、完全に生き物の存在しない世界なんてのは、ありえない、て……な。生き物ってのは、こう——三角形になってるだろ」

「ヒエルラキーね」

手つきを見て、ミサビが呟く。

「そうだ。一番下の微生物にはじまって、上にどんどん捕食生物がのっかってく。で、えーと、なんてったかな。そうそう——もしその階層のうち、どこかひとつの生物でもかけたなら、即座に他の、それにかわる生物が空いた席を埋めるものだ——とか」

「とうと」

「ここには、人間の気配がある」

テッセンは、腰に手をあてたまま、ぐるりとあたりを見渡した。

「だけど、人間がない。なんでもないのか、という理由は、俺は単純だから、こう考える。“人間よりもっと強いやつがここにいるから”」

「もっと——強いやつ」

「あるいは、もうひとつ考えるのは、なんらかの理由で、人間があつというまに滅んだってことだ。こういう町並みを残したまま。で、町はまだ朽ちる間もない、そんな時期に俺たちが来た。しかし、人間がないとするなら、ここにはもう、人間に代わる、人間の席を埋めるやつが生まれ始めているか、生まれて、活動を開始するのを今か今かと待ってる——ような気がするんだよな。俺は、この静けさってのは、ええと——予兆に思える。上品にいうなら、オーケストラが音楽を鳴らす前の調律の時間。開演前のあの緊張感だよ」

全員が、テッセンの頭が悪くないことを再認識した。

「すごいや」

リヒトは目を丸くして、大きな友人を見上げた。

「そんなことを考えてたの」

「オーケストラ、なんて単語をまさか、君から聞くとはな」

ミチタカもうなずく。

「一理ある」

誰より真剣な顔なのは、ミサビだ。彼は、天をあおいで、眉間に深くしわをよせた。

「ああ——失敗した。そうか。図書館もだけど、まず、東京タワーにのぼってみればよかった。町並みをちゃんと見るべきだったな。そういうものがあるかどうか、もしかしたら、それでわかったかもしれない」

「でも、あれを自力で登るのは大変だぞお」

サツキがおどけた調子で言った。

「それこそ、時間の無駄かもしれないしさ」

「もしかしたら、他のチームが上ってるかもしれないですよ」
ミユキが控えめに口をだす。

「他の人たちだって、この東京のこと、気になってるかもしれないし。同じように、図書館のことだって思いつくかも」

「その可能性はあるな」

「でも、とりあえずさ、図書館に、やっぱり行こうよ。神楽坂って遠いよ。もし日が暮れたら、どこかで休む場所だって必要でしょ」

「日が暮れたら、ね」

一同がなんとなく黙ったのは、頭上が一面、灰色の雲で覆われているからだ。ぼんやりと明るいので、おそらく昼間なのだろうとは予想がつく。しかし、雲に切れ間がなく、どこまでもどこまでも、灰色である。このまま夜になったら――

視界が暗いというのは、それだけで精神的な疲労になる。

「どうしてもって言うんなら、それでもかまわねえけどよ」

テッセンは、ミサビにむかってぼそりと言った。

「とにかく、足手まといもいるしな」

ちらりとマチコのほうを見る。彼女は、少し離れて、テスと一緒に地面に座り込んでいた。長刀はすでに杖と化している。

「いこう」

決意の声でミサビが言った。

「よし、きまり。――マチコ、立てる？　もう少しだけ、がんばれるかい」

「しょうがねえなあ」

ち、と舌打ちして、テッセンが「おい、駄目なら俺が背負って――」

そういいかけた瞬間だった。

何かが、静かに、マチコとテスの背後に現れた。

そう。

これがオーケストラなら、まだ、演奏者は半分だけ、もしくは、観客しか来ていなかったのだ、ということ——まだ、何の調音すらもしていない状況だったのだ、ということが、ようやくわかった瞬間だった。

「お——」

マチコとテスの後方には、地下鉄駅への階段口が、歩道に黒い空間をつくっていた。

そこから、突然現れたもの。

それは、黒い人間だった。

「おい、うし」

いちはやく気付いたテッセンが、後ろ、と言い切る前に、その黒い人間は、異様に長い手を伸ばして——長いだけでなくムチのようにしなった腕がマチコの肩にかろうとした。つづいてそれに気付いたのは、マチコの真横にいたテスである。彼女は、級友の背に手をまわして思いきり自分のほうに引き寄せた。つんのめったマチコの体があつた場所を、黒い腕が空を切る。前に転がったマチコの体をかばうようにテスの体が空間にはいりこみ、黒い人間にむかってホルスターからひきぬきざま銃をむける。

「なんだ!？」

サツキが叫んだのも無理はない。なんだ、というほかなかった。

その黒い人間。

人間が、全身焼け焦げたような姿形をしている。

顔に、二つの目がある。まばたきをいっさいしないその瞳だけが、

白かった。

そして、大きい。

背丈は二メートルはある。衣服は身に着けていなかった。性別はわからない。二本ずつ手足があつて、丸太のような胴体に頭。見た目の身体構成はほぼ人間だ。

「敵か……!?!」

味方か。

テスが躊躇したのは間違いない。話が通じるかもしれない、といういっぺんの望みを、賢明な彼女なら間違いないと持っただろうからだ。事実、そう思わせるぎりぎりの外見をしていた。しかし、実行に移される前に、相手はノーをつきつけた。

黒い人間は、手のひらから何かを出した。

オレンジ色の、すさまじい熱を発する炎だ。

火炎放射器のように、線となって吹き出すそれが、テスの肩をえぐる。水平に動く。

「ひっ……」

息を吸い込んだまま声を忘れたマチコ同様、その場の全員が、何もできずに凶行を見守ってしまった。

胴体から切り離されたテスの首が地面に落ちたとき、ようやく、サツキが「ひけ!」と怒鳴った。

「退け! 逃げろ!」

「や……」

リヒトは、一步も動けなかった。

テッセンが、前に走り出て、ぼうっと黒い人間を見上げているマチコの襟首をひつつかむと、荷物のように脇に抱える。ミサビが、黒い人間の横から回りこんで、仰向けに倒れたテスの体に腕を滑らせる。ミチタカは、アスファルトに転がった、テスの銃を拾い上げていた。

「走れ!」

はじけるように、リヒトは足を動かした。

——なんだこれ。

テス。

背の高い、黒髪のハンサムな女の子。

死んだ——死んだ？

当たり前だ。首がとんだのだ。いくら平安人でも、ひとたまりもない。

でも、本当に？ これは本当に現実か？

町並みがゆがむ。どこをどう走ったのかよくわからないが、気付くと、彼らは坂になった隘路を抜けていた。

「どっ……」

走りこんだのは、小さな公園である。ペンキでカラフルに塗り分けられたブランコやすべりだい、シーソーにジャングルジム。砂場には、プラスチックのおもちゃが転がっている。

植え込みの影に、彼らは入り込んだ。つつじのしげみだ。クロガネモチや銀杏、桜の木が、ところどころに植わっている。

「なんで」

芝生に手をついたまま、リヒトが呆然と呟くと、テッセンが「だから言っただろうが」と苦々しげに舌打ちした。

「嵐の前の静けさってこった」

「なんだろうね。ヒトじゃなかった。いきなり攻撃してきた——知能がない？」

「この文明を作ったのは奴らか？ いや、だったら、街がこんなふうに作られるわけがない。やっぱ、人間は滅んでる。後継種族か……テッセンのいうとおり」

「地下から出てきたな。どこかに潜んでいやがったってことか。しかし、あの見た目——あの炎——炎だよな。火を、腕から出した」

「そうだね。ちらっとだけど、傷口を見た。炭化してたよ。服は焦げて、火傷も……」

「待って——待って、待ってよ！」

リヒトは叫んだ。テッセンたちは、ぴたりと喋るのをやめて、彼

を見た。仲間が死んだというのに、驚くほど冷静な様子だ。リヒトは、信じられない思いで、四人を見つめる。

「どうということ。どうということ!？」

「おちつけ」

テッセンが言った。奇妙に優しげな声である。

「な。おちつけ。頼むから、静かにしてな」

「でも……」

「あいつ一匹じゃないかもしれない。どうするか決めないと。今すぐ」

「戦うにしても、相手がわからない。火を噴くだけじゃないかもしれないね。――やっぱり、一度図書館に行くよ。調べたい。現場と装備を確認」

「了、現場と装備を確認。次は？」

「防衛一位に仮置。それと、状況がわかるまで、粒子は使わないほうがいいかもしれない。ここのルールが不明だ」

「防衛一位、粒子不使用。了」

「了です」

「了」

「了?」

ミサビに尋ねられて、リヒトは面食らう。隣から「了だ」とテッセンがかわりに答えた。

「了解ってこった。まず、身を守る。できれば攻撃はせず逃げに徹する――死なないことが目的だ。それから、粒子の操作は控える」

「目的地は、文京区の東京大学付属図書館。一時間で着。マチコは――無理そうだね」

「置いてくか？」

冷たく言ったのはテッセンだ。その言葉に、びくつとなった少女は、青ざめた顔で首を振る。茂みの中で、テッセンから放り出されたときのままうずくまっていたが、表情は、置いていかれまいと必死だった。

「やだ。やだよ！ おいてっちゃやだ！」

「冗談だよ。俺が背負えばいいだろ。振り落とされんなよ」

「う、うん……」

「つうわけだから、リヒト、お前も、なんとかついてこいよ。俺は、お荷物背負うことになっちまったからな」

腰から、長い紐を取り出しながらテッセンが言った。陽気な声とは裏腹に、表情はきびしい。

「なんとか状況が分かって粒子が使えればな。助けもはやく呼べるかもしれないし」

「まあね。しかし、テスがいないのは正直、痛いよ。彼女、医療系志望だったから」

「待って——皆さん、来ましたよ！」

見張り役のミュキの、するどい声がとぶ。

テッセンに頭を押さえつけられながら、リヒトも見た。

公園の入り口に、二体の黒い人間が立っていた。

「二体——」

「足は速くない。逃げるぞ」

「いや、待て。いる——あっちにも」

公園には、出入り口が二箇所ある。裏手にあたる場所にも、二体立っていた。植え込みは中央にあった。

「こいつ背負って柵はよじ登れねえな、さすがに」

周囲は、三メートルほどの鉄柵で囲われている。どちらかを突破するしかない。

「スリーカウントで正面突破。まず、なんとか道を空けないと。獲物にリーチがあるのは、僕とミチタカとテッセンだね」

「俺が行こう」

ミチタカが手をあげた。刀の鐔に手をそえる。「しんがりを」とミュキがすぐさま言った。

「リヒトはテッセンの左。僕は右。ミチタカが前、ミュキとサツキが後。それと、絶対を守るべき人間を決めておく。サツキとリヒト

だ」

「え……」

リヒトは目を見開いた。

サツキはわかる。彼は地理に詳しい。しかし、自分がなぜ、思っている、ミサビが、いつもの冗談めいた口調で笑いながら言った。

「転校して日が浅いルーキー君だ。悪いけど、マチコと一緒にお姫様になってもらうよ」

「お、姫さま!？」

「そう。気楽にね」

ぽん、と肩をたたかれたと思うと、ミサビが植え込みから上半身を出す。

「生きて帰るよ。テスのぶんもね——三、二、一！」

ミチタカが飛び出す。続いて、マチコを紐で背中にくくりつけたテッセン。ミサビと、なんとか遅れずにリヒトも飛び出した。サツキとミユキが続く。

戦闘が始まった。

黒い人間は、やはり、腕から火を噴出して戦った。しかも、吹き出す位置は腕ばかりでなく全身に及び、タイミングを自在に操れるようだ。けして速くはないが、立ちふさがられて、火を出されると、猛烈な熱と火の粉が舞って、逃げられず、容易に手を出せない。

平安人の体は、珪素——つまり、シリコンをベースとした細胞でできているため、熱には強い。しかし、内部に、人間と同じ臓器を持っているため、あまりにもそれをあてにしすぎると、内蔵に異常をきたすおそれがある。

正面を突破するのには、やはり時間がかかった。ミチタカが、傷を負った腕を振り回し、無事なほうの手に持った刀を相手に突き刺した。

「よし！」

動きの止まったタイミングで、公園から外に出る。

そこからの一時間を、リヒトは永遠のように感じた。

右、左、まっすぐ——走りに走った。平安市のインフラはお世辞にも整っているとはいえないので、彼は、転生してからことのほかよく“歩く”ことに慣れていたが、たかが十キロ、二十キロを走り抜けるのでも、警戒しながらとなると、それは膨大なエネルギーを必要とした。道々に、黒い人間が音もなく現れる——暗い路地から、突如として出てこられたときの衝撃はたまらなかった。何度心臓が停まりそうになったことか。

そして、目的地までたどりついたところで、ついに、先頭をひきうけたミチタカが倒れた。

「悪い。ここまでだ」

すでに、全身火傷と裂傷で覆われている。ベストのボタンはちぎれ、シャツも袴も破れて血がにじむ。血液補充剤も底をついていた。「がんばってくれ……！　もう少し！」

ミサビが、杖でガラス戸を破る。ひびのはいった箇所をテッセンとサツキが交互に蹴破り、全員が通れる穴を広げた。

東京大学の図書館は、石造りの巨大な建物だった。電気の通っていない暗渠に、目を凝らすと本棚一杯に並ぶ本。あたり一面、巨大な書架特有のかびとほこりの匂いが満ちていた。

ここなら、黒い人間は出てこない。

しかし、ほっとする間もなく、中に入り込んですぐ、ミサビとミユキに支えられたミチタカが、途切れがちに訴えた。

「これ以上血がなくなると、損傷が残る。ここで消えるよ。処置を頼む——」

「——わかった。でも……」

「いい。どうなっても文句は言わないさ。覚悟はしている」

澄み切った表情でそう言った。リヒトは、震えながらその光景を見た。

彼らにとっても、もつとも重要な臓器は、人間と変わらない。

脳。魂と魄をつなぐ要。これだけは、どんなに科学技術が進歩しよう、医学が発達しよう、再生が不可能なのだった。心臓、肝臓などの臓器は、ひとつの細胞さえあればまったく新しいものが作れ、拒否反応なしに移植できるが、脳だけは無理だった。それは、心の動きを決め、思考をし、魂の記憶を貯蔵する。ひとりにひとつ、必要不可欠のものだ。

彼らが今の体で、以前と間違いなくもっているのは、脳、そのみである。人間だったころのものをそのままハクに移してもらって、使用している。逆にいえば、これを失えば、彼らは彼らでなくなる。もやいをなくした魂はこの世界を離れていく。本当の死がおとずれるのだ。脳の保持は、彼らが生きていくうえで、最低限の条件だった。

ミチタカは、脳を残して、体を放棄することを告げた。

「酸素を充たしても、どれほどもつか――」

処置は、ミサビが行った。このなかで、もっとも知識があるのが彼だったし、ミチタカがそれを望んだのだ。

首に特殊な針を差し込んで痛覚を麻痺させる。胸部を簡易メスで切開し、心臓近くまで手をいれて、ハクの定着時に取り付けられた処置板を取り出す。板には名前が彫られている。早川途孝、というのが、いつも冷静で落ち着いた声色で話す少年の名前だった。板にはまた、コードでつながれたあるモノが付随する。彼らのハクにすべて設置されているブラックボックス――行動を記録し続けている、といわれる函状の制御装置である。これを引っ張り出し、開く。中にあるスイッチを操作する。神経の切断、そして心停止――同時に、血液の循環、すなわち各器官への酸素の供給が絶たれ、細胞の壊死がはじまる。すぐに頭の皮膚をはがし、頭蓋骨のとじめを開き、髄液で充たされた脳を取り出す。半球のそれを、ブラックボックスに納めると、青いランプがともった。血液がなくなった今、脳を生かす手段は、函による酸素の直接供給のみである。よどみなく処置は終わった。しかし、ミサビとて、一介の中学生に過ぎない。正規の手順を踏んだとしても、不安は残った。

今後、元の体に戻ったとしても、ミチタカが、前と同じ彼でいられるのかは、まさに、神のみぞ知る、というところだ。

ミサビの手は震えていた。

ミチタカ。

脳だけになった彼は、当然だが、喋ることも、見ることも、聞くこともない。

作業には、十五分ほどかかっていた。蒸し暑いほどの空間は、事務室の奥にあった、四畳ほどのスペースだ。処置のために、ひとまずここに逃げ込んだのである。

彼らの目の前には、胸を開かれ、頭をからっぽにされたミチタカの体が横たわっている。彼は言わなかったが、左腕はほぼとれかけ

ていたものを、上から布を巻いて隠してあった。どうりで血がなくなるはずだな、とサツキがぼつりと呟いた。

ミサビは、ミチタカの脳——いまでは彼自身、といえなくもない彼のご本尊を、自分の腰にさげた巾着のなかに仕舞った。

「もし僕になにかあっても、ミチタカだけは連れて帰るように。これ以上、函にする人間を出したくないものだね」

「可能性があるのは俺だな」

自嘲に似た笑みを浮かべて、テッセンが呟いた。さすがに、目の前で級友が解体されるのを見て、動揺を隠せない。彼もまた、左腕にひどい傷を負っていた。血を噴出していたが、ミチタカの処置のあいだにマチコを怒鳴りつけて縫い合わせせたので、ミチタカほど逼迫してはいなかった。

マチコは沈み込んでいた。

「どうして」

彼女は言った。言わずにいれなかったのだろう。

「なんでこんなことに」

「なんでって、そりゃ——なっちまったもんはな」

「ミチタカはまだ運が良かったよ。処置をする余裕があったもの。テスなんか……、本当に」

「あいつら、なんなの。火をふくって——それも、自由に。どうなってるの。変だよ」

マチコは顔を、手で覆う。

「魔法みたいじゃない……」

リヒトをのぞく全員が、苦々しげな表情になった。

リヒトだって、それを、何度口に出そうとして迷ったかわからない。

目に映るものすべてが本物とは思えなかった。かつて彼が属していた世界の、画面の向こうのゲームのように思えてならなかった。あいつらが現れてから——どこかにあるスイッチを切れば元の世界に戻るのではないか、と、自分のなかの自分が常に呟いていた。

もしゲームなら、自分たちは勇者だ。黒い化け物に立ち向かう力が、だから、必ずあるはずだ。

しかし、そう考えるたびに否定せざるをえなかった。宙にしぶきをあげたミチタカの血、聞いたことのないミサビの厳しい声、テッセンの気合。彼の手を引いて走るサツキの鬼の形相。これは、現実だったからだ。

魔法――

それをねがって何になるのか、ということに、彼はすでに気付いていた。

「魔法だって？――お前、本気でいつてんのか。このごに、およんで」

案の定、一番しかめつらを作ったテッセンが、怒りを押し殺した声で言った。

「だって。思うよ！ あいつらの変な力を見てたら。この世界なら、私たちだって何かできるんじゃないかって。たとえば、粒子を使えば、もしかしたら、傷をなおせたり、武器だけじゃなく、別の力であいつらを倒せたりするかもしれないって」

「魔法？ はっ、そんなもん」

テッセンは笑い飛ばした。

「空を飛べて何になる。傷を瞬時に消し、それで病人を治癒して何になる。手から火を出し、水を操り、風を従えてそれでどうする。

魔法？ そんなもの、物語のなかだけで十分だ。それを現実に望むことに何の意味がある？ それで空想が腹いっぱいになれば――確かに、そんな世界は楽しいかもしれない、と俺だって思うよ。好きだよ、そういうの、小説やマンガで読むぶんにはな。でも、だけど――だったら、これまで人類がしてきたことは？ たったひとりの魔法使いが空を飛んでも、たくさんの人を乗せて飛ぶヒコキの前に、そんな力は無意味だ。スプーンを曲げてどうする。ひとつずつレンガを積んで家を作る、土を運んで道路を作る、その行為のほうがよほど尊い。家族が眠り、守られる場所、誰でもが恩恵を受けら

れるそういう努力の積み重ねの前で、そんな能力は無駄の横槍でしかない。医者存在は？ そいつらだって、死んでいく患者を前に何度も無力な気持ちになっただろうよ。助けたいのに助けられない。でも、それで、マホウノセカイに逃げてどうするんだ。そういう、何万、何億の医者たちが必死で積み上げてきた医学を前に、超能力で治して見せますなんて、お前、本気でいう奴がもしもいたら、そいつこそバカだ。よしんば、今、ここでもしそれを使ってもだ、魔法で治せるのは、せいぜいその目の前にいる一人か二人だ。それで助かったって、いつかみんな死ぬ。みんなが生き残れるような共通の知識や方法や薬を生み出すほうが、どれほどみんな助かるか。魔法なんて、ただのその場ののぎだ。意味がない。まったく意味がない。子どもみたいに、そんな夢みたいなこと言うな。そんな夢ばかり見て、自前の能力を信じないなんてことするな。手前の力で戦ってきたやつ行為を無にするな。できないことに夢を見るな。今、この時間に、そんな夢みたいなことだ」

テッセンはそこで、唇をかむ。

息を吐き出しながら、彼は、空っぽになって横たわるミチタカの体をにらんだ。

「こいつらの、やってきたことを無駄にするんじゃないやねえよ！」

「でも……」

「だってヘチマもねえんだよ！」

マチコが男なら、確実に殴られていただろうな、とリヒトは思いつながらその様子を見ていた。

「お前だってやれることがあるだろうが！ リヒトの——なんちゃらとか作ったのだってお前だし、さっき俺の腕縫ったのだってお前だろうが！ 絵しかかけない、お裁縫しかできないなんてのはたしかに今、そんなに必要じゃねえよ！ でも、できることがあるだろうが！ それをやれよ。逃げるなよ。逃げなかったら——お前がちゃんとしてるなら、俺が絶対、命がけで守ってやるよ！」

マチコは、ひくりと息を吸い込む。大きな目を一杯にみひらいて、

しばらくその場に立ち尽くしていた。

全員が何かしら傷を負う中で、テッセンの背におわれていた彼女だけは、ほとんど無傷でいる。彼女はしばらくそのままだったが、やがて、こくりとうなずいて、やっと泣きそうな顔をやめた。ぎゅっと、長刀を杖でなく、しっかりと握りなおす。覚悟を決めた表情で、顔洗ってくる、と彼女は言っ、ミユキとともに洗面所へ去っていった。

「あと、リヒト。お前——どこまでいける」

マチコが立ち直ったとみたのを機に、ミサビとサツキも「ちよつと」図書館のほうへと事務室を抜けて様子を見に行くのを見送って、テッセンが静かに言った。

二人だけになった空間に、彼の声が響いた。

「どこまで——って」

「落ち着いてるな。思ったより。よかったよ——とにかく、逃げるのに邪魔にはならんし、ついてくるし。でも、もうそろそろ、お前もな」

「うん——」

逃げるばかりでなく、とテッセンは言いたいのだ。それは、彼自身も、ずっと考えていたことだ。

テッセンは、左腕をなでながら、にやりと笑う。小さなソファに巨体を投げ出すと、目の前に空いた椅子にリヒトを促して座らせた。「弓は扱えるか？ テスの銃が一丁、これはミサビがたぶん使えるだろうが、他にも飛び道具があるってことは、かなり重要なことだ。できれば、十メートル射程を命中するくらい腕があればいいが、そこまでは期待できないだろう。いや、バカにしてるんじゃない、正直な感想として。どうだ」

「うん。自信ない」

彼の弓——実戦弓なので、和弓ほど扱いづらくはない。作法も型もない。しかし、なんといっても、持ちはじめて日が浅い。リヒトは、慎重に、自らの力量を測る。

「威嚇程度なら……、びっくりさせるくらいはできるかもしれない」
「飛距離は」

「五メートル——いや、八メートルなら、胴体には当てられると思う。十メートル以上はわからない。それなら、石とかを手で投げたほうがいいだろうし、肥後守（小刀）で切りかかったほうが、」

「ナイフはしまつとけ。接近戦は、お前には勧めない。お前も気付いたと思うが、わかったかぎりでは、かなりぎりぎりだ。火を噴出すのに、予備動作があるってことは言ったな。そこから実際に火が出るまでが、一秒弱。射程が二メートル。気付いてすぐに後ろに飛びのくのに力がある。しかも……、ありやな、ただの火じゃないと俺は見た。ただの火で、あんな簡単に首は飛ばんよ。ものすごい——どっちかっていうと、レーザーの威力に近いような気がする——まったくどうなってるんだかなあ。で……、お前は小柄だし、リーチも短い。そこを、あの長い腕や足が襲ってくるのだけでもかなりきつい。——これはお前には言っとくがな、俺の左、骨軸がちょっとイカレたかもしれん。力の伝わり方が弱くなってる」

「えっ」

顔色ひとつ変えずに左腕のぐあいをたしかめている。テッセンは「内緒だぞ」と笑った。

「なんで。言おうよ。ミサビは、だって、何かあったらすぐに言えって」

「言っでどうする。俺が抜けたら、それこそ、もう——あれを相手に、ここから一日たりとも生き残る目なんてねえよ」

たしかにそうだった。テスを失い、ミチタカの欠けたこのチームの主力は、いまやテッセンなのである。乱暴で、無骨で、無愛想で、といった日ごろの欠点が、ここではすべて頼もしかった。容赦なく強い。今では全員が頼りにしている。ミチタカも、彼がいたからこそ、死ぬまで戦わず望みを託したのだろうし、マチコも、なんだかんだ言いながら、突き放した物言いが、彼なりの気遣いの現れ方なのだと言ったから、自分の足で歩き始めたのだ。

「ねえ——俺、どうしたら一番いいと思う？　ごめん、テッセン。頼ってばかりだけど。俺、そこまではまだ判断できない。みんなが生きたり死んだりするってところで——本当に情けないけど、弓をなんとか使えて、威嚇程度で役にたって、それだけでいいかな。何をするのが、一番、テッセンやサツキや、ミサビやマチコの、ミユキのためになる？」

「じゅうぶんだよ。ためになってる。お前がそうやって、なんとかついてきて——こんな実戦はじめてなのに、そんなに騒ぐこともなく、啼いたりわめいたりしねえで——まるで初めてじゃねえ、みたい……驚くほどしゃんとしてるのが……、それで、わりとみんな、落ち着いていられるんだぜ。リヒトもちゃんと来てるんだからがんばろう、ってな。それに、そうやって素直に、知らないことは教えてくれ、わからない、頼りにする、ってのは、なかなかできるもんじゃない。少なくとも、俺にはできない芸当だ。あとは、そうだな。もし、体が動くなら、お前がそうやって落ち着いていられるのなら」

そこで、テッセンはじつと彼を見つめた。

「なに——？」

「見るんだ」

テッセンの声は、真剣だった。

「見る……、って？」

リヒトは、眉間にしわをよせて首をかしげた。文字通りうけとつていいのだろうか、という迷いをもって。

「どう見える？ お前には、今の俺たち」

彼は、手をひろげてみせる。

「どうって……、ぼろぼろだけど、」

「具体的には」

「具体的には？ ええっと——サツキは、そうだな——情けないと思ってるかな。自分を。柔道部だから、接近戦のエキスパートでしょ、このなかでは。でも、相手があだから、あんまり前に出られなくて……、誘導役だから、おちおち無茶もできないし、性格としては辛いと思う」

そうだ。だから彼は、ミサビと一緒に、書架に出ていったのだ。勉強も本も苦手なのに、それでも、何か役にたちたくて、じっとしてはいられなくて——

そういうと、テッセンはうなずいた。

「よし。じゃあ、ミサビは？」

「困りきってる、かな。それから、怖がってる。あんなミサビははじめて。もちろん、ミチタカのこともあるし……、一応、ここではリーダーでしょう？ でも、むぎむぎとテスを死なせてしまつて……それから、ミユキを気にしてる。そうだ——怖いってのは、ミサビの場合、自分が死ぬかもしれない、っていう、自己中心的なものじゃないよ。チームが絶望的な状態になって立ち直れなくなることで、それが怖いんだ。そう、ミチタカのがきっかけで——ミチタカ

がいるからミユキはがんばってこれた、ってのもあるんだ。それを、ミチタカがいなくなったから、彼女はとても悲しくて、もう駄目かもしれないって思ってる。怖い、と、ようやく今思い始めてる。そう、ミサビはそれも気にかけていて、そこからもし決定的に絶望に叩き落されたらどうしようか、本当に悩んでるよ。表面はまだ笑顔を見せて、どうにか希望をもって、明るく盛り上げようとしているけど。で、それで……、それで本当にミサビらしいのは——俺たちだけじゃない、彼は、A組のほかのみんなや、別れていったひとたちのことも気にかけてる。心配でたまらない。自分のしたチーム分けは正しかったはずだ、と、信じて、信じようとして——うん。でも、彼は立ち直るよ。ミサビは、課題に優先事項をつけられるひとだ。最後まで希望を持ってるひとだもん。結局は、しょうがない、何とかしなくちゃね、と彼らしくふっきる。大丈夫。あと——さっきまでは、本当に死にそうだったけど、マチコは、今、ようやく大丈夫になったと思う。今のテッセンの言葉がきいたし、それに、彼女は本当はとても強いんだ。未来のことを、今、一番思ってる。自分のやりたいことがちゃんとあるひと。そのために努力を惜しまない。小さいけど、山椒みたいにぴりっとしてる。絶対に生きるんだ、生きて帰るんだ、って思ってる」

言い終わると、彼は自分でも不思議な気持ちになった。話し始めると、どんどん——視界がクリアになる気がする。細かい、仲間たちの心の動きが、突然にはっきりと目の前に浮かび上がってくる。

「そう」

テッセンはうなずいた。心から、彼の見解を信じている、という目つきで、じっとリヒトを見つめる。

リヒトは、目をしばたかせる。

「そう——お前が言うなら、たぶん、そうなんだろう」

「え？」

「すごいな。俺はまったく、他の連中が何を考えてるかなんて、ましてどういいう心境かなんて——想像もつかねえよ。そう……、そう

だな。俺は、今、ようやくわかったような気がする。いや、そんな気がしてたけど。本当に」

感心した様子で、何度もうなずいた。

「な、なに……？」

「お前には、見る目があるよ。なんていうのかな——物事の本質を、まっすぐ見るんだ、お前は」

「どうということ」

首をかしげると、テッセンは静かに言った。

「そういう奴を、俺はもうひとり知ってる——というか、知ってた。こいつはすげえな、って幼心に思ったな。どうなってんだ、って。あんまり使いたくない言葉だけど、これが才能かな——てさ。でも、驚くことに、だ。たぶん、お前は、そいつよりもっと懐が深い。きつと、転生する前から——お前がそのまま成長してればそうだった、っていうこともあるんだろう。外の世界を知ってるからな——漠然とじゃない。手探りでもない。まだるっこしい方法はとらない、というか、そんな方法をそもそも知らないのかもしれないが——それが、転生して、その体で、粒子もお前のその長所をぐんと伸ばす方向に傾いたんだろう。俺がなんとなく、これに最初に気付いたのは——今このときだから正直に話す。根拠を話さなきゃ、おまえ自身も納得できやしねえだろうから。そう、最初は——俺の母親を紹介したとき、初めて俺の母親に会ったときもお前、そんなに驚かなかったな、と思ったんだ。それは、俺にとっちゃ、稀有といってもいい体験だった。普通のやつなら、まず、あの顔や体を見た瞬間、顔色を変えるんだよ。目をそらしたりもする。医者でさえ。で、そのあとこわごわ、上から下まで見て——または、ぶしつけなくらいじろじろ見て——とってつけたみたいに愛想笑いを浮かべてさ……でもお前は違ったよ。お前は、最初っから、目をそらさなかった。じつと、藤原緑、っていう存在を確かめようとして、見てた。じいっとね。それで、気付いてたかどうかしらんが、お前が来てから、妙にうちのクラスの連中も、変わり始めてるんだよな。一見、内部と

外部の対立が激しくなった、ってのはこれ、あいだに一個小石をはさんで摩擦が起こってる、みたいなもんで、小石のおかげで、結果的には棘がなくなって、きれいにつるっと、馴染むようになるんだよ。お前がその、小石だ。で、何が言いたいかっていうのだ

。お前がそうやって、全体を見てくれれば——もしできるなら、それを、言葉で、うまく説明できるようになれば、俺たちがどんなに戦って、傷ついて、ぼろぼろになって、もう駄目だって思っても、お前が指摘してくれれば、打開策は見つかるんだ。サツキやミサビの心の内側について、本人たちより詳しくわかってる、ってことを、今、証明したように。そう……お前さえ見てくれたら、どんなに打つ手がなくなっても、何かは見つかるだろう。そうやって、ひとりひとりが夢中で、わけがわからなくなっているなかで、本人よりしっかりと自分の置かれた状況が分かる、客観的に言える誰かがいる、というのは、ものすごくみんな自信が持てるし、大事なことだ。本当に、大事なことなんだぜ。だから、ミサビのやつも——ふん、あいつもたぶんそう思ってやがるな。だから、お姫さまなんて、とてもねえ、冗談みたいに言ったわけか」

そうなんだろうか、とりヒトは目を丸くしてテッセンを見つめた。「なんか、そりゃ言いすぎっていうか……かいかぶりすぎる、気がするけど」

「まあ、そりゃそうかもしれないけどな。単純に言うと、お前の目は、アルリシヤやらの相棒、シキガミ、使い魔の連中みたいな、ってこった」

「んん？」

「あいつらが主を決めるのに、どういう基準があるか、っていうのは、けっこう謎なことだな。なんでか、っていうのは、皆とりあえず聞くんだよ。で、話を総合してみるに、どうやら、あいつらは、俺たちの姿形だけじゃなく、魂の形や色や模様、あり方みたいなもので、寄っていく相手を決めるんじゃないか、という話なんだ。お前もそうかもしれない。お前も、俺たちの行動や様子を見ながら――

「本当はこいつはこんな人間なんだ、つてのを、つねに見てるのかもしれないな、ということだ」

「へえ……」

そう聞くと、相棒を持つことに興味がわいた。

「ま、それもまた、生き残ったらだな」

「うん」

相棒の話で、テッセンはアルリシャやミドリ、タエコのことを思い出したらしい。しんみりと物思ふ風情に、彼もまた、だいぶ気が弱っているなとリヒトは思った。

ああ。

本当に——自分に、そんな力があるのなら——

「とにかく、信じるよ。自分をな。何もできなくて、逃げるだけだなんて思わずに。お前には、その、人を見る目がある。で、これから、ちつとでも力を貸してくれたらいいさ」

「うん……」

ひょっとしたら、そうやって元気を出させようとしているのかもしれないなかった。今、彼に一番必要なのは、励ましであり、仲間の一人として頼りにされている、というたしかな証だったのだ。

テッセンの言葉が、今だけの、その場のぎでた言葉だとしても、いいや、とリヒトは思った。

「俺、がんばる」

「おお。がんばれ」

しかし、ようやく盛り上がり始めたところに、戻ってきたミサビとサツキが現れると、上昇するムードは一気に冷めた。

二人と、ちょうど帰ってきたマチコたちもいるところだった。全員を見渡して、ミサビはちよつとだけ微笑んだ。そのあと、何気ない風に彼は言った。

「ミサオが死んだよ——コーゾウも」

リヒトは、聞き間違いかと、彼の青白く整った顔を見つめた。

「どういうことなの」

まっさきに言ったのはマチコだった。ミサビが、その場に立ったまま、静かに説明を始めたが、彼が言うには、だいたい、こういうことだった。

内部生は、外部生たちと別れた後、リヒトのチームと同じように、地上に出て徒歩の最短ルートを探したのだが、途中から、地下鉄の線路をたどっていくのがもっとも合理的だとして、地下鉄の構内に入ったのだという。そして、あの黒い人間に襲われた。傷を負いながら逃げるうちにパニックが起こり、内部生たちはばらばらになった。ナマモノ・トリオとミサオだけが、一緒に固まって逃げたが、やはり、途中でミサオが帝大図書館の存在を思い起こして、ほんの一時間ほどリヒトたちより前に、ここへ辿り着いたのだった。

「だけど、すでに致命傷を負っててね——ミチタカと同じく、処置ができればよかったんだろうけど……レイも、ヨウタもコーゾウも、ミサオに対して何もできなかったんだ。また、ミサオもねえ……、彼らしいといえば、実にらしいんだけど、特に、何も言わなかったらしいんだ。それで、ついさっき——だったそうだよ」

たしかに死んだのか、と呟いて、テッセンが目をむいた。

「ちょっと待てよ。あいつらも、ここにいるのか？」

「上にいる。僕らとは反対の門から入ったから、わからなかったんだね。彼らも、ガラスを破って入ったって。……上に、禁帯出図書だね、書庫があって……。そこにみんなでいた、よ」

「処置ができなかったって——いや、その言い方だと、余裕があるっちゃあったわけだろうが。見殺しにしたのか——？　で？　コーゾウは。そっちはなんで」

「ミサオが死んだあと、自害した——って」

「はあー!？」

一同は、顔を見合わせて絶句した。ミサビは、ときどき浮かべる、独特の、シニカルな笑みを口元に浮かべて、肩をすくめた。サツキは、きつく眉根をよせて、唇を噛んでいる。

「どういうこと？」

「わからない。とにかく、二人は死んだ。それでおしまい。……らしいよ。残った二人の話ではね」

沈黙がおりた。それぞれが、胸中で複雑な考えをめぐらせる。

ミサオが死んだ。

リヒトにとっては、少なくとも時間を同じ部屋で過ごした相手である。コーゾウだって、自殺するほどの何かがあるとは――衝撃は徐々に胸に広がり、やがて、彼は立っていられないほどのめまいを感じて、椅子から前のめりに床に座り込んだ。

「感想は？ テッセン。君は、一番、つきあいが長かったね」

自棄に聞こえる声色で呟くミサビ。

「しょうがない。死んだものはしょうがない――な」

テッセンは、深くため息をついた。

「まあ、でも……、死んで残念、とは、悪いけど俺は思えねえなあ……。あいつらに何度、はらわた煮えくり返るほど怒りをおぼえたか知らんし。特にミサオ、か。あいつ、頭がまわるから、余計にひどいこともたくさん言われたしょ。ふん……、ミサオとコーゾウね。ああ――そう。長いような短いつきあいになっちゃったか」

そのあと、テッセンは、微妙な表情で呟いた。

「まったく、しょうがねえなあ」

どこことなく、途方にくれた感じだった。ミサビはうなずき、ゆっくりと部屋に入ってくる。彼は、まだむきだしだったミチタカの体に毛布をかける。そのあと振り向いた顔は、完全に、いつもの彼になっていた。

「それにひきかえというわけじゃないけど、彼らから、これをもらった」

一冊の本を、中央のテーブルに投げ出した。かなり分厚い、製本されていない、紙のファイルのようなものだ。厚いボール紙の表紙に、手書きの原稿やグラフ、新聞の切り抜きや、外国語で書かれた手紙が挟まっていた。大半を閉めるのは、書きかけの論文だ。

「なんだこれ」

「ミサオがね。死にそうなのに、図書館じゅうを探して回った挙句に、最後にこれを見つけて——死ぬ前にね、できれば僕に見せろ、と言ったらいいんだよね。まあ、最初にここに来るのを提案したのも彼だったっていうから……、僕ならわかると思ったのかどうか。まあ、わりと、考えることは似てたんだね、今になって思うと」

次々とページを開く。墨のあとも鮮やかに、筆で大きく「壊矢紛失兵器埋没地点への成和09隕石落下時の地球環境への影響予測」とメモらしき紙にある。舌をかみそうに長いタイトルをさしたミサビは、冒頭の二文字を指先で丸くなぞり「壊れた矢」と呟いて、その指を首元にあてた。

「ブローケン・アロー、かなあ。元の世界における」

「なんだそれ。ぶろおくんあろう、って」

「米帝——いわゆるアメリカ。アメリカが、世界各国に軍駐屯地を置いていることは知ってるよね。ブローケン・アローというのは、そこで行われた——外国における軍事演習での、核兵器紛失事故の暗号名だよ」

「核兵器——紛失……紛失って、なくしたってこと。なにそれ。そんなのあるの!？」

「あるよ」

多くは機密として非公開となっているが、例外もある。スペインでその事故があったことは、起こった、という事実を含めて公表されている。飛んでいるアメリカ軍用機から、核弾頭をのせた核ミサイルが落下し、飛散した核物質が広範囲の土地を汚染したのだ。しかしこれはレアケースで、そもそも、公表される、というのが破格のことであり、公表されてないものも含めると、実際の事故の数は

数百ともいわれた。その結果、多数の核兵器が、あるいは北極海へ、あるいはアイスランド周辺の海へ、太平洋へ沈んでいる、とされている。ほとんどは回収が困難であり、放置されている状態だった。

「これはたぶん——その核兵器が眠っている場所へ、もし隕石が落ちたら、という、予測データだね」

「それを、ミサオが、ミサビに読め、っていったってことは……」

「成和09隕石って名前がまず、はっきり書かれてるのがその証拠だろうね。まず、この隕石は、地球と衝突する確実なものだったんだろう。このひとは、そのなかでも、そういう危険地帯にもし隕石が落ちてきたら、というシミュレーションを、もともとしていたひとみたいだ。うーん。ひよっとして、それがどこかの領海だったりしたら、それで——ひよっとしたら——」

「隕石で、爆弾が、爆発したんだろうか？」

「したかもね。というか、核反応がもしあったら——他国だって、世界中にリーダーだの探査機だの潜水艦だの持ってるはずだし。ひよっとしたら、報復機構が働いたりするかな？」

「するとどうなる？」

「まず、世界中の大都市が破壊されるのは間違いないね。東京も例外じゃなく」

「でも、この東京、無事にみえるけど」

「そうなんだよね。だから、ミサオが言いたかったのは、ひよっとしたら、隕石のほうだけかも」

ミサビは、手紙を取り出し、中身を開く。横文字だった。

日本語に訳しながら、ミサビが音読する。

「“まず間違いなく、落下地点は南半球太平洋上の一地点と断定できると考えられます——直径はおよそ十五キロ、衝撃波はすさまじい威力となり——”

「何語だよそれ」と、あきれた顔でサツキ。リヒトとテツセンも、さっぱりわからないことを、目配せで確かめあう。

どうりで、ミサオが、どうしてもミサビに、というはずだった。

「oui, je viens du KISHU——フランス語かな。このメモのひとつ、同業の外国人研究者、みたい。“その日は七月七日午前” ああ——やっぱり、隕石だ。待てよ。ここ見て。そうだ。本当に、衝突した——みたいだね」

手紙はほかにもある。もう一通を広げて引き比べると、最初のものは、衝突の予測について書かれ、もう一通には、衝突後の変化について書かれていた。二通目の封筒は、便箋とともにぼろぼろになっている。

「それか。外がやけに寒かったよね。太陽がちつとも出てなくて。あれは、やっぱり、隕石が衝突したからだったんだ。ここは、衝突後の世界なんだ——ちりとほこりが空に舞い上がり、太陽をおおいつくすため、地表が暖められず気温が下がる。——微細な粒子が空気に充満して電磁波を発するため、電子機器、計器は壊滅。陸海空の交通手段が断絶すると同時に、物流が止まる。二通目の手紙の日付、七月九日だね。フランスのパリから、よく届いたな——作物も壊滅。うーん。でも、なんで人がいないのか——“さらに……未知の病原菌——ん？　これか。これだ！”

交通手段が止まろうと、物流が止まろうと、人はとにかく、なんとかして生き延びる。絶滅することはない。しかし、隕石の落下による衝撃は、南極の水を、とにかく破壊した。溶解して流れ出した五十億トンにのぼる氷の中には、人類誕生以前からあった未知の病原菌が、絶対零度の眠りをむさぼっていたが、それが、海流によって運ばれた。温められて蒸発した水とともに風に乗って、世界中へと広がっていった。その結果——

「あつというまに広がる病に対して、人類がウイルスへの対抗手段を、死にいたるまでに見つけられなかった場合は、最悪の事態も考えられるでしょう。すなわち、絶滅です。シエルタに避難できた各国の首脳部も、彼らの中に、このウイルスへの感染者が、ひとりでもいたならば、狭い空間の中でとうてい長生きができるとは思えません。そして、私はあるひとから、南極の氷床のなかには、たしか

に、危険なウイルスが閉じ込められていると聞きました。いよいよ、現実味を帯びてきました――貴方と私の研究をつきあわせると、私は、果てしない悪夢、絶望の鏡を見るような気がするのです。もう一通の最後の行。“死の時間が近い――私も感染した。パリで生きているものはもう百人にみたない。健闘を祈る、友よ”。すごい。パンデミックだ。未知の病の大流行――本当に、このひとの予測どおりになったんだ」

「要するに、隕石の落下の衝撃で南極の氷が解けて、そこからウイルスが流れ出して、ばたばた人が死んだってことだな。ペストみたいなもんか？……それで、人っ子ひとりいないってか」

「そうみたいだね」

「それで？ ああ黒い連中は」

「あれは――」

ファイルには、日記が挟み込まれていた。大学ノートの表紙には、筆書きで署名がある。手紙の受け取り主のものだろう。すでに故人であろう研究者をしのびつつ、全員が見守るなか、ミサビがページをひらいた。重複する部分をよけて読み始める。

がらりとかわった街の様子が、なまなましく描かれていた。

「友の言つたとほりの事態になった。」……旧字だな。現代風に訳そう。“地方に去った教え子から最後の手紙を受け取る。彼がいうには、海辺の町ほど悲惨なようだ。あの衝突の日より風の強い日の翌日、または、村に外から人がくるたびに、ばたばたと老人も子どもも倒れ、ついにそのまま、一日ともつものはなかった。異様な流感――生きながらえたものも、自我をうしなって、叫びながら街をさまよい歩く様子は、狂ってしまったようだ。そいつらは、墓が足りずに穴を掘る家のものを尻目に、監視をかくぐってどこかへ行ってしまったとか。ところで、私の弟子は、火葬の薪を得るのに山に入ったところで、途中、ひとつの黒いものを拾ったそうだ。生きていたとは思えないのだが、本当に小さいが、これでも生き物だと思った。燃えながらうごめくさまは、芥川の地獄変の、火の車の

ようだと見える。こんな時世だけれども、忘れていた探究心がむくむくとめざめて、久しぶりにメスをとることにした。しかし、持ち帰って解体したところ、その体から黒いものがはねて口に飛び込んだので、思わず飲み込んでしまった。それから、彼もまた体調が悪いらしい。これ以上の研究は無理だとして、なんとか家のものに頼んで、黒いものの残りを私に送ってくれた。”

ええと、次は翌日だ――“私は今日これを見た――小さい、と言っていたが、私の手のひらほどの大きさがある。書かれていた寸法より大きい。酸素をとりこむ機構が変わっている。よく燃える。これがわれわれでいう呼吸のやりかたなのだろう。調べてみると、ほかに、これを見たことがあるというものが大勢いるらしい。衝突後に現れはじめたということは、この地上で、衝撃により滅んだ生物にかわり、新たに生まれた生物だろうか。……また、次の日。生命科に行った。これがびつしり瓶に入ったものが置かれていた。これを研究してみたいと若い新入りの女性などはいうのだが、教授によれば、彼女もまた、帰省の際にウイルスに冒された恐れは消えず――。故郷に帰った学生の死亡報告が、今日はことのほか多かった。事務の受付の面子が、また一日と待たず交代していた。

また次の日。一言だけだね――体調悪し。

翌日。体調悪し――クロ、成長している。

三日後、八月八日――昨晚の目玉につづき、クロに手足生える。赤子ほどの大きさに、四つんばいにて歩く。我が家のサブロを真似ていると見える。家にひきとることにする。わが学術の最後の砦もとうとう閉鎖された。街にはもう人の姿を見ることがない。

八月九日――感染した。弟子の死亡通知受け取る。わが友ウシュディエエルの遺言により遺稿を受け取ったが、封を開けるか開けないかのときに当局に踏み込まれ奪われる。痛恨。愛人の家の住所まで知っているとは。

八月十日――クロと寝た。こいつが何なのかわからないが、学習能力は相当にある。生きている知人とやっと連絡とれる。資料など

託すことにする。——と、ここで終わりだ。前の文章と照らし合わせる、南極のウイルスに感染すると、一日もつかどうか、というところみたいだから、ここでこのひとも、おそらく」

「ん？——なあ。クロって、もしかしてあの黒い人間か？」

サツキが眉間にしわを寄せて言った。

「成長してるとかなんとかいってなかったか」

不気味そうに首をすくめた。ミサビもうなずいた。

「決め付けるのははやいような気がするけど。あいつらに少しでも関係してる、と思われるのは、たしかにこの、クロというやつだけだね。燃えることで呼吸する——酸素はたしか、助燃物質だったね。燃えるところに酸素がうまれる。その酸素を取り込んで生きてる……これが本当にあいつらだとすると、それで、あんなに真っ黒なわけかな？ リンとか硫黄とかでできてるとか。体をこすり合わせたらすれば、簡単に火がつく。それでいて朽ちない。いや、朽ちているものを——なにかで補給しているのか。あの火を発するのは、攻撃であり、身を守る手段であり、生きるために必要な行為なんだろう。そう……少し、ほっとしたね。妙な力があるってわけじゃないんだ。ちゃんと、理屈がある。ルールが、僕たちの世界と変わらない、というのなら、僕たちが粒子を使っても、へんなことにはならない」

「とにかく、人間は滅んだんだな」

テッセンが言った。

「それで、かわりがあいつらってわけだ」

そして、彼は話を聞いている間じゅう手入れしていた刀を、仕上げに懷紙で拭きながら、

「じゅうぶんだ」

とうなずいた。

「行こう。神楽坂へ」

ミサビがファイルを閉じてテーブルに置き、ていねいに風呂敷に包んだ。ミユキとマチコが立ち上がる。サツキは、ベッドからはみ

出したミチタカの手を布団の中にいれてやってから、うなずいた。

「帰るぞ」

言葉はただ重く、全員の心を鼓舞した。

すべてがわかったわけではない。しかし、片鱗だけはたしかに見えたようだ。

9 現実の夢

一時間後。彼らのチームは、さらに人数を減らしていた。

ミユキが死んだ——ミチタカのかわりに、先頭を引き受けて奮戦した挙句、あの、黒い人間に、首と足を切られ——頭は、かろうじて胴体とつながっていたが、処置をほどこすには、あまりにも状況が悪かった。戦闘が終わったときには、すでに彼女の魂はここにはなかった。

不思議なことに、神楽坂に向かうにしたがって、衝突と、その後に起こる戦闘も少なくなっていた。一同は、淡々と進んだ。仲間を失ったことについて、もう一言も口に出さない。話題は、それとは関係のないことばかりだった。

「そういえば、なんで、東京だったんだろうね」

ふと出たりヒトの疑問は、誰でもが抱くものだった。遭難が粒子の暴走によって起こるなら、到着地点が、軸は違えどなぜ過去の東京だったのか。もっととんでもない場所だった可能性もあるのに。

遭難で行き着く場所が、けてして他の国にはならず、同じ日本のどこか、ということも疑問だった。

すぐにミサビが答えた。

「血の記憶——って、わかるかな？」

「ちのきおく」

おうむ返しに呟くと、ミサビはうなずく。

「血は地に通じる。血の記憶は、すなわち、土地の記憶でもある。なぜ、僕らが行く時代が江戸や明治や大正や昭和、平成なのか——はね、それは、そこが僕らの直近の祖先が暮らした時代であり場所だからだ。僕らに遺伝子をつなげた彼らのことを、僕らの体は——細胞や遺伝子は、とてもよく記憶しているんだね。僕ら自身の自我

や、生まれてからこれまでの記憶とは関係なく。そして、粒子は、僕らの記憶というより、僕らに血をつなげてくれた彼らの記憶にこそ、とてもよく馴染んでしまうものだから——もしものとき、とっさに、そこへ行こうとする力が働くんだよ。なぜなら、そこは安全が保障されている時代と場所だから。僕らの祖先が、子孫を残して繁栄した、生き延びることができた場所だからね。もしものときはそこへ避難すれば安全だ、と思い込んでしまうわけ」

「じゃあ、ええと——ここに俺たちを飛ばした、運び屋の誰かの先祖も、この時代の東京に暮らしていて、それでここに来たってこと？」

「そう。ちよつとずれちゃったけど、そうなんだろうね」

リヒトは考え込んだ。彼の一族は、知っている限りでは、福島から動いたことがない。母方に限ってはなんともいえないが——祖父や曾祖父が、東京にいたことがあっただろうか。

「あんまり考えこむな」

サツキが言った。

「外部生なら、家族の誰かが、まして先祖が、東京に行ったことないやつなんかのほうが少ない。みんな、なんだかんだ、行ったり住んだりしてた奴、過去まで含めたら、本当に多いもんよ。江戸の時代からの百万都市って、だてじゃないし」

「俺んちのじじいだって、東京にだって仕事で何度も行ってたってよ。親父もな。誰でも可能性はある」

テッセンも言った。

「うん」

しかし、徐々に、リヒトは不安を感じ始めていた。テッセンのいう、見る力を、彼は改めて、自分自身に向けてみていた——すると、どこかになにか、強く違和感を感じる。

先祖についてではない。考えてみると、それはむしろ、自分についてだ。なぜか、この環境に既視感がある。前にも、こんなことがあったような気がする。

古ぼけて曇り、寂れはてた東京の町並み。風景ではなく、その奥に潜む根本的な、空間を作りあげている要素、肌触りが、そう感じさせるのだ。肌の上をぬぐってもぬぐってもとれないぬめりのように、考えるうち、徐々に気分が悪くなってきた。

テッセンは、俺のこと、“まるで初めてじゃないみたい”に落ちて着いてる、と言っていなかったか……

「ところで、なんで神楽坂なの」

気をとりなおして明るく尋ねる。声の明るさにじぶんでも驚くほどだったが、ミサビがやはり、優しく教えてくれた。

「東京の中では、比較的安全な場所だからだよ。関東大震災と、東京大空襲の被害区域が重なるってことは、知ってるかな。驚くほど重なってるんだよ。そのなかで、神楽坂は、両方の被害を免れて、とまでは……いかなかったか。空襲でやられたからねえ。でも、すぐに復興して、平成まで当時の町並みを残した。そのあとの、平成関東大震災でも——古い街だから、っていうのでかえって、耐震補強や地盤を固める作業がちゃんとされていて、持ちこたえた。坂、とつくとおり、傾斜があるから水害にも強い。それから、芸者さんなんかもいる昔からの花街——遊興の街だから、僕らみたいに、ちよつととつぴな連中がいても、まあ、あまり目立たないという理由もあるね。そういうわけで、どの時代でも、とりあえず神楽坂の平安会館、という名前で、避難所がある」

「ここにも、あるっていうの」

「たぶん……」

自信がなさそうだ。

それに、どの時点にも平安会館という建物が存在する、という不思議さについては、ミサビもまだ、説明ができないようだった。

地面が、アスファルトから石畳に変わった。十センチ四方の石を扇状に配置した、変わった道路だ。「ピンコロていうんだ」とテッセンが言った。

「扇形になってるのは、末広がりという意味するんだ、たしか。縁起が

いいってんで、昔から花街に多い」

彼の知識は、平安市の生活と重なるものなら、ときにミサビよりも深い。

「そうだ。ここだ。神楽坂だ――」

一本の大通りから中に入ると、そこは、暗がりに花を見出す昔ながらの風情ある街だった。木の塀に、両脇にしだれ柳の植わった細い小道、うねる階段。江戸時代以来、威勢のよい下駄の音が鳴る、芸と色と人情の街。ミサビ、サツキ、テッセン、リヒト、マチコ。五人は、急いで小道をひた走る。もちろん、誰一人いなかった。

ある、しもた屋の脇から上を見上げたところに、平安会館と墨書きされた木の看板があるのを、マチコが見つけた。看板は、矢印でつながっていた。たどった先にあったのは、石塀に囲まれた洋館だ。心配は杞憂に終わって、一行はほっと顔を見合わせた。

「あった……」

門にかけられた木の看板には、縦書きで「平安会館」とある。外観は、どこかの会社の寮のようだ。「女子寮に似てる」と言ったのはマチコだった。赤茶色のレンガの外観は、たしかにそう思い起こさせる。草がぼうぼうに生えた庭、玄関に続く石畳。

敷地へ一步踏み入った途端、あたりの風景と比べると、色彩の明度が一段階も二段階も下がったように、リヒトには感じられた。

全員を代表して、サツキがおそろおそろ玄関ドアのノブに手をかける。きしんだ音をたててドアは開いた。テッセンを先頭に、リヒト、サツキ、マチコ、ミサビの順で入り込む。ホールはがらんとして誰もいない。天井から下がったシャンデリアは、蜘蛛の巣でびっしりと覆われている。

「誰か、もう来てるやつがいるぞ」

埃の上に残った靴のあとをみつけて、サツキがほっと息を吐いた。彼らと同じ、指定靴の足跡だ。

「行こう」

足跡は複数で、同じ方向に続いていた。どんなに静かにゆっくり

歩いても鳴る廊下をぎしぎしいわせながら、順にたどって、彼らは二階に上がる。ずらりと廊下に並んだドアのうち、足跡がそこで切れているひとつをノックすると、ややたって「誰だ」と声がした。

「その声、シルル？」

ミサビが尋ねると、がたがたという物音につづいてドアが開き、シルルが顔を出した。顔も髪も服も、焦げて血まみれだった。彼は、五人を見ると、目を見開いた。

「サツ……ミサビ。リヒト。無事、だったんだ――」

「あたりまえだ、ばかやろう」

サツキが笑う。シルルの顔は歪んだ。緊張の糸が切れたように、彼は、部屋の中に五人を案内すると、その場に座り込んでしまった。「死んじまったよ。ジュンサン、フリオークレールにミヨ、一Bのヴァレンティノ、メグ」

エイリンとジュリア、二年B組のファティマ、グエン。四人はそれぞれ、板張りの床に足をなげだし、あるいは胡坐で、あるいは傷ついた体を辛そうに横たえたまま彼らを見た。カーテンのひかれた室内は暗く、かびとほこりと、こげた布と血の匂いでいっぱいだ。グエンとファティマ、ジュリアは、シルルのチームではない。「途中で一緒になったんだ」と彼は言った。

「俺のチームで残ったのはエイリンだけだ。グエンのところはジュリアとファティマだけで、あとはみんな死んだ。お互い、合流できなかったら全滅だったよ……。お前らは？　おい、ミチタカはどうした」

ミサビが腰をさすと、シルルはきつく目を閉じて、体をななめに傾けた。

「本当かよ……残りは。いや、いい。言わなくて。あの、黒いの――」

「そう、黒いの。それで、ミサオとコーゾウも」
情報を交換する。ミサビが、図書館でのことを話すと、彼らはやはり驚いた。そのあと、グエンが「助けが来るのか」とぼつりと呟

いた。

「軍が来るんなら、遅すぎやしないかと話していた。それに、こちらに向かつてる奴を、どうにかして迎えにいけないものかと」

彼は、腕に巻いた時計をさした。実習時に、組の班長に貸し出されるもので、訓練開始から終了までの時間がカウントダウンされる。「もう六時間になる――」

上野からまっすぐここに来るなら、六時間以上かかることはないな、とサツキが呟く。

そのとき、一階から足音がした。

「先輩がた……！」

一年B組の生き残り、ウィリアム、リツ、マライと、二年A組のシズカ、フィリップ、B組のヴィクトリアが、大柄な女子を抱えて現れる。ぐったりと床に横たえられた女子を見て、マチコが「ルカ！」と声をあげた。彼女の親しい友人だったが、ルカはすでに死んでいた。そのすぐあとに、ドアが小さくノックされて、レイとヨウタが現れた。図書館から、どうにかここまでやってきたのだ。亡骸を前に震えるマチコを気遣ってか、二人は黙って隅に控えていた。

「これで終わり」

やがて、ミサビが、精根尽き果てた、という様子で呟いた。

「たぶん、これ以上――仲間はこない」

ミサビの前には、回収された、仲間の身分証明カードが並べられている。

六時間の間に、なんと多くのものが命を落としたのか。

「一年B組――サイラス、シェン、ヴァレンティノ、ミユキ、メグ。二年A組――アイ、コーゾウ、クレール、ジュンサン、テス、マリア、ミサオ、リユー。二年B組――セツ、フリオ、ミヨ、ルカ」

十字を切るもの、合掌するもの。それ以外は、誰ともなく額に手をあてて敬礼する。

それが、今は精一杯の弔いだった。

平安学園の学園長は、昨年まで高等部の操作実践教師を務めていた六十がらみの男である。狐のように細い目とひよろりとした体躯で、吹けば飛ぶようなといわれていたが、管理職にあたっては、教え子が多数、今では軍の上層部にいるところから、安全対策と交渉の腕については評価が高かった。

前代未聞の事態だった。

学園上空に天使たちの浮遊城が現れ、その余波で、多数の生徒たちがワームホールに消えたのである。

あらゆる手続きと連絡のため走り回る職員に、ひととおりの指示を出してから、彼もまた、学園長室にこもって、副学園長とともに対策を練っていた。電話をかけまくり、煙草を吸いまくり、水を飲みまくりながら。

すでに、事故から五時間半が経とうとしていた。マテ研の調査終了を待っている余裕は、一秒たりともない。

とにかく、どこかの時限にいることは確かなのだろうから、このうえは、人海戦術しかない、と彼はあたりをつけていた。近時限にかたっぱしから熟練者を出動させるとともに、消えた生徒たちの履歴を確かめるのだ。しかし、何度、担当部隊の出動を軍に要請しても、「上に相談中」との返答が来るばかりだ。一時間たち、二時間たち、三時間もたつと、彼の苛立ちはピークに達した。今では、疑問で爆発しそうである。

「どうということなんだ」

これほど大規模な遭難である。どのゲッターでも、軍を出してしめるべき状況だ。

時計の針が一秒進むごとに、彼の思考は最悪の事態の想定を深めた。

生徒たち――口では、全員の無事を信じて探せといった彼も、大多数と同様、全員の無事生還は、万が一にもあるまいと思っていた。事故につきもののケースで、最悪、ひとりかふたりの生存者しかないということも考えられた。

「早く、いいから軍を出してくれ。手に負えん。粒子反応は検索しているのですか。なんでもいい、早く見つけるんです。とにかく、生死だけでもたしかめないことには」

「落ち着いてください、学園長」

「私は落ち着いている。いいか――消えたもののなかには、留学生がいるんだ。これは、大きな問題ですよ。この平安に生徒を預かるからには、絶対に、彼らの髪の毛一本損なうことがあっては駄目なのです。軍を」

知り合いが多いことから、何かあるとやたらと軍を頼ろうとする男である。しかし、今はこれしか頼れないのも納得できる――教頭にあたる副学園長も、どうしたものかと頭を抱えた。そのときだった。

ようやく、彼の疑問と苛立ちに返答をくれる人物が、この場に現れた。

「軍を出すことはまかりなりません」

朗々と響いた声に、校長はぎょつとして振り向く。そこに立っていたのは――

「し、市長」

学園長は飛び上がった。

市長といえば、単なる地方の為政者に過ぎないと外界では思われているが、ここでその肩書きは、最高権力者を意味する。一国の大統領クラスである。

平安市市長であり総府の長、草間士郎は、着流しに杖をついた姿で、すっと立っていた。後ろには、秘書が二名と、マテ研の職員

が影のように控えている。

「軍は出せない」

草間はもう一度繰り返した。

「な、なぜです」

学園長は、体勢を立て直しながら、相手に椅子をすすめる。草間は座らなかつた。立ったまま窓辺まで歩み寄ると、校長の横一メートルにあたる水平位置から、じっと外をにらむ。

「浮遊城」

彼ははつきりと言った。

悪夢のようなそのキーワードに、校長も視線を動かす。彼らの見つめる先には、合成写真のように、巨大な城が空に浮かんでいる。その城も、とんでもなくふざけている――ロシアはエカテリーナ宮殿、スウェーデンのストックホルム宮殿。イスパニヤのアルハンブラ宮殿に、イタリアのサンタンジェロ城（聖天使城）、ドイツのサンスーシ宮殿にノイシュヴァンシュタイン城、フランスのベルサイユ宮殿、プチ・トリアノンつき。モンサンミシエル。スペインのサグラダ・ファミリア（聖家族教会）、イギリスのバッキンガム宮殿、ギリシャのパルテノン神殿、トルコのドルマバフチェ宮殿、インドのタージ・マハル。カンボジアのアンコールワット。中国紫禁城、日本の江戸城。古今東西のあらゆる宮殿や城をこたごたと合体させ、密着させ、集合させた、まるで城の見本市である。どういうわけか、縁にそってぐるりと万里の長城で囲ってある。それらすべてを搭載した円盤状のもの――天使のおわします住居が、空に堂々とそびえたっていた。

「あちらからの事前の連絡はなかった。今日、この学校の上空に現れる、とは」

「はっ。まことにそのとおりで」

学園長は、昔の癖で敬礼をやりかけて、あわてて手をひっこめる。市長は、彼を見向きもせず「単なる物見遊山ならいいがな」と続ける。

「あまりに突然だったが、まあ、それならそれで、彼らしいといえ、らしい。――ロシアでは大騒ぎですよ」

「はあ。それで、なぜ――市長がここに」

「うちの子供たちが消えたんですよ。当然でしょうが」

「じろりとにらまれて、学園長はもごもごと言葉を飲み込む。

「それに――軍を出さないことについての説明を、誰かがしなけりやなりません。下のほうは、この件でおおわらわ。いちばん暇なのは私だ」

「は……。で、ありますれば、市長」

学園長は、すぐるように草間を見つめる。

「なぜ、軍を出してはいただけないので」

「遭難者の探索部隊は、連合軍ですよ。外ゲッター人もいます。この件を、よそに露呈するわけにはいきません。感づかれてしまう」
「感付かれる、とは……。いやしかし、生徒たちが。どうするのですか、彼らを。軍を出せないとするなら、どうすれば。――市長。まさか、子どもたちを見捨てるので」

よそのゲッターへの体面を気にしているのか、と、いくぶん学園長は気分を害した。消えたのは、彼の生徒である。すでに、近隣住民の助けを借りて周囲を搜索する、という基本対応もしている。マスメディアも、第一報を報じていた。

軍を出さないことは、イコール見捨てること。単純に学園長は考えた。そして、ならば責任をとるのは自分、ということになるのは、とも。

しかし、

「まさか」

草間は首を振った。学園長は、相手の本心をはかろうと、じっと市長を見る。草間士郎――見つめれば見つめるほど、年齢の分らない風貌である。若くもあり、故老めいてもいる。虹のように、追いかけても追いかけても根っこが見えない、不思議な存在だった。「消えた子どもたちのリストを見せてもらったよ。――その中に、

今後、平安にとって特に大事なものがある」

「大事なものは」

「転校生が来ましたね。夏の終わりに。中等部に」

「え？　はあ。ああ……」

中等部に限れば、いつでも、全校生徒あわせて120名あまりの小さな学校である。ほとんどの面子は初等部から変わらないので、生徒の名前なら全員、頭に入っている。一番新しい生徒の名前も、もちろん学園長は知っていた。急に関係のない話をされて、面食らいながら彼は答える。

「たしか――リヒトくんとかいいましたね。リヒト。日本人のはずですが、けったいな名前でしたのですね――ええ、二年次に転入しておりますが。ああ、二年A組でしたから、その子も遭難しておりますが」

「そう。リヒトだ。彼に関して、われわれは憂慮している」

「彼に関して？――われわれ、とは……」

学園長にとって、リヒトという男子は多くの生徒のなかのひとりにすぎない。この年で変化して生き残るというのはたしかに稀だが、例がないこともない。校内で何度か見かけたことがある、普通の元気な生徒。担任に聞いたところによると成績は突出していいわけでもなく、素行も普通――そう、まったく普通の生徒だ。草間が気になるような生徒ではない。よほど、高等部にいる松岡家の御曹司が消えたというのなら、市長自らがご出馬もうなずけるが。

それに、われわれとは。

混乱しつつ「彼がなにか」と首をかしげると、「震源地かもしれない」と草間はため息をつきながら言った。震源地とは、遭難における中心人物をさす隠語である。

「は――」

学園長は、手元に送られた最新の報告書を見る。たしかに、消失時の並び方を見ると、その少年は中心に近い場所にいたことがわかる。しかし、だからといって、現時点で断定できるほど材料はそろ

っていない。

「そうですか？　でしたらその――はばかりながら、この隣の、藤原流通の悪たれのほうが、よほど粒子に関しては。ほかにもそうですね、そちらの外交官の息子さんなどもここに……」

「根拠はある」

草間は言った。

「私より詳しく知っているものがある。入りなさい」

「失礼いたします」

入ってきたのは、カエデだった。まだ装束を解いていないが、彼女の場合、どんなに粗末な格好でも、清楚な気品にあふれている。校長は、突然室内が明るくなったように感じてまばたきをくりかえした。カエデ・エリザベス・ワン・ロレンス――後輩としても旧知だ。操作実践のエースであり、教官であり、やんごとなき家の、今では跡取り娘。かすかに青ざめた緊張した面持ちに、学園長は首をかしげる。

「リヒトの――彼自身というよりは、彼のハクに問題があります。校長先生もご存知でいらっしやいますわ」

カエデは、美しい顔を曇らせた。秘密をにおわせるしつとりとした視線が彼女から送られると、学園長は、細い体をふるわせた。悲壮を瞳にたたえたカエデに、ふと脳裏にフラッシュバックしたのは、かつての教え子の姿だった。逸材と称されながらも、一昨年、惜しくも客死したと報告された人物。その死に疑いありとの情報も、きこえていた。

彼は、サンプルだった。

「そうですか」

彼は、もういちど浮遊城に視線をうつす。

「そうですか――では――」

「そう。問題は、浮遊城ではありません。問題は、他のゲッターです。軍を出せば――おそらく、彼がイチカだと知られるでしょう。今、彼のハクが平安にあることはとても重要です。他国に獲られて

はならない。なんとしても、此度の事態を、学園内の事故でおさめなければなりません。実習中の事故。浮遊城も、あるいは隠蔽の絶好の口実とできるかもしれません。彼以外の生徒が運び屋とすることも、今なら可能です。テッセンにミサオ、クレールとすれば――留学生という可能性もある。あちらも強くは出てきません」

「しがし、軍が出せないとするなら」

「マテ研が、さきほど、これまでに存在しなかった場所からの粒子反応を補足したそうです。じきにより詳しいデータが出ます。そちらは大丈夫――。救出には、高等部のものがあたります。大学生を出したいですが、全員出払っていますので」

「学生を？　大丈夫ですか」

「シンがいます。彼とリヒトとは、浅からぬかわりがあると。他にも、精鋭を選抜してことにあたります。軍を出せないとなると、なりふり構ってられません。私も、他の教官も同行します」

「任せる」

学園長は、最後にそう言った。

「全力を尽くしてくれ」

「はい」

カエデが去ったあと「では」と市長も立ち上がる。軍を出せない実習中の事故となると、自分の責任はどうなるのだ、と考え込む学園長を尻目に、市長は飄々と去っていった。

外では、まだ搜索にあたっている生徒たちの悲鳴が起こった。

浮遊城から、巨大な天使がゆっくりと姿を現して、空を飛び回りはじめたのだった。その姿は揺らぎ、ときおり霞んで消えかかったかと思うと、ふいに空中に静止する。鏡のように光を反射して鮮やかに色彩をくるめかせる。多くのものは、飛来人、いわゆる天使を目にするのはじめてであろう。浮遊城だけでも認めがたいというのに、すっかり度肝を抜かれてあわてふためくさまが、窓から丸見えだった。

平安市に、続々と他ゲッターの要人からの入国依頼が届き始めて

いた。学園長室の電話には、取材申し込みもぼつぼつと混じり始めている。

彼らがこのような生活を強いられている元凶にも関わらず、口も手も出せない、いかんともしがたい生き物たち。人間をある時期から見守っていたという生き物たち。

——よりによって、今、平安学園になぜ現れる。

「現実の夢」

彼の後ろで、呟いたのは副学園長である。いつか、外界のマスコミが、浮遊城をさしていったという言葉であった。

「現実の夢」

学園長も繰り返し、それから、何度目か分からないため息を深く吐いた。

「平行の――行き止まり（エッジ）？」
パラレル

シンが告げると、ミューは目を見開いて――といっても、彼女の目は厚い前髪に覆われてまったく見えなかった――気配でそう判断できるが、シンの言葉を、おうむ返しに繰り返した。

「行くの？ 貴方が」

続いて、心配そうに呟く。

「ああ」

ざわざわと話し声がうるさい。高等部の生徒全員が呼ばれ、あわただしく志願者と選抜者の身体検査が行われている。高等部校舎の入り口ホールには、彼ら同様、事故のあと、ひとまずここで待機といわれて待ちぼうけの中等部三年生たちもいるので、ざわめきは二倍にもふくらんだ。カエデに呼び出されて詳細を告げられたあと、そこで、隅に亡霊のように立っているミューの姿を見つけたとき、シンは、思ったより自分がほっとしていることを知って、思わず笑ってしまった。

彼自身は、選抜されるまでもなく志願しようと思っていたし、まづ間違いなく出勤を確信していたので、なんの動揺もない。しかし、ミューは違った。

「どうして。どうしてそんなこと」

「そういうこともある。それしかないよ。なんにせよ、彼をよそに渡すわけにはいかないから」

「そんなに気にするなんて。貴方ほどのひとが。ねえ――私より彼が大事なんて、まさか言わないでよ」

「まさか……」

何の心配をしているのだ、と言いかけてやめる。ミューはいらだたしげに口元に爪をあてる。よくない兆候だな、とシンはうんざり

としながら、彼女の耳元で「大丈夫」と囁いた。

「僕は何度も行ったことがあるからね」

「行き止まりの世界には、変な奴がたくさんいるんでしょう」

緊張した声色で、少女は呟いた。

「けがをしたり——死んだりしないかしら？」

「大丈夫だよ。僕を誰だと思ってるの」

「貴方はいつもそう。自信たっぷりで、実力があって——そしてたぶん、それを現実にするんだ。でも、今度は違う。貴方にだって無理かもしれないわ」

「そんなことはない。君だってできる」

「貴方のためならね。ええ、何でもしますけど」

そのとき、そばに他の生徒がやってきたので、二人は、接近していた体を離れた。おやという顔で二人を見たのは、スエタケである。シン同様、選抜メンバーである彼は、制服に装備を満載している。

「シン、カエデ先生が」

「今行く」

シンが行くところつねに道がある、と見送りながらミューは思った。今も、彼が歩くたびに、人は彼に道を譲るのだ。スエタケと並ぶと、そのオーラはこのほか厚みを増す。シンがすがすがしい若武者なら、スエタケは、淡い紅茶色の髪に、典雅な趣が加わって、騎士のような雰囲気がある。この二人が親友である、というのは、まったく奇跡的だ。

女教官が説明を始めると、ホールは水を打ったように静かになった。

ミューは爪をかみながら苛立ちをおさえた。

平行世界のなかでも、彼らにとって過酷な環境であるのが、行き止まり、と呼ばれる世界だ。そこは、現在の地球には起こりえない災厄が起こった時限である。可能性の消えた世界、未来のない世界。どこかの時点から、現在の軸を外れてまったく別の道に進んだ場所——どうかすると、到着した時点で、酸素がないために窒息とか、

地面から噴出すマグマで熱死という可能性もあった。幸い、下級生たちは、まだ生きているようだ、とカエデが説明する。涼しげな女の顔を見ながら、ミューは何度も舌打ちしそうになった。

「あんたのせいでシンが」

最初は、やたらにシンが気にする少年のことや、純粹に下級生たちのことを彼女も心配していたが、今では、焦りと怒りがわいた。じぶんのやることなすことすべて裏目に出る、という気がしてならなかった。男に嫉妬している、という事実が、余計に火をそそぐ。ふいに、彼女の足元に、そっと柔らかなものが触れた。見ると、ルーが、トパーズの瞳で見上げている。使い魔がどうしてここにと、それまでの怒りを忘れてびっくりしていると、小さな白蛇は、ミューの服のなかを這いのぼって、「うんしょ」と首元に顔をだし、彼女にしか聞こえない声で報告した。

「大変よっ！ みんな、みんな大騒ぎよ」

「はあ？ あんた、なんでここに」

ずいぶん動転した様子だった。しゅうしゅうと――人間なら肩で息をする様子で、しきりに、体をミューの首にこすりつける。

「学校には来ちゃいけないって決まりでしょう。どうしたの」

「それどころじゃないわ。言ってるでしょ。みんなみんな大騒ぎだ
って」

「みんな？」

そっと呟き返すと、ルーは小刻みに首を縦にふる。

「うん。何人か消えたっていつてるのよ。あのね、たしか、ミケエ
レってというのが最初に言い出したの。じぶんのあるじと結んだ糸が
切れたっていうの。他にもよ。他にも、おんなじこと大勢言いだし
て、僕たち大騒ぎなの」

「使い魔たちが――ああ、そうか。もう、みんな気付いているのね
？ ご主人たちが、ここにいないって？」

「そうそう。ねえ、何かあったの？ それで、僕らみんな一箇所に
集まろうって話に、さっきあったのだけどね。僕、心配になって。」

どうなってるのかしらと思って。もしかしてミューにも何かあるんじゃないかと思って、いなくなっちゃうんじゃないかしらって、寮を飛び出して、ここまで急いで来たのよ」

「そう。……ねえ、あんた一人？ 他にも、こっちに来てるの？」

「他のひとはみんな大人だから大丈夫みたい。ひとまず鎮守の森に向かつてる。羽のお兄ちゃまお姉ちゃまたちは、おっつけ来るかもしれないけども——でも僕、いてもたってもいられなくて、こっそりこっちに来てしまったわ。ねえ、何かあったの？ ご主人さまたち。ミュー、どうしてここにいるの？ ここ、中学校じゃないじゃない。どうしたの。どうなってるの。あの、お空に浮かんでる大きいものはなに？」

「あんたはいい子ねえ」

ミューはしみじみと呟き、ルーに頬をよせた。他の誰の使い魔も、今この場に来てはいない。ルーの行動は、いきとどかないしつけを表すようで恥ずかしかったが、心のよりどころを得た気がしてほっとした。隣にいたクラスメイトがひとり、目を丸くしてルーを見ている。彼もまた、ルーの声が聞こえたのだろう。他のクラスメイトに、内容を囁き始めた。高等部の生徒たちは、全員、カエデの説明に聞き入っている。

気にせず、ミューは尋ねた。

「連中、なんて言ってる？」

「政宗さまやユウデイトさまは、ひゅうがお姐ちゃまたちとずうっと話してる。アルリシヤのおぼさまは大騒ぎだった。うちのかあいかあいぼんがどこぞ遠いところへ連れ去られたって。同じことね、女子寮のかたがたもおっしゃっているのよ。ミーシャさまが、うちでは特にお強いでしょう。それがね、僕たちでも手の届かないところにみんな行ってしまわれたようよ、って。あのね、それでね、ええとね」

「私のクラスの人の相棒たちは、みんな大丈夫だって言ってるでしょう」

「あ——ええ、ええ。そういえば、そうね」

ルーは、はっとしたように体を震わせた。かわいそうに、気が動転して気付かなかったのだ。ミューは、ルーに優しく「大丈夫」と呟いた。

「今から、助けにいくからね」

「あの——そういえば、あのひとは。あ——、あそこにいるじゃない、シンさま。シンさまが行くの。ミュー、大丈夫なの」

「大丈夫」

そのときには、彼女はすでに決意を固めていた。

「大丈夫」

絶対に私が守る。そう言ったが、ルーは余計に心配そうに首をふるばかりだった。

一方、神楽坂の平安会館、二階一室では、局地的ないさかいが起こっていた。

けんかのもととは、左腕のけがの悪化に、我知らずいらだちを溜め込んでいたテッセンである。安全な場所に逃げこんで気がゆるんだのか、おさえられていた不安が爆発したのだ。

矛先はミサビだった。彼は、リーダーとして全員をチームわけしたときから責められることを覚悟していたので、黙って耐えていた。そもそものきっかけが、彼の癖だったこともその理由だ。

「こんなときに、鼻歌なんか歌ってる場合かよ」

「あ、ごめん——考え事してて」

聴こえてた、とミサビは言って、申し訳なさそうに謝った。声は本当にかすかで、みんな、それが考え事をするときの彼の習いだと知っていたので特に問題にしなかったが、テッセンは違った。いやそんな顔のまま「なんなんだよお前は」と、普段から思っていたことがつい口に出た。

「こんな時に、なんでへらへら笑ってられるんだよ。信じられねえな」

いつも、どことなく微笑んでいるように見える顔立ちの優しさが、テッセンには、笑っているようにみえた。続いて、「胡散臭い野郎だ」——そこまではよかったのだ。

次の言葉が、さしものミサビをもむっとさせた。

「本当はお前、嬉しいんじゃないやねえだろうな。ミサオやらコーゾウが死んで。邪魔な連中が減ったってよ」

「どういうこと」

「やりやすくなるだろうが。来年から、お前、特待生になれるぜ。隠してるが——なあ、お前、相当金に困ってるだろ」

「なにそれ。どういうこと？」

表面上は物柔らかだが、親しいものはすぐに気付いた。それは、ミサビに関してみんなが避けていた話題であった。ちよつと、とりヒトが脇でテッセンの袖をひく。しかし、彼は止まらなかった。

「なんだか知らん研究部に入りまくって、先輩やらにとりいつて、なんやかんや、融通してもらっちゃあ自分の懐にしまいこんでるだろ。よく、質屋の親父がお前のこと見るって言ってたぜ。お上品ぶって誰にも彼にもこにこしてるのは、どうせそれが目当てなんだろう。気持ち悪い。そうそう――お前、元、捨て子かなんかか？」

ここにいる全員、お前に、誰一人手紙も荷物も送ってこないこと、とつくに知ってるんだぜ。だからか、必死にとりつくろって勉強して成績優秀者になつても、ミサオにはあと一歩ってとこで叶わなかったもんな。初等部からずーっと、二番手の副委員長だ。それで奨学金申請しても、通るか通らないかわからんもんな。意地張つて、そしらぬふりをしてるんだろ。まあ、人望だけはあるよ。そりゃ認めてもいい。しかし、そんな能天気な奴らをだまして楽しいか、ってんだ」

「貧乏なのはたしかだよ。手紙に関しても、まあ、そうだね」

ミサビはため息をついて肩をすくめた。テッセンは眉間にしわをよせ、眼光するどく彼をにらむ。

「何をたくらんでるんだよ」

「たくらんじやいないよ。別になにも」

「ミサオたちが死んで、嬉しいのか？」

横から、いやらしい笑みを口に浮かべて言ったのは、ヨウタだった。

「ふうん。まあ、なるほどね。たしかに、テッセンの言うことも一理あるねえ」

疲れた様子なので、テッセンほど舌鋒は鋭くない。やがてヨウタたちは黙り、テッセンが、け、と吐き捨て「おめでとう」と肩をすくめた。

「よかったじゃねえか。これで、名実共にお前が首席だ。留学も、奨学金も、特待生の座もとりのうだいだ。楽になるぜ、これから」
「だから」

うんざりした様子で、ミサビはため息をつく。そのあと、仕方なさそうに言った内容は、全員の予想外だった。

「何を勘違いしてるか知らないけどね。僕、高校行かないから」
ええっ、と最初に言ったのは、マチコだった。

「なにそれ。何で？」

面喰らっているのは、彼女だけではない。その場の全員の視線が、いつせいにミサビに注がれる。テッセンもリヒトも、ヨウタもコーゾウも、それまで、興味なさそうになりゆきを見守っていたグエンも、顔を上げた。

下級生たちでさえ目を丸くしてミサビを見つめた。彼の名前は、成績上位者のなかに毎回あるため、同級生だけでなく、下級生も、きっとこの人物は難なく高校に行くだろう、たぶん、上級職のいいところをめざしているのだろうと、当然のように思っていたのだ。

全員の表情が変わった。満員電車で、立っている老人を無視して座席に居座り続ける顔から、単純な疑問になった。

ミサビは、いつせいに見られて戸惑いの表情を浮かべていたが、必要を感じたのか、やれやれ、と息を吐き出すと、ゆっくりと説明する。サツキだけが驚かなかったのは、もともと知っていたのだろう。それは、初めてはつきりと語られた彼の進路だった。

「僕、中学出たら、料理の修業するんだ。もう、“白楽”の親方にも話を通してある。去年、一昨年あたりから、暇見つけて、弟子入りをお願いしてて――この夏に、ようやく許しをもらった。まあ、どっちみち中学出たら、そのまま料理人になろうと思っていたので、高校には行かないつもりでいたけれども。だから……奨学金も特待生もとらなかったのはそういうわけ。自慢するわけじゃないけど、先生がたから、特待生の話ならずと来てたよ。ミサオより成績のいい教科もいくつかあったしね。でも、そんなもんになっちゃった

ら、どうしたってこのさき軍属か公務員だし、じゃなかったら、ずっとお金を返さなくちゃいけないでしょう。そんな余裕ないよ。余分な借金なんか冗談じゃない。はやく一人前になって独立して、お店持ちたいもの、自分の」

「ほええ」

マチコが感嘆する。他のものは、度肝を抜かれたように目をしばたかせている。

状況は、ここから奇妙な様相をていしはじめた。

「白楽って、山際の高級料亭か。なんだよ……なんだそりゃ。じゃあ、なんでお前、そんな成績がいいわけ？ 料理って、職人になるってことだろ。そんな必要ないだろうが」

毒気を抜かれて聞き入っていたテッセンも、苦虫を噛み潰したような表情をする。ミサビは「うーん」と首をかしげたあと「素質？」と、悪びれる様子もなく答えた。全員が沈黙したところで、「ていうのは冗談だけ」と続ける。

「お店持つなら、税金とか借地料とか、出資の計算とかできなくちゃいけないと思ったから、そろばん算用は要ると思ってがんばるでしょう。語学もね、僕、できれば、いろんな料理を学びたいと思ったのさ。ほら、平安って、最近増えたけど、なかなか洋食とか——外の世界で僕、ものすごく好きだったのって、イタリアとか中華とか、フランスももちろんだけど——ベトナム、タイ、エスニック料理なんかもいいなあと思ってたんだよね。和食ももちろんだけど、そういうのできたらいいなって思ってさ。創作料理っていうの？ いずれ、自費で留学でもしたいんだ。まずはヨーロッパ。それで、語学は絶対いる。とすると、その国の歴史も知っておかなくちゃならない。いやでも勉強するよ。時間がないもの。もう、一年とちょっとしかない」

「子どもらしくねえなあ」

「なにいつてるの。自分こそ」

ミサビは、いっそさわやかな冷たい目でテッセンを見た。

「いつまで子どもでいるつもりなの。下らない卑屈な態度で」

「ひくつ、って」

テッセンは目を見開いた。ミサビはさらに、冷たく言い放った。
「卑屈だよ。生まれがなにさ、育ちがなにさ——結局は、自分が今ここで、どうするかっていう、一瞬のことでしょう。それで時間を消費しちゃつまらないよ」

「そ……、そうだね!」

突然、明るく言ったのはマチコだった。ミサビの話に感動した、という、まるわかりの表情で、前のめりになっている。この少女とテッセンとは、どこまでもテンポがずれているようで、テッセンは、そのときちようど開きかけた口を閉じて黙り込んでしまった。マチコは目をらんらんと輝かせていた。

「私、絶対、ドレス作る! 絶対、高校に行くんだ。それで、意匠研究部で、絶対一番とる!」

「ドレス?」

「花嫁衣裳作るの」

うっとり、その目は空中を泳ぐ。「花嫁衣裳って、白無垢か?」とサツキが首をかしげると、マチコは「ちがう」と、彼女にしてはするどい反応で首をふった。

「花嫁衣裳っていったら、ウェディング・ドレスに決まってるよ。デザインから、採寸、型起こし、全部自分で注文とって、そのひとの、オーダーメイドのドレスを作るの。お色直しぶんまでふくめて全部。白無垢だって作るよ。作れるようになるんだ。職人になる。絶対、私、それができる人になる。やるんだ」

それまでとは別人のように目を輝かせてマチコが宣言すると、下級生の女子から、ぱらぱらと拍手が起こった。そこから自然と空気はなごんで、険悪さはどこへやら、ぽつりぽつりと、誰ともなく、自分の未来についての話が続いた。アルバイトに喫茶店の女給をやってみたい、本国ゲッターに戻って友人とディナーを食べたい、というささやかなものから、留学生の資格を手に入れて、外界との仕

事をしたい、というもの、ミサビのように、何かひとつのジャンルを極めたい、というものもいた。ヨウタやレイでさえ、希望を語った。グエンだけが「見ればわかるだろ」と言って黙り込んだので、何がなんだか不明のまま終わったが、それを抜きにすれば、はつきりと進路を言えないのはテッセンとリヒトだけだった。

テッセンはもう、無表情に考え込むばかりだ。

リヒトは、争いがうやむやに終わったことにほっとしながらも、やはり何も話すことができなかった。

――俺、どうしよう。

将来の希望がない、というのは、平安学園では、真っ暗な道を闇雲に歩いているだけなんだな、ということ、うすうす感じ取っていたが、ここでもまた彼はその感覚に襲われた。将来に何の展望もない。希望も持っていない。ただの元、農家の息子。食べるのは好きだが、ミサビのように、作ることに興味がない。夢は家族と暮らすことだが、叶わないことがわかっていて。

もっと、ちゃんとした目標が要る。今、ただばくぜんとカエデに会いたいなあなどと思うのではなく。

自分の幼稚さを痛感しているとき、近くから、物音が聞こえた。それまで談笑していた全員が顔を見合わせる。

「隣の、部屋のほうじゃないか」

「いつの間に――誰か来たのか」

緊張が走った。「風かもな」と、レイが窓をさすと、カーテンが揺れている。しかし、直後、彼らは腰を浮かせた。

窓は締め切っている。カーテンは内側にかかっている。揺れるはずがない。窓のある壁を背に座り込んでいたグエンが「何かが壁面をすぎていった感じがした」とするどく言った。「何か重いものが、壁面を歩いていくような振動だった」

再び、隣の部屋から、物音がする。

「俺、見てくる」

思わずリヒトは言っていた。テッセンが続こうとするのを、彼は

手で押しとどめた。「座ってて。腕、辛いでしょう。見てくるだけだから」

「俺も行くよ」

サツキが手を上げた。全員のなかでは、比較的体力を温存している二人である。エイリンとヴィクトリアも一緒に、サツキたちが出て行くと、ミサビは「玄関はちゃんと閉めたよね」と下級生に尋ねた。

「閉め——ました」

彼らはそろって首をたてに振る。

「もう誰も来ないだろうっておっしゃってたから、僕らで閉めにいって、念のために、そこらにあった椅子や机で塞いで」

うなずきあうウィリアム、リツ、マライ。ミサビは唇を噛む。

これ以上の不安を与えたくなくて、あえて言わないでいたことが彼にはあった。口を開こうとしたとき、天井がまたたく。

「電気が」

まぶしさに、光度調節がおいつかず、目を細める。久しぶりに見る人工光——蛍光灯の白い光が彼らの影を床に落とした。

「電気が」

「つきました、ね」

廊下でも、様子を見に出てきた四人は、同じように天井を見上げて顔を見合わせた。館じゅうの照明が点いたのだった。廊下は煌々たる明かりに照らされて、荒れ放題の館の様子が目についた。ちょっと外も見ようか、と、サツキがカーテンをまくった窓は、すべて木がうちつけられてふさがれていた。来たときに気づかなかったんですか、とエイリンがあきれたように肩をすくめる。

「ま、とにかく、ここだ」

えへん、と咳払いをして、サツキが、隣の部屋のドアを指さした。明かりが点ったので、どことなく元気になったようである。

「何か、モノでも弾みに転がり落ちたっていうんならまあいいけど、グエンの言葉も気になるし、念のためな」

「そうですね」

「でも、何で電気ついたんだろうね」

「知るかよ。さ、行くぞ」

「何でだろう。」

ドアノブに手をかけるサツキを見ながら、リヒトはふと、寒気を感じて身震いする。何かがひっかかった。電気がつく、ということに対して、彼は今、異様な疑問が身中にわきたつのを感じていた。

誰もいない屋敷。

やっぱり、なんとなく覚えがあるような気がする——この、空気。「ねえ、やっぱちよつと待って。いったん戻ってみない」

「よつと——あ、やっぱり何もないな。気のせいか……、ここじゃなくて、もうひとつ隣かな」

止める間もなく、すでにサツキは勢いよくドアをあけ、首を伸ば

して中を覗き込んでいた。誰もいない、と呟いて構えを解く。続いて部屋を覗き込んだエイリンとヴィクトリアの背中ごしに、リヒトも中を見た。明かりに照らされた埃まみれの床が見えた。彼らがいた部屋と同じ、十畳ほどの広さで、壁際に、古い本棚や机、クロス張りの椅子が転がっていた。「あの椅子が倒れたんでしょか」とヴィクトリアが首をかしげる。

「自然に倒れたりするでしょうか？」

三人が部屋の中に入るのに、リヒトも続く。くまなく照らされた室内には、彼らのいる部屋とは違うものもあった。大きな暖炉である。

「二階に暖炉――、って」

リヒトは上を見る。当然、そこには煙突がある。レンガづくりで、サンタクロースが出てくるのには十分といつていい大きさだ。外観を見渡したときに、たしかに、屋敷の複数個所に煙突が伸びていた。妙に胸がざわついた。

「珍しいけど、あるんじゃないの……、と。おい、これ」

サツキが、暖炉の中を指さす。そこには、小山をなした灰があったが、その中に、奇妙なものが埋まり込んでいた。

「これ、なん」

だ、といい終わる前に、あえていうなら、果物を握りつぶしたような音と、硬いものどうしがこすれる音がして、彼らの前に、あるものが現れていた。灰が蹴散らされ、視界が曇る。暖炉の煙突を、おそらく上からすべり落ちてきて――その場に突如として現れ、立ち上がったのは、懐かしい姿だった。

「あ――。ア……イ、」

視界が晴れると、そこに立っていたのは、ヴィクトリアが言ったとおり、彼らのクラスメイト、アイだった。黒い髪をおさげにした女の子。死んだはずの少女だ。蹴散らした灰をまとして、服も肌もぼろぼろ、傷だらけのその体は、ぎこちなく動いた。糸のない、金属製のマリオネットを思わせる――ぎぎい、と音がしそうである。

最初は後ろ向きだった体が、徐々にねじをまくように、彼らのほうをむく。やがて、正面に彼らを見ると、ぎし、と奇妙に左右に震えて静止した。

これが、アイのはずがない、ということとは、一瞬のうちに全員が理解していた。アイは、その後、少しずつ滑らかになってきた機械的動作で体をまげると、灰のなかに埋まっていたものに手を伸ばす。それは、拳銃だった。しかし、アイの武器が拳銃でないことも、やはり彼らは知っている。

「なんで……」

リヒトの目は、その拳銃が、ミサオのものであることを見抜いた。部屋で手入れをしているのを覚えていたのだ。そして、恐怖に目を見開きながら、それでもテッセンの言ったとおりに相手をじっと見つめ――アイの体の関節にあたる部分から、黒いものがはみ出しているのに気付いた。

て、き。

「逃げろ！」

ようやく彼の体は正常に動いた。今までにないすばやさで、腰に掛けた矢筒に右手を伸ばし、左手で弓をつかんで、折りたたまれた武具を傘のように開く。その動作の間に、サツキが前に踏み出していた。アイの腕をつかんで体を半回転させ、少女を側体から床に叩きつける。銃が宙を飛び、壁にはねかえって落下した。しかし、少女はほかに、衣装のなかに武器を隠し持っていた。倒れたまま、アイの腕は内側から膨張してはじけ、黒い腕に握られた杖――それは、アイの杖だ――が、おそるべきはやさで、彼女のななめ上にかがみこむようになっていたサツキへ繰り出された。いまや、それはアイではなく、少女の皮を脱ぎ捨てた黒い人間。杖の先が、吸い込まれるようにサツキの胸の中心を激しく打った。サツキがうめきながら、あおむけに吹っ飛ぶ。リヒトは、構えていた弓を床に落として、すんでのところで、壁に叩きつけられるところだった友人を背中から抱えた。

「エイリン、部屋に知らせて！」

体制を立て直したとき、弓に矢をつがえたリヒトに、アイの体を操っていた黒い人間は、狙いを定めた。リヒトは、襲い掛かる火をよけて後方へ飛ぶ。熱に圧倒されながらいっばいに弓をひく手は震え、矢を落とした。胸をおさえて咳をするサツキが、「リヒト」と叫んだ。黒い人間が、もう一方の長い手で銃をひろいあげていた。いつのまに習得したのか、正確に激鉄を起こして、銃口を彼の額に定める。

——やられる。

銃声と同時に、彼の体は衝撃にふっとんだ。サツキが、リヒトに体当たりをくらわせたのだ。しかし、そこは、壁の四隅にあたる場所、サツキは逃げ場を失っていた。

「サツキ！ サツキッ！」

「いってえ——何しやがる、この……ばけもんが」

首筋をおさえて、サツキは黒い人間をにらみつけていた。彼の首からは血が噴出し、どす黒く衣装を染めはじめている。リヒトは、矢を手で持って、黒い人間の背中へ突き立てる。ひるんだすきに、サツキに肩をかして、なんとか廊下にのがれた。

ヴィクトリアの悲鳴が聞こえた。隣の部屋から、ミサビたちが出てくる。

「窓が割れて」と、下級生を廊下に突き飛ばしながらシズカが叫んだ。

「あいつらがいる！」

「テッセン！ サツキが——」

刀を手に巻きつけたテッセンが姿を現す。泣きそうなりヒトの顔と、抱えられるようにして苦しげに息をするサツキに、焦りの色を浮かべたテッセンも絶句した。

黒い人間は、他の部屋からも出てきた。館じゅうから、窓の割れる音がする。

「がんばれ」

あごのあたりで聞こえた、ぞっとするほど力のない声に、あわててリヒトはサツキの顔を間近で見る。青ざめて、あきらめにみちた震えた声。いつも快活によく動く口が、億劫そうに言葉を吐き出す。「なあ、リヒト――、お前、絶対、負けるなよ」

布に溜まった血が、はげしく床にしたりおちた。急激に力を失い始めた体に、「待って」とリヒトはサツキを励ます。「お願い、もうじき、きつと」

最期の声は聞こえなかったが、誰かの名前を呼んだように思えた。とうとう、サツキは目を閉じ、首がぐりと下がった。力を失った体に引きずられるようにリヒトも膝をつく。横たわったサツキは、もう、動かなかった。

「行くぞ」

テッセンの腕が彼の体を引き上げた。リヒトの体だけを。あたりは、大混戦になっている。リヒトはいやだと思いつつも、それでも、サツキのカードを彼の首から外した。

「また会える」

行き過ぎるグエンが、ちらりとサツキとリヒトを見比べて呟いた。「われわれは許される」

もしかしてこのひとは、坊主頭の見かけそのまま、お坊さんにでもなるつもりだったのかもしれない、とリヒトはぼんやりと思った。そのとき、黒い人間の襲撃前とは、比べ物にならない衝撃が平安会館じゅうを襲った。どかーん、という巨大な音とともに、それにつりあった質量のものが、突如この場所に現れたようだった。

誰も彼もが、床にひっくりかえった。黒い人間たちは、ざわざわと身をよせあい、廊下の端へと、引き潮のように引いていく。

「畜生が！ 何度目だよ！」

テッセンが愚痴を言ったとき、彼の真横の空間が歪んだ。リヒトは目を見開く。中島が空中から現れる不思議な感覚をもっと濃くしたような不思議が起こった。

「どんぴしゃだ」

突如、空間を切り裂いて目の前に現れたのは、彼の弓道部の先輩だった。

「やあ、リヒト」

「タケー——さん」

貴公子然とした笑みを浮かべて、スエタケが立っていた。いや、彼だけではない。高等部の制服をアレンジしたような装束と武器を身にまとい、次々と、名前を知らない何人もの男女がその場に現れた。知っているものもある。タダヒコに、ユイに、ランチュア。シンもいる。顔が隠れるほどフードを目深にかぶったものもいたが、最後に現れた人物を目にして、誰何のことはふきとんだ。廊下の先に、生徒を背後にかばい、黒い人間たちに相対する形で降り立った人物。懐かしい後ろ姿に、リヒトは思わず叫んでいた。

「カエデー——！」

助けに来てくれたのだ。

美しい女性教師は、振り向くと、彼を見てかすかに笑った。

救助にかけつけた高等部の生徒たちは、その優秀さを見せ付けるように的確に動いた。彼らは、生存者が全員、平安会館の二階にいることを確認すると、黒い人間を一階に追い落として、階段上に電気網を設置し、簡易バリケードを築いた。それでも踏み越えようと来る敵には銃弾を浴びせる。応戦する黒い人間の攻撃で、数名がけがを負ったが、いずれも致命傷ではなかった。戦闘がひと段落したと見て取ると、カエデが「一問確保」と言い放つ。すぐさま、数名が、二階に並ぶドアを次々に開けて、メジャーで地面を測定しはじめる。その後、彼らは、何か鉄の棒のようなものをひろげて、場所を作りにかかった。

「い、ったい」

部屋のなかで、シンやスエタケが「窓をふさげ」、「一匹も持ち帰るな」と他の生徒に指示をしている。「シンさん」とミサビが叫んで、駆け寄っていった。手に、図書館から持ち出した例のファイルを抱えている。

「あいつら、火を噴きます。それから、学習能力が相当にある。僕ら、はめられたんです。ここに誘導された——これ、見てください。最初は、奴ら、何にもできなかったんですよ。最初に会ったとき、人間の武器なんて持っていなかった。学んだんです。僕らが使っているのを見て——電気も、やつらが途中で点けたんだ。たぶん、字も読める。読めるようになったんだ。ミサオたちや僕らを追って、図書館に入り込んで、そこで学び取ったに違いない」

「なるほど——」

その言葉を聞いて、リヒトにも、ようやく合点がいった。ずっと、ここが安全だと、どうしても思い切れなかったのは、そ

ういうわけだったのだ。

「では、一刻も早くここを脱出すべきだね。安心して。すぐに、元の世界に戻る。誘導波が出ているし、運び屋が何人もいるんだ。重傷者から転送！ 順次撤退！」

了、という応答が次々にあがる。

高等部の生徒は、ざっと十人ほどだった。彼らとあわせると、二十人余の人間が、二階にひしめいていることになる。いくら広い館のなかといえど、密集するのは、危険だ。それぞれの部屋から「完了」の声があがると、近くにいた生徒たちに、次々と、先輩から声がかかった。

「二人運びます」

「三人」

「二人、来い」

リヒトはなんとかカエデの元へ行こうと悪戦苦闘していた。高等部の先輩の邪魔にならないように、廊下を進もうとしていると、それに気付いたテッセンとシルルが追ってきた。

「なにしてんだ、早く行くぞ！ 帰れるんだ、ゲットーへ！」

「邪魔になるよ」

「だめだ！」

リヒトは叫んだ。自分で思ったよりも激しい口調になったのに驚いていると、彼の口は、さらにとんでもないことを口走った。

「駄目だよ——！ 彼女を連れて帰らなければ、生きている意味がない」

「——はあ？」

「誰だ彼女って」

「カエデ。カエデ！」

その剣幕に驚いたのか、一瞬、他の高等部の生徒たちが、武器を手にしたままリヒトたちを見た。

「逃げろ！」

リヒトは叫んでいた。

「あれが来る。あれが来るんだ！」

両手をふりまわしながら廊下を進む。あげたことのない声、別人のような形相。テッセンとシルルは、互いに顔を見合わせる。

それはもう、リヒトではなかった。

彼の中にいる、別の誰かだった。

「君に会うためにもういちどここへ来た——カエデ！ カエデ！ 僕だ」

ようやく駆け寄った背中へリヒトが言うと、カエデがびっくりした顔で振り返る。彼女の手にしたマシンガンが、一瞬、攻撃を忘れた。

「そうね」

カエデの声は、騒音のなかではっきりと聞こえた。赤い唇は微笑み、柳眉はすこしだけ困ったようにひそめられる。淡い茶色の目は星のように輝いた。

「でも、貴方はもういないのよ」

「何の話をしてるんだ」

テッセンが舌打ちする。背後では、人が減っているのだろう、徐々に気配が消えていた。重傷者から、元の世界へと、先輩たちの手によって連れ帰られているのだ。スエタケも帰り、シンと、他数人が残っていた。

「先生！ 網が——破れます」

階段のきざはし、バリケードのすぐ手前で、階下にむかって発砲していた女生徒が訴えた。カエデは面をひきしめて、女生徒を引き起こす。

「撤退して。ユースがまだいる。シルル、テッセン、リヒト、あなたたち誰かひとり、一緒に行きなさい。ここはもういいわ。大体しのいだ」

テッセンがうながして、女生徒と一緒にシルルが去っていった。シンが、一室から出てくる。

「もう最終組です。奴らは」

「待つて——もう少し」

すさまじい音がして、彼らが背にした壁が割れた。黒い人間が、どうやって手に入れたのか、手榴弾をなげつけたのだ。半壊した階段を、彼らはいっせいに上り始めた。と、しゅう、という音とともに、電気網にともっていたランプが切れた。

遠い背後でも、爆音がした。一人の生徒が、転がるように廊下を飛び退って壁にぶつかる。その拍子に、かぶっていたフードがぼさりと外れた。反対側にも階段があるのだ。そこでも戦っていた高等部の生徒たちが「撤退します」と叫ぶ。

「了！ 急げ！」

「——カエデ」

リヒトは、彼女の前に立った。

——違う。これは俺じゃない。瀬田理非等じゃない。
貴方は誰。喋っている俺は、誰。

リヒトの頭には、もうひとり別の人間の気配が、たしかにあった。銃弾がはじける。カエデが、リヒトの肩を抱いて、横向きに伏せる。懐かしい、カエデの柔らかい体と吐息、流れる血の熱さを感じて、リヒトの中には、苦しいほどの情熱が沸き起こる。

「嬉しいけど。本当に嬉しいけど。——もう、思い切ったのだから」
カエデが、悲しげな声でそっと呟いた。

「忘れさせて、お兄さま」

カエデは、リヒトの体を抱いたまま走りだした。前をいくテッセンは、彼らの会話を聞きながら、ようやく思いあたっていたが、さすがに、今問いただすことははばかられた。

シンと、他の生徒の声が、三人を誘導する。副委員長の責任感で、ミサビもまだ残っていて、部屋の前に飛び出して手を振っている。

「早く！」

部屋の中まであと一步、というところだった。銃声が四つ、一つはリヒトの肩をえぐり、三つは反対側の肩の斜め上——カエデの体の中心に吸い込まれた。崩れ落ちる体を支えるのは二度目だ。サツ

キより背が高く、豊満な肉体が床に沈んでいくのを、リヒトは、自分も肩をかばいながら、信じられないままに見た。

「カ、エデ」

呆然と見下ろすと、大好きな女性教師は、床に膝をついた姿勢で、傷口を押さえて顔をあげ、にこりと笑ってリヒトをまっすぐに見つめた。血が噴出し、みるみるうちに青ざめていく。あっけないほど簡単に負わされたそれが、致命傷だった。本人が、誰よりもそれを理解しているようだった。

「Hi, brother——honey——It's time……
to say long goodbye……」

「カエデ」

「RUN」

「逃げなさい」

そういったことはわかった。しかし、耳に聞こえたのは、日本語ではなく、別の言語だった。逃げて、という意味の英語だった。

「カエデ。カエデ？」

「行って、お願い (go, please) …… 私はもう駄目 (there's no hope for me)」

ゆっくりと横たわったカエデの足元に、乾いた音がして、白煙があがる。銃弾が、床にめりこんでいた。黒い人間は、どこからか大量の武器を調達したのだ。合間に火をふく。——そこで、やっと、リヒトは気付いた。なぜこんなにも高等部の生徒たちが焦っていたか。決着を急いでいたか。館中、焦げた匂いと熱と、煙でいっぱいだった。どこからか、めりめり、ばきばきという、不吉な音がきこえていた。

急に、聴覚がクリアになった。ぱちりとスイッチを切り替えられたように、実感がわいてくる。サツキを失って茫然自失状態にあった彼は、もう一人の大事なひとの最期にあって、ようやく、自分本来の意識を取り戻した。

「カエデ。いやだ、カエデ！」

行かない！ 俺は君をひとりにしない！ ——だが、そう言ったリヒトは自分で驚いた。彼女に答えるように口から出てきたのは、やはり、彼の母語ではない言語だ。自分が言ったのだ、間違いない。しかし、自分が口にしたようには思えなかった。奇妙な二重人格の気分だった。何かと融合しているような——呆然としてみると、カエデは困ったように微笑んで、震える腕を伸ばし、リヒトの頬に触れる。

「それはもう、リヒト、の体。行きなさい。行つて。私に貴方を守らせて。リヒトを、私の生徒を守らせて。お願い、約束して」

プロミス、という単語はわかった。

「行つて。貴方がこの先どうなつても、貴方の今に、意味がある」

「嫌だ。俺は君を置いていけない。もう、二度と」

「貴方じゃないの。リヒト……」

「君をひとりにしない」

アドン、レットユーアローン。ネヴァー——口をついて出るのは、リヒトの言葉ではなかった。誰の言葉だろう？ 誰の心だろう？

誰だ、誰だ、と問うと、突然、脳裏にひらめくものがあつた。ようやく清明になったリヒト自身の意思が、驚くほどの確に、記憶から答を抽出する。

ハク——俺の、ハクは——以前、別の誰かのものだった。

誰の？

今は、俺だ。

強く思うと、彼の中にいる誰かの声は、一瞬、弱まった。

「行こう」

後ろから、彼をひっぱつたのは、シンだった。気の毒そうに眉をひそめ、彼に向かって静かに首を横に振る。リヒトはその手を振り払った。カエデの両肩の下に手をいれ、このままでは黒い人間の餌食になるだろう体を、引き寄せようとする。しかし、突然、彼は襟首をつかまれ、空中にひきずりあげられた。

「いい加減にしろ。お前まで死んだら、困る！」

ミューだった。フードから解放された銀色の髪を振り乱し、黒い制服に、さらにべっとりと黒い染みをつけている。いままどこにいたのだろうか——髪も肌も鮮血にまみれて、あちこちに傷がある。と、いきおいよく放り投げられて、リヒトは床に叩きつけられながら身を丸めた。部屋の中に突き飛ばされたのだ。ミューは、横柄な態度で、床に散乱している木っ端をいまいましげに蹴り飛ばすと、部屋の中へ入ってきて、彼を見下ろした。彼女の後ろでは、ミサビ

とテッセンが、血で汚れた床に座って、転送を待っている。

どん、どん、と、黒い人間たちの足音が迫っていた。

「先生！ よろしいですね」

部屋の入り口から、シンが、廊下の壁にぐったりともたれかかったカエデに話しかけていた。

「もう僕らだけです。すぐに準備を」

「私は置いていって。私は、もう、無理——」

リヒトは、無理じゃない！ と叫んで膝立ちでにじりようとする。それは、かつて彼女に恋した瀬田理非等の意思だった。しかし、立ちはだかったミューにさえぎられてしまう。

——いやだ、いやだ。

——カエデが、まさか。よりによって。最後に。

「離脱します——規則により、この空間はマークが許されません。したがって、救出のための跳躍を、現時点でのカエデに対して行うことは不可能になります」

「お返し、します……」

カエデの手から、シンが、小さなお守り袋を受け取る。彼女がいつも身に着けているものだ。それは昔、リヒトが——いや、誰かが送った……

「カエデ！ カエデ！ 駄目だ！」

「馬鹿、危ない……」

彼女のいる廊下へと、思わず飛び出したリヒトを、弾丸が襲う。しかし、彼は弾丸を浴びることはなかった。盾になったのは、追従した勢いのまま、彼の前に出たミューだ。ふと、爆風に彼女の髪は舞い上がり、その下の瞳と目があった。綺麗な目をしていた。どこかで見えた目だった。

「ミュー、……先、輩」

「リヒト」

信じられないくらい柔らかに、ミューは彼の名を口にした。いちど間近にしたきりだというのに、なぜか、前から知っているような

錯覚におちいる。疑問が、つと膨らんだ。他の生徒たちは全員、高等部の生徒だった。なぜ、三年生のミューがここにいるのか。なぜ、彼をかばったりしたのか。

恐る恐るミューを見上げる。殴られるかもしれない、と思った。

しかし、彼女は、苦痛を耐えながらも笑みを浮かべてみせ、さらに「怪我は」と、優しく口にした。リヒトは首を振る。

「ならいい。行こう」

逆らう余地は残されていなかった。シンが、すでに意識を失ったカエデに敬礼する。座ったままのミサビも、テッセンも、緩慢だがしっかりとした動作で、水平にした手を額に当てていた。ミューも、黙ったまま敬礼したので、リヒトも倣った。

「さよなら」

だが、やはり、おいていくことはできない。リヒトはミューの手をふりほどき、カエデへと目を走らせる。

——俺はなぜだか、彼女の家族を知っている。体を持ち帰って欲しいと思っている家族の存在を知っている。

再び、天秤はかたむいた。強いカエデへの執着が、彼を突き動かす。

「駄目だ。行かない。俺はいかない。一緒にいる」

支える腕から抜け出しながらそう言ったとき、再び襟を引きずられ、そのまま壁にたたきつけられた。息が止まりそうになる。ミューが、鬼のような形相で彼をにらんでいた。

「いいかげんにしろっ」

「だって……俺は」

「甘ったれが。あんたは何にも変わってないな、福良耕地のお坊ちゃん。いいから帰るんだよ！ リヒト！ 瀬田！」

「え？」

滑らかに口に出されたファミリーネーム。リヒトは、まじまじと——初めて、この銀髪の小柄な少女を見つめた。

粒子のゆらぎが、赤茶けた液体に濡れた銀色の髪をはねあげる。

銀色の髪。

その瞬間、彼の脳裏にすさまじい勢いで電流が流れた。
シンじゃない。リンでもない。

銀色の髪。

銀——ギン。

「ギン……？」

少女は、青ざめたロータス・ピンクの唇に垂れた血を手の甲でぬぐい、ぺっとつばを吐き出した。ミューの手はリヒトの肩をつかむそのまま、ふと彼女の目は宙を泳いだかと思うと、ぐらりとその体が傾いた。リヒトはあわてて先輩の体をささえた。乾いた音がして、何かが床におちてはじけとぶ。それは、無数のアクセサリーだった。すべて、制御装置の形をしている。ミューのベルトにつけられていたのが、落下したのだ。

「彼女をこっちへ。急ごう」

ミューの体をリヒトの腕から取り出して抱きかかえたのは、シンだった。

「無理しないっていうから連れてきたのに……」

ぶつぶつ言いながら、慣れた様子でたすきをミューの体にかけると、荷物でも持つように横抱きにした。

「さあ、帰るよ！」

後輩たちを、シンは、床にマークされたサークルへと追い込んだ。いつのまにか、テッセンとミサビが彼の両脇をはさむように立っている。

ミュー——ギン——を抱きかかえたシンの広い背中が歪んだ。すべての景色がゆがんだ。ひっぱられる。ひっぱられて、どこかへ飛んでいきそうな気がする。

混乱のただ中にある意識は、変化したときと奇妙に似ている。
複雑な悪夢に、まだとらわれているのだ。

カエデ。

好きだったのは、俺。

それとも――

どうして、ミユ！

帰れる。平安へ。

意識は、そこでとぎれた。

事故から一週間。

掃いても掃いても、落葉は絶え間なく地面を埋めた。なかでも、豪華に輝く黄金色の銀杏は、風が吹くたび波のようにうごめいて葉を落とし、吹き溜まりに溜まって山を作った。それを蹴散らしに来る子どもたちが歓声をあげる。あちらでもこちらでも、落ち葉たきの煙があがる。霜月になってめっきり寒くなったねと言い合う声が多くなり、「甘酒はじめました」「鍋ものどうぞ」のぼりが立つ。寺社の鐘の音がどことなく哀愁を帯び始める。コクマザサは緑から白へと変わりはじめた。年末の予定を尋ねあう住人たちは、それにあわせて、今年は特にある話題について、ひっきりなしに意見を交わし、炉辺で、井戸端で、茶店で、驚きと戸惑いを述懐しあった。すなわち、先日起こった、平安学園中等部での、大遭難事故である。

「えらいことだったねえ」

「たくさん亡くなって、気の毒だわ。かわいそうに」

町には、まだ、調査や取材のために滞在している他ゲッターの間が多くいた。正式な発表が先日出されたが、それは、こういう内容だった。

“留学生の一人が、浮遊城の出現に潜在的危機回避能力として備えていた、運び屋としての素質を発揮して大規模な粒子の暴走を起こし――それにあわせて、平安市在籍のほかの生徒も同調して粒子を暴走させたため、類を見ないほど規模が拡大した”。

多くのものはそれを信じた。しかし、どの世界でもあるとおり、

他のあらゆる憶測も乱れ飛んだ。天使の攻撃だったのではないか。なにか他の不祥事による事故ではないか。喧々囂々、議論と推論はつきない。かくして、生存者の帰還直後には、さまざまな憶測記事が書かれたし、当事者たちに話を聞こうと、マスコミーブンヤ、と呼ばれるものたちが世界中から集まって、学校の周囲だけでなく、平安市じゅうを跋扈した。茶店や宿屋は、彼らのもたらすにぎわいに嬉しい悲鳴をあげたークリスマスにはまだ一ヶ月以上、年末にはまだ遠いとあって、場所柄ハロウィンでもない平安市で、これはふってわいたようなイヴェントでもあったのだ。

しかし、とにかくにも、たった三日で浮遊城もいずこかへ去ったので、そういった連中も、徐々にその数を減らしていった。後に残ったのは、濃縮還元された搾りかすに似た、ブンヤのなかのブンヤ、特ダネ・スクープ・独占取材という餌を是が非でもものにしたイプロのハイエナたちである。彼らは、現場である学校と“被害者たち”のいる病院の周りをうろついて、ときおりは、警察に注意をうけたりひっぱっていかれたりしていた。きりのない鬼ごっこにいていなくもなかった。しかし、それ以外では、おおむね、街は平和に戻っていた。いたって普通の秋の日。

今日も、晩秋の、どこことなくもの悲しい光景が見られた。その建物の分厚い窓ガラスの向こうでは、傾く太陽がきらきらと冬の光を放っている。空にはいわし雲が並ぶ。

事故から一週間。

当事者たちは、大正区にある平安病院へと入院され、検査を受けていた。

「A組で生き残ったのは俺らだけ、か」

もう何度目かわからないセリフを、やはり、いつもと同じ調子で言ったのはシルルだった。ベッドに寝転がったまま、ぼうつと天井を見ている。

「ミサビ。テッセン。リヒト。ヨウタとレイ。マチコ、ジュリア、フィリップ、シズカーーミチタカは、まだわからない。あとは、俺。

……なあ、本当に、夢みたいだな。あいつら、もう、本当にいないのか」

シルルの傷は軽かったが、まだ病床にあった。彼の場合、問題は、精神的なものだった。他のものもそうだ。リヒトもミサビも、テッセンも、生存者たちは等しく同じトラウマ状態にあった。

脅かされたショックは、見た目の傷が癒えるにつれていや増した。特に、体に深い傷を負ったものは、性格や気質には関係なく、風の音にすらびくびくするほどだった。これで、病院の周囲を今もうろつくハイエナたちの襲撃を受けては、ひとたまりもなかっただろう。学園側の配慮で、出席扱いの病欠にされ、彼らはここで、ひとまずはのんびりと、心と体を癒すことに全力をあげていた。

リヒトの傷は軽かったが、ぼんやりと時の過ぎるままに、彼は悩み倒していた。悶々とベッドの上を七転八倒すること百回、それは、ついに、隣のベッドに体を伸ばすテッセンを「ちったあ静かにしねえか」と怒鳴らせた。

「静かなのがいいなら、もとの部屋に戻ればいいじゃないかあー」

「いいからおとなしくしてろ。ほこりっぽいのはかなわねえ。頼むから」

テッセンは、家人の配慮で、二日目までは個室に入院していたが、静かなのがかえって傷の痛みを増す、と言って、リヒトたちが入っている大部屋へ移ってきていた。部屋には、シルル、ミサビ、リヒト、グエンが同居している。寝起きを共にするなかで、関係は改善し、テッセンは、リヒト以外とも言葉を交わすようになった。話し相手には不足しない。しかし、やっぱり、リヒトにはかり口が出るのは、変わらなかった。それは、今となっては、リヒトがもつとも危うい立場に立たされたからかもしれない。

「俺の体どうなるんだろ」

リヒトは、ごろごろとベッドの上を転がる。

「それはもうお前のものだからなあ。いまさら、返せとは言われな
いと思うけどな」

「うん……」

リヒトが転生したハクについての事実が、ようやく彼に知らされたのは、帰還した翌日の朝のことだった。教えてくれたのは、テッセンである。

「お前、イチカだったんだな」

個室へ遊びに行ったリヒトに、左腕を固定されたテッセンが、彼の顔を見ながら感慨深そうに言ったのだった。

「誰、それ」

「俺の従兄——カエデの、兄貴だよ」

「カエデの」

「最初に会ったとき、もつとちゃんとお前の顔を見てればなあ——まあ、後悔先にたたず、ってなあ。……カエデの兄貴な。兄貴っていつても、義理の兄貴だ。ロレンス家の養子。それで、軍人で——一昨年、亡くなったんだよ。外国のゲッターで。事故らしくてな。遺体はなかったから、今年の夏に、葬式が、親しい身内だけ集めて開かれたんだ。それが、どういうわけか——イチカのハクが、お前にまわされてたってわけだ」

「イチカー——さん」

「お前のことを、カエデがなんとなく気にしてるなっていうのは思ってたんだよ。そういうことだったんだな。お前が、カエデを好きだったのも……」

そこで、テッセンは表情を消して黙り込んでしまった。

——俺のハクは、カエデのお兄さんのハクだった。

すんとふにおちた気がした。あの、最期のときに、彼の意識の表面に浮かび上がってきて、カエデに思いを囁いたのは、彼女のお兄さん。

今になって、そのことが、重くりヒトの肩にのしかかった。

「……カエデ。——サツキ……」

さらに彼を悩ませるのが、救援を得る直前に亡くした友人のことである。あと五分無事でいれば、サツキは同じこの病室で、大変だ

ったねと言いかうことができていたのだ。何度思い出しても、悔やまれた。

戦おうとせずに、すぐに逃げていれば。いや、そもそも、俺一人で見に行けばよかったのだ。

カエデ。カエデも、俺をかばって死んだようなものだ。

ベッドの上を転がりまわるのが終われば、座ったままぼうつと宙を見ている。毎日が知らないあいだに過ぎた。食べて、寝て、起きて、検査を受けて、体を拭いて、食べて、寝る。口には出さないが、テッセンだけでなくミサビやシルルも、リヒトを気にしていた。事故の原因が、彼のハクに残っていた、前の人物の遺物といえる粒子のはたらきによる、と――彼らにだけは知らされていたからだ。巻き添えをくった、という被害意識が彼らにあるのはもちろん、しかし、それ以上に、彼らがリヒトを気にする様子は、何か、変に思いつめたりしないかどうかを、見極めようとしているようだった。同じ死地を潜り抜けてきた仲間の連帯感が、奇妙にはりつめた空気を病室にもたらしている。

それにしても。

こんなにも大規模な事故を起こした、そもそもの原因。とてつもない粒子操作能力の持ち主だったという、リヒトのハクの先住者――“イチカ”とはいったい何者だったのだろう。カエデとは、本当のところ――さしものリヒトも、この事故で、カエデという従姉を亡くしたテッセンに、これ以上聞きかねた。もちろん、請えば教えしてくれるだろうとは思っている。それでもふんざりがつかないのは、結局は彼自身の問題で、だからこそいつまでも悶々とした気持ちが続れないのだ。

しかし、その停滞に引導を渡す人物が、その日、とうとう現れた。「やあ。やっと面会謝絶が終わったっていうから」

斜陽さしこむおやつどきに、ルリと一緒に、引き戸を開けて現れたのは、長身でひよろりとした、白髪交じりの髪を後ろで束ねた、着物姿の男だった。腕に、大きな紙袋を抱えている。

「シュー——シュウ先生！」

「やあやあ。大変だったねえ」

彼のめあてはリヒトらしかった。ずんずんとまっすぐに大股でやってきて、リヒトのベッドの脇に置かれた丸椅子に、ぴしりと座る。身内でもない、友人でもない。予想外の客だった。誰だこいつ、と素直に顔を見合わせた生徒たちを見渡して、シュウはにこりと笑った。

「どうも。皆さんが不思議な顔をするのも無理はありません。私は、中等部の職員とはいえ非常勤で、相談室にいつもは勤めておりますしがないカウンセラーといったところだね。そして、弓道部の顧問をしている。はじめまして——あ、これ、みんなで食べなさい。育ち盛りですからね、病院の食事では、きっと満腹中枢の憤懣やるかたないことでしょう。特に君はグルメだからねえ」

「は、あ。……ありがとうございます」

ひどくかさばってしょうがない、湯気の立つ鯛焼きの大袋を渡されて、リヒトは目を白黒させた。

シュウは、にこにこなずいている。

「ここの全員、けがが軽くて何より。命あつてのモノダネ。僥倖僥倖」

「軽くねえぞ」

テッセンが、手術が終わったばかりの左腕を示したが、

「元氣そうでよかった」

シュウはさらりと受け流した。

「先生。どうして——」

鯛焼きをひとまずつまんで、ベッドの上に正座をすると、シュウは、ふわりと笑った。

「学校は——とりあえず授業を再開したところではありますけど、事後の対応で、みんなまだ忙しくてね。そろそろ、君たちの友人もお見舞いに行きたいようなことを計画していましたから、もうじき、友達に会えますよ。で、まあ、私は非常勤だし、相談室といっても、

今来てくれる生徒も先生もいないんですよ。必要のある人はちゃんとしたカウンセラーのほうに行くし、弓道部は夕方からだ。それで、君の面会謝絶がとけるのを、今か今かと待ち受けていたというわけ。キョウタローも、こちらに来たがっていたが、ちょっと大変な状況で、どうにも今は動けそうにないのでね。まあ、君に話があつて、きた。誰よりもはやく、平安学園の教師を代表して――と、いうより」

ただの顧問と生徒という関係なのに、という疑問は、次の一言で解けた。

「カエデとイチカの友人だったものとして。そのほか大勢のお偉いさんにいろいろと吹き込まれる前に、君に言っておきたかった。――知りたいことがあるでしょう」

リヒトは黙って、師範の顔を見た。

談話室に移りましょうか、というリヒトの提案を、シュウは拒否した。彼は、昼寝中のシルルや、興味深そうにこちらを見ているミサビ、瞑想中のグエンらを見渡して「別に、聞かれて困る話ではないのでかまいませんよ」と前置きして「もちろん、テッセンもね。聞いておいたほうがいいでしょう」と話し始めた。

「どこから話したらいいものかね。まあ、とにかく――まず、私とイチカは、古い友人でね。イチカというのは、一つの花、と書いて一花と読みます。いい名前でしょう。で――秀才でね。私よりだいぶ年は下でしたが、飛び級して、一つ下の学年にいました。私のほうが、何年か留年なんかしたもので、よけいに差が縮まったってこともありますが。それで、なんでか気が合いましたね――彼と親しくなるうちに、自然と、妹のカエデともつきあうようになりました。三人で、よくどこぞへ出かけたりしましたよ、学生の時は。それで、まあ――この友情劇が芝居なら、親友の男二人と、仲のよいその妹、当時からにおいたつよな美少女一人、というトライアングルの次の展開が予測できると思うのですが」

「はあ――」

教師もかつては学生で、また、青春時代というものがあったのだ、ということ、生徒はほとんど意識しない。最初の話題が、十年以上も前のことであるから、関心もあまり持てなかった。見当もつかないリヒトの横から、「横恋慕か」とテッセンが口をだす。シュウは肩をすくめた。

「さにあらず、か――まあ、あたらずとも遠からず、かな。しかしですね、テッセン。君は、イチカがなぜ、かの家に養子に入ったか、

という事情をご存知ですか？」

「男の跡継ぎが欲しかったんだろ」

シュウは、ふふ、と笑った。

「半分正解。しかし——まあ、そうですね。イチカのことを伝えるにあたっては、どうしても、カエデのことは外せないし、彼自身の出自というのもまた、必要なエッセンスであります。まあ、ちょっと、身をいれてお聞きなさい、リヒト」

「ええ——あ、はい」

喝をいれられたリヒトはうなずき、いずまいをただす。シュウは続けた。

「彼の言うとおり、あとつぎとしてイチカがロレンス家に来たのは、ある意味では事実です。しかし、もともとロレンス家には、れっきとした直系の子孫としてカエデがいましたから。当時、ロレンス翁をはじめ、一族は、まあ彼女がいれば、と思っていたのですよ。ご存知の通り、かの家がもともあったのは、はるかなる楓の国、悠久の北の大地カナダです。日本のように、おおきみの位には必ず男子がつかなければならぬ、というような文化の国ではありません。女王陛下の国。ですから、彼女の両親には、カエデしか生まれなかったけれど、まあ、彼女さえいれば、と、ご両親も係累も思っていたわけですから——途中までは。しかし、その希望はやがて碎かれます。彼女がごく幼くして変化したために、子どもを持つことができなくなってしまったのです。これが大変。由緒ある血統をカエデで絶やしてはならない、かといって他にどうしたら。それで、ロレンス家は議論ののち、分家から、特に賢い子を養子にもらうことを考えます。ですが、これが、一筋縄ではいきません。なぜかという、彼らはゲッターで暮らす一族だからです。ここに養子を迎えるには、さまざまな課題がある。人間のまま養子に迎えることはできないのです。これが、ごくむずかしい。ある程度成長して、子どもを作る能力を確保してから変化させ平安市で暮らす資格を持たせる、という手順を踏まなければならない。人間から転生させるのなら、生

存するであろう年齢を見極めるのも一苦勞だし、どうせなら、という目論見があったので、女の子ではいけなかった。ここでまず、候補がとてせまくなりますね」

「どうせなら？」

「養子は男の子でなければならなかった。あわよくば——カエデとその子が結婚すれば万々歳、ということですよ」

「へえ——ええ？」

「なるほどなあ」

テッセンはうなずいた。いまいち飲み込みの悪いリヒトに比べて、親戚のようなものだというだけあって、ロレンス家の事情に詳しいぶん、理解も早い。

「そうだな。うちみたいに、何か一個でかい資格があれば、人間のままでいいが。ロレンス家って、アトランティックにいればまあよかったんだろうけど、ここでは異邦人だからなあ」

「そうなんです。それで、せっぱつまったわけです。カエデが変化したことは素直に喜ばしい。家族が今までどおり暮らしていける磐石の基盤を得たのです。しかし、カエデから先の一族繁栄をどうしたらいいのか。しかし彼らは、幸運にも、イチカ・レオンという、日本名と英名——まあ、これは、ゲッターに來て養子にもらわれてからの名前ですから、彼の前世がどういう境遇の子で、どういう名の子かは、もう分かりえないことですが——とにかく、お眼鏡にかかった男の子が來た。しかも、まあまあ容姿もよかった。紅顔の美少年といえなくもない義理の兄と、天使のように愛らしい妹。家族にとつての幸運はさらに続いて、二人とも非常に素直で、よく氣も合った。二人は仲良く成長し、両親が何を言わずとも、自然と、いずれは夫婦になるつもりでいるようになったわけです。表面上は兄と妹ですけれども」

「待ってくださいよ。待って待って。ねえ、そんなのありなの？」

リヒトは、声をあげた。彼の疑問のひとつが、まさしくそこであったので、声をあげずにいられなかった。

自分の体の前の持ち主であるイチカが、妹であるカエデに、ものすごい執着を抱いていた、ということが不可解だった。彼は、カエデに焦がれるほど熱をあげていたからよくわかる。その気持ち、イチカのものだったのだ、と言われてなお、自分自身の恋だったのでは、と思わざるを得ない理由は、兄が妹にむける感情としてふさわしくなかったからだ。テッセンに、義理の、といわれてすら腑に落ちなかった。

「ありえないでしょう。きょうだいで結婚って、まさかそんな」

「ここではよくある話なのです。この、平安ゲッターでは。全部が全部、ということはもちろんありません、念のため。しかし、お嬢さん候補、お嫁さん候補を、息子・娘の、兄や弟、姉や妹として養子にしておく、幼い頃から一緒に生活させておく、というのは、珍しくはない。——かくいう私も、かつて義理の姉と婚約関係にありました」

さらりとシュウが言ったので、リヒトはまたも驚いた。しかし、テッセンがうんうんとうなずいているのを見て、そうなんだ、と思うと共に、ようやく、わだかまりが解けた。

そうなんだ。

イチカは、本当に——本当にカエデのことが好きだったのだ。兄としてでもあり、将来の夫、ひそかな恋人としてでもあった。いや、二人だけのあいだでは、恋人だったのだ。そういう、ことだったんだ——

それはさておき、とシュウはせきばらいをする。

「だけど、イチカは亡くなりました」

「あ——」

リヒトは小さく息を吐く。

「そうなんです。からね。だから——あの、でも。そうだ。イチカさんって、どうして亡くなったんですか？ テッセンは事故って言うだけ。たけど。なんか、他にも理由があるかも、みたいなことを言っていました」

ね、とテッセンに水をむけると、テッセンはうなずく。

「先生はご存知で？」

シュウはうなずいた。

「そう……事故、といわれています。しかし——私とあと数名、ごく近い、親しかったものは、そうでないことを知っている。なぜなら、彼は、サンプルだったからです」

「サンプル」

どこかで聞いたような、と思っていたと、テッセンとミサビが、同時に「やっぱり？」とベッドの上で居住まいを正したので、ふと思いついた。

「ええっと、たしか……事故の直前、だよな」

テッセンを見ると、彼は深くうなずく。

「そうだ。やっぱり、イチカはそうだったんだな」

「ええ」

シュウは、あごに手をあてる。

「サンプル。これについても、貴方に深く関わることでですから、これだけは知っておいたほうがいいでしょう。むしろ、貴方にとって、本題はそちらだと思います」

一呼吸置いて、続けた。

「私たちが、今使っているこの体は、ハク——粒子によって変化し、ぐしゃぐしゃになって放棄せざるを得なくなった肉体のかわりにもなった、作られたからだです。そして、これはかつて、天使によって与えられたからだでした。また、天使より受け取った技術で作られたハクのなかには、まれに、彼らから、素体としてまるごと渡されたハクも混じっています。天使が作ったそのままの人間の体。それは、非常によく人間の魂と馴染み、通常ではありえないほど高い能力を発揮するものがある。その魂の持つ潜在能力を、限界一杯に引き出してくれたりもする。しかしそれは、彼らが現れてからの長い歴史の中で、誰がその体に入っているのか、誰に渡されたのか、今ではデータが散逸して不明になっているものが多い。また、その

ももとの多くは、これを解析して自分たちで量産しなさいよ、という、本当の意味のサンプルとして人間側に渡されたものでした。

大部分は、意図通りに使われました。解体して、分析して、再構築する技術を磨く、私たち、変化したものを助けるためのハクを量産する、そのためにです。――わかります？」

「ああ、はい。ええと――人形を作る師匠が弟子に、これを見て作りなさいよっていう、お手本みたいなものですか」

「そうです。ですが――その人形の体の中にね。どうしても緊急事態でいれなくちゃいけない事態が起こったときは、当時はまだ、ハクの準備も満足に整わなかった時代ですから、いれてしまうわけです。粒子で変化したそのひとを、助かるかもしれないひとを、みすみす殺すわけにはいかないんですからね。そういうわけで、サンプルの体に入ってしまったひとたちが、結構いるわけです。世界中に」「イチカも、そうだった、と」

「ええ。すでに技術が確立しても、やっぱり、不測の事態、というのがあったんでしょうね。幸か不幸か――イチカはサンプルになり、高い能力を発揮した。ところが、サンプル、というのが、いわくつきだ、というのが、近年言われているんですよ」

「いわくつき？」

「サンプルだったんです。天使にとって――人間という種族のサンプル。そういうことだった。そういうことになってしまった」

「はあ？」

「私たちの魂は、人間のときのままなのです」

シュウは、自分でも言葉をたしかめるように、ゆっくりと言った。「それを、効率的に見張るためには、なにか目印のついた箱にいておく――今ははっきりとわかっていることですが、どうやら、天使には、人間は観察の対象なのです。私たちがどうふるまうか、魂はどのような動きをみせるか、彼らは見てみたいと思っているのですよ。彼らは最初、がんばって生きなさいよ、と思って、サンプルを私たちにくれたのでしょう。しかし、途中で考えを変えた。これ

からさき、ずっと共に生きていくにあたって、人間を観察しておきたいな、と思った。不穏な動きがあれば、もちろんチェックするつもりでしょう。で、そのとき、人間全部を見張るのはとても無理だから、どうにかして基準を設けて、行動をトレースする個体を決めたいと思った。そして、選ぶ基準をどうするか、というところで、そういえば人間たちに渡したあのサンプルがあったじゃないか、と思い出したか——最初からそのつもりであったのかは、推論の余地を出ませんが——とにかく、あのサンプルに入った人間の一生を追うことにしたらどうか、と思った。数も少ないし、やりやすい。もとは自分たちが作ったものだから、発する粒子の割合や質と、自然とひきあうものがある。能力を限界までひきだしたりしてくれるから、その魂のもつ地力や可能性も見ることが出来るわけです。かくして、サンプルは、サンプルに入ってしまったものは——簡単にいうと、いつでも、彼らの実験の対象となってしまうことになった。……それは、つまりですね」

ここで、シュウは言いにくそうに唇を斜めにした。

「なんです？　言ってくださいよ」

ここまで教えてくれたんだから、と言ひ募ると、シュウは困ったように口を開く。

「つまりですね。非常に、危ないトラブルに巻き込まれやすい」

「危ない、トラブル」

「そうです」

真剣にうなづくシュウに、それでもリヒトは合点がいかなかった。

「それと俺と、何の関係が——、あ」

途中で気付いた彼に、シュウは「そう」とため息をついて、あごに手をあてて前かがみになったまま、足を組んだ。

「その、サンプルだったイチカハクが、どういう経緯かわかりませんが、君のものになっている、ということです。今回の事故も、おそらくそのせい」

「はあ……」

というしかなかった。リヒトが首をかしげたまま固まっていると、シュウは、困ったように首を横に振った。

「そもそもですね。最初に君をみた先生たちは、特に、イチカを知っているものは、おや、と思つたのだそうですよ。イチカに似ている、って。ハクが君の魂に準じて君のものへとなっていくにつれて、面影は消えましたから、すぐに忘れてしまいましたけど。——でも、カエデは違いました。彼女は、兄がサンプルであったことを知っていましたから——サンプルというのにふりかかる運命についても知っていましたから、その死を黙って耐えていました。そこへ、変化して君が現れた。彼女は、目覚めた直後の君を見ていましたから、すぐに私に言いましたよ。今度来るリヒトという生徒のハクは、あれは、イチカではないかと思う、と。私も、彼の死についてはよく事情を知りませんから、なぜ彼のハクが君に、ということについては、いまだにわかりません——が、とにかく、何か複雑なことがあって、彼のハクが君に渡された。貴方の体がもとイチカだろうということは、私は、疑いませんでした。カエデがそういうなら間違いないと思ひましたから。で——と、するとです。そこで、サンプルという運命が、いずれ君にも降りかかってくるわけです。カエデは、実践授業週間が終わったら、とにかく、じぶんの従弟のテッセンが、リヒトと親しくしているから、彼を通じて家に呼んで、兄のことを話してみるつもりだ、と私に言っていたんです。注意をうながすつもりだったのでしょう。そして——もしかしたら、君の中に、なか、最愛の人の気配なりとも残っているかもしれない、だとしたら探ってみたい、と賭けていたのかもしれない。あまりにも突然に引き裂かれてしまいましたから」

「俺、カエデを好きでした」

リヒトは、まっすぐにシユウを見た。シユウは、まばたきをせず、ぼんやりとリヒトを見ていた。リヒトのむこうにある、かつての友

人を探すような目だった。

「だけど、今は、よくわからない。俺はカエデを好きだったのか——イチカのハクがおぼえていた、彼女への恋なのか」

どっちなのか、混乱し、迷っていた。もちろん、カエデの死がとても悲しい。彼女の最期に納得がいかない。しかし、炎のような恋心は、勢いを潜めていた。思いに疑念を抱くほど、冷静に考えることができた。そして、そのことにまた失望をおぼえる。

「ハクのヒステリシス現象」

唐突にシュウが言った言葉は、リヒトにはよく理解できなかった。「あるいは魂の形状記憶。生まれ変わっても一緒にいようね、とか、前世で言い交わした仲、だとか——来世の恋、とか——現世でロマンティックに言われるそれらは、ここではあながち、いつわりにならない」

脳裏に浮かんだのは、中島のことだった。呼ばないから出てこないだけか、最近、顔を見ていない。

今は、どこでどうしているのか。

シュウは呟いた。

「そういうものなんですよね。なぜなら、魂というのは、たとえば、その上にまとう肉体が新しくなり、見た目も性格も変わっても、確実に記憶を刻んでいるのです。直近の記憶が、今の感性に与える影響は非常に大きい、ということは、すでに分かっている。歴史は繰り返す。いつも親しかったもの同士は、何度生まれ変わっても、互いを知らずのうちに探し、呼び、寄り、ときには結ばれることもあるでしょう。私たちは、余計にそのことを身をもって知っています。一度死んで生まれ変わった記憶を持っていますからね。……貴方は、イチカの生まれ変わりだった。もちろん、そのハクでだけ、一時だけのことです。しかし、その一時だけでも、イチカの魂の記憶をもつそのハクは狂喜した。そして、まだまっさらな状態のままの貴方の、感性、嗜好にまで働きかけた。魂の記憶を持った粒子のなせる業——貴方の中にあつたイチカの残骸は、貴方を通じて再び彼女に

恋をして――それが、甘いかわかりませんが、そんな錯覚をおぼえさせ――有事にあたっては、結果、貴方がたを恐るべき世界に連れ出すにいたり――そして、いまわのきわというとき、友人を失って茫然自失した貴方の変わりに、肉体と口のコントロールを一時期、手中にして暴れまわった。ハクが引き出した、彼の恐るべき能力を、火事場の馬鹿力的に復活させた。そして、カエデに思いを伝えて、彼女の死とともに、彼女の魂をつれて、一緒に消滅したのでしょうか。彼の心残りは、たった一つだった、ということが、そのことからわかります。カエデ。彼のたったひとりの妹であり、結ばれるはずだったクイン・エリザベス。だから、今、リヒト――貴方は、混乱しているでしょうね。貴方は今まで、貴方ひとりで立ってはいなかった。いつも、イチカが一緒だった。だけど今、貴方はひとりです。ようやく、貴方は貴方自身になった。私は、彼が、そのために貴方の体に残っていたのだと思うのは、あまりに感傷的だと思いますけど、でもまあ、そんなことも、あるかもしれません。とにかく、礼を言いますよ。貴方はいやかもしれませんけど――もういちど、カエデにイチカを会わせてくれてありがとう。たとえば、貴方自身がカエデにひきよせられたのでないとしても、私はそういいます。ありがとう」

「そんな――ことは」

みじめだった。

自分が自分でなかったことに礼を言われるのは、恥ずかしいことだと思えた。今までの自分がうそになった気がする。

リヒトは、齒をくいしばる。そして、何気ないふりで「ところでその――サンプルに降りかかる運命って」と口を開いた。シュウは、唇をかんだ。

「それです。ええ、そう。本題」

「あの、俺――俺がサンプルで、このハクが、ものすごい危険を呼ぶってことですね。ええと、あいう。もしかして、今回のことも全部、俺のこのハクのせい。だとしたら、取り替えたりとかしなく

ちやいけないんじゃないかって」

「ところがどっこい」

シュウは首を振った。

「できないんです。それが」

「でき——ない」

どうして、と首をかしげると、シュウは、深くためいきをついた。

「いわば、鍵がかけられるんですよ。一度入ったが最後、魂が死ぬまで、そのハクは貴方を放さない。そのかわり、そのハクは異様に頑丈にできています。丈夫で長持ち——だからこそ、イチカの魂が消し飛ぶほどの衝撃をうけても、そのハクだけは無事、という、いかんとも説明しがたい状況に、今、なっているわけですが」

「丈夫で長持ちって——そんな、どっかの園芸改良品種じゃあるまいし」

「でも、そうなんですよ」

とほほ、という感じでシュウは苦笑した。

「サンプルには、天使からたびたびちょっかいかかります。そのつど、ハクは、周囲を巻き込んで遭難させたり、えらいところへ連れて行ったり、また、サンプルだということで、人間たちからもやいやい言われたりするでしょう。むしろ、人間たちからの干涉のほうがひどいかもしれませんよ。ということで、誰がサンプルか、というのは伏せられるわけですが、それでも、妙にこの人物のまわりではトラブルが多いなあ、ということで、自然と知られる場合があります。それに、貴方はこれから立ち向かわなければならぬ。選ばれた限りは、進むしかないわけです」

「選んでくれなんていってませんけど……」

「運が悪かった、という言い方では、おそろく、理不尽に感じるでしょうね。でも、もしかしたら、本当に選ばれたのかもしれませんが。ハクが魂を呼ぶ、ということも、あるかもしれませんから。イチカのハクが貴方に渡されたのも、そもそも、これは貴方の魂と馴染む、と判断されたからでしょうし」

「それについては、僕もあると思う」

今まで黙って聞いていたミサビが、ふいに、テッセンとは反対の、隣のベッドで言った。

「ソジ法で、いくら粒子の拡散が防止されても——どんなに嚴重に制限されているにも関わらず、毎年、一定の犠牲者が出る。もしかしたら、変化するものは、もともと何か特定の素質とかを持っているのかもしれないよね。いくら気をつけても、変化するひとはするのかもしれない、と思う」

「そうですねえ」

シュウは、感心したようにミサビを見ながらうなずいた。

「そうなんですよね。どうあがいても、私たちのような人間は毎年必ず出てくるんです。リヒト、貴方がどこでどうして、なぜ変化したのかは私もよくわかりませんが——イチカは死んだ。どうして死んだのか、本当の本当に事故だったのか、サンプルとして何かのトラブルに巻き込まれたあげくに、今度こそ試練を乗り越えることができずに惜しくも果敢なくなったのか、軍人としてなにか密命を帯びて活動中にどうにかなくなってしまったのか、そこだけはまったく、私にもわかりません。しかし、事実として、彼の魂は消え、そのハクは今貴方のもとにある。サンプルの座は貴方に譲られた。それにも、何らかの意図があるのかないのか。一介の弓の師範である私にはわかりません。だけど——覚えておいてほしいのは——絶対に、やけになったりいじけたりしないでほしいのです。イチカのこと、もう、できればこれっきり、頭の隅に、こんな人が自分の体の前の持ち主だったのだな、というだけで、忘れて欲しいのです。サンプルになってしまったというのも、あきらめて、とはいいませんが、どうか、まるごと受け止めて、前向きに生きて欲しい。君ならそうできる、と、私は思います。そして、とにかく、今回のことは、本当に本当に、生きて帰ってきてくれて、本当に良かった。何も知らないでこんなことに巻き込まれて、ひどく気がかりでしょうがなかったのですから。本当に——こうみえて、すごくすごく心配でした

よ」

「そう、なんですか」

「ええ。あんなまともに弓を引けない子に、もしなにかあったら、と思うと。とにかく、無事に帰ってきてくれれば、いくらでも対処のしようがある。教えられる。それに……私がカエデと最後に会ったのは、実践授業の、あの事故の日の三日前でした。相談室にやってきた彼女は、忙しそうにしていたけれど、そのなかで——とにかく、リヒトが入っているのがイチカの体であったとしても、もう、それはリヒト自身なのだから、自分の生徒なのだから、彼のこれらの人生を考えなければならぬ、と、そう言っていました。最初は……正直に言います。カエデは、貴方を少しだけ恨みに思っていました。貴方のせいでイチカが死んだような気が、彼女にはしていません。貴方を見るたびに辛い、と言っていました。イチカを思い出して——だけどそのうち、貴方が本当にいい生徒で、可能性のある子だとわかって、彼女は忘れることにしたんです。貴方が強く生きることがカエデの支えになるだろうと私は思った。カエデの死も、気にしないでほしい。彼女は、彼女の兄をかばったのではなく、リヒト、貴方をかばったのです。自分の生徒を。教師として、立派につとめを果たしたんですから。そして……こうなった以上、私は貴方を、できるかぎり幸福なほうへ導くために、いつでも、なんでもしますよ。それを覚えておいてください——きっと、まもなく貴方は、平安市の上のほうから呼び出されて、サンプルとしての節度ある生活を求められたり、貴方がサンプルだということを利用する輩もでてくるでしょう。そのとき——」

「先生は」

ふと、シュウの言葉がとぎれたところで、リヒトは、じっとシュウを見て言った。

「カエデが好きだったの……?」

「カエデと、イチカが——ね」

自分でも不思議そうに、頬に手をあてて、シュウは言った。

「そう。三人、というのは、不如意なものでね。ひとは、大体、三人で話はできないものなのです。どうしても、親しい二人と、まあ親しいひとり、というふうに分かれます。私たちの場合、カップルは自然と、楓と一花。私はひとり。しかし、私は、まあ親しいひとり、という地位にいて、特に何も不満はなかった。彼らがそうさせていたから、ということもあつただろうけど――私は、たぶん……彼ら二人を、ひとりとみなしていたのでしょう。イチカというカエデ、カエデというイチカ。最初から、どちらかがいないというのは考えられなかったんですね。そういうわけで、私は、今こうして彼らを失っても、二人とも同じ場所にいるのだからきつと幸せだろう、よかったかもなど、多少の浪漫をこめて思うわけ」

「もう会えなくても、ですか」

「会えますよ。何十年分の彼らとの記憶が、魂にあります」

「でも、心のどこかで、もう二度と会えないのだ、と思いませんか。俺は思う。死ぬ、魂がなくなる、というのは、口ではいくら、天国でまた会える、とか、胸の中にいる、といっても、死ははじまりだとわかっていても――そりゃそうだけど――きれいごとじゃないかなって思う。今回のことで、ものすごくそう思う。生きて、物理的にそばにいてくれるのなら、それにこしたことはないって。……俺は、カエデに生きていて欲しかった。サツキも、ジュンサンも、フリオも、ミサオもコーゾウも。俺のせいだと思ってしまいます。俺が運び屋だった、サンプルで、諸悪の根源だったっていうなら、ずっと思えます。あんなふうな死に方、きつと、みんな予想もしてなかった」

「君は鋭い。でもね――私たちの命なんて、もともときつと、そんなものなんです」

呆然とシュウは言い、静かに立ち上がった。

「瑣末な問題だから」

さあ、これ以上病人を疲れさせてはいけないから、と言って、シュウは去って行った。

時計の針は今日も進む。ルリが検温にやってきて、医師が診察にやってきて、それぞれ、翌日の検査予定が渡される。

「俺がサンプルだってこと、シュウ先生は、この部屋みんなに隠そうともしなかったね」

夜、ぽつりとベッドでリヒトが言うのと、ミサビとテッセン、シルル、グエンは、それぞれ顔を見合わせた。

「お前だけ、お偉方から呼び出されてなんか言われて、それを俺らがやきもきして、何言われたんだって疑心暗鬼になって、こいつはサンプルなんじゃないのか、って探られたら、面倒だと思っただろう。俺は――よかったぞ。お前がはつきりそうだってわかって」

慰めるような口調だった。

「かもね」

リヒトはため息をつく。テッセンは、ほかにも何か言いかけたが、結局、言葉が見つからなかったのか、黙ってしまった。しばらくして、

「知ってれば、フォローできる」

考え込む顔でミサビが言った。

「この部屋にいる人間なら、あそこがどんな場所だったか――何もいわなくても分かっている。リヒトが、誰よりも驚いただろうってこともね。それで、僕らの心証が変わることはないよ」

きっぱりと言った。シルルとグエン、テッセンは黙ってうなづく。「そうだ。俺が褒めたお前の長所だって――あれは、イチカのものじゃない。おまえ自身のものだ。俺は、お前と親しくなりたいと思ったんだ。イチカじゃない。イチカとは、俺は――どんなに年が近くても、駄目だったろうな、と思う。でも、お前とは――お前はあいつとぜんぜん違う。どうなっても、きっと、お前らしい、別の策が見つかるさ」

誰も口外しないだろうと、確信させる表情だった。
和やかな空気が病室に広がる。

リヒトはその晩、はじめてぐっすりと眠ることができた。
それは、彼がいつか故郷でむさぼったような、温かい眠りだった。

シュウの訪問から三日もたつと、リヒトは、精神的にも元気を取り戻していた。とにかく、自らの体に対する疑問は解けたのだ。肩の傷は、小さなあとだけを残してすっかり治ってしまい、入院生活も板についてきた。サンプルゆえに、彼にだけ別の検査があるとか、問診が妙に長いということはあったが、テッセンもミサビもシルルもグエンも、気にするそぶりはない。むしろ、氣遣ったりはげましたりしてくれた。シュウが、同室の彼らの性格や気性まで見越した上で話をしていったというなら、どうしてどうして、すごい人物である。

もうひとつの疑問については、リヒトは見てもぬふりをしていたが、前述の謎が解けたことで、そちらがにわかになりだした。しかし、だからといって、安易に蓋をあけて覗いてみる気には、やはり、なれないものである。こちらは、イチカとカエデのもろもろよりも、彼自身にとってよほどデリケートな問題だった。

土曜日。学校なら、休日であるその日、ルリが朝食後の検温にやってきたときである。足がかりのひとつが、意外な方向からできた。ルリが、体温計と一緒に、あるものを彼らに差し出したのだ。それは――

「お手紙つきよ、今日は。はいシルル。と、グエンと、リヒト――学校に行けないからねえ、貴方たち。事務のひとつが、これからは、退院まで病院に届けてくれるみたいだよ」

「お……お母さんからだ！」

彼は二通の手紙を受け取った。手紙単体では初めてのことだ。病院にも届くんだなあと思ったとき、口に合わない朝食を、まだのろのろと食べていたミサビが、小さく「そうかもなあ」と呟いたのが、

彼の耳に入った。

「そうかなあって？」

手紙に目を通して、リヒトが振り向くと「ん」と、箸を置きながらミサビが口を開いた。

「いや、手紙を盗んでた犯人についてさ。——ちょっと、分かったかもしれないあって」

「えっ」

「本当かよ！ とすると、お前じゃなかったんだな？」

「失礼極まりないね、君は」

野次をとばすテッセンに、ミサビはしかめつらをしてみせる。シルルも、左手で不器用に箸を使いながら顔をあげた。彼は、腕を負傷したため、手を使う作業に時間がかかる。食べ終わっているのはリヒトだけだったが、気になって尋ねてみた。

「なに？ どういうこと？ ミサビ」

「いや——」

そのまま、ミサビは、箸をとる気が完全になくなったようだ。お茶をひとくちのむと、トレイを遠くに押しやって、リクライニングされたベッドに背をあずけた。宙に視線を泳がせながら、ゆっくりと、話し始める。

「そもそもさあ、同級生じゃなかったんじゃないかって、思ったんだよね」

「同級生じゃ、ない？」

「そう。ねえシルル、リヒトのいないところでは、わりと、事故の前の添木会の話題って、もっぱらそれだったよね——で、僕らの見ているかぎり、今回はどうも、あのナモノトリオでもないし、ミサオではないしテッセンでもない。僕らのクラスの誰も、犯人としてはふさわしくない。不思議だなあって——そう結論したの、覚えてる？」

「ああ。そうだ……、そうそう」

ミサビの向かいのベッドで、シルルがうなずいた。

「つかしいなあ、って皆で話してたんだよな。事故の前日も、何人かで、そうやってさ。――で？ ミサビ、誰だと思ったんだよ」

「うん。とすると――ひよつとして、時間割が大幅に違う、他の学年の人かなって、ちょっと思ったんだよね。どういうわけかわからないけど、そいつがリヒトに嫌がらせしてるのかもな、って。で、そのタイミングで、リヒトがシンとかリンとかいう名前のひとを気にするものだから、ひよつとして、シンさんかもしれないなあと思ったの。おいそれと皆に話すわけにはいかない人物だけど、彼かなあって。でも……、それも違った。彼ならきつと、荷物だろうがなんだろうが、徹底して取っていくと思った。使い走りになる人間なんて、寮内の高校生のなかにたくさんいたと思うし。だけど――荷物は届いたよね？」

「あ、うん。……ちよつと、待ってて」

話が佳境に入る前に、やるべきことをすまそうと、空になったトreyを持って、リヒトは立ち上がる。病室のすぐ外に出て、ワゴンに戻していると、隣の病室から、朝早くだというのに、にぎやかな話し声が聞こえた。マチコやシズから、女子が集団で入っている病室。休日なので、お見舞いがこぞって来ているのだろう。

華やかだなあと肩をすくめつつ、急ぎ足でベッドに戻る。

「ごめん。それで？ 誰が犯人なの？」

「うん――」

ミサビが続ける。

「それで、犯人はシンさんじゃないな、と思ったんだよ。そして、じゃあ誰かなと思った。さっぱりわからなかった。でもさ――女子――ってことはないだろうか、とふと思って」

「女子」

「そう。女子。それも、学年の違う女子、ね」

「それはまた、どうして」

「女子なら、男子寄宿舎に届く荷物には手が出せないんだ」

「ああ……はいはいはい」

目を丸くして、シルルがうなづく。

「たしかになあ。それならわかるよ。うん。そうだそうだ。女子なら——えっ……てことは、なに。ラヴ、みたいな関係？」

「こいつに、そんな色気起こすやつがいるかあ？　ないない」

テッセンが大げさに首をふった。

「違うだろうが。ふふん。俺はわかったぞ——」

意味ありげに笑みを浮かべる。首をひねっていると、ミサビはさらに説明した。

「ねえ、リヒト。君は、シンが自分の幼馴染じゃないかって疑っていたね。でも、決定的な証拠はない。そう——そうなんだよね。君が、シンやリンなるひとが、このゲッターのどのひとなのかかわからない、としたら、あちらだってそうだと思わない？　あちらにだって、ここでわかるのは、リヒト、という名前だけ。それだって、君と同じように覚えていたかどうか。あちらにとっても、君がじぶんの幼馴染だっていう決定的な証拠はないんだ。転校生のリヒト——名前だけのリヒト。もしかして、というのを、確信に変えるには、君がどういう人間知らなくちゃならない。故郷の地名、親兄弟の名前、子どものころの話。姓がわかればなおいい。探するには、家族からの手紙、って、うってつけだと思わない？　もちろん、悪いとは思ったと思うよ。でも——どうしても、正体を隠しておかなくちゃならなかった。というより、言っても信じてもらえないと思ったかも。だって、君の記憶の中の幼馴染は、男の子だったんだよね。だけど——」

それで、さすがのリヒトもはっとした。

「ギン、ね——僕も、あれでようやく、最後のひとかけらがはまった気がして。どうにも、不思議な話だけどね」

「あ……」

そうだったのか——とリヒトは目を丸くする。たしかに、ミサビのいうとおりなら、ありえる話だ。

もしそうなら——いや、しかし、どうして？

「そう。いや。でも……、なんでミュー……先輩。まだ、そうと決まったわけではないでしょう」

「だけど、そういうことじゃない？　今手紙が届くのもわかるよ。だって、彼女も」

そのとき、二番目の足がかりが、軽い音をたててやってきた。

こんこんというノックに、「どうぞ」と、一番近くにいたミサビが声をかける。ドアが開いて入ってきたのは、彼の知らない少女だった。黒い長い髪、平均的な幼顔。少女は「お初にお目にかかります。中等部一年、アスカと申します」と名乗った。「失礼いたします」と頭を下げると、全員を見渡して「リヒトさまはどなたでしょう？」と首をかしげる。

「あ、俺です」

手をあげると、アスカはうなずき、「失礼します」と再び言って、彼のほうへ近づいてきた。手に持っていた荷物のうち、包装紙に包まれた箱を、ふいに、くるりと反転して、ミサビに渡す。

「あの、これ……これ、マチコさまが、よろしかったら、と」

「ん？——おすそわけかな？　どうもありがとう」

ミサビは、包みをたしかめてにこりと笑う。頬を赤らめて「どういたしました」と頭を下げると、アスカはリヒトに向き直った。焦った顔を、気の毒なくらいあわてて鎮めようとした中途半端な表情だ。挙動不審のまま「これを」と彼女が差し出した大きな封筒を、リヒトは受け取った。一体なんだろうと首をかしげたとき、「ミュー先輩からです」と言う。

「中を見てください」

「へ？……あ——これって」

中に入っていたのは、二十通をゆうに超える手紙の束だった。丸くなった目が、送り主を確認してさらに丸くなる。すべて、彼の家族から彼へ送られたものだ。消印は、八月の終わりから、九月、十月。届かないと思っていた期間すべてのものがそろっている。呆然としていると、「やっぱり」というミサビの呟きが聞こえた。

「ミューさんからなら、完璧——彼女が犯人だよ」

「あの、これ……どうして」

顔をあげると、アスカは、平静の表情を取り戻していた。独特の、やや冷淡な口調で、

「だから、先輩からですって。頼まれたので、着替えなんかと一緒に寮からお届けしたんですけど——」

「寮！——寮って。あの、ミュー……先輩の寮のことだね」

「はあ？——もちろん、女子寄宿舎ですが。ええ、男子寄宿舎の向かいにありますね」

何を言っているのだという目で見られて、リヒトは「ええと」と口ごもる。アスカは、自身も疑問を丸呑みさせられたのだろう、納得のいかない顔で、多少、怖い先輩への意趣返し的气もあって「鍵のかかる引き出しの鍵を渡されたんですよ。その鍵を使って開けて、持ってきてくれていわれたんです」と、その手紙が、たしかにミューの部屋に隠されていたことを教えてくれた。

「たぶん、ご自分で貴方にお返ししようとお考えだったのでしょうけど。でも、先輩は今、ちょっと自分では行けそうもないからって、——ええと、——できれば、貴方にお会いしたいそうです。五階の東側の突き当たり、ガラスのドアがあって、その一番奥の部屋が先輩の病室です。毎日、夕方の三時から四時のあいだなら出入りができるから、来て欲しいと。確かに、伝えましたから。……では、私は、これで」

「あの」

ひきとめる間もなく、アスカは姿を消した。あとには、大量の手紙が残されるばかりである。リヒトは、手紙の入っていた、一回り大きな封筒をもう一度よく見た。小さく、細い字の羅列がある。

“ごめん——水森”

「ギン。……水森——ギン」

信じられないが、本当なのだ。しかし、なぜあのギンが——いまでは、はっきりと、その名前も姿も思い出していた。水森ギン。た

しか、ラストネームのほうは、色の名前ではなくややこしい漢字の名前だった——いつも、彼は、自分の名前をひらがなかカタカナで書いた。なぜそれが今、ミューという名前で、しかも、女の子になっっているのだ。

時間はたっぷりあったので、考えに考えた。女装？ 整形？——しかし、彼の記憶では、あるときふわりと舞い上がった髪の下顔立ち、間違いなく自然な女子のものである。高い声も、抱きとめたときに感じた、男子にはありえない骨格の華奢な様子も、肉体の柔らかな部分も。少しきついかな、と思われる性格も。どこからどう見ても。縦にしても横にしても、ひっくり返しても、彼は少女だ。「ねえ。ミューってさあ。あのひとつてさあ、確かに、絶対に——どうしても、間違いなく女子なんだよね？」

彼が首をかしげると、

「そのはずだけどねえ」

ミサビとシルル、テッセンが、困り顔で、やはり、首をかたむけた。

「初等部のところから、たしか、ずっと、ずーっと、女子寮だった——と記憶してるし」

「女子の制服を着てるだろうが、そもそも」

「女子連中が、気付かないで一緒に暮らしてるってことは、そうだろうなあ。改修前は、風呂だってトイレだって、うちとおんなじ、共同だったって話だぜ。いくらなんでも」

うう、とりヒトが唸っていると、テッセンが痺れをきらした声で「もういいから、行って来い」と檄をとばした。

「気になってしかたねえんだろ。早く行って来い。男なら正面突破」
「そのほうがいいよ」

やや優しく、ミサビもうなずいた。手紙の山を見ている。

「待ってるってことじゃない。あちらも」

「ん……」

それはたしかに、待ちわびた瞬間だった。何かの決着がつくだろ

うということも想像できた。しかし、恐怖もあった――底知れない闇を見てしまうかもしれない恐怖。絶望への大きな扉が開いてしまう恐怖。たしかに彼――か彼女がそうなら、会って話をしないではおさまらない。同じ故郷を知る幼馴染の存在は、彼の孤独に光を投げかけている。

しかし、

「じゃあさあ！ みんな、面と向かってあの人に聞ける？ 貴方もとと男ですよって。なんて言ったらいいのさ、俺。ねえ。ちょっと見せて――ってわけにはいかないじゃない。どうしたらいいの？ ねえ」

彼らは、いっせいに寝たふりをした。

頼りにならない友人たちは、それでも、こっそりと病室を出るリヒトに、声援だけは送ってくれた。夕方、彼らのすすめで、リヒトは、見舞いの菓子や果物、花束を両手に抱いて、二階上の病棟へむかった。

ある意味、あの東京をうろろするより緊張した。いつか鬼と呼ばれていたミューに会いに――しかも、二人きりで話をするのだ。とがめられるかと思ったが、病室にいたる通路には、人っ子ひとりいなかった。ワゴンを押す看護婦たちも、医師もいなかった。フロアすべてが、特別病棟に値するらしい。彼らの階よりいちだんと白い壁、白い廊下。息をするのはばかられる静けさだった。言われたとおりの場所には、救急――の二文字が、ガラスの扉の横の看板に書かれていて、その奥にいるものの容態を悟らせた。

「やあ――来たか」

ミューは、ひとりきりの病室に横たわっていた。十畳ほどの部屋は、もともとVIP用にでも作られていたのだろう。壁紙も調度品も上等だった。しかし、それらは今、部屋の主にとっては無用の長物らしく、贅沢にもひとまとめにされて壁際におしつけられている。かわりに空間を埋めているのは、無機質であたたかみのない、やたら大きな機械類だ。たくさんのコードがそこから延びていて、先はすべて、彼女のベッドに向かっていた。布団からはコード類が飛び出して、縦横無尽にあたりの床にのたうっている。

彼らの病室のものよりひとまわりもふたまわりも大きなベッドの、操作ボタンが布団の中で押されたらしい。やがて、ベッドの上半分がなめらかな低速でリクライニングされ、目の高さが同じになった。停止する瞬間、彼女は少しだけ辛そうな顔をした。

向かい合ったミューの様子は、これぞ、病人らしい病人、といえ

た。青ざめた顔、艶を失ってぱさぱさと左右に分かれた髪。細い首筋に、はだけられた薄い病衣の、鎖骨のうきでた胸元。照明の絞られた、薄暗い部屋のなかで、一瞬、これがハク——作られた肉体だということを忘れさせるリアルさだ。息をのみながら、

「あの——お久しぶり、といっつていいのかどうかわからないんですけ、ど。ギン——なんだよね」

彼が、ベッドの脇に立たされたと置かれている機械とコードをよけて置いた椅子の上で呟くと、ミューは、ふ、と口元をなごませた。

「うん。そう——久しぶり……だ」

ああ。

ため息が、知らずのうちにすべりでた。

そのまま、黙ってしまったリヒトを見ると、ミューは、しばらく宙を見上げていたが、やがて「びっくりしたでしょう」と、女性らしい柔らかな口調で呟いた。

「ああ、うん。そりゃあもう」

「ふふ。そりゃあもう、ね。——そうだよ。私もそうだよ。呼びつけてまで来てもらったのに、いざとなると、迷ってる……。どっちで話したらいいのかな、と。あんたの——お前の、知ってる、かつての水森ギンとしてか。今、ここにいて、ミューという女としてか……」

女——なんだ。やっぱり。

小さくりヒトが呟くと、ミューは大きな目を見開いて、何かに耐えるようにじつとりヒトを見た。

「手紙、見た？」

「うん。見た——俺の手紙。君が？」

「そう。私が」

ミューはため息をついた。

「どうしても知りたかった。あんたが本当に、私の知ってるあのリヒトか。福島の——あそこは、小さな町だった。山に囲まれた、古い古い土地。その、古い古い家の、あんたはたしか、長男だった。

よく似た弟がいた。両親が、いまどき珍しくそろっていて、ちゃんと結婚していて、さらに珍しいことに、おじいさんおばあさんも一緒に暮らしていて――あんたに関する私の記憶が確かなら、今もきっと仲良く、ひとつの家で暮らしてる、と思った。知りたかったんだ。どうしても」

「ギン。ねえ――あの、本当に、ギンだよね？」

坂の下の団地には、あまり裕福ではない、たちのよくないものたちが住んでいた。

そこで、ひととき悲惨な暮らしを送っていた少年。

いつか町を去っていった彼が今ここにいて、と思うと、不思議な気持ちになる。あの少年が、どういった奇異な変化を経てこの姿になったのか。

「もしかして、君もサンプルなの。それとも、それとも――そうだ、前のハクの持ち主が、女の子だったとかなの？　それでなの？　どうしてもそれしかなかった、とか。あの……なんか――ごめん。でも、どうしても、変な感じがするんだ。何があったの？　何で変化したの。俺、君のことを忘れてた。中島が――友達がね、聞いたら君は、たしか小学校で転校していったって。その男の子が――本当に、君なんだよね。よく一緒に遊んだよね。それと、間違いなく同一人物？」

「間違いなく、私が――俺が、水森ギンだよ。瀬田理非等」

まっすぐに目がある。疑う余地は微塵もない、と、リヒトがそれでどうとう悟ったとき、彼は、途方もない脱力感におそわれた。

驚きで声も出ない彼にむかって、ギンは逆に、慰めるような小さな声で「ごめんね」と言った。

「驚いたでしょう。信じられないのも、わかる。私も、あんたがゲッターに来たときは信じられなかったけど――比じゃないよね、きつと。こんなんだもの。どっかに、男だった証拠でもないか、あんたになら、体じゅう見せてもいいけど、きつと見つけられないと思うしねえ」

「とんでもないです」

すぐにぶるぶると首を左右に振ったりヒトを見ると、ギンはくすりと笑った。そのいたずらっぽい顔が、かつての面影と重なる。リヒトは頭がくらくらした。

もつれて汚れた黒い髪、やたらにぎらぎらと光っていた、丸い巴丹杏の目。赤い唇は、しょっちゅう悪態とスラングを吐き出した。細く長い手足をしていた。性格は乱暴で、粗野で——二人で遊ぶという、ちよつと危険な遊びが多かった。

鉱山あとを見に行ったり——檻の向こうのトンネルの暗がり、トロツコの線路を見出したり。廃車場の壊れた車のなかに基地を作ってみたり。大人抜きで山に入って、遭難しかけたこともある。水遊びが昂じて深みにはまりそうになったこともある。

だけど今、その子は——

なんてお人形みたいな綺麗な顔、と、あらためてリヒトは、ギンを凝視した。全体に、東洋とも西洋ともつかない、まさに、生きた妖精だ。今は目元を覆い隠す前髪もわけられて、その全貌が、文字通り明らかにされていた。それは、神様が、一つ一つ、パーツや位置を吟味してこしらえたような、精緻な顔だった。整えられた美しさと幼稚な愛らしさ。かわいい、という汎用形容詞が、未完成なもの、欠けたものを含む愛らしさに使われるものなのだと、彼は初めて気付いた。これは、まったくかわいいとはいえない——ここまで詳細にかわいいと、かわいげがなくなるのだな、と、そのかわいげのないかわいらしさがリヒトをいたく感嘆させた。髪と同色の柳眉、髪をもっと濃くした色の長いまつげ、光を放つ瞳、すっきりとした鼻梁、淡い珊瑚色の唇。肌はふんわりと白く、柔らかなクリームのようだ。細い首筋、ときおり左右に揺れる華奢な肩の線。少女から女性に変わるにあたって、大多数が顔と体の造形バランスを崩す年代を、ものともせずに乗り切っている。

それは、ギリシャ彫刻が現したような永遠。人工の美の極致だ。

——あ——…しかも、やっぱり——これだよな。これ、女の子だ。

きわめつけのように、ふつくらと盛り上がっていく胸の谷間が、浴衣の袷からのぞいている。この部分には、特に、自分でも知らないうちに視線が集中していたらしい。

「見る、」

遠慮がちに言って、緩慢な動作で胸元に手をかけたミューに、あわてて手をふって「いい、」と否定してから、リヒトは、頬が熱くなるのを感じた。

「で、その……なんでなのかな、っていうのは」

「ああ。そうだなあ。最初から、話すか——そのほうがいいよね」「うん」

「忘れてたっていったよね。どこまで覚えてる？」

「できれば、その——全部知りたい」

うしろめたさを隠して「いい？」と尋ねると「いいよ」と、ギンは言った。

「やっと——初めて人にいえるよ。あの夏からだ。覚えてるかな——小学二年生の、夏休み」

「小学二年。八歳くらい」

「そう。そのときから、お前が、私の、永遠の希望になった」

びっくりしてリヒトが目を丸くすると、ミューはかすかに笑った。「信じられないでしょう。でも、本当。……小さい頃のこと、転生して、最初からはっきり覚えてたのは、あんたのことだけだったんだよ、私。私ね——」

じっと見つめられると、わけもなくどきどきした。

彼女はふと、辛そうに顔をしかめて、背もたれに体を預ける。そういえば、銃で撃たれたのだ、と「大丈夫なの」と尋ねると「それが原因じゃなくて」と、やはり辛そうに呟く。

そして、話し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5274w/>

ゲッター? 平安羽化

2011年11月4日16時18分発行